

宮城県多賀城跡調査研究所年報1996

# 多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所



## 序 文

当研究所の主な業務は、特別史跡多賀城跡の調査研究と史跡整備事業の推進である。史跡の指定面積が 107 ヘクタールと広大であるため、発掘調査では学術的な課題の設定はもとより、史跡整備事業による効率的な史跡の活用をも考慮して、5 年計画を積み重ねる方法で事業をすすめている。

本年度の第 67 次調査は平成 6 年度を初年度とする第 6 次 5 年計画の 3 年目の調査にあたる。調査対象地は外郭東門の南西に展開する城内最大の大畑官衙地区のうち、昨年度に調査した地区の南隣接地である。これまでの調査で、大畑官衙は北が東門から西に延びる城内の東西道路に開く官衙北門と材木堀で区画されており、東西 160m 以上の大きさであることが明らかになっていた。また、南西地区では 9 世紀後半の桁行 6 間の南北棟建物が発見されたことから、南東地区での廂付建物を主屋として、これに数棟の切妻建物群と井戸が付属する構成とは異なる官衙配置が想定されていた。このことは、実務官衙のなかには、堀で囲われた一単位の官衙が単独に存在する場合の他に、幾つかの関連する曹司群で全体が構成されるものも存在するという意味で、地方官衙の構成上の大きな問題を示唆するものであった。そこで、今年度の調査では、南西地区での建物配置を確定し、大畑地区官衙が東と西の官衙に区分できるかどうかを確認することと、大畑官衙全体での年代的な位置付けすることを主な目的とした。

調査の結果、北門の南延長線上で南北に平行して延びる 9 世紀前半から中頃にかけての二条の材木列堀を発見した。これらの堀には北門から 90m 付近でほぼ対称の位置に棟門が設けられていた。このことから大畑官衙は北門からのびる南北道路で東官衙と西官衙に明確に区別されるという曹司構成上の貴重な事実を確認することができた。また、材木列堀間の約 10m は道路幅を示すものであり、曹司内の通路の実態を初めて検証できた。

西官衙では北西にあたる建物は未検出ではあるものの、桁行 6 間、梁行 2 間の 10 尺等間の同規模の建物を東西対称に 3 棟ずつ配置し、南端に東西棟建物 1 棟を配置する、いわゆる北向きの「コ」字形配置が 9 世紀の中頃から後半にかけて成立していることが確かめられた。このように、9 世紀になって曹司が一段と整備され、職掌に応じてさまざまなパターンが成立してくることを解明した意義は大きい。

本書は平成 8 年度の調査成果をとりまとめたものである。調査の全般にわたりご指導をいただいた多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、多賀城市など関係各位に心から感謝申し上げます。本報告書が、東北古代城柵および国府の研究に資料として広く活用いただければ幸いです。

平成 9 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所  
所長 進 藤 秋 輝



## 目 次

I. 調査の計画	1
II. 第 67 次調査	3
1. 調査の目的と経過	3
2. 発見した遺構と遺物	3
3. 考察	86
III. 付章	98
1. 関連研究・普及活動	98
2. 研究成果刊行物	102

写真図版

## 例 言

1. 本書は平成 8 年度に実施した多賀城跡第 67 次調査、特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更、関連研究、普及活動などの調査研究事業の成果を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査、環境整備等の事業は多賀城跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに行っている。
3. 発掘調査の測量原点は政庁正殿跡（S B 150 B）の身舎南側柱列中央に埋設してある。この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直行する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線は真北に対して  $1^{\circ} 04' 00''$  東に偏っている。
4. 政庁跡の遺構期と瓦の分類基準は、『多賀城跡 政庁跡 図録編』（宮城県多賀城跡研究所、1980）、『多賀城跡 政庁跡 本文編』（同、1982）による。
5. 土色については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1976）を参照した。
6. 本書の作成は進藤秋輝・丹羽 茂・阿部 恵・佐藤和彦・柳澤和明・白崎恵介の協議・検討のもとに、執筆・編集は I を丹羽・柳澤、II を丹羽・柳澤・白崎、III を丹羽が担当した。
7. 金属製品の X 線写真・鏽落としは、東北歴史資料館保存科学研究科手塚均氏の協力を得た。
8. SI2367 竪穴住居跡出土の漆器の保存処理は東都文化財保存研究所朝重嘉朗氏に依頼した。
9. 本年度の発掘調査、調査資料の整理・研究、本書の作成参加者は次の通りである。

### 発掘調査

蜂谷貞夫・阿部幹穂・三浦昭吾・鈴木正輝・金澤義孝・白岩勝治・佐藤彦司・管野勇造・三島滋・高橋静枝・後藤節子・鶴巻まき子・千葉菊枝・中村みつ江・佐藤寿子・嶋田和子

### 発掘調査・遺物整理・本書の作成

酒井亜希子・千葉朱実・阿部笑子・佐藤貴子・亀井桐子・小野郁子・佐藤友子・小幡悦子・鈴木文子・高橋幹子・千田玲子・鈴木敬子・岩井良太



## I. 調査の計画

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備および多賀城関連遺跡（桃生城跡など）の発掘調査を計画的・継続的に実施している。

多賀城跡の発掘調査は、昭和44年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会（表2）の指導のもとに、5カ年ごとの計画を立案し、古代多賀城の解明に努めてきた。平成8年度は多賀城跡発掘調査第6次5カ年計画の3年目に当たる（表1）。昨年度は、第66次調査として大畑地区北西部の発掘調査を実施した。その結果、①外郭東門から西に延びる城内の東西道路と大畑地区官衙北辺区画施設の変遷、②大畑地区官衙北西部の官衙の構成と変遷について大きな見通しを得ることができた。また、大畑地区官衙北門の東側と西側では、建物配置・構成に相違がみられ、職掌の違いを反映している可能性がでてきた。

今年度は第66次調査の成果と課題を踏まえ、大畑地区の北西部～中央部を対象として第67次調査を実施することにした。発掘調査面積は2,500㎡である（第32回指導委員会承認）。大畑地区北西部における官衙の構成・変遷・特徴を本格的に解明することを大きな目的としている。

なお、南門－政庁間については公有化の進捗状況にあわせて別途に計画を作成する予定である。

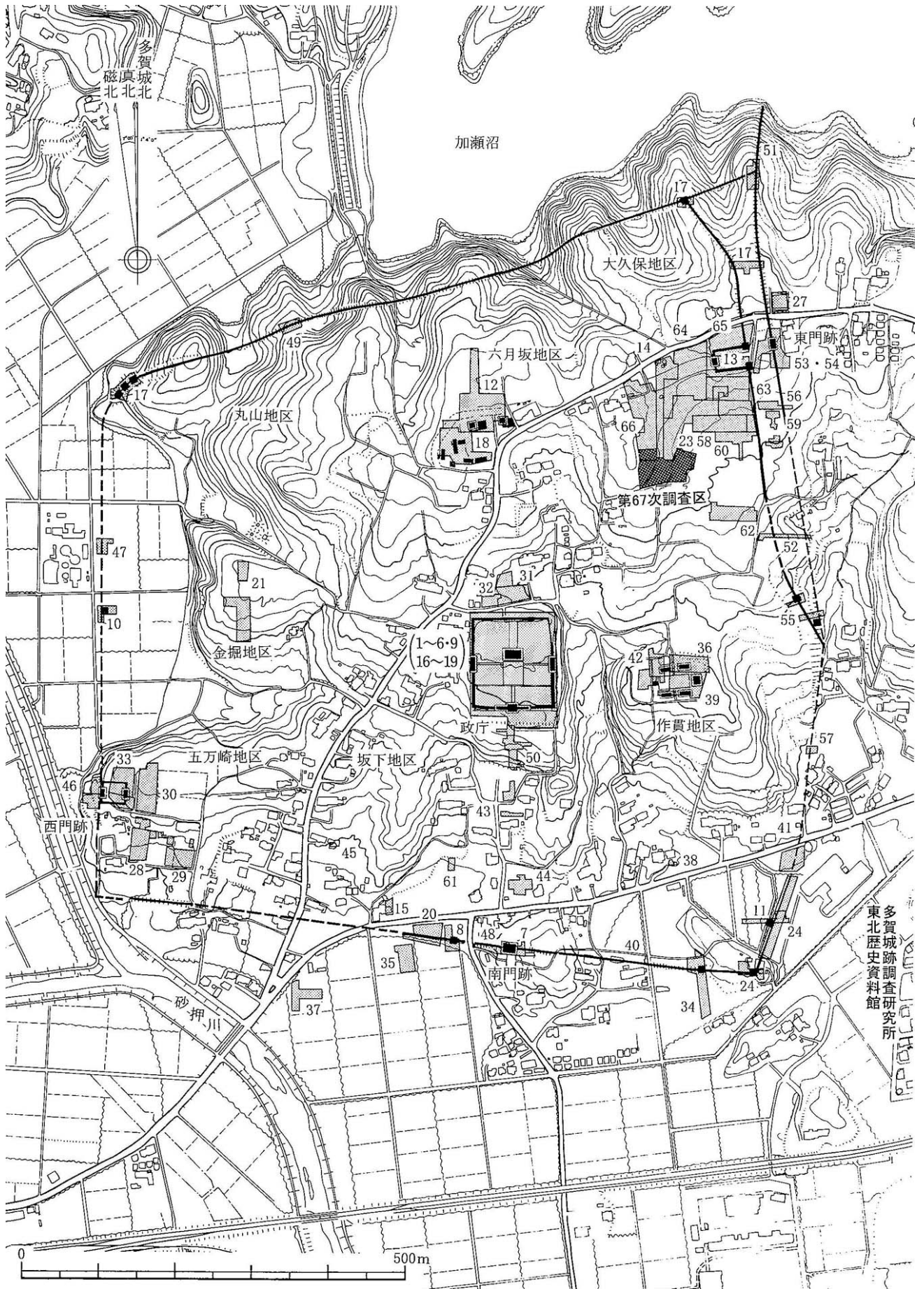
年次	発掘調査回数(対象地区)	・その他	調査面積	予算
平成6年度	第65次調査(外郭東門北部)	・現状変更	2,200㎡	36,000千円
平成7年度	第66次調査(大畑地区北西部)	・現状変更	3,000㎡	35,000千円
平成8年度	第67次調査(大畑地区西部)	・現状変更	2,500㎡	39,000千円
平成9年度	第68次調査(大畑地区南部)	・現状変更	2,000㎡	39,000千円
平成10年度	第69次調査(大畑地区南部)	・現状変更	2,000㎡	39,000千円
合計	5地区		11,700㎡	188,000千円

表1 多賀城跡発掘調査第6次5カ年計画

	氏名	現職	専門分野
委員長	芹沢 長介	東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館長	考古学
副委員長	須藤 隆	東北大学教授	考古学
委員	坪井 清足	(財)大阪府文化財調査研究センター理事長	考古学
委員	榑崎 彰一	愛知県陶磁資料館総長	考古学
委員	田中 琢	奈良国立文化財研究所長	考古学
委員	岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館情報資料研究部長	考古学
委員	青木 和夫	放送大学教授	古代史
委員	笹山 晴生	学習院大学教授	古代史
委員	吉田 孝	青山学院大学教授	古代史
委員	今泉 隆雄	東北大学教授	古代史
委員	塩田 敏志	東京農業大学教授	造園学
委員	井手 久登	東京大学教授	緑地学
委員	渡辺 定夫	工学院大学教授	都市工学
委員	飯淵 康一	東北大学助教授	建築史学

表2 多賀城跡調査研究所指導委員会委員名簿





第1図 多賀城跡調査実施区(1/7,000)



## Ⅱ. 第67次調査

### 1. 調査の目的と経過

#### (1) 調査の目的

今年度は、第66次調査区（昨年度実施）の南側と、その東側（大畑地区北西部～中央部）を対象として、発掘調査を実施することにした。調査の目的は次の2点である。

①大畑地区官衙を東西に分ける施設（塀・道路跡）を北門の南側で明らかにする。第66次調査で大畑地区官衙は北門の東側と西側で建物配置が相違する可能性を指摘できた。その成果を踏まえると、両者の間には塀や道路が存在することが想定できる。この点を発掘調査で証明したい。

②大畑地区官衙北西部における官衙の構成・変遷・特質を解明する。第66次調査では桁行6間の大規模な南北棟建物が東西に2棟ずつ配置されていた可能性が指摘できた。今回はその南側を調査することによって、建物配置の全体像を明らかにしたい。あわせて、官衙を構成する他の建物や施設の配置・変遷を把握し、北西部における官衙の特質を解明したい。

#### (2) 調査の経過

5月14日に器材を搬入し、調査対象地区の立木伐採作業を行った。5月21・22日に測量基準杭を設置し、3m方眼の小地区（グリッド）杭を打ち、グリッド名を記入した。5月23日から表土除去と遺構検出作業を西側から開始し、7月19日にはほぼ表土除去が終了した。

6月7日から調査区西端の遺構検出と精査を、8月1日から調査区北東部の遺構検出と精査を、9月4日から調査区南部の遺構検出と精査を実施し、10月7日から1/20の遺構平面図の作成を開始した。11月22日にラジコン・ヘリコプターによる航空写真の撮影を行い、11月23日に現地説明会を開き調査成果を一般に公開した。その後、材木塀跡などの補足調査を行い、12月20日に第67次調査を終了した。

### 2. 発見した遺構と遺物

棟門跡2棟、材木塀跡4条、掘立式建物跡11棟、竪穴住居跡14棟、井戸跡1基の他、土壇・溝・ピットなど多数の遺構を検出した（第3・4図）。

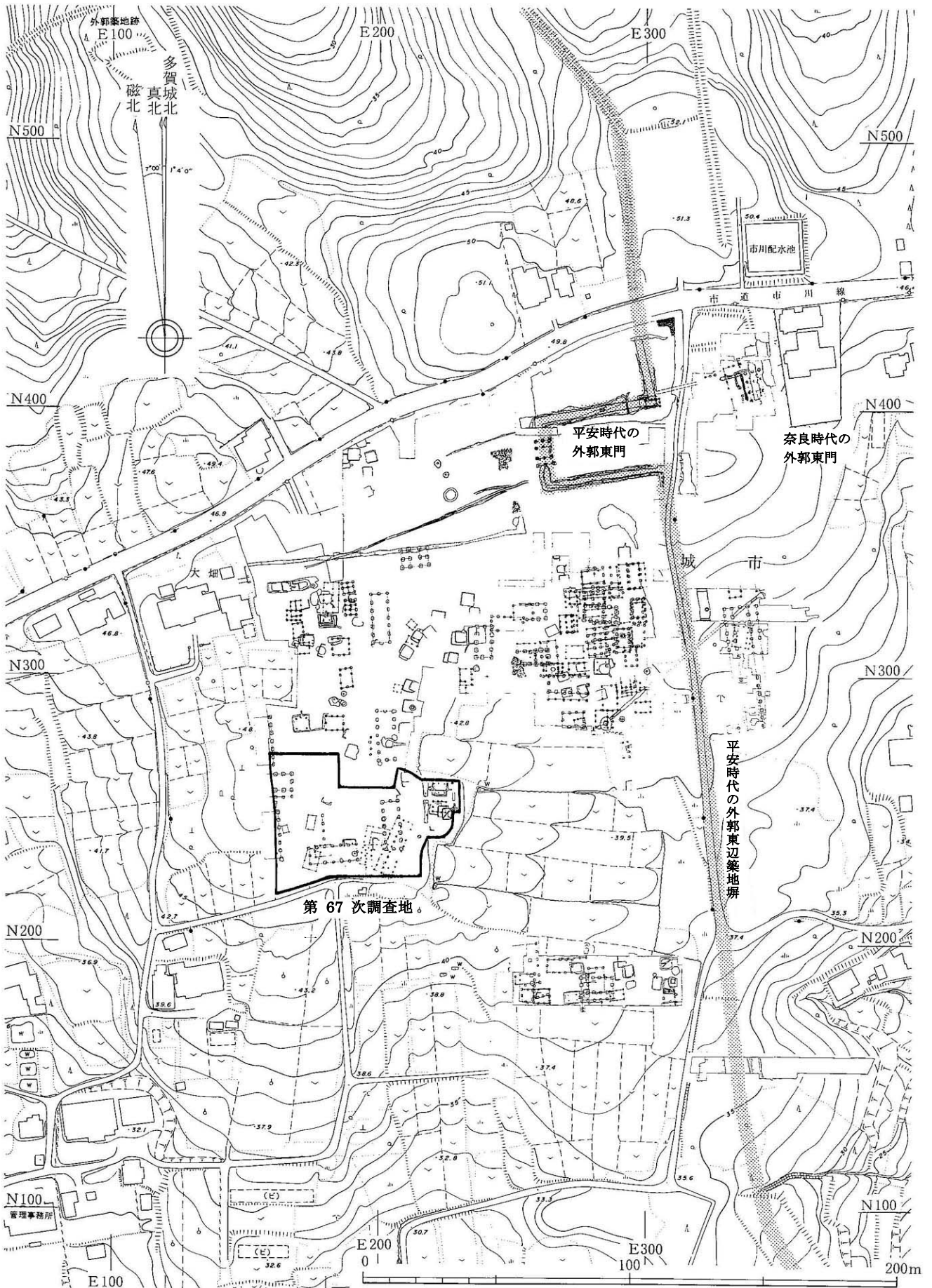
なお、表土（第1層）下はすぐ地山となっているところが大部分であったが、調査区の東部および中央南部には表土下に黒褐色土の堆積層（第2層）が部分的に分布していた。

発見した遺構の大部分は地山面で検出したものである。

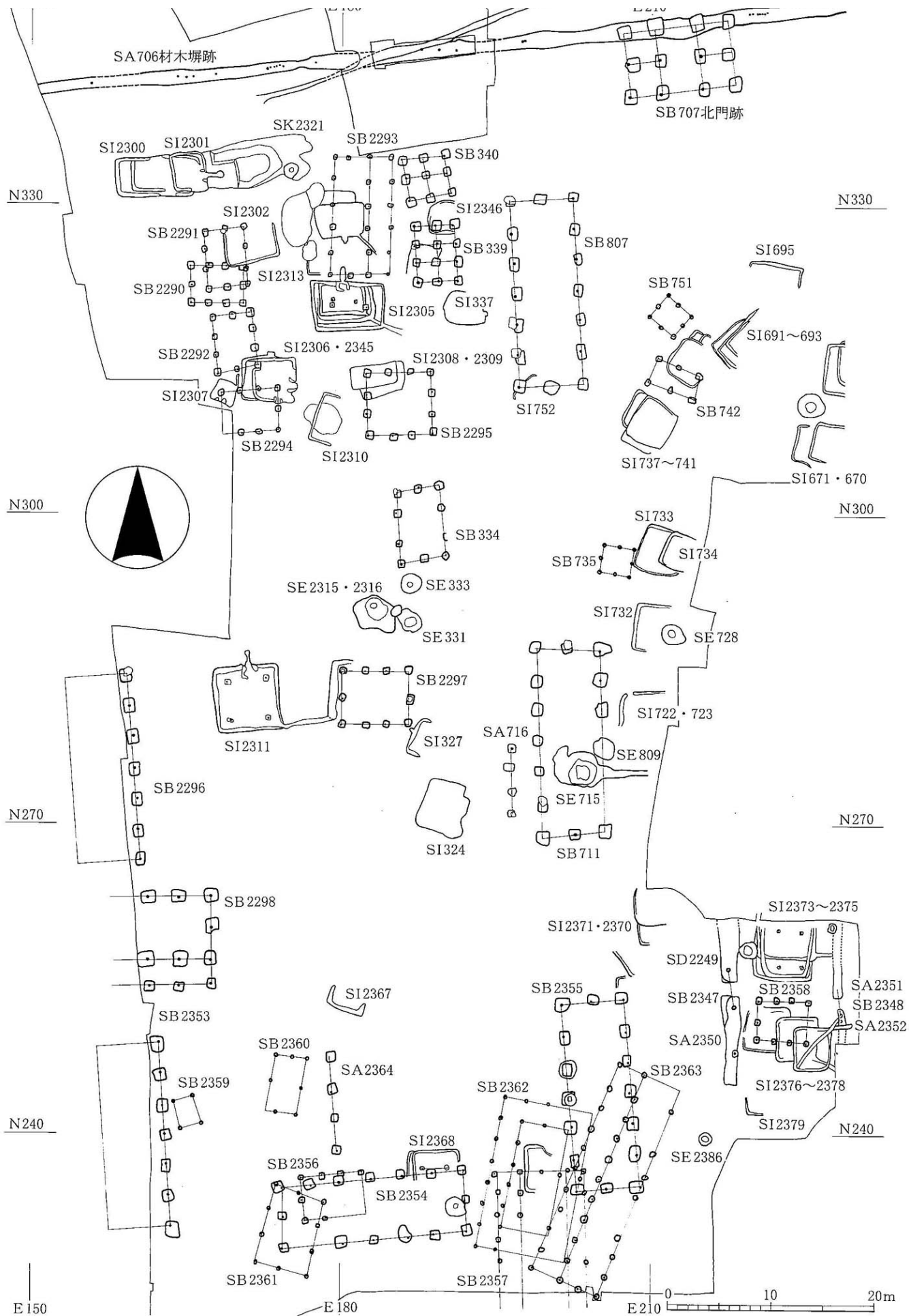
#### (1) 材木塀跡と門跡

調査区北東隅部で南北方向の布掘りが、約10mの間隔で平行して検出された。それらの布掘りはともに約1.3mの間隔をあけて南北に並ぶものである。それらの大部分は、断面が逆台形の掘方で、そ





第2図 外郭東門・大畑地区官衙の主要遺構(1/2,000)



第3図 外郭東門・大畑地区官衙（西部）の主要遺構(1/500)



の中央部に扁平なU字形の溝が掘り込まれていた。さらにその溝の底面で材痕跡3箇所と材の位置を反映すると考えられるくぼみを1箇所確認した。このような状況はこれまでの調査で検出された材木堀跡の掘方と材抜取溝および材痕跡の検出状況と類似することから、これらの遺構は材木堀跡であると判断し、西側の布掘りを北からS A2349材木堀跡・S A2350材木堀跡とし、東側の布掘りを北からS A2351材木堀跡・S A2352材木堀跡とした。これらを詳細に検討すると、

① S A2352 材木堀跡の北端付近では、材痕跡が2個確認された。そのうち北側のものは直径約33cmであり、南側の直径約18cmのものと明らかに寸法が異なる。

② S A2347 材木堀跡の材抜取溝は北端部のみ大きくなっており、その中央に直径約40cmのくぼみがある。このような状況から、北端の材がその南側の材よりも太かったことが推定できる。

③ S A2348 材木堀跡の南端部の柱痕跡は直径約23cm以上である。

①や②のように端部の材だけが太いという状況が対称的に北側のS A2348・2351材木堀跡にも当てはまると推定すると南北に並ぶ布掘りの約1.3mの間隔をはさむ部分は材木堀の材より太い材が使われていたとが考えられる。そのことは③とも矛盾しない。そして材木堀掘方端部の太い材は材木堀の間に設置された門の柱痕跡と判断し、S A2349材木堀跡とS A2350材木堀跡の間はS B2347棟門跡、S A2351材木堀跡とS A2352材木堀跡の間はS B2348棟門跡とした。以下これらの材木堀跡、門跡の詳細を記す。

**【S A2349 材木堀跡】**（平面図：第5・6図、断面図：第7図、遺物：第8図、写真：図版4・5）

**【位置】** 調査区東部の北寄り。

**【重複】** S K2383・2388～2394 土壌より古い。基本層の第2層に覆われている。

**【変遷】** ほぼ同位置でつくりかえられており、A→Bの2時期の変遷がある。

#### < S A2349 A 材木堀跡 >

**【検出状況】** 掘方および材抜取溝を検出した。S A2349 B材木堀跡の掘方によって大きく壊される。

**【掘方】** 掘方の幅は不明である。確認できた長さは約3.3mで、さらに調査区の北へのびる。検出面からの深さは約80cmである。壁の傾斜は急で、底面は平坦である。掘方埋め土は地山土、地山岩片を多く含むにぶい黄褐色土と、黄褐色土をつき固めており互層をなしている。

**【材痕跡】** すべて抜き取られ、残存していなかった。

**【方向】** S A2349 B材木堀跡とほぼ同じ方向とみられる。

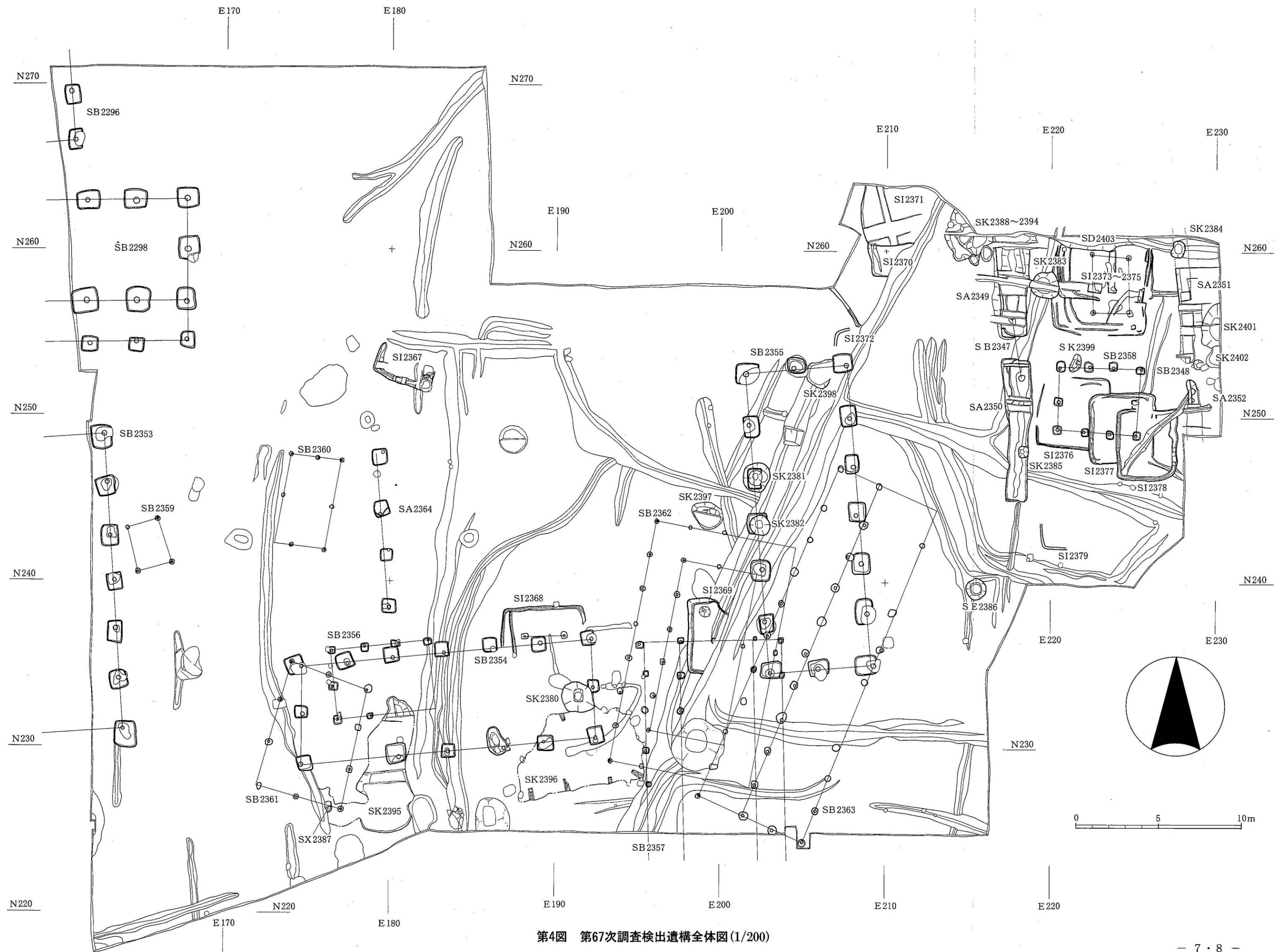
**【出土遺物】** 遺物は出土していない。

#### < S A2349 B 材木堀跡 >

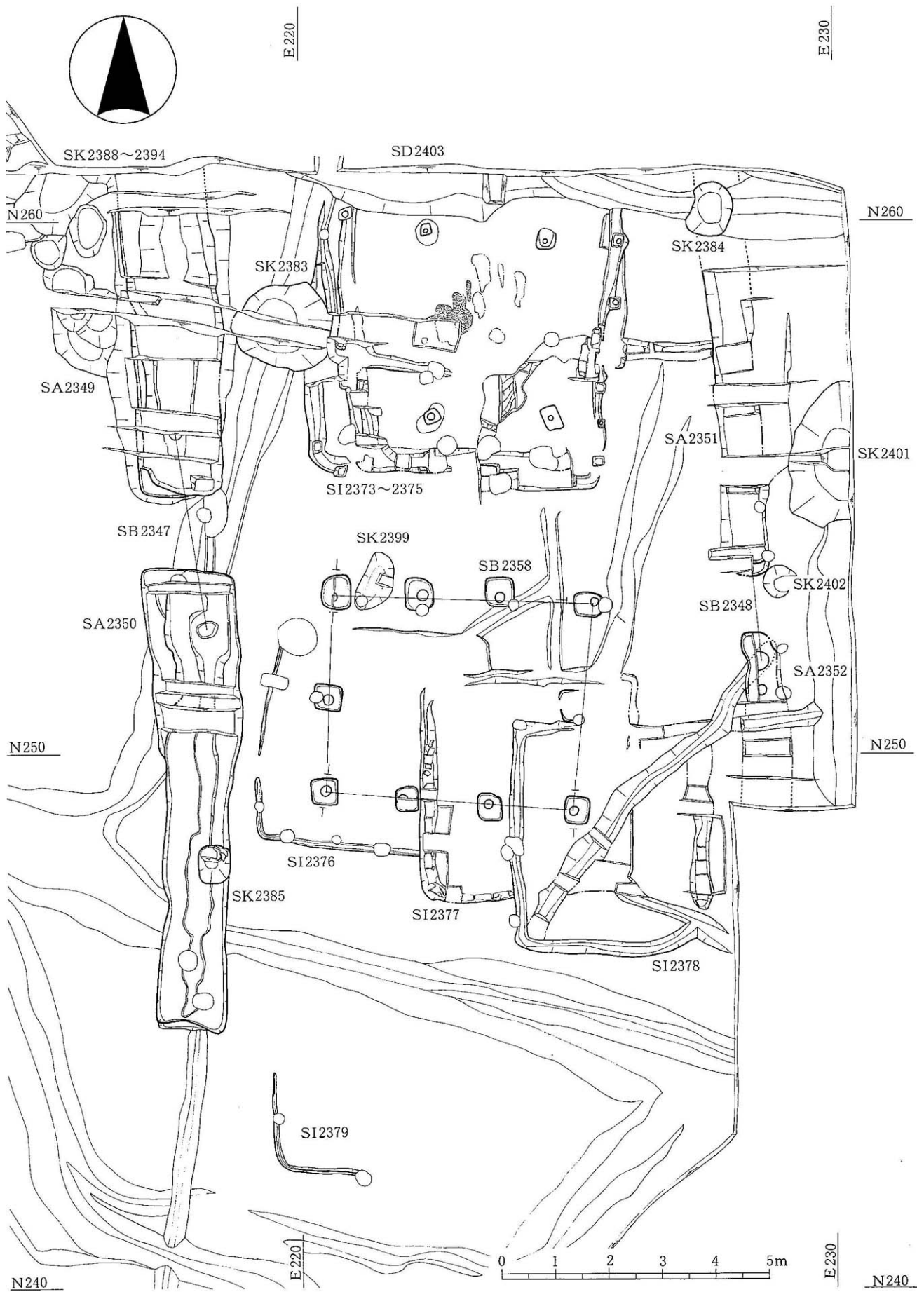
**【検出状況】** 掘方および材抜取溝を検出した。

**【掘方】** 幅約80～160cmの布掘りで、長さ約6.5m分検出し、さらに調査区の北へのびる。検出面からの深さは約80cmである。壁の傾斜はほぼ垂直で、底面は平坦である。掘方埋め土は地山土・岩片を多く含む灰黄褐色土・明黄褐色土・黄褐色土をつき固めた互層である。

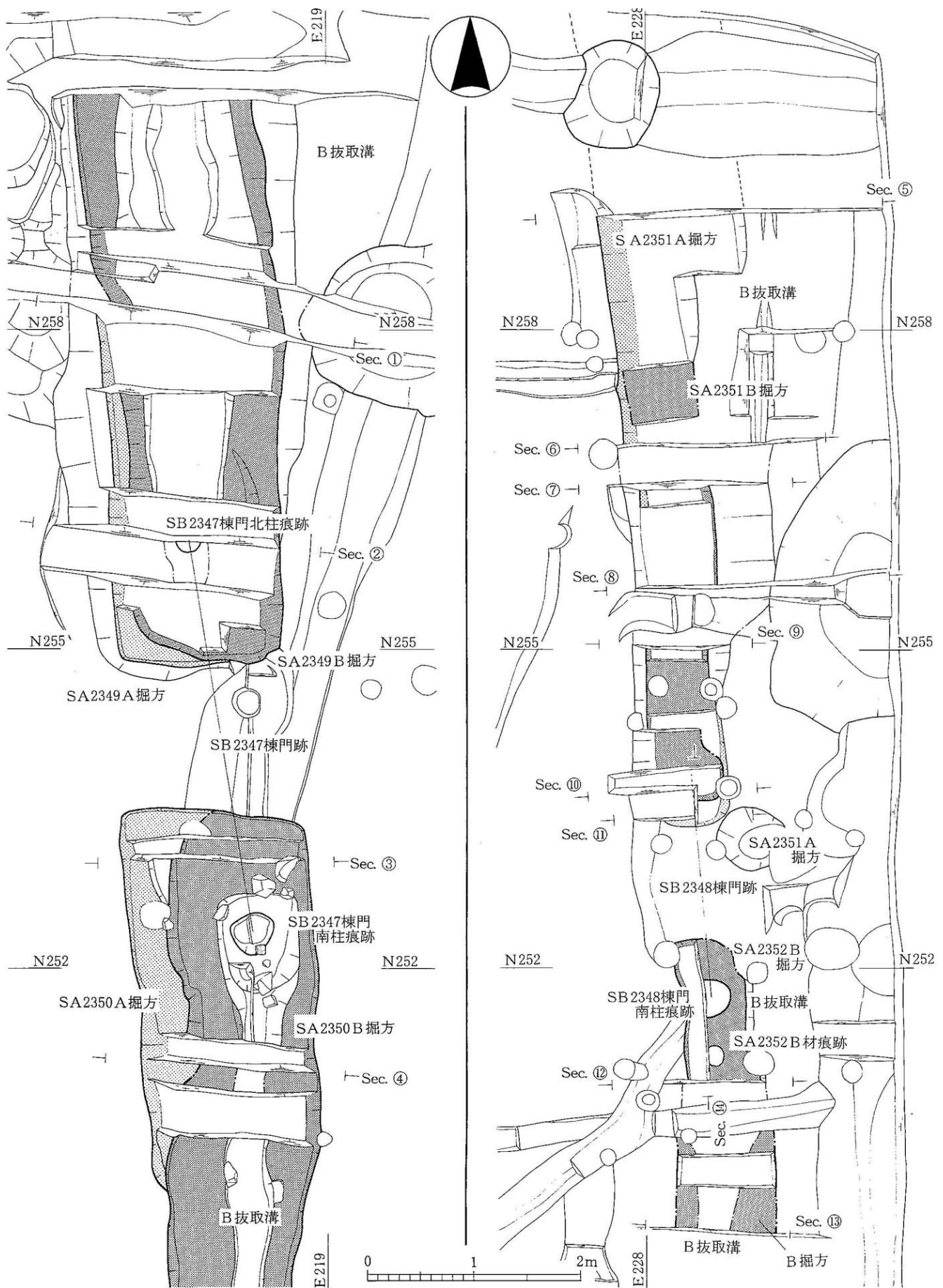
**【材痕跡】** すべて抜き取られ、残存していなかった。



第4図 第67次調査検出遺構全体図(1/200)

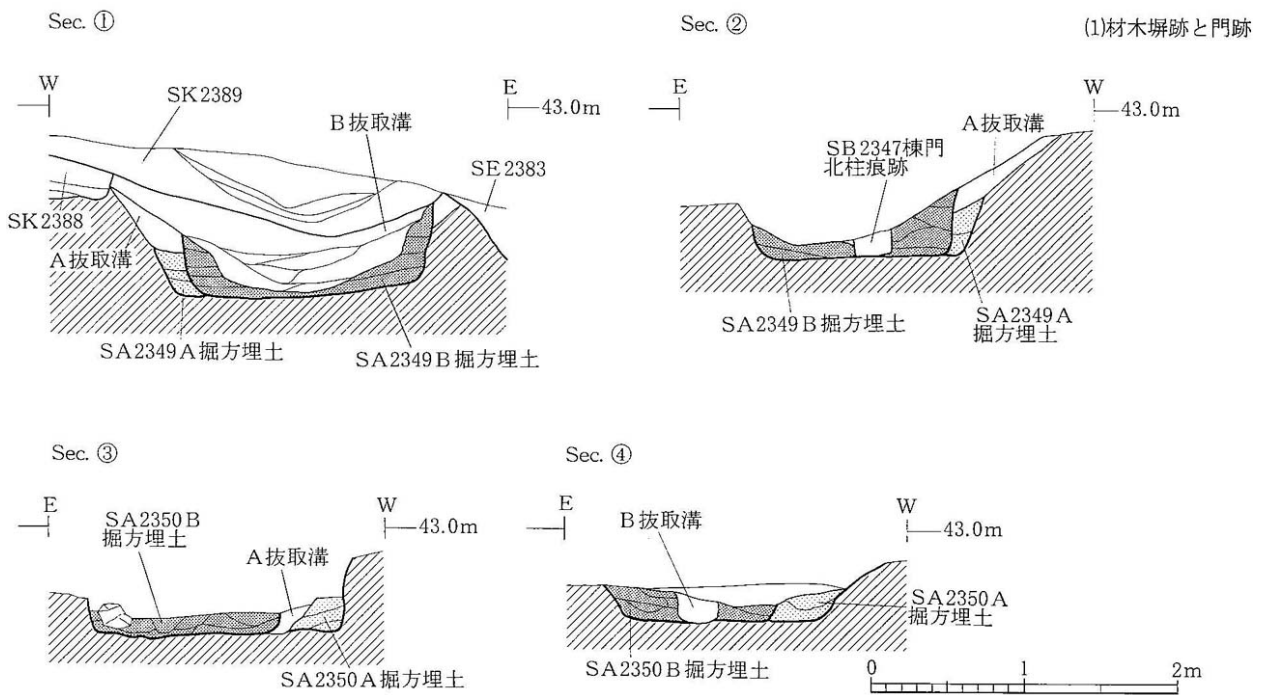


第5図 調査西端部の遺構 平面図(1/100)



第6図 SB2347・2348 棟門跡、SA2349~2352 材木堀跡 平面図 (1/50)





第7図 SB2347 棟門跡、SA2349・2350 材木堀跡 断面図(1/50)

【方向】 抜取溝の中心軸でみると、発掘南北基準線にほぼ一致する。

【出土遺物】 掘方から須恵器甕、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類の破片が少数出土した。抜取溝からは口縁部～底部まで残存する土師器坏2点(1・2)・須恵器坏1点(4)の他、比較的多くの土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺破片や少数の平瓦・丸瓦破片、砥石1点(9)、鉄鏝1点(8)、漆紙小断片2(墨痕なし)、材木片、モモ種子2点、種不明の二枚貝1点が出土した。

土師器はいずれもロクロ調整のものである。図示した2点を含めると、土師器坏では底部の調整がわかるものが19点と比較的多い。底径はいずれも大きい。不明の5点を除けば、底部・体下部の調整は回転ケズリが7点(うち1点が回転糸切り後の再調整と判明)、手持ちケズリが3点、ケズリが4点といずれも再調整されている。底部内面のミガキは放射状のものが3点、横ミガキが6点と横ミガキが多い。須恵器坏3点はいずれもへら切りで、底径は大きい。

【SA2350 材木堀跡】 (平面図：第5・6図、断面図：第7図、遺物：第8図、写真：図版4・6)

【位置】 調査区東部の北寄り。

【重複】 基本層の第2層に覆われており、SK2385 土壌より古い。

【変遷】 ほぼ同位置でつくりかえられており、A→Bの2時期の変遷がある。

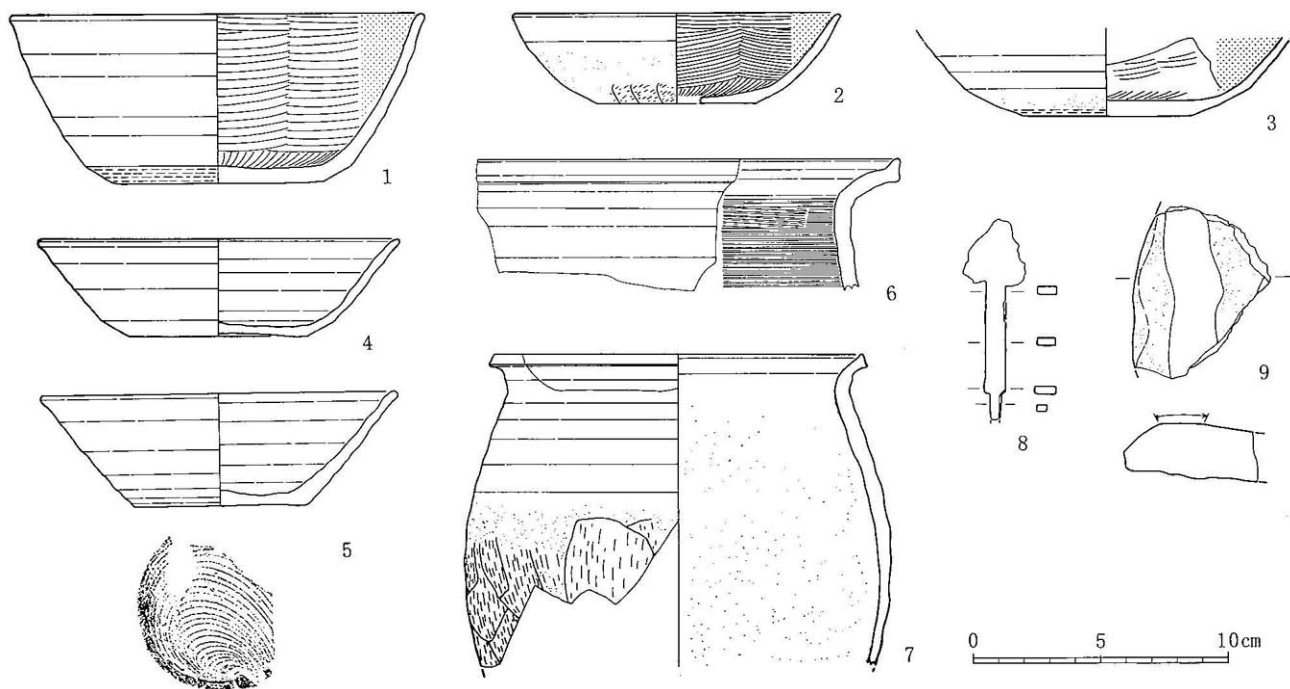
#### <SA2350A 材木堀跡>

【検出状況】 掘方および材抜取溝を検出した。SA2350B 材木堀跡によって大きく壊される。

【掘方】 長さ約7.2mの布掘りである。検出面からの深さは最大約50cmである。壁の傾斜は急で、底面は平坦である。掘方埋め土はしまりのあるにぶい黄橙色粘質土と浅黄色粘質土をつき固めた互層である。

【材痕跡】 すべて抜き取られ、残存していなかった。

【方向】 SA2350B 材木堀跡とほぼ同じ方向とみられる。



番号	器種	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	遺構	特徴	登録	箱番号
1	坏	SA2349B	回転ケズリ。放射状ミガキ。	16.2	8.2	6.6	1	1	12722	6	壺	SA2349B	口縁部受口状。ロクロナデ・回転刷毛目。	11	12722
2	坏	SA2349B	手持ちケズリ。放射状ミガキ。	12.8	6.2	3.5	1/4	2	12722	7	甕	SA2350B	口縁部外反。外面ロクロナデ・ケズリ。内面ロクロナデ。摩滅。口径14.4cm。	2	12722
3	坏	SA2350B	回転ケズリ。横ミガキ。		6.6		3/4	1	12722	8	鉄鏃	SA2349B	筒被式三角形状鉄鏃。現存長7.7cm。	15	12746
4	坏	SA2349B	ヘラ切り→部分的な手持ちケズリ。	14.2	7.0	3.8	>1/2	3	12722	9	砥石	SA2349B	一面研磨。安山岩製。	12	12744
5	坏	SA2350B	回転糸切り無調整。	14.0	6.8	4.4	1/2	3	12722						

第8図 SA2349B・2350B 材木堀跡の抜取溝の出土遺物 (1~3、6・7: 土師器、4・5: 須恵器、8: 鉄製品、

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

### < SA2350B 材木堀跡 >

〔検出状況〕 掘方および材抜取溝を検出した。

〔掘方〕 幅約120~125cmの布掘りで、長さ約8.5mである。平面形は細長い長方形で、検出面からの深さは最大約50cmである。壁の傾斜はやや急で、底面は平坦である。掘方埋め土は凝灰岩片を粒状に多く含む灰黄褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土をつき固めた互層である。

〔材痕跡〕 すべて抜き取られ、残存していない。

〔方向〕 抜取溝の中心軸でみると、発掘南北基準線に対し、北で東に約4°偏る。

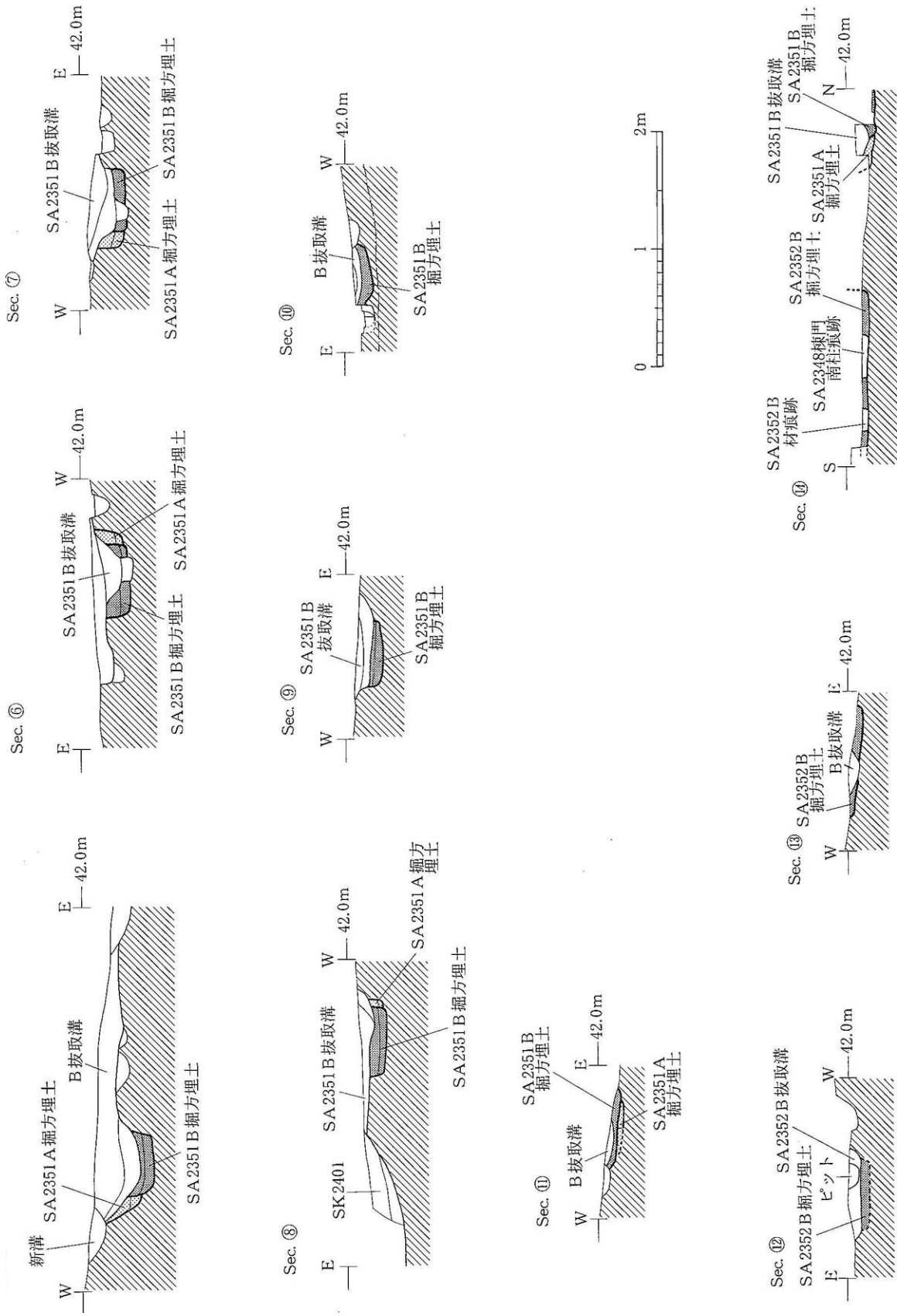
〔出土遺物〕 遺物は掘方からは出土せず、抜取溝から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、丸瓦の破片が少数出土した。このうち底部の調整がわかるものは、ロクロ調整の土師器坏の回転ケズリ(3)・手持ちケズリが各1点で、底部内面はいずれも横ミガキである。須恵器坏は回転糸切り無調整(5)・回転ケズリが各1点ある。

〔SA2351 材木堀跡〕 (平面図: 第5・6図、断面図: 第9図、遺物: 第10図、写真: 図版8)

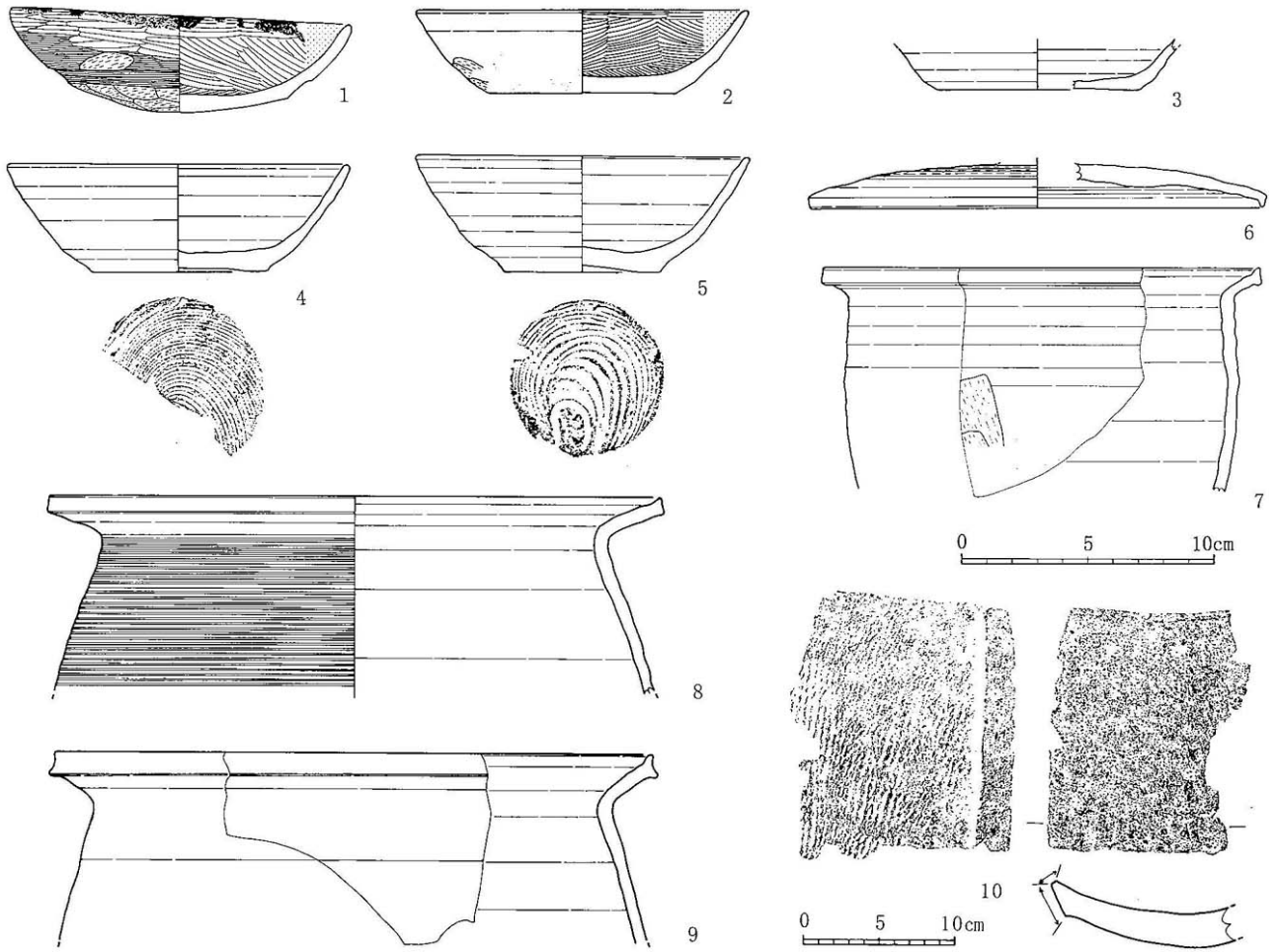
〔位置〕 調査区東部の北寄り。

〔重複〕 基本層の第2層に覆われており、SK2384・2401土壌、SD2403溝より古い。

〔変遷〕 ほぼ同位置でつくりかえられており、A→Bの2時期の変遷がある。



第 9 図 SB2348 棟門跡、SA2351・2352 材木堀跡、SK2401 土層 断面図 (1/50)



番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	
1	坏	非ロクロ。有段・丸底。外面ヨロナデ→下半ケズリ→口縁ミガキ。内面ミガキ→黒色処理。口縁両面に油煙。	13.4	8.8	3.8	>3/4	1	12722	5	坏	回転糸切り無調整	13.2	6.2	4.6	1	4	12722	
									6	盖	口縁短く屈曲。回転ケズリ。口径18.0cm。			13	6	12722		
									7	甕	口縁部受口状。ロクロナデ→ケズリ。口径約17.2cm。				8	12722		
2	坏	手持ちケズリ。横ミガキ。	13.2	7.4	3.3	1/2	3	12722	8	甕	口縁部受口状。ロクロナデ。回転刷毛目。口径24.0cm。					7	12722	
3	坏	ヘラ切り。		8.0		>1/4	2	12722	9	甕	口縁部受口状。ロクロナデ。口径約23.6cm。						9	12722
4	坏	回転糸切り無調整。	13.7	7.0	4.3	<2/3	5	12722	10	平瓦	平瓦II B類 bタイプ1。凸面縄叩き。凹面ナデ。側端部圧痕。						14	12741

第10図 SA2351B 材木堀跡の抜取溝出土遺物 (1・2・7~9: 土師器、3~6: 須恵器、10: 瓦)

### < S A2351A 材木堀跡 >

〔検出状況〕 掘方を検出した。S A2351B 材木堀跡によって大きく壊される。北半部は後世の削平をうけ残存していない。

〔掘方〕 確認できた長さは約5.7mで、さらに調査区の北へのびる。検出面からの深さは最大約30cmである。壁の傾斜はほぼ垂直で、底面は平坦である。掘方埋め土は黄褐色粘土とにぶい黄褐色粘土の互層である。

〔材痕跡〕 すべて抜き取られ、残存していない。

〔方向〕 S A2351B 材木堀跡とほぼ同じ方向とみられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



### < S A 2351 B 材木堀跡 >

〔**検出状況**〕 掘方および材抜取溝を検出した。北半部は後世の削平をうけ残存していない。

〔**掘方**〕 幅約 50～70cm の布掘りである。確認できた長さは約 5.5m で、さらに調査区の北へのびる。検出面からの深さは最大約 20cm である。壁の傾斜はほぼ垂直で、底面は平坦である。掘方埋め土は風化凝灰岩地山ブロックを含む黄褐色粘土と褐色粘土をつき固めた互層である。

〔**材痕跡**〕 材はすべて抜き取られ、残存していない。

〔**方向**〕 掘方の中心軸でみると、発掘南北基準線に対し、北で東に約 5° 偏る。

〔**出土遺物**〕 遺物は掘方から出土せず、抜取溝から口縁部～底部まで残存する土師器坏 2 点（1・2）・須恵器坏 2 点（3・4）の他、比較的多くの土師器坏・甕（7～9）破片、少数の須恵器坏・高台坏・蓋（6）・甕・壺、平瓦・丸瓦破片、スサを含む壁材小片、モモ種子 1 点が出土した。このうち土師器坏で調整がわかるものは、非ロクロ調整の有段丸底（1）、ロクロ調整の手持ちケズリ（2）が各 1 点で、底部内面はいずれも横ミガキである。須恵器坏は回転糸切り無調整（4・5）・ヘラ切りが各 2 点ある。

【**S A 2352 材木堀跡**】（平面図：第 5・6 図、断面図：第 9 図、写真：図版 7）

〔**位置**〕 調査区東部の北寄り。

〔**重複**〕 基本層の第 2 層に覆われており、S I 2378 竪穴住居跡より古い。

〔**検出状況**〕 掘方、材抜取溝および材痕跡を検出した。

〔**掘方**〕 幅約 90cm の布掘りである。確認できた長さは約 2.7m で、さらに調査区の南へのびる。検出面からの深さは最大約 5cm である。壁の傾斜は急で、底面は平坦である。掘方埋め土は褐色粘土や黄褐色粘土である。

〔**材痕跡**〕 S B 2348 棟門南柱の南で材痕跡 1 ヲ所を検出した。直径約 18cm の円形で、堆積土は褐色土で風化した凝灰岩をブロック状に含む。

〔**方向**〕 材抜取溝の中心軸でみると、発掘南北基準線に一致する。

〔**出土遺物**〕 遺物は出土していない。

【**S B 2347 掘立式棟門跡**】（平面図：第 5・6 図、断面図：第 7 図、写真：図版 4・5）

〔**位置**〕 調査区東部、S A 2349・2350 材木堀跡が取付く。

〔**柱間数・棟方向**〕 1 間 1 戸の棟門。南北棟。

〔**重複**〕 基本層の第 2 層に覆われている。S A 2349A・2350A 材木堀跡より新しい。

〔**検出状況**〕 S A 2349B・2350B 材木堀跡の切取溝の下面で柱痕跡を検出した。

〔**柱穴掘方**〕 北側の柱は S A 2349B 材木堀の掘方埋め土に、また南側の柱は S A 2350B 材木堀の掘方埋め土によってそれぞれ据えられている。したがって、この棟門は S A 2349B・2350B 材木堀と一連でつくられたものとみられる。

〔**柱痕跡**〕 北側柱痕跡は直径約 23cm 以上の円形で、堆積土は灰黄褐色土である。南側柱は S A 2350

B材木堀跡の材抜取溝の底面で検出された、直径約40cm、深さ約5cmのくぼみに位置していたとみられる。

〔平面規模〕 柱間寸法は3.75mである。

〔建物方向〕 発掘南北基準線に対し、北で西に約9°偏る。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【S B 2348 掘立式棟門跡】（平面図：第5・6図、断面図：第9図、写真：図版7）

〔位置〕 調査区東部、S A 2351・2352材木堀跡が取付く。

〔柱間数・棟方向〕 1間1戸の棟門。南北棟。

〔重複〕 基本層の第2層に覆われている。S A 2351A材木堀跡より新しい。

〔検出状況〕 S A 2352B材木堀跡の切取溝の下面で南側柱痕跡を検出した。北側柱の痕跡は残存していなかった。

〔柱穴掘方〕 南側の柱はS A 2350B材木堀跡の掘方埋め土によって据えられている。

〔柱痕跡〕 直径約33cmの円形で、柱痕跡の堆積土は褐色土である。

〔平面規模〕 柱間寸法は約1.9m以上である。

〔建物方向〕 南側柱とS A 2351B材木堀跡の抜取溝南端の中心とを結ぶ線は発掘南北基準線に対して、北で西に約5°偏る。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

## （2）掘立式建物跡

【S B 2298 建物跡】（平面図：第11図、断面図：第11図、写真：図版9-1・2）

〔位置〕 調査区西部の北西端。

〔柱間数・棟方向〕 桁行3間以上・梁行2間の身舎に、南側に1間の廂が付く、東西棟。

〔重複〕 なし。

〔検出状況〕 第66次調査で検出した柱穴10個を今回再調査した。建物西半部は調査区外に位置する。

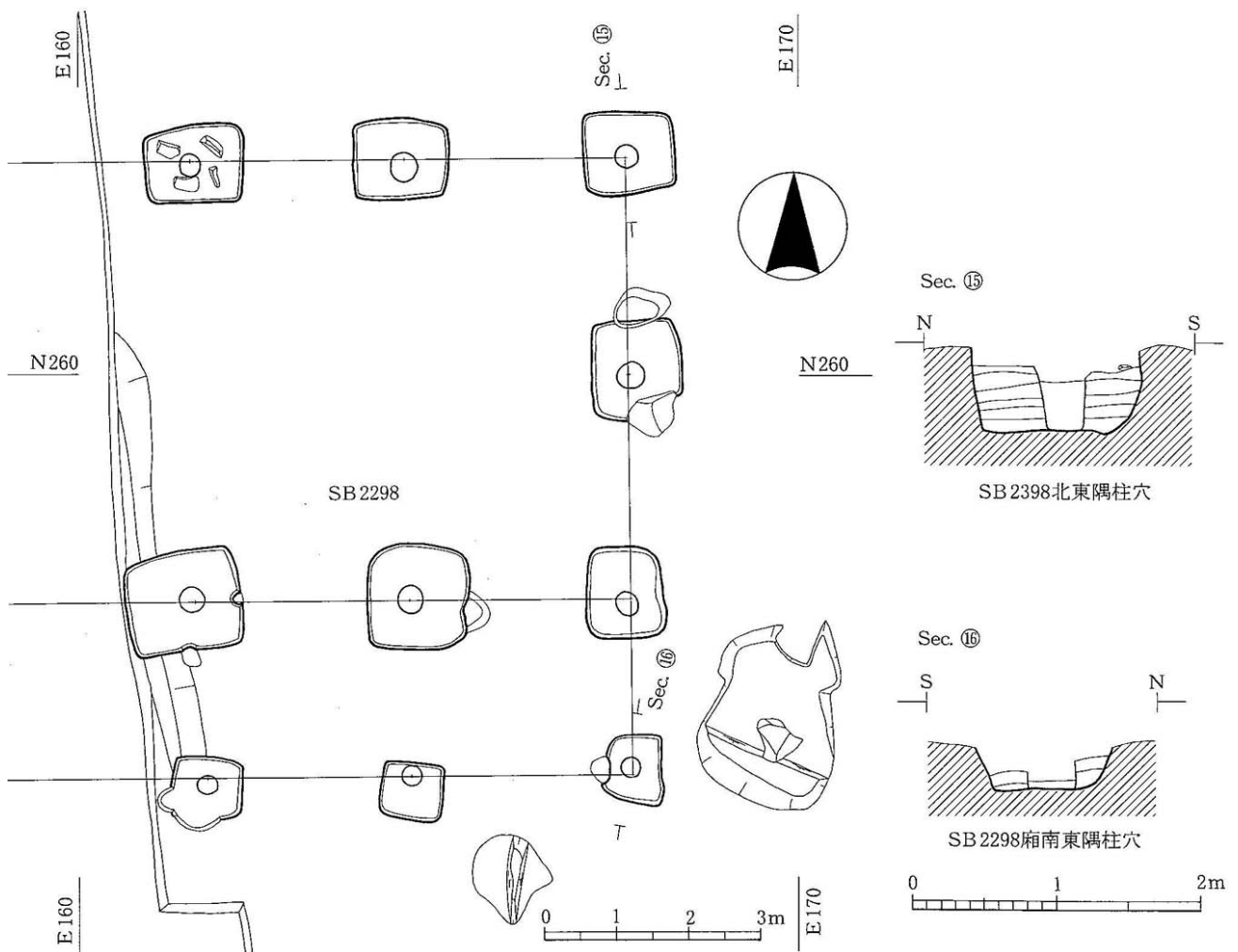
〔柱穴掘方〕 身舎の掘方は一辺120～135cmの方形で、検出面からの深さは北東隅柱穴で約60cmである。廂の掘方は一辺80～90cmの方形で、検出面からの深さは南東隅柱穴で約30cmである。埋め土は身舎、廂とも褐色土あるいは暗褐色土で、地山粘土及び凝灰岩小礫を含む。

〔柱痕跡〕 検出した10ヵ所すべての柱穴で柱痕跡を検出した。身舎の柱痕跡は直径34cm前後の円形、廂の柱痕跡は直径27cm前後の円形で、堆積土は身舎、廂とも粘性のある褐色土である。

〔平面規模〕 桁行総長は北側柱列で6.09m以上、柱間寸法は東から3.04m・3.05mである。梁行総長は東妻で8.51m、柱間寸法は北から2.99m・3.11m・2.41m（廂）であり、梁行方向の廂の柱間は身舎の柱間よりも狭い。

〔建物方向〕 東妻でみると、発掘南北基準線とほぼ一致する。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



第 11 図 SB2298 建物跡 平面図 (1/100) ・断面図 (1/50)

【SB2353 建物跡】 (平面図：第 12 図、断面図：第 12 図、写真：図版 2-2、9-3・4)

【位置】 調査区西部の西端。

【柱間数・棟方向】 桁行 6 間・梁行 1 間以上の南北棟。

【重複】 なし。

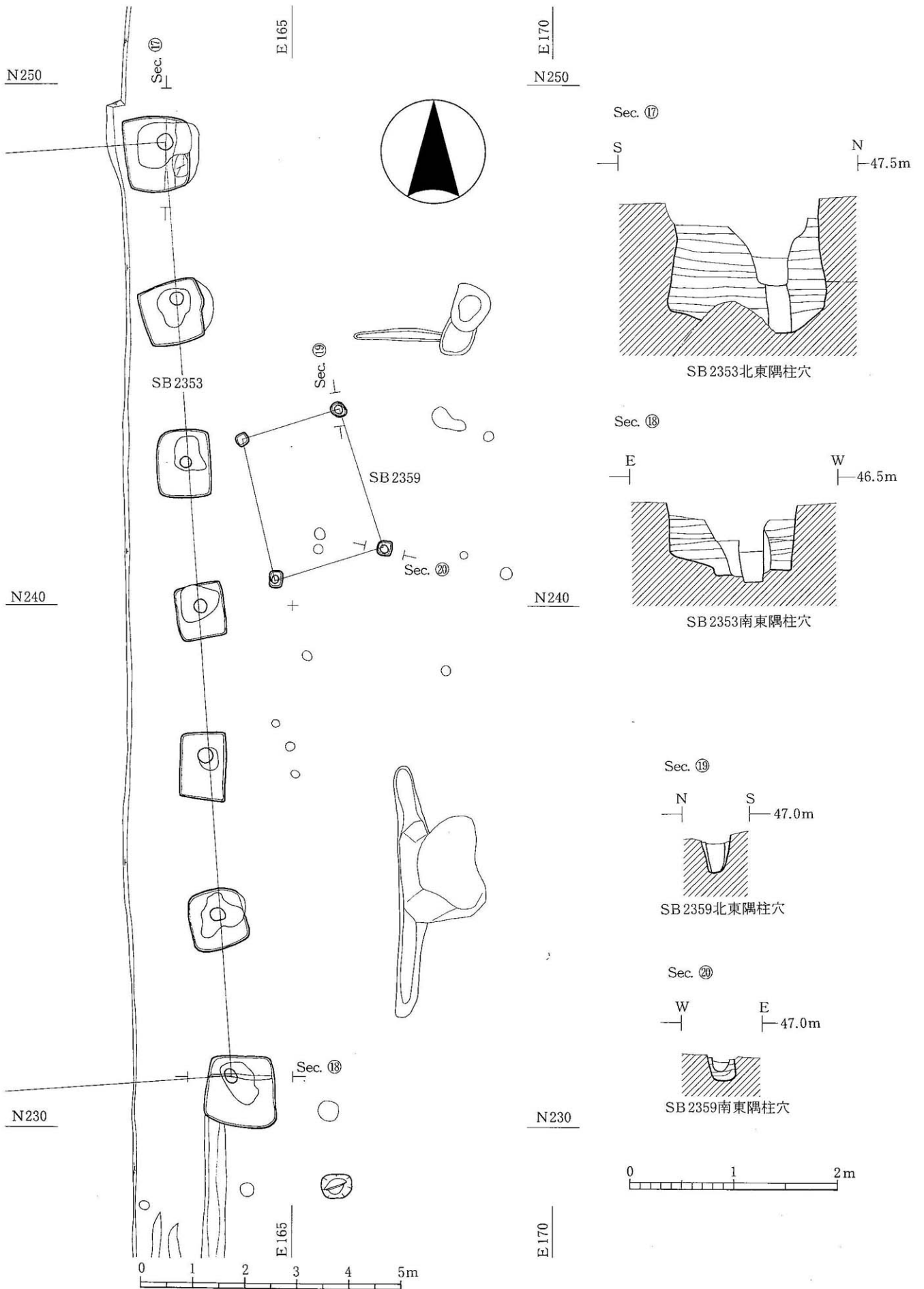
【検出状況】 東側柱列の 7 個の柱穴を検出した。建物西半部は調査区外に位置する。

【柱穴掘方】 掘方は一辺 110~130cm の方形で、検出面からの深さは北東隅柱穴で約 130cm である。埋め土は褐色粘質土で、暗褐色粘質土や地山風化凝灰岩片をブロック状に含む。

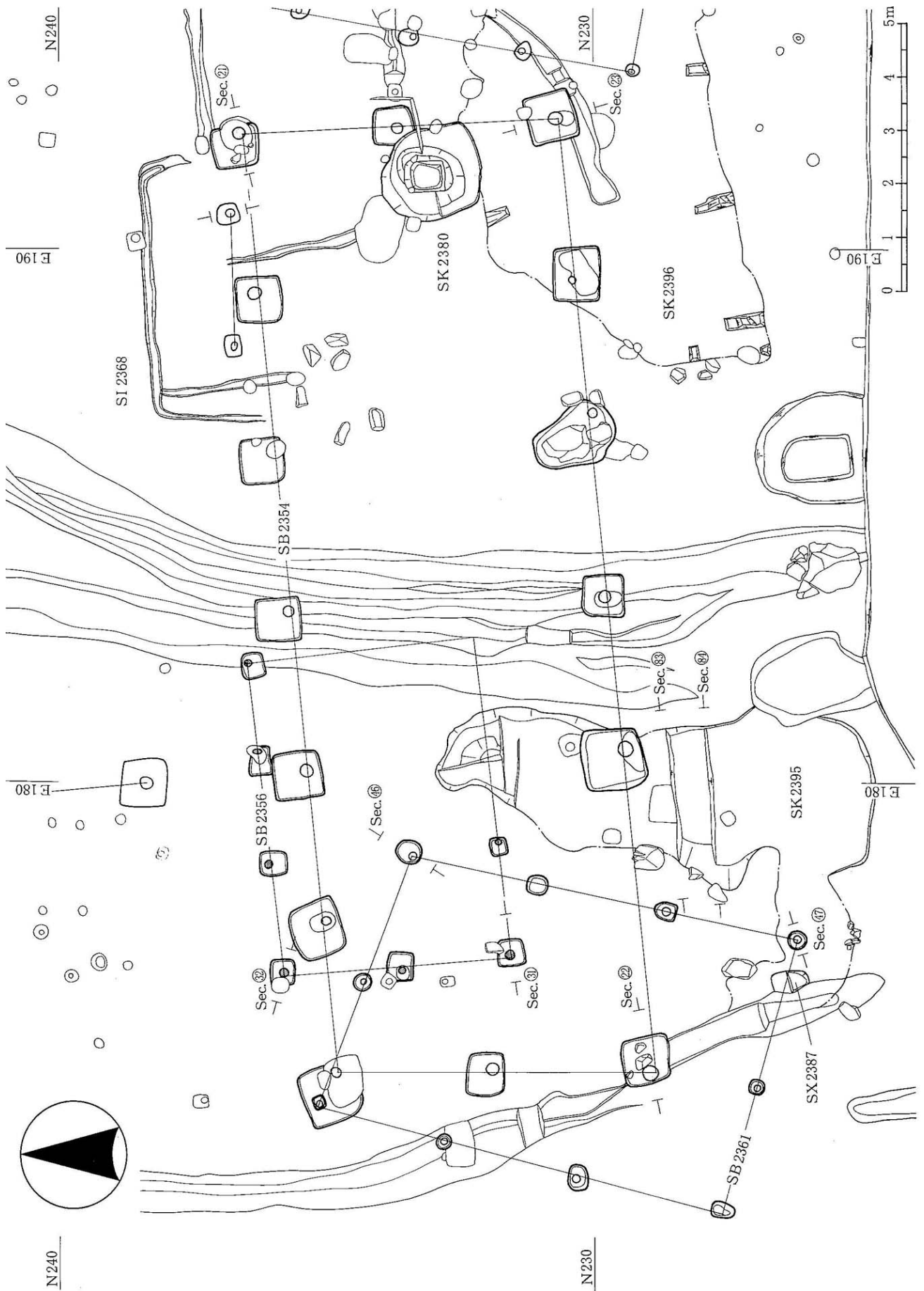
【柱痕跡】 検出した 7 ヲ所すべての柱穴において、柱切取穴の底面付近で柱痕跡を検出した。直径 24cm 前後の円形である。堆積土は粘性のある褐色土で、風化した凝灰岩をブロック状に多量に含む。

【平面規模】 桁行総長は東側柱列で 17.93m、柱間寸法は北から 2.98m・3.16m・2.76m・2.88m・3.06m・3.10m である。

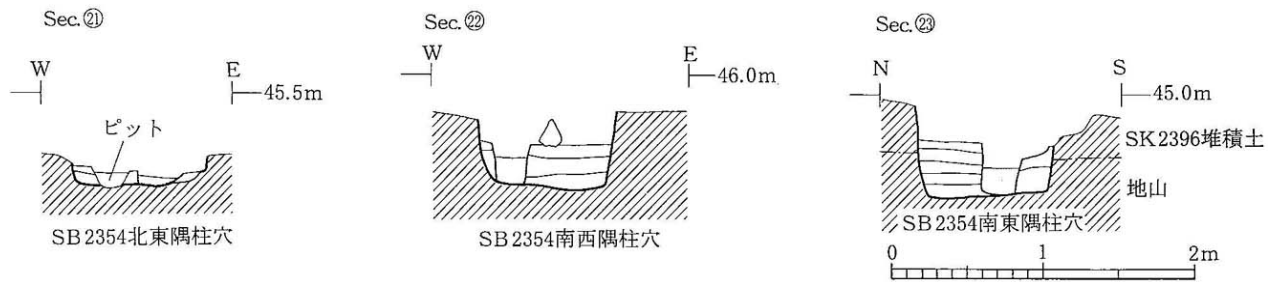




第 12 図 SB2353・2359 建物跡 平面図 (1/100)・断面図 (1/50)



第 13 図 SB2354 建物跡とその周辺の遺構 平面図 (1/100)



第 14 図 SB2354 建物跡 断面図 (1/50)

〔建物方向〕 東側柱列で見ると、発掘南北基準線に対し北で西に約  $4^{\circ}$  偏る。

〔出土遺物〕 遺物は少ない。柱切取穴から非ロクロ調整の両面ミガキの後両面黒色処理された口縁部破片 1 点、ロクロ調整の土師器甕体部破片 2 点、政庁第 I 期の平瓦 I A 類破片 1 点が出土した。

〔SB2354 建物跡〕 (平面図：第 13 図、断面図：第 14 図、遺物：第 17 図、写真：図版 3-1、9-5~7)

〔位置〕 調査区中央部の南西寄り。

〔柱間数・棟方向〕 桁行 6 間・梁行 2 間の東西棟。

〔重複〕 SK2395・2396 土壌より新しい。基本層の第 2 層に覆われており、SB2361 建物跡、SK2380 土壌より古い。SB2356 建物跡、SI2368 竪穴住居跡とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔検出状況〕 南側柱列の西から 1 間目の柱穴を除く 15 個の柱穴を検出した。

〔柱穴掘方〕 掘方は一辺 90~95cm の方形で、検出面からの深さは南東隅柱穴で約 60cm である。埋め土は粘性のあるにぶい黄褐色土や黄褐色土で、地山風化凝灰岩片をブロック状に含む。南側柱列の東から 2 間目の柱穴は、周囲に集塊岩が分布しており掘方は不整形である。

〔柱痕跡〕 14 ヲ所で柱痕跡を検出した。うち 7 ヲ所は柱切取穴の底面付近で確認した。直径 24cm 前後の円形で、堆積土は粘性のあるにぶい黄褐色土である。また北側柱列の東から 2 間目柱穴では、柱は抜き取られていた。

〔平面規模〕 桁行総長は北側柱列で 17.68m、柱間寸法は西から 2.83m・2.82m・3.04m・3.02m・2.95m・3.03m である。梁行総長は東妻で 5.95m、柱間寸法は北から 2.94m・3.00m である。

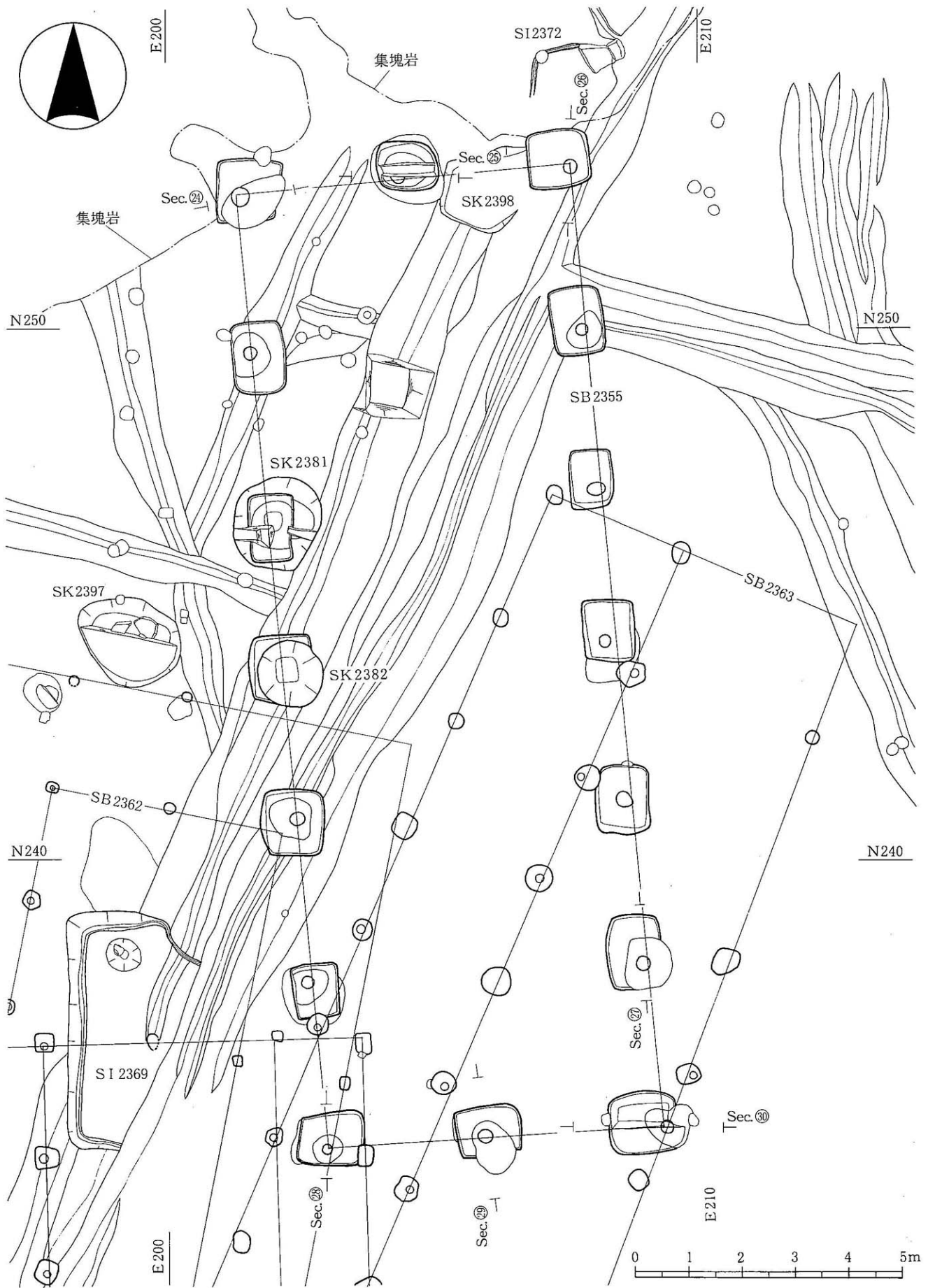
〔建物方向〕 北側柱列で見ると発掘東西基準線に対し、東で北に約  $6^{\circ}$  偏る。

〔出土遺物〕 掘方埋め土から土師器坏・甕、須恵器蓋 (1・2)・甕、柱切取穴から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏 (3)・蓋、柱痕跡から須恵器坏の破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。須恵器蓋 (1・2) の天井部は回転ケズリされている。

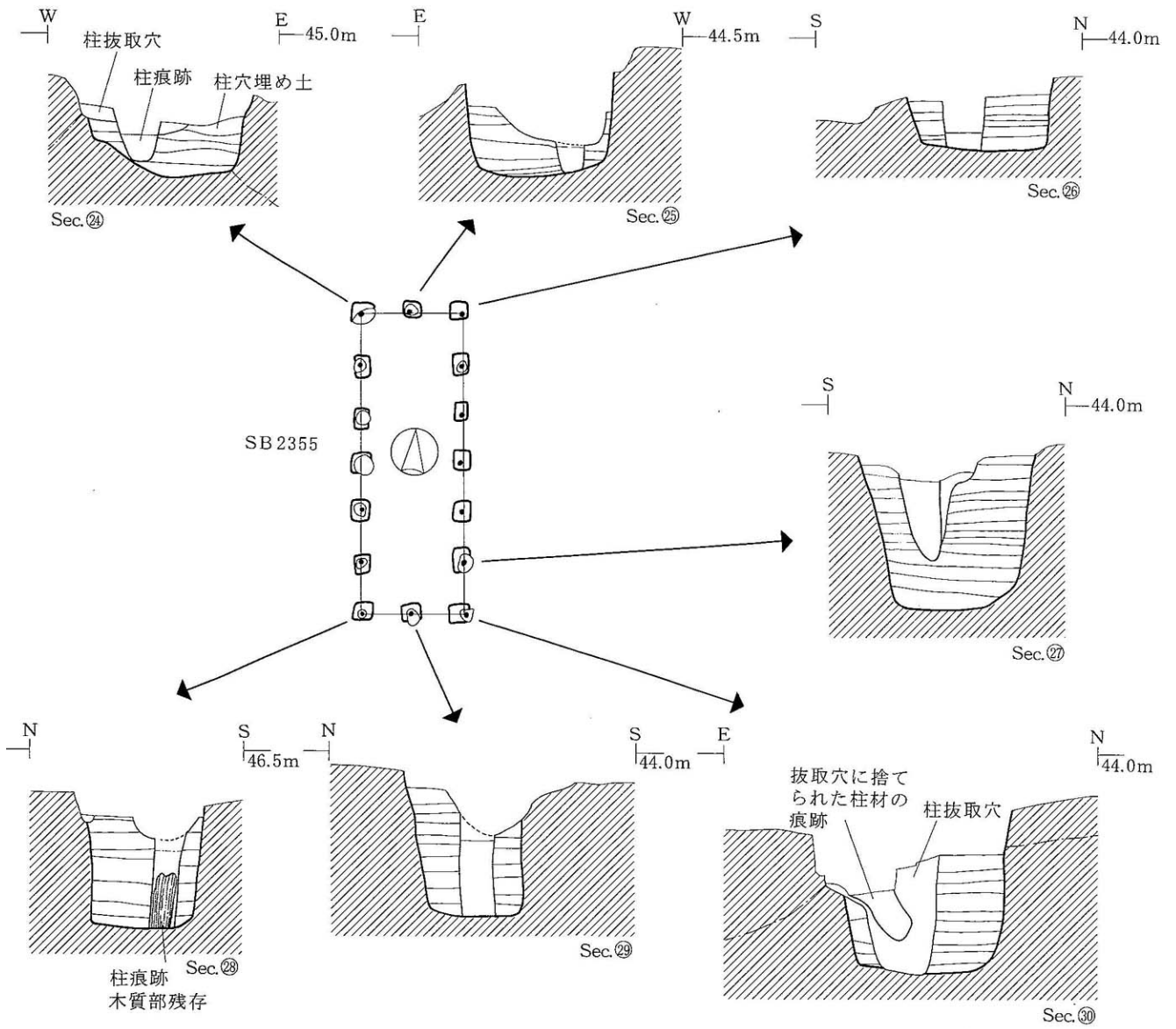
〔SB2355 建物跡〕 (平面図：第 15 図、断面図：第 16 図、遺物：第 17 図、写真：図版 3-2、9-8~10、10-1・2)

〔位置〕 調査区中央部の東寄り。

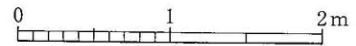
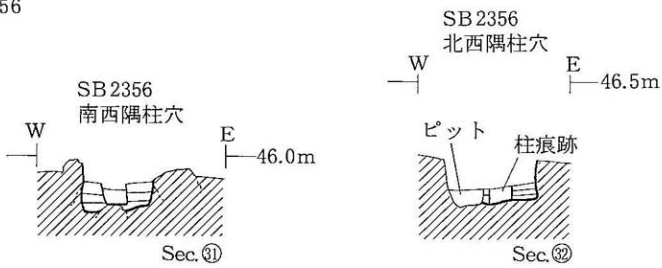




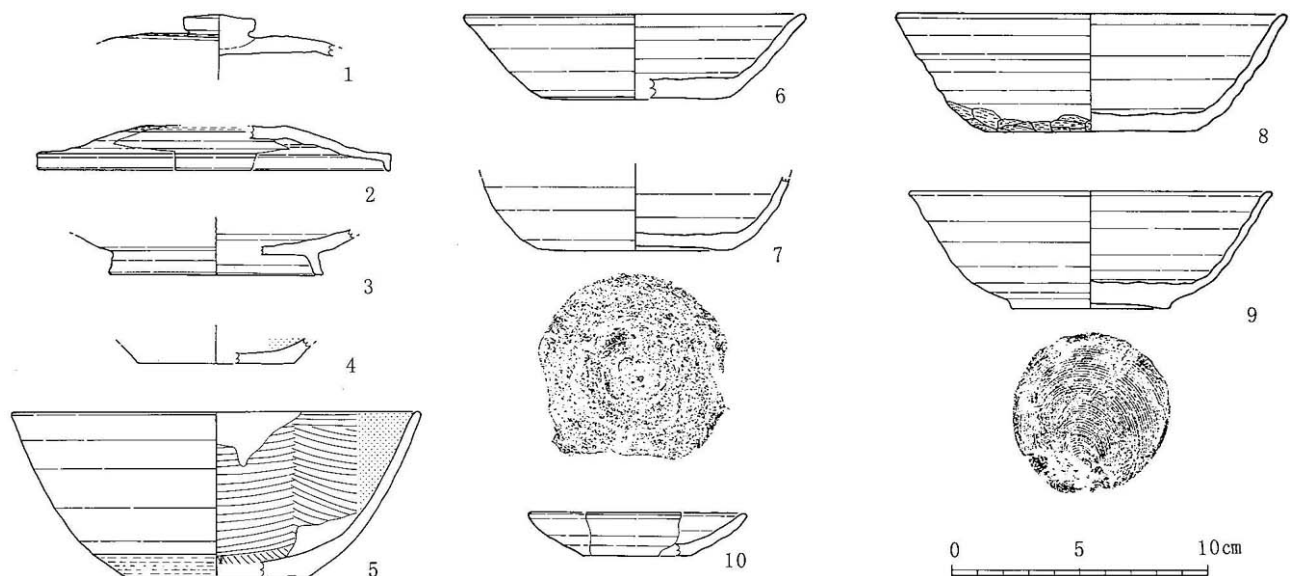
第 15 図 SB2355 建物跡とその周辺の遺構 平面図 (1/100)



SB2356



第 16 図 SB2355・SB2356 建物跡 断面図 (1/50)



番号	器種	遺構	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	遺構	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	蓋	SB2354	掘方	低い宝珠状つまみ。回転ケズリ。					1	12723	6	坏	SB2355	掘方	ヘラ切り一部分的軽いナデ。	13.4	7.4	3.3	>1/3	1	12723
2	蓋	SB2354	掘方	口縁短く屈曲。回転ケズリ。口径約 13.8cm。					5	12723	7	坏	SB2355	柱穴	ヘラ切り。両面部分的に被熱剥落。底径 7.6cm。					6	12723
3	高台坏	SB2354	柱穴	高台径 8.4cm。高台高 9mm。				1/4	2	12723	8	坏	SB2355	切取穴	体下部・底部手持ちケズリ。	15.2	8.2	4.5	1	5	12723
4	坏	SB2355	柱穴	回転糸切り無調整。内面ミガキ消失。				1/4	3	12723	9	坏	SB2355	切取穴	回転糸切り無調整。	14.2	6.2	4.6	1	4	12723
5	坏	SB2355	切取穴	回転ケズリ。横ミガキ。	16	7.2	6.4	1/2	7	12723	10	小型坏	SB2355	切取穴	黄褐色。回転糸切り無調整。	8.6	4.2	1.7	1/8	2	12723

第 17 図 SB2354・2355 建物跡出土遺物 (1~3・6~9: 須恵器、4・5: 土師器、10: 須恵系土器)

【柱間数・棟方向】桁行 6 間・梁行 2 間の南北棟。

【重複】S B 2357・2362・2363 建物跡、S K 2381・2382 土壌より古い。S K 2398 土壌とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

【検出状況】16 個すべての柱穴を検出した。

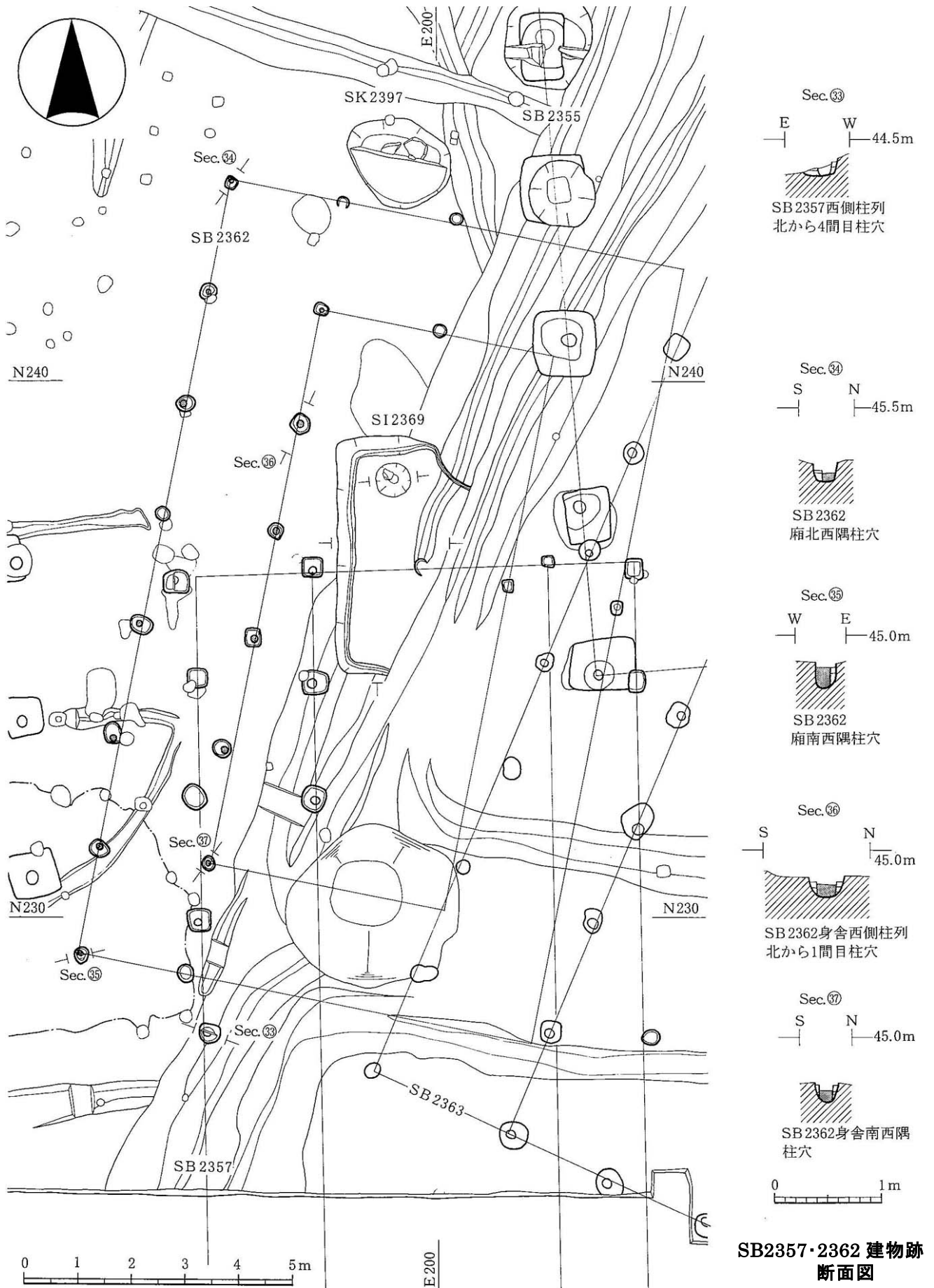
【柱穴掘方】掘方は一辺 100~120cm の方形で、検出面からの深さは東側柱列南から 1 間目の柱穴で約 130cm である。埋め土はやや粘性のあるにぶい黄褐色土で、地山風化凝灰岩片をブロック状に含む。

【柱痕跡】14 ヲ所で柱痕跡を検出した。うち 12 ヲ所は柱切取穴の底面付近で確認した。直径 25cm 前後の円形で、堆積土は灰褐色粘土である。南西隅柱穴の柱痕跡では、柱材の木質部分が直径約 15cm、長さ約 40cm 残存していた。

【平面規模】桁行総長は東側柱列で 18.15m、柱間寸法は北から 3.11m・2.99m・2.88m・2.99m・3.10m・3.08m である。梁行総長は南妻で 6.32m、柱間寸法は西から 2.98m・3.34m である。

【建物方向】東側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で西に約 5° 偏る。

【出土遺物】柱切取穴より出土したほぼ完形の須恵器坏 2 点 (8・9) 以外はすべて破片である。掘方埋め土からは土師器坏・甕、須恵器坏 (6)・甕の破片、モモ種子が少数出土した。柱切取穴からは比較的多くの土師器坏 (4・5)・甕、須恵器坏 (7)・甕・壺破片、柱痕跡からは少数の須恵器壺、丸瓦破片が出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。また、底部の調整がわかるものは、土師器坏では回転糸切り無調整 (4)、回転ケズリ (5) が各 1 点、須恵器ではヘラ切りが



SB2357・2362 建物跡 断面図

第 18 図 SB2357・SB2362 建物跡、SI2369 住居跡、SK2397 土壌 平面図 (1/100)



3点（6・7）、回転ケズリが2点、手持ちケズリ（8）・回転糸切り無調整（9）が各1点ある。

【S B 2356 建物跡】（平面図：第13図、断面図：第16図、写真：図版10-3）

〔位置〕 調査区西部の南寄り。

〔柱間数・棟方向〕 桁行3間・梁行2間の東西棟。

〔重複〕 S B 2354・2361 建物跡とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔検出状況〕 7個の柱穴を検出した。建物南東部は新しい溝によって壊されている。

〔柱穴掘方〕 掘方は一辺40～45cmの方形で、検出面からの深さは南西隅柱穴で約30cmである。埋め土は褐色土あるいはにぶい黄褐色土で、地山粘土をブロック状に含む。

〔柱痕跡〕 検出したすべての柱穴で柱痕跡を検出した。うち2カ所は柱切取穴の底面付近で確認した。直径15cm前後の円形である。堆積土は褐色土で、木炭を多く含む。

〔平面規模〕 桁行総長は北側柱列で5.87m、柱間寸法は西から2.03m・2.12m・1.72mである。梁行総長は西妻で4.21m、柱間寸法は北から2.21m・2.01mである。

〔建物方向〕 北側柱列でみると発掘東西基準線に対し東で北に約7°偏る。

〔出土遺物〕 掘方埋め土からロクロ調整の土師器坏・甕、柱切取穴から土師器甕の破片が少数出土した。

【S B 2357 建物跡】（平面図：第18図、断面図：第18図、写真：図版10-4）

〔位置〕 調査区中央部の南寄り。

〔柱間数・棟方向〕 桁行4間以上、梁行2間の身舎に、東西両側に1間ずつ廂が付く、南北棟。

〔重複〕 S B 2355 建物跡より新しい。基本層の第2層に覆われている。S B 2362・2363 建物跡、S I 2369 竪穴住居跡とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔検出状況〕 身舎の柱穴5個および廂の柱穴8個を検出した。身舎の東側柱列及び建物南半部は削平のため残存していなかった。

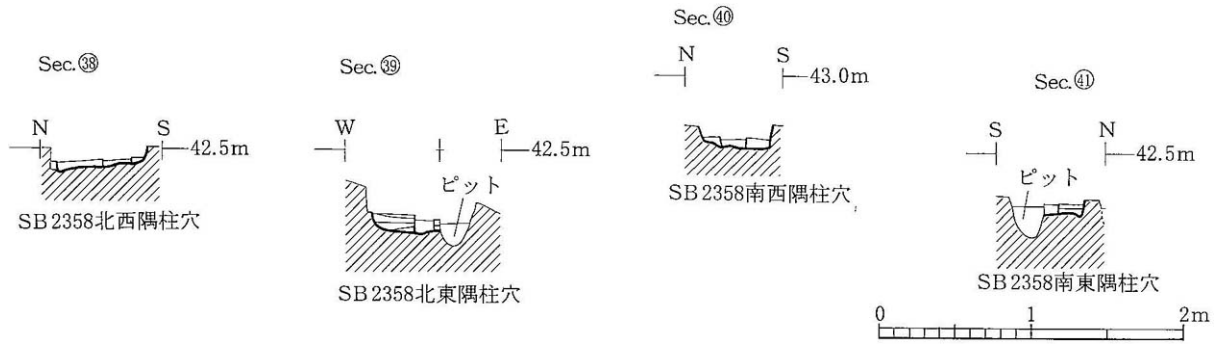
〔柱穴掘方〕 掘方は身舎、廂とも一辺30～45cmの方形もしくは隅円方形で、検出面からの深さは西側柱列北から4間目の柱穴で約20cmである。埋め土は粘性のあるにぶい黄褐色土で、地山風化凝灰岩片を粒状に含む。

〔柱痕跡〕 身舎の3カ所および廂の2カ所で柱痕跡を検出した。直径は身舎、廂とも直径15cm前後の円形で、堆積土はにぶい黄褐色土である。

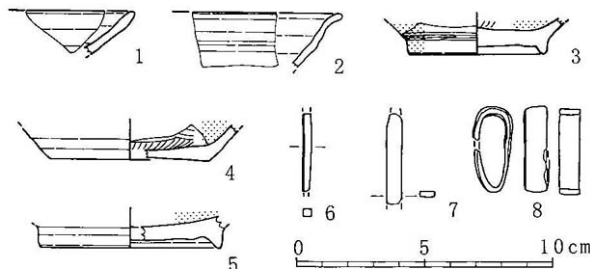
〔平面規模〕 桁行総長は西側柱列で8.49m以上、柱間寸法は北から約1.9m・約2.3m・約2.4m・2.04mである。梁行総長は北妻で約8.6m、柱間寸法は西から約2.6m（西廂）・約2.1m・約2.4m・約1.6m（東廂）である。

〔建物方向〕 西側柱列でみると発掘南北基準線とほぼ一致する。

〔出土遺物〕 掘方埋め土から須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕、丸瓦、柱切取穴からロクロ



第 19 図 SB2358 建物跡 断面図 (1/50)



番号	器種	層位	特徴	登録	箱番号
1	小型坏	切取穴	橙褐色。口径約 8.4cm。	1	12723
2	坏	柱痕跡	淡黄灰色。口径約 12.6cm。	2	12723
3	埴	切取穴	両面ミガキ→黒色処理。高台径 5.4cm。高台高 6mm。	4	12723
4	坏	切取穴	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。底部黒斑。胎土に海綿骨針含む。	3	12723
5	高台坏	切取穴	高台径 7.0cm。高台高 8mm。	5	12723
6	鉄釘	切取穴	切取穴：現存長 3.0cm。断面 3×3mm 方形。	27	12746
7	鉄鏝	切取穴	切取穴：現存長 3.5cm。断面 6×2mm 長方形。	26	12746
8	口金	堀方	環状。銅(はばき)か。3.3×1.5cm。幅 8mm。厚さ 2mm。	25	12746

第 20 図 SB2358 建物跡出土遺物 (1・2：須恵系土器、3～5：土師器、6～8：鉄製品)

調整の土師器坏・甕、須恵器坏、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類の破片が少数出土した。

【SB2358 建物跡】(平面図：第 42 図、断面図：第 19 図、遺物：第 20 図、写真：図版 10-5～8、14-1)

【位置】調査区東部。

【柱間数・棟方向】桁行 3 間・梁行 2 間の東西棟。

【重複】S I 2376～2378 竪穴住居跡より新しい。基本層の第 2 層に覆われている。S K 2399 土壇とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

【検出状況】10 個すべての柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は一辺 45～50cm の方形で、検出面からの深さは北東隅柱穴で約 30cm である。埋め土は黒褐色土あるいは褐灰色粘質土で、地山風化凝灰岩片をブロック状に含む。

【柱痕跡】9 ヲ所で柱痕跡を確認した。うち 1 ヲ所は柱抜取穴の底面付近で確認した。直径 20cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質土である。

【平面規模】桁行総長は北側柱列で 4.89m、柱間寸法は西から 1.67m・1.44m・1.78m である。梁行総長は西妻で 3.65m、柱間寸法は北から 1.96m・1.69m である。

【建物方向】北側柱列でみると発掘東西基準線にほぼ一致する。

【出土遺物】掘方埋め土から比較的多くの土師器坏破片と少数の土師器埴・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺の破片、鋤(はばき)と推定される環状の口金 1 点(8)、スサを含む壁材小片 1 点が出土した。

柱痕跡からは須恵系土器坏（2）、土師器坏・甕、須恵器坏・壺破片が少数出土した。柱切取穴からは少数の須恵系土器小型坏（1）・坏、土師器壺（3）・高台坏（5）破片の他、比較的多くの土師器坏（4）・甕破片、少数の須恵器坏・甕・壺、灰釉陶器壺（両面刷毛塗りの体部）の破片、鉄釘（6）・鉄鏟（7）、縄文時代かそれ以前の玉髓製碎片が出土した。土師器はいずれもロクロ調整のもので、底部の調整のわかる土師器・須恵器坏はいずれも回転糸切り無調整である。

【S B 2359 建物跡】（平面図：第 12 図、断面図：第 12 図、写真：図版 10－9・10）

〔位置〕 調査区西端、S B 2353 建物跡の東側。

〔柱間数〕 南北 1 間・東西 1 間。

〔重複〕 なし。

〔検出状況〕 4 個すべての柱穴を検出した。

〔柱穴掘方〕 掘方は直径約 25cm の円形で、検出面からの深さは北東隅柱穴で約 30cm である。埋め土は黄褐色土あるいは明黄褐色土で、地山風化凝灰岩片をブロック状に含む。

〔柱痕跡〕 3 ヲ所で柱痕跡を確認した。直径 15cm 前後の円形で、堆積土は粘性のある褐色土である。

〔平面規模〕 東側柱列で南北 2.82m、南側柱列で東西 2.17m である。

〔建物方向〕 東側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で西に約 18° 偏る。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【S B 2360 建物跡】（平面図：第 21 図、断面図：第 21 図、写真：図版 11－1・2・7）

〔位置〕 調査区西部の中央、S A 2364 柱列跡の西側。

〔柱間数・棟方向〕 桁行 2 間・梁行 2 間の南北棟。

〔重複〕 なし。

〔検出状況〕 南西隅の柱穴を除く 7 個の柱穴を検出した。

〔柱穴掘方〕 掘方は直径約 20cm の円形で、検出面からの深さは南東隅柱穴で約 30cm である。埋め土は褐色土で、地山粘土を粒状に含む。

〔柱痕跡〕 5 ヲ所で柱痕跡を確認した。直径 10cm 前後の円形で、堆積土は褐色土である。

〔平面規模〕 桁行総長は東側柱列で 5.52m、柱間寸法は北から約 2.8m・約 2.7m である。梁行総長は北側柱列で 3.08m、柱間寸法は西から 1.66m・1.43m である。

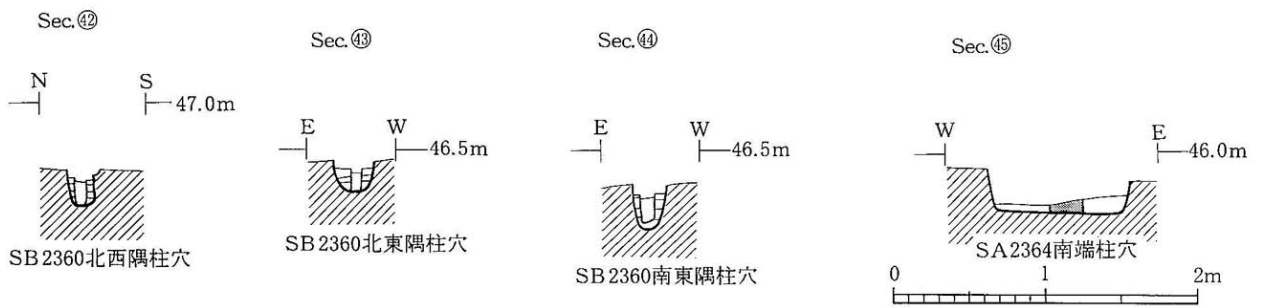
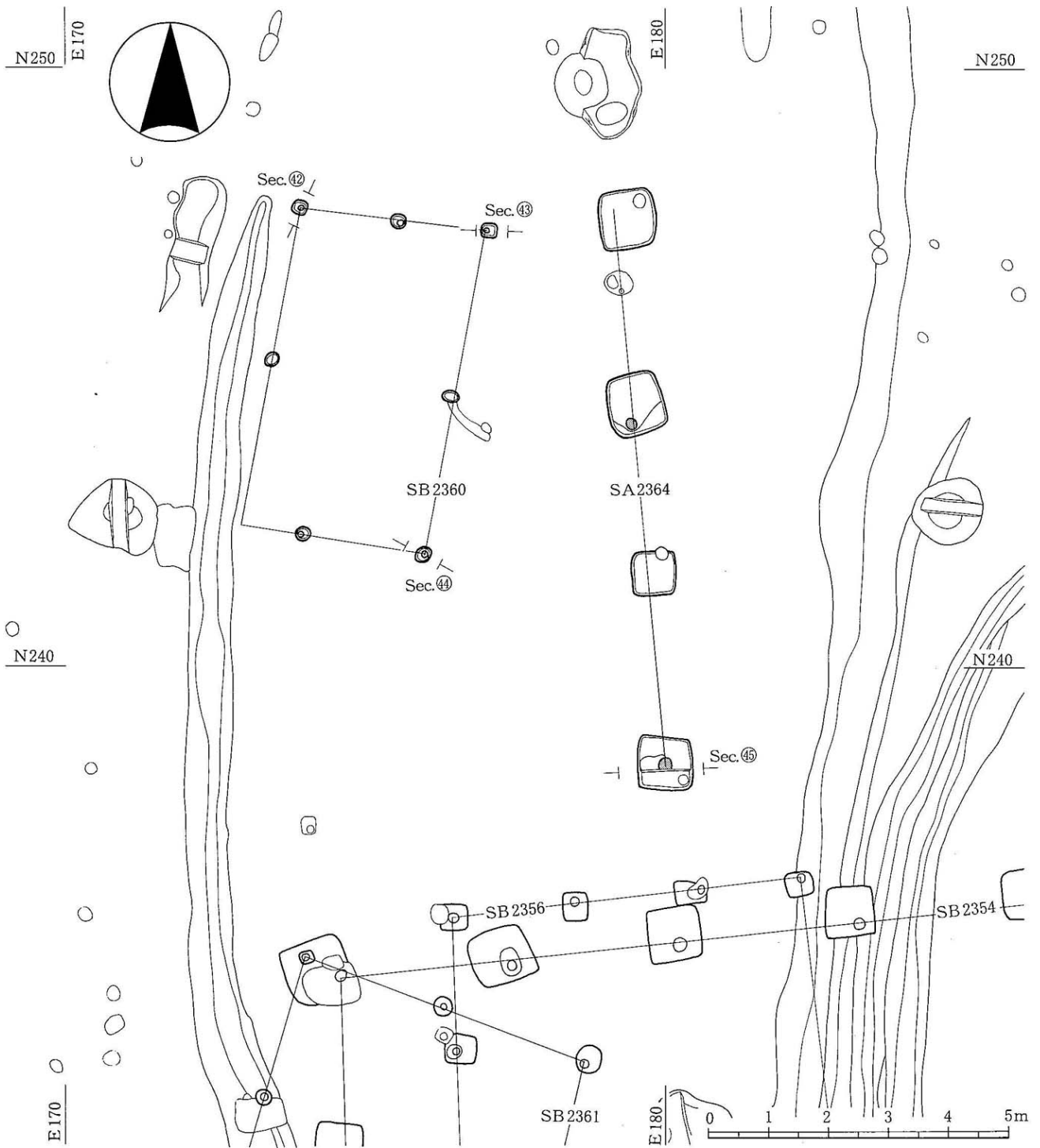
〔建物方向〕 東側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で東に約 11° 偏る。

〔出土遺物〕 掘方埋め土からロクロ調整の土師器坏、柱痕跡から須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が少数出土した。

【S B 2361 建物跡】（平面図：第 13 図、断面図：第 22 図、遺物：第 24 図、写真：図版 11－3・4）

〔位置〕 調査区西部の南寄り。

〔柱間数・棟方向〕 桁行 3 間・梁行 2 間の南北棟。



第 21 图 SB2360 建物跡、SA2364 柱列跡 平面図 (1/100) · 断面図 (1/50)

〔重複〕 S B 2354 建物跡・S K 2395 土壌より新しい。S K 2387 土壌とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔検出状況〕 10 個すべての柱穴を検出した。

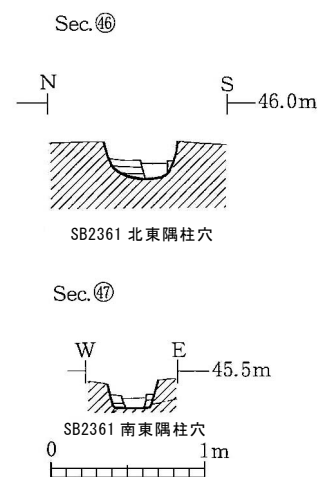
〔柱穴掘方〕 掘方は一辺 25~30cm の隅円方形もしくは円形で、検出面からの深さは北東隅柱穴で約 25cm である。埋め土は黄褐色土あるいは明褐色土で、地山凝灰岩片をブロック状もしくは粒状に含む。

〔柱痕跡〕 8 ヲ所で柱痕跡を確認した。直径 15cm 前後の円形で、堆積土は明褐色土である。

〔平面規模〕 桁行総長は東側柱列で 7.34m、柱間寸法は北から約 2.4m・約 2.5m・2.50m である。梁行総長は北妻で 4.92m、柱間寸法は西から 2.42m・2.50m である。

〔建物方向〕 東側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で東に約 16° 偏る。

〔出土遺物〕 柱痕跡から須恵系土器高台坏（1・2）、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕の破片、漆とみられる皮膜が少数出土した。



第 22 図 SB2361 建物跡  
断面図 (1/50)

〔S B 2362 建物跡〕 (平面図：第 18 図、断面図：第 18 図、遺物：第 24 図、写真：図版 11-5・6・8)

〔位置〕 調査区中央部の南寄り。

〔柱間数・棟方向〕 桁行 5 間・梁行 2 間の身舎で、四面に廂が付く南北棟。

〔重複〕 基本層の第 2 層に覆われている。S B 2355・2357・2363 建物跡、S I 2369 竪穴住居跡とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔検出状況〕 建物西半部を中心に、身舎 8 個、廂 12 個の柱穴を検出した。東半部は後世の削平をうけ残存状況は悪い。

〔柱穴掘方〕 掘方は身舎、廂とも一辺 20~30cm の隅円方形もしくは円形で、検出面からの深さは廂南西隅柱穴で約 25cm である。埋め土は黄褐色土あるいはやや粘性のある灰黄褐色土で、地山風化凝灰岩粒を含む。

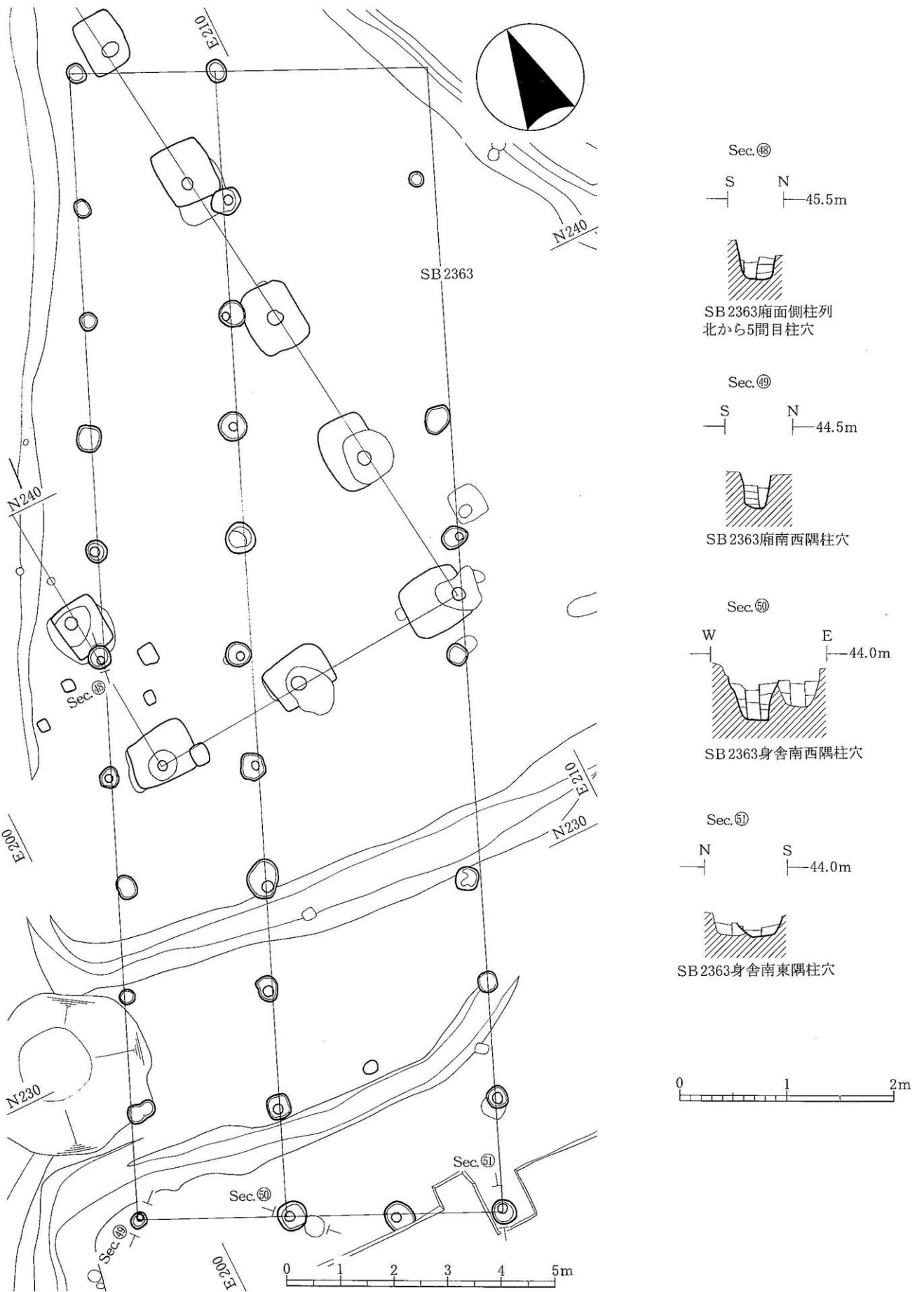
〔柱痕跡〕 身舎 6 ヲ所、廂 7 ヲ所で柱痕跡を確認した。身舎、廂とも直径 14cm 前後の円形で、堆積土は暗褐色土である。

〔平面規模〕 桁行総長は西側柱列で 14.77m、柱間寸法は北から 2.14m (北廂)・2.13m・約 2.1m・約 2.1m・2.18m・2.05m・2.10m (南廂) である。梁行総長は北から 3 間目でみると 8.62m、柱間寸法は西から約 2.1m (西廂)・約 4.4m (身舎 2 間分)・約 2.1m (東廂) である。

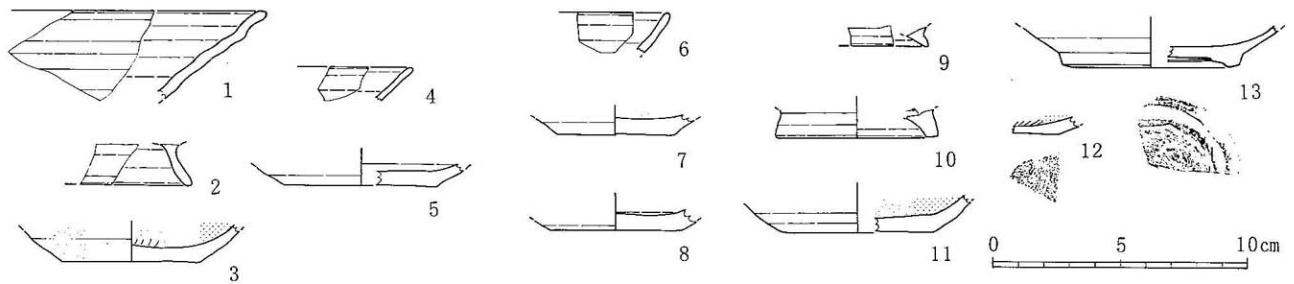
〔建物方向〕 西側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で東に約 11° 偏る。

〔出土遺物〕 掘方埋め土から須恵系土器坏（4）、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕、柱痕跡から須恵系土器坏、土師器甕、柱切取穴から須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏（5）・壺の破片が少数出土した。





第 23 図 SB2363 建物跡 平面図 (1/100) ・ 断面図 (1/50)



番号	器種	遺構	層位	特 徴	登録 番号	番号	器種	遺構	層位	特 徴	登録 番号	箱番号
1	高台坏	SB2361	柱痕跡	口縁～体部破片。黄灰色。微細なガラス含む。	1 12723	8	坏	SB2363	掘方	底径 5.2cm。黄褐色。微細ガラス含む。	1 12723	
2	高台坏	SB2361	柱痕跡	足高高台小破片。淡黄灰色。胎土微細。	2 12723	9	高台坏	SB2363	掘方	高台小破片。高台径小。橙褐色。胎土微細。	5 12723	
3	坏	SB2361	柱痕跡	底部摩滅。放射状ミガキ?。底部 5.4cm。	3 12723	10	高台坏	SB2363	掘方	破損面に回転糸切り痕。黄褐色。胎土微細。	4 12723	
4	坏類	SB2362	掘方	小型杯 or 坏。口縁部小破片。黄褐色。胎土微細。	1 12723	11	坏	SB2363	掘方	回転糸切り無調整。内面摩滅。	7 12723	
5	坏	SB2362	柱穴	底部破片。回転糸切り無調整。	2 12723	12	坏	SA2364	掘方	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。	1 12723	
6	坏	SB2363	掘方	口縁部小破片。	6 12723	13	埴	SA2364	掘方	回転糸切り→付高台。内面に粗く発泡した灰釉。外面体下部に透明な灰釉。	2 12723	
7	坏	SB2363	掘方	底径 4.6cm。黄褐色。微細ガラス含む。	2 12723							

第 24 図 SB2361～2363 建物跡、SA2364 柱列跡出土遺物

(1・2・4・6～10：須恵系土器 5：須恵器、13：灰釉陶器)

【SB2363 建物跡】(平面図：第 23 図、断面図：第 23 図、遺物：第 24 図、写真：図版 11-9・10)

【位置】調査区中央部の東寄り。

【柱間数・棟方向】桁行 10 間・梁行 2 間の身舎に、西側に 1 間の廂が付く、南北棟。

【重複】SB2355 建物跡より新しい。SB2357・2363 建物跡とは直接の切り合いがなく新旧は不明である。

【検出状況】東側柱列の 3 個及び北妻棟通り柱穴を除く 31 個の柱穴を検出した。

【柱穴掘方】掘方は身舎、廂とも一辺 35～45cm の円形で、検出面からの深さは身舎南西隅柱穴で約 40cm である。埋め土はにぶい黄褐色土や灰横褐色土あるいは粘性のある黒褐色土で、地山凝灰岩片を含む。

【柱痕跡】身舎 13 カ所、廂 4 カ所で柱痕跡を確認した。身舎、廂とも直径 18cm 前後の円形で、堆積土は暗褐色土である。

【平面規模】桁行総長は西側柱列で約 21.4m、柱間寸法は北から約 2.5m・約 2.1m・約 2.2m・約 2.1m・2.05m・2.22m・約 2.0m・約 2.1m・約 2.2m・約 1.9m である。梁行は南妻で総長が 6.88m、柱間寸法は西から 2.93m (西廂)・1.99m・1.97m である。

【建物方向】身舎の西側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で東に約 23° 偏る。

【出土遺物】掘方埋め土から須恵系土器小型坏・坏 (6～8)・高台坏 (9・10)、ロクロ調整の土師器坏 (11)・甕、須恵器坏・甕・壺、緑釉陶器椀 (両面ヘラミガキの口縁部破片、S I 2371 竪穴住居跡 1 層と約 18.5m 離れて接合；第 32 図 25)、柱痕跡から須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕体部の破片が少数出土した。

(3) 竪穴住居跡

【S I 2367 竪穴住居跡】(平面図：第 26 図、断面図：第 26 図、遺物：第 25 図、写真：図版 12)

【位置】調査区西部の中央。

【検出状況】住居跡の南半部が残存しており、貼床・周溝・カマド・貯蔵穴を検出した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】東西約 3.5m、南北約 1.7m 以上である。

【方向】南辺は発掘東西基準線に対し、東で南に約 20° 偏る。

【壁】南壁で約 10cm 残存していた。

【床面】暗褐色土の掘方埋め土の上面に、橙色地山土ブロックを主体とした貼床が残存していた。

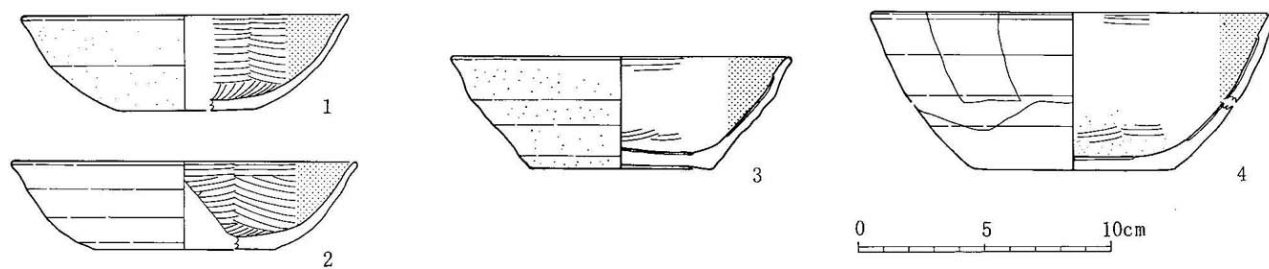
【周溝】断面 U 字形で幅 25~30cm、深さ 20cm である。堆積土は、暗褐色土でマンガン粒を斑状に含む。

【カマド】東辺南寄りに位置する。カマド本体の南側壁が高さ 10cm 残存していた。カマド底面でも貼床を確認した。貼床上面には焼土、木炭が分布していた。

【貯蔵穴】住居南東隅に位置する。径約 70~85cm の楕円形平面で、深さ約 15cm である。貯蔵穴内堆積土は、橙色地山土を小さなブロック状に含むにぶい黄褐色土の人為堆積土である。

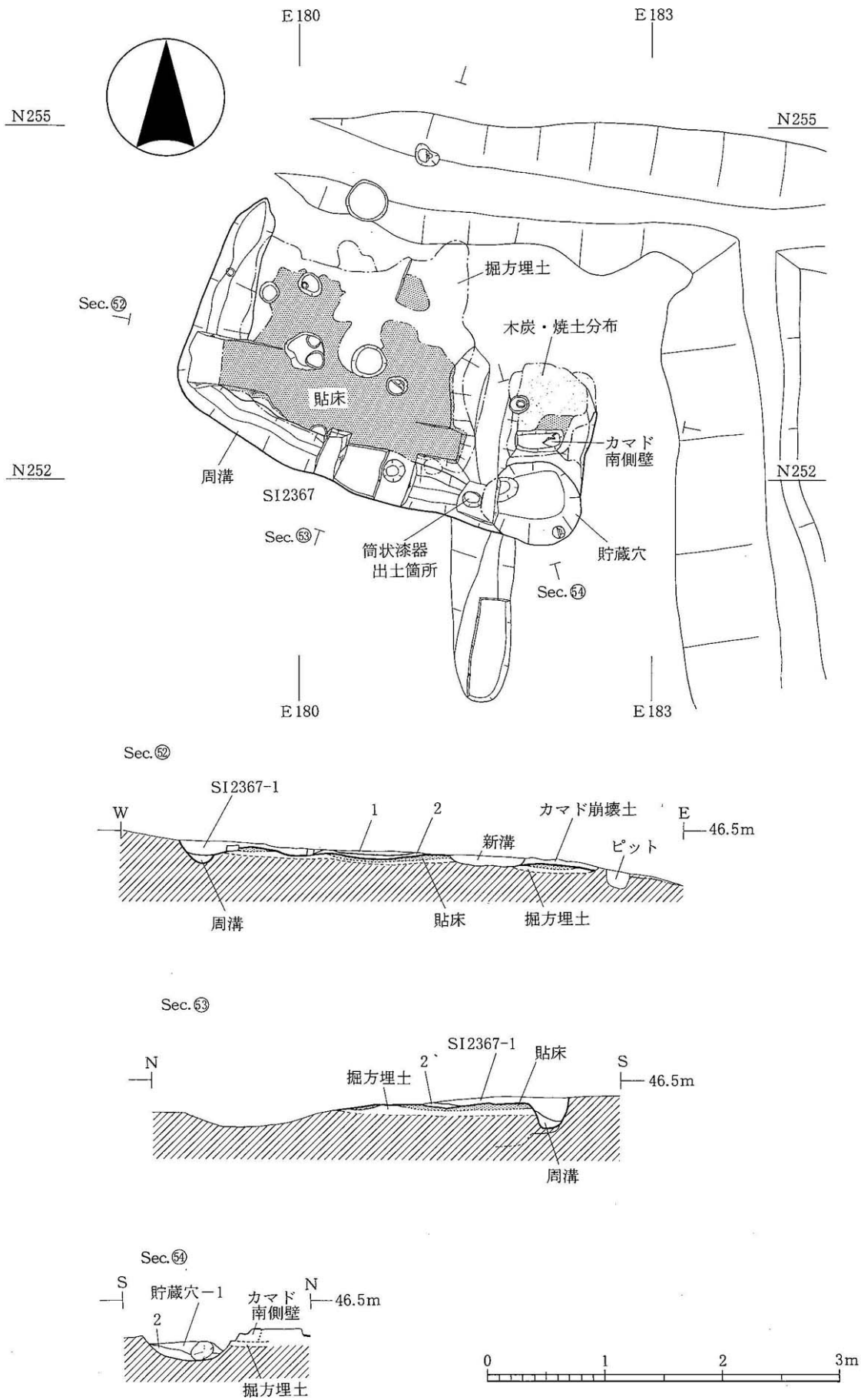
【住居内堆積土】大きく 3 層に分けられる。1 層は明黄褐色地山土をブロック状に含むにぶい黄褐色土、2 層は褐色土、3 層はマンガン粒を斑状に含む、明黄褐色地山土を小さなブロック状に含む暗褐色土である。1・2 層は住居廃絶後の人為堆積土、3 層は周溝内の自然堆積土である。

【出土遺物】貯蔵穴からは口縁部~底部まで残存する磨滅した土師器坏 3 点 (1~3) の他、土師器坏、須恵器坏・甕の破片が少数出土した。また、周溝からは土師器坏 (回転糸切り無調整と磨滅した底部各 1 点など)・甕、須恵器坏・甕・壺、政庁第 II 期の平瓦 II B 類の破片の他、円筒状の漆塗り木製容器 1 点 (保存処理中のため、今回は図示できず) が出土した。堆積土からは土師器坏、須恵器坏 (へら切りの底部 1 点など)・甕・壺破片、鉄滓が少数出土した。カマド崩壊土からは土師器坏、時期不明の平瓦・丸瓦破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。



番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	貯蔵穴	磨滅。放射状ミガキ。	13.0	5.6	3.8	<1/2	2	12723	3	坏	貯蔵穴	磨滅。	13.4	7.2	4.4	1	1	12723
2	坏	貯蔵穴	回転糸切り?。横ミガキ。	13.8	7.2	3.5	1/3	3	12723	4	坏	埋 2 層	磨滅。	16.0	7.8	6.2	1	4	12723

第 25 図 S I 2367 竪穴住居跡出土遺物 (1~4: 土師器)



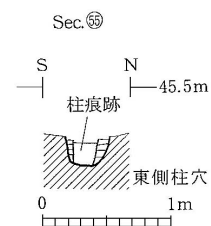
第 26 図 SI2367 竪穴住居跡 平面図・断面図 (1/50)

【S I 2368 竪穴住居跡】（平面図：第 13 図、断面図：第 27 図）

〔位置〕 調査区中央部。

〔重複〕 S B 2354 建物跡と重複するが、直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔変遷〕 ほぼ同位置で建てかえられており、A→B の 2 時期の変遷がある。



第 27 図 SI2368 竪穴住居跡 断面図 (1/50)

#### < S I 2368A 竪穴住居跡 >

〔検出状況〕 北半部が残存しており、S I 2368B に一部壊されている。東辺および西辺の周溝・柱穴を検出した。南半部は後世の削平を受け残存していない。

〔平面形・規模〕 東西約 4.4m、南北約 2.6m 以上である。

〔方向〕 西辺は発掘南北基準線に対し、北で西に約 7° 偏る。

〔壁〕 残存していなかった。

〔床面〕 残存状況が悪く、床面の様子は不明である。

〔周溝〕 断面 U 字形で幅 15～25cm、深さ 3～5 cm 残存していた。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

#### < S I 2368B 竪穴住居跡 >

〔検出状況〕 北辺と東・西辺の一部のみ残存しており、周溝・柱穴を検出した。

〔平面形・規模〕 東西約 4.7m、南北約 2.1m 以上である。

〔方向〕 北辺は発掘東西基準線に対し、東で北に約 4° 偏る。

〔壁〕 残存していなかった。

〔床面〕 残存状況が悪く、床面の様子は不明である。

〔周溝〕 断面 U 字形で幅約 20cm、深さ約 5 cm 残存していた。

〔支柱穴〕 2 個の柱穴を検出した。柱穴掘方は一辺 30～40cm の方形で、深さ約 25cm である。掘方埋め土はにぶい黄褐色土あるいは灰黄褐色土で、地山風化凝灰岩をブロック状に含む。柱痕跡は径 12～17cm の円形で、堆積土はにぶい黄褐色土である。柱間寸法は 2.47m である。柱痕跡を結んだ線の方角でみると発掘東西基準線に対し東で北に約 2° 偏る。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【S I 2369 竪穴住居跡】（平面図：第 18 図、断面図：第 28 図、遺物：第 29 図、写真：図版 12-5）

〔位置〕 調査区中央部。

〔検出状況〕 住居跡の西半部が残存しており、貼床・周溝・貯蔵穴を検出した。

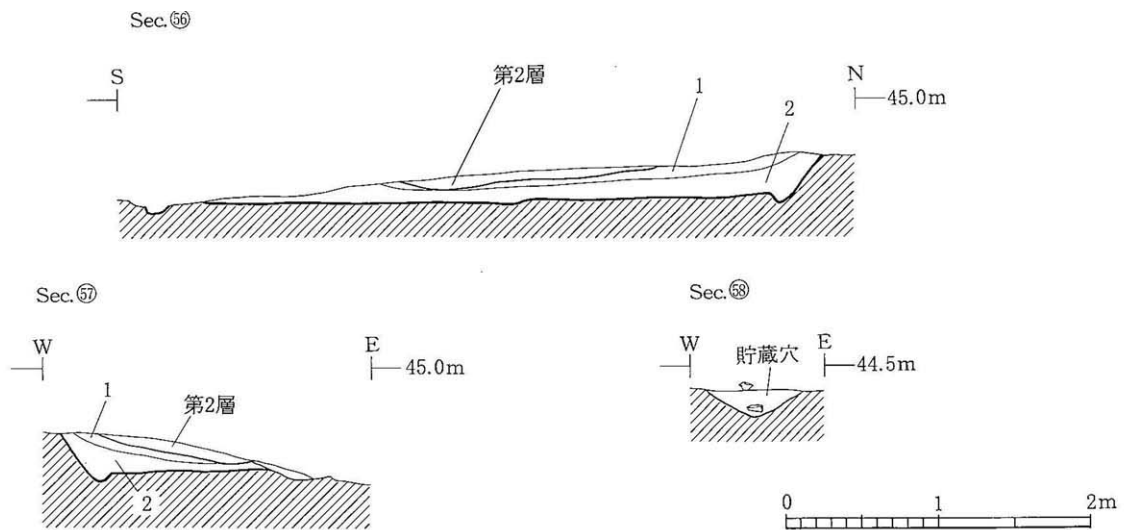
〔重複〕 S B 2357・2362 建物跡と重複するが、直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔平面形・規模〕 西半部のみ残存しており、東西約 1.9m 以上、南北約 4.4m である。

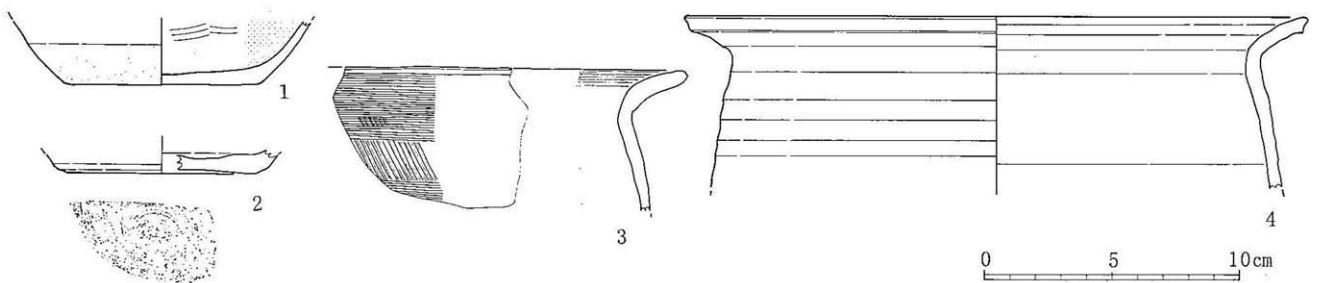
〔方向〕 西辺は発掘南北基準線にほぼ一致する。

〔壁〕 北西壁で約 27cm 残存していた。





第 28 図 S12369 竪穴住居跡 断面図 (1/50)



番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号	番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号
1	坏	堆積土	摩滅。底径 7.6cm。	2 12723	3	甕	堆積土	口縁部外反。非ロクロ。刷毛目・ヨコナデ。	3 12723
2	坏	堆積土	回転糸切り。底径 7.4cm。両面火痕。	4 12723	4	甕	床面	口縁部外反。両面ロクロナデ。口径 24.4cm。	1 12723

第 29 図 S12369 竪穴住居跡出土遺物 (1・3・4：土師器、2：須恵器)

【床面】 暗褐色土の掘方埋め土の上面に、橙色地山土ブロックを主体とした貼床が残存していた。

【周溝】 断面U字形で幅 15～35cm、深さ 5 cm 残存しており、堆積土はにぶい黄褐色土である。

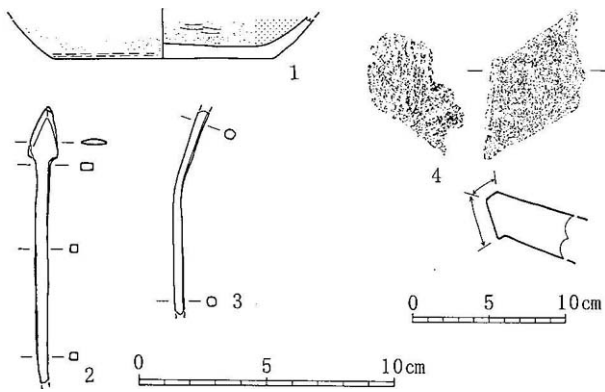
【貯蔵穴】 住居北西隅に位置する。直径約 65cm の円形で、深さ約 17cm である。貯蔵穴内の堆積土は、橙色地山土を小さなブロック状に含むにぶい黄褐色土の人為堆積土である。

【住居内堆積土】 大きく 3 層に分けられる。1 層は明黄褐色地山土をブロック状に含むにぶい黄褐色土、2 層は褐色土、3 層はマンガン粒を斑状に含み、明黄褐色地山土を小さなブロック状に含む暗褐色土である。1・2 層は住居廃絶後の人為堆積土、3 層は周溝内の自然堆積土である。

【出土遺物】 床面からロクロ調整の土師器甕 (4)、貯蔵穴から須恵器甕、堆積土から土師器坏 (1)・甕 (3)、須恵器坏 (2)・甕の破片が少数出土した。須恵器坏には回転糸切り無調整 (2)・手持ちケズリが各 1 点ある。

【S I 2370 竪穴住居跡】 (平面図：第 4 図、遺物：第 30 図)

【位置】 調査区東部の北端。



番号	器種	層位	特徴	登録	箱番号
1	坏	西周溝	回転ケズリ。摩滅。	1	12723
2	鉄鏝	床面	長茎鏝。現存長 10.7cm	3	12746
3	不明	床面	現存長 8.0cm。断面 3.5 mm 方形。	4	12746
4	平瓦	西周溝	平瓦ⅡB類 b タイプ 2。赤褐色。凸面=長軸に平行する潰れた縄叩き目。凹面:布目→ナデ。側端部圧痕。政庁第Ⅲ期。	2	12741

第 30 図 S I 2370 竪穴住居跡出土遺物 (1: 土師器、2・3: 鉄製品、4: 瓦)

【検出状況】住居跡の南西隅付近が残存しており、東辺の周溝を検出した。精査していないため、詳細は不明である。

【重複】S I 2371 竪穴住居跡より新しい。

【方向】西辺は発掘南北基準線に対し、北で西に約 6° 偏る。

【壁】南西隅で約 30cm 残存していた。

【周溝】断面 U 字形で幅 50cm、深さ 20cm 残存していた。【出土遺物】床面から長茎式鉄鏝 (2)・不明鉄製品 (3) 各 1 点、周溝から土師器坏 (1)・甕、須恵器坏、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB 類の破片が少数出土した。

【S I 2371 竪穴住居跡】(平面図: 第 4 図、遺物: 第 31・32 図)

【位置】調査区東部の北端。

【検出状況】住居跡の西辺および南辺が残存しており、北半部は調査区外に位置する。精査していないため、床面・住居内堆積土の状況や周溝・カマドの有無などの詳細は不明である。

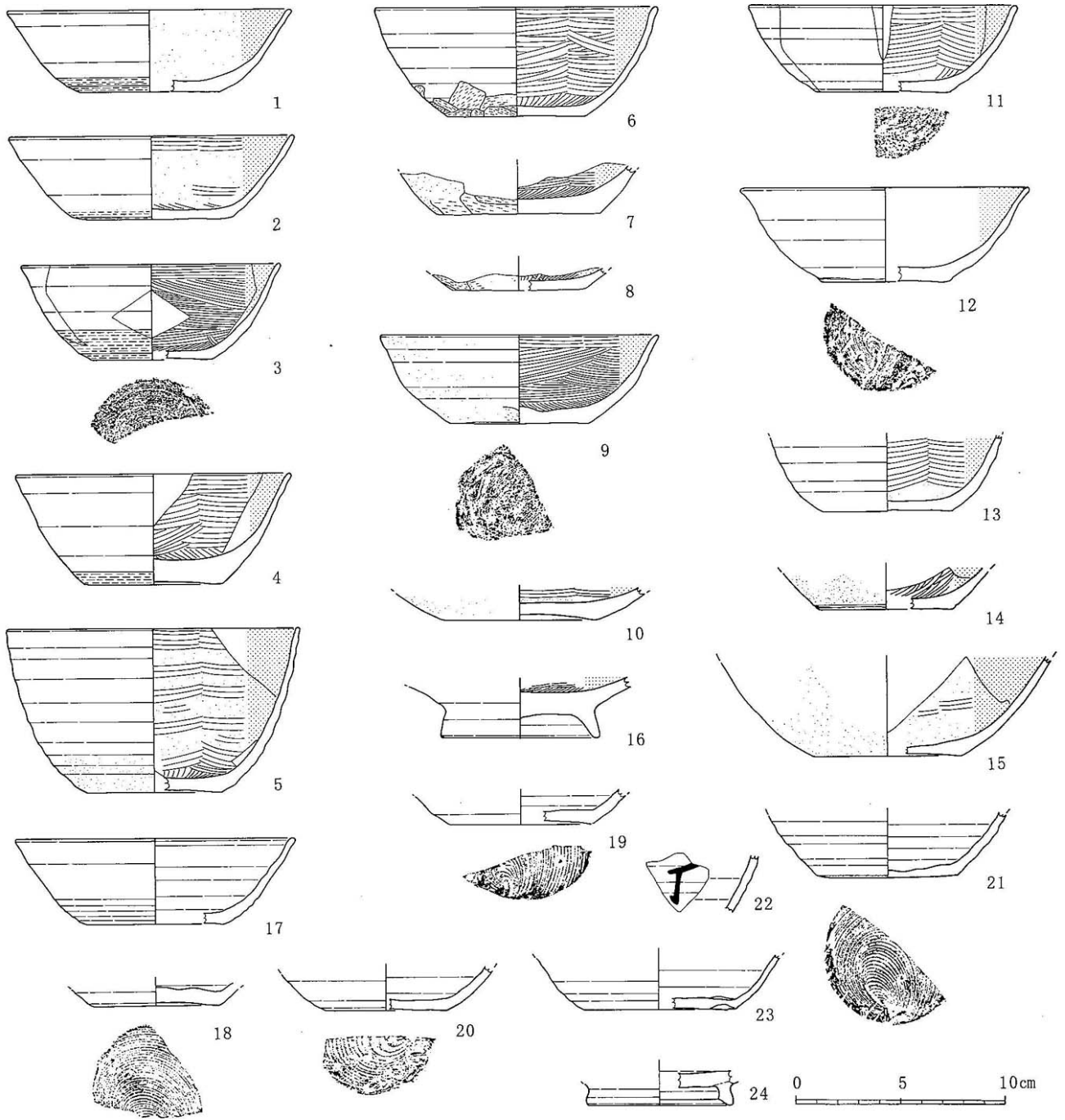
【重複】S I 2370 竪穴住居跡より古い。

【平面形・規模】東西約 3.1m 以上、南北約 3.7m 以上である。

【方向】西辺は発掘南北基準線に対し、東で南に約 6° 偏る。

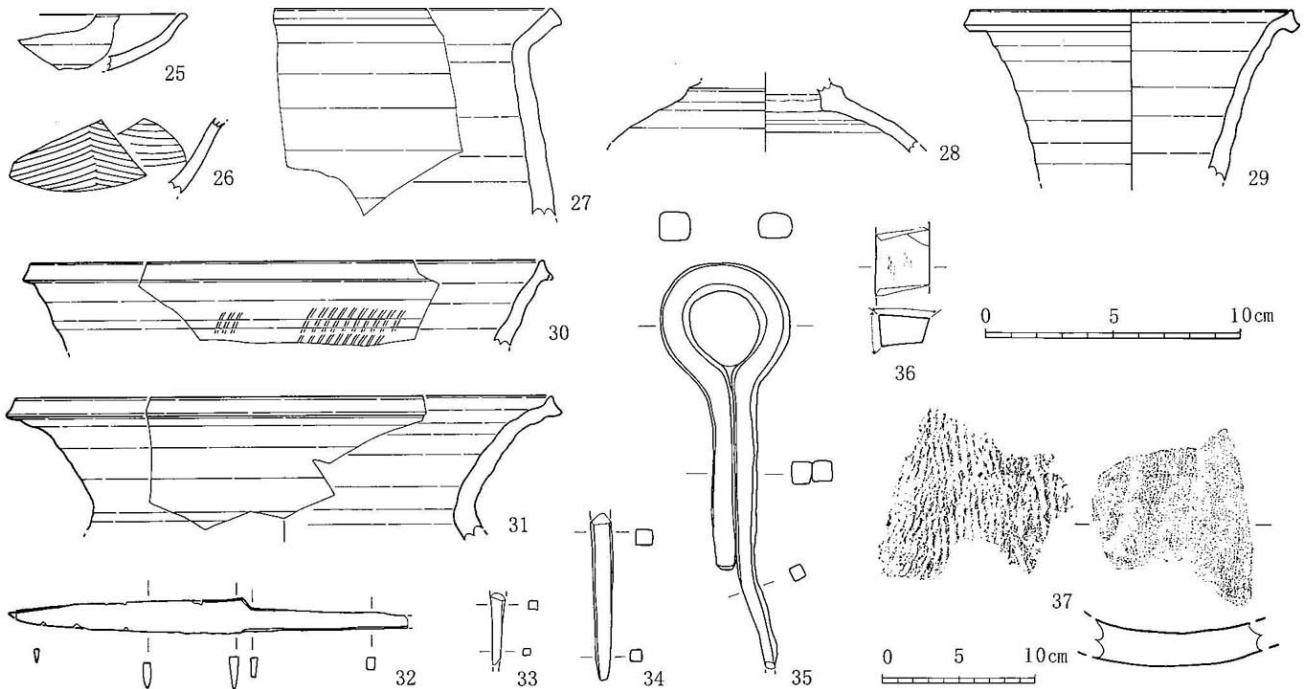
【壁】西壁で約 22cm 残存していた。

【出土遺物】周溝からは口縁～底部まで残存する土師器坏 4 点 (1・4・5・11) の他、土師器の坏・甕、須恵器坏・甕の破片がやや多く出土した。堆積土からは口縁～底部まで残存する土師器坏 5 点 (2・3・6・9・12)、須恵器坏 1 点 (17) の他、多くの土師器の坏・甕、須恵器坏の破片と少数の土師器高台坏、須恵器高台坏・甕・壺、緑釉陶器皿 (25)・埴 (26)、政庁第Ⅰ期の平瓦ⅠA 類、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB 類 (37)、丸瓦の破片、轆羽口先端小破片? 1 点、刀子 1 点 (32)、鉄釘 3 点 (33~35)、砥石 1 点 (36)、漆皮膜断片 1 点、スサ入り壁材小破片 2 点が出土した。



番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	西周溝	回転ケズリ。摩滅。黒斑。	13.6	6.6	5.3	1/2	2	12724	12	坏	堆積土	回転系切り無調整。摩滅。	13.8	6.0	4.5	<1/2	11	12724
2	坏	堆積土	回転ケズリ。横ミガキ。黒斑。	13.6	7.6	4.0	1	9	12724	13	坏	堆積土	回転系切り無調整?。摩滅。底径6.2cm。				1	12	12724
3	坏	堆積土	回転ケズリ。横ミガキ。	12.4	5.8	4.5	1/3	7	12724	14	坏	堆積土	回転系切り。放射状ミガキ。黒斑。底径6.4cm。				1/3	15	12724
4	坏	西周溝	回転ケズリ。横ミガキ。黒斑。	13.2	6.6	5.3	1	1	12724	15	坏	西周溝	回転系切り無調整。摩滅。底径7.0cm。				1/3	5	12724
5	坏	西周溝	摩滅。放射状ミガキ。	14.0	6.4	7.8	1/3	4	12724	16	高台坏	堆積土	横ミガキ。高台径7.6cm。高台高13mm。				1	17	12724
6	坏	堆積土	手持ちケズリ。放射状ミガキ。海綿骨針を含む。黒斑。	13.5	6.6	5.2	1	8	12724	17	坏	堆積土	回転系切り無調整。重ね焼き痕。	13.4	6.6	4.1	<1/4	18	12724
7	坏	堆積土	手持ちケズリ。横ミガキ。底径7.8cm。				1/3	13	12724	18	坏	堆積土	回転系切り無調整。底径6.0cm。				1/4	21	12724
8	坏	堆積土	手持ちケズリ。放射状ミガキ。底径6.4cm。				1/3	14	12724	19	坏	堆積土	回転系切り無調整。海綿骨針含む。底径6.8cm。				1/3	30	12724
9	坏	堆積土	回転系切り-体下部・底部外周手持ちケズリ。横ミガキ。海綿骨針。	13.2	6.6	4.2	1/4	10	12724	20	坏	堆積土	回転系切り無調整。底径5.8cm。				1/3	20	12724
10	坏	堆積土	摩滅。		7.4		3/4	16	12724	21	坏	堆積土	回転系切り無調整。棒状圧痕。底径6.7cm。				1/2	6	12724
11	坏	西周溝	回転系切り無調整。摩滅。	12.8	6.4	4.1	1/4	3	12724	22	坏	堆積土	体部破片。外面不明墨書。					23	12724
										23	坏	堆積土	ヘラ切り。体部焼け膨れ。底径7.2cm。				1/4	19	12724
										24	坏	堆積土	体部~高台部破片。高台径7.0cm。高台高9mm。				1/4	22	12724

第31図 SI2371 竪穴住居跡出土遺物(1) (1~16: 土師器、17~24: 須恵器)



番号	器種	層位	特	徴	登録	箱番号	番号	器種	層位	特	徴	登録	箱番号
25	皿	堆積土	口縁～体下部破片。ロクロナデ。SB2363 掘方出上破片と約 18.5m 離れて接合。		28	12724	31	甕	堆積土	口縁部破片。口径約 21cm。ロクロナデ。		25	12724
26	埴	堆積土	体部破片。両面ヘラミガキ→淡緑色釉。		29	12724	32	刀子	堆積土	平造り角棟。両区。総長 15.4, 身長 8.8, 茎長 6.6cm。		75	12746
27	甕	堆積土	口縁～体部破片。両面ロクロナデ。		31	12724	33	鉄釘	堆積土	現存長 2.8cm。断面 4mm 方形。		77	12746
28	壺	堆積土	頸下部～体上部破片。リング状凸帯。		27	12724	34	鉄釘	堆積土	現存長 6.5cm。断面 7mm 方形。11 と同一個体?		76	12746
29	壺	堆積土	口径 12.6cm。凸帯径 13.2cm。凸帯高 8mm。		26	12724	35	鉄釘	堆積土	環状鉄釘。		74	12746
30	甕	堆積土	口縁部破片。口径約 20cm。平叩き→ロクロナデ。		24	12724	36	砥石	堆積土	極細粒凝灰岩製手持ち砥石。2面研磨。		71	12744
							37	平瓦	堆積土	平瓦 II B 類。赤褐色。凸面縄叩き目。凹面布目→ナデ。		70	12741

第 32 図 S12371 竪穴住居跡出土遺物(2) (25・26 : 土師器、28～31 : 須恵器、32～35 : 鉄製品、36 : 石製品、

周溝・堆積土から出土した土師器はいずれもロクロ調整のものである。また、調整のわかる土師器坏は 38 点で、うち回転糸切り無調整が 15 点 (11・15)、回転ケズリが 7 点 (1・4)、回転糸切り一体下部・底部手持ちケズリが 3 点、手持ちケズリが 13 点で、回転糸切り無調整と手持ちケズリがほぼ同数で主体を占める。須恵器坏は 18 点で、うちヘラ切りが 5 点 (17・23)、回転糸切り無調整が 11 点 (18～21)、回転ケズリが 1 点、手持ちケズリが 1 点で、回転糸切り無調整が主体を占める。

【S I 2372 竪穴住居跡】(平面図 : 第 15 図)

【位置】調査区中央の北寄り、S B 2355 建物跡の北側。

【検出状況】住居跡の北西部が残存していた。残存状況が悪く、周溝を検出することどまり、詳細は不明である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】東西約 0.9m 以上、南北約 0.8m 以上である。

〔方向〕発掘基準線に対する角度を検討することはできなかった。

〔周溝〕断面U字形で幅約8cm、深さ約7cm残存していた。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【S I 2373 竪穴住居跡】（平面図：第33図、断面図：第34図、遺物：第35図、写真：図版13）

〔位置〕調査区の北東隅。

〔検出状況〕貼床・周溝・壁柱穴を検出した。住居跡の北半部は調査区外に位置する。

〔重複〕基本層の第2層に覆われており、S I 2374・2375 竪穴住居跡、S K 2383 土壙、S D 2403 溝跡より古い。

〔平面形・規模〕東西約5.5m、南北約5.1m以上である。

〔方向〕西辺は発掘南北基準線にほぼ一致する。

〔壁〕南壁で約15cm残存していた。西周溝内に1個、南周溝内に2個、東周溝内に5個の壁柱穴を検出した。その内3ヵ所で柱痕跡を確認した。壁柱穴の掘方は一辺20～25cmの方形で、深さ約15～20cmである。壁柱痕跡は直径約8～12cmの円形である。

〔床面〕貼床を南西部・南東隅で確認した。厚さ約3cmで、凝灰岩片・地山土をブロック状に多く含むにぶい黄褐色粘質土である。

〔周溝〕北辺を除く3辺で確認した。断面は偏平なU字形で、幅約30～35cm、深さ約18cmである。堆積土は灰黄褐色土で、焼土、炭化物、地山粒を含む。

〔住居内堆積土〕灰黄褐色土のブロック、風化凝灰岩片を多く含む褐色粘質土である。

〔出土遺物〕壁柱穴から口縁部～底部まで残存する回転ケズリの土師器坏（1）、丸瓦Ⅱ類、周溝から土師器坏・甕、回転糸切り無調整の須恵器坏（2）、須恵器甕、堆積土から土師器坏の破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

【S I 2374 竪穴住居跡】（平面図：第33図、断面図：第34図、遺物：第35図、写真：図版13）

〔位置〕調査区東北隅。

〔検出状況〕貼床・周溝・外延溝を検出した。

〔重複〕S I 2334 竪穴住居跡より新しい。S I 2375 竪穴住居跡、S K 2383 土壙、S D 2403 溝跡より古い。基本層の第2層に覆われている。

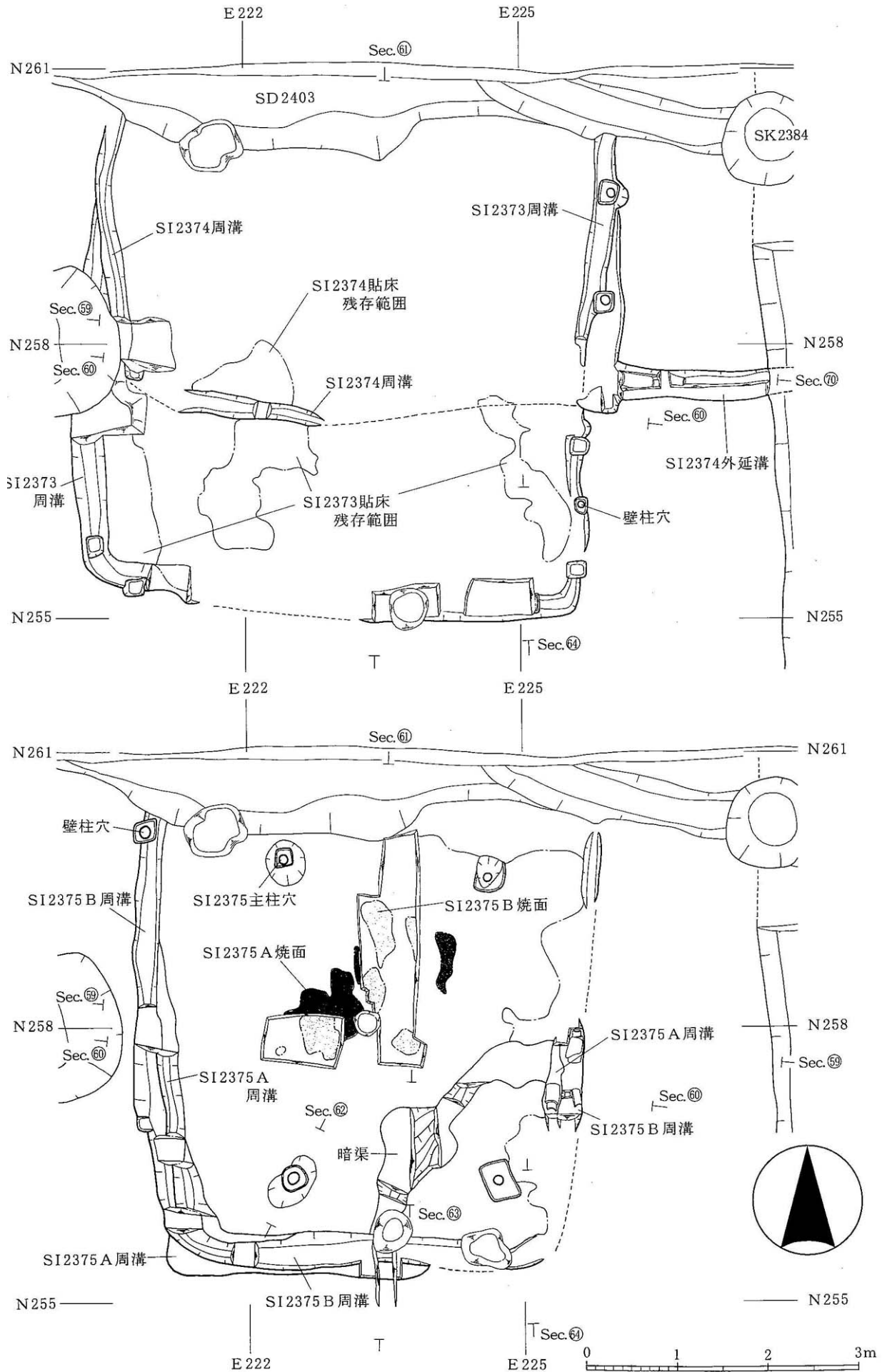
〔平面形・規模〕東西約5.6m、南北約3.3m以上である。

〔方向〕東辺は発掘南北基準線ほぼ一致する。

〔壁〕残存していなかった。南西隅の周溝で壁柱穴を1個検出した。掘方は一辺約20cmの方形で、深さ約30cmである。柱痕跡は残存していなかった。

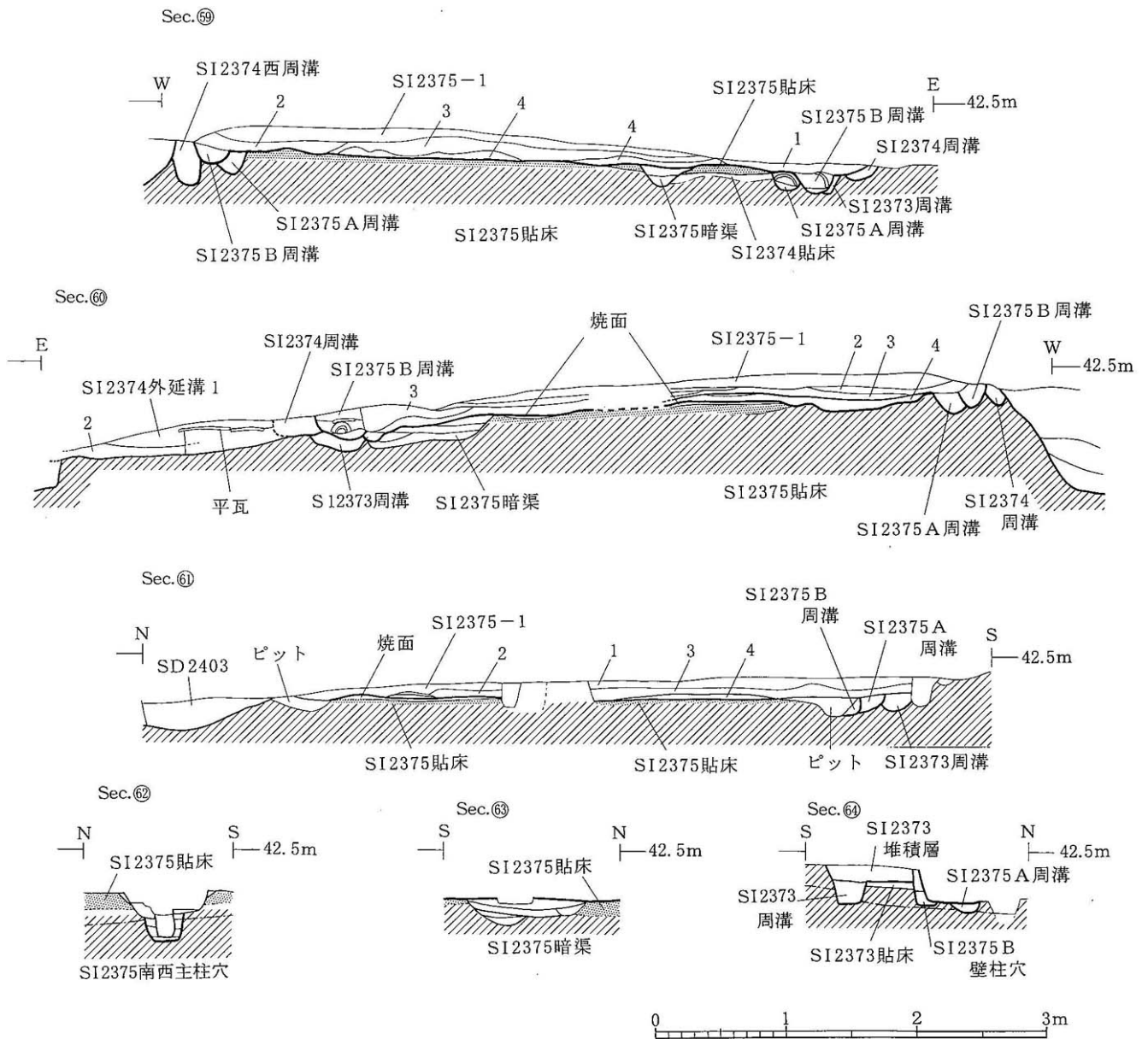
〔床面〕南西部で部分的に貼床が残存していた。

〔周溝〕西辺および南辺の一部で確認した。断面はU字形で、幅約20～28cm、深さ約15cmである。堆積土は、にぶい黄褐色土である。南東隅から東へ向け、幅約30～40cm、深さ25cmの外延溝を長さ



第 33 图 SI2373・2374 竖穴住居跡（上）および SI2375A・B 竖穴住居跡（下） 平面图（1/60）





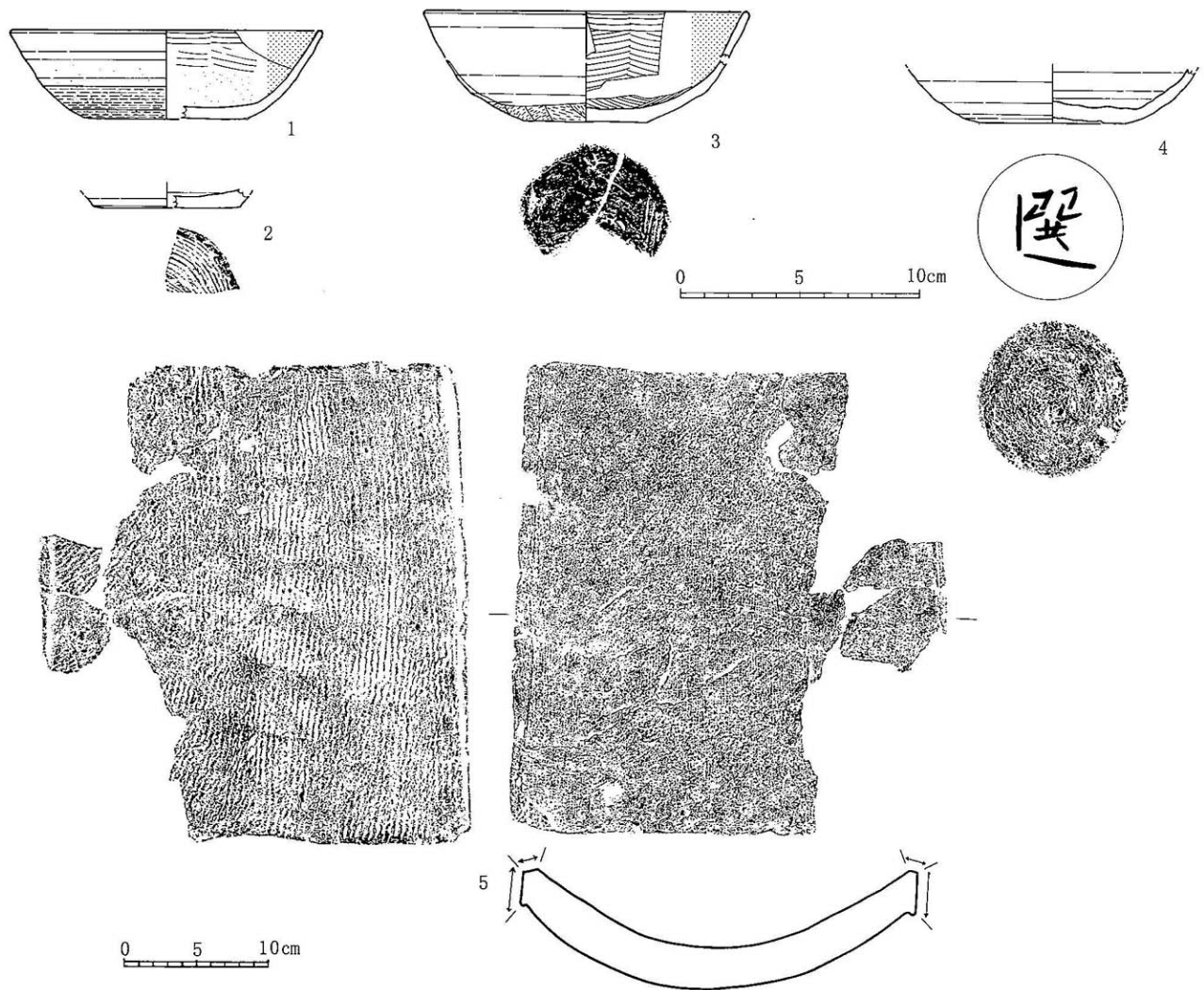
第 34 図 SI2373~2375 竪穴住居跡 平面図 (1/50)

約 1.7m 検出した。これは平瓦で蓋をした暗渠になっていた状況が確認された。堆積土は上下 2 層に分けられる。1 層は褐色土、2 層は黄褐色粘質土で焼土ブロックを非常に多く含む。

【出土遺物】堆積土から口縁部から底部まで残存する回転糸切り→手持ちケズリの土師器坏 1 点 (3) の他、土師器坏、須恵器坏の破片、外延溝から政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB 類 b タイプ (5) が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

【S I 2375A・B 竪穴住居跡】(平面図：第 33 図、断面図：第 34 図、遺物：第 35~41 図、写真：図版 13)

【位置】調査区東北隅。



番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	登録	箱番号
1	坏	SI2373	回転ケズリ。被熱。摩滅。	13.0	6.8	3.7	1/3	1	12724	4	坏	SI2375A	ヘラ切り→底部外周部分的手持ちケズリ。底部墨書「選」。底部6.0cm。	1	12726
2	坏	SI2373	回転糸切り無調整。		6.2		1/4	2	12724						
3	坏	SI2374	回転糸切り→手持ちケズリ。横ミガキ。黒斑。	13.6	5.2	4.6	3/4	1	12724	5	瓦	SI2374	平瓦ⅡB類bタイプ。凸面縄叩き目。凹面糸切痕→布目→ナデ。側端部圧痕。政庁第三期。	3	12742

第35図 SI2373・2374・2375A 竪穴住居跡出土遺物 (1・3：土師器、2・4：須恵器、5：瓦)

〔重複〕 S I 2373・2374 竪穴住居跡より新しく、S D 2403 溝跡より古い。基本層の第2層に覆われている。

〔変遷〕 ほぼ同位置で建てかえられており、A→Bの2時期の変遷がある。

< S I 2375A 竪穴住居跡 >

〔検出状況〕 貼床・周溝・焼面・住居内暗渠を検出した。

〔平面形・規模〕 東西約4.5m、南北約4.8m以上である。

〔方向〕 南辺は発掘東西基準線にほぼ一致する。

〔壁〕 西壁で約20cm残存していた。

〔床面〕 ほぼ全面に地山土ブロックを多く含む黄褐色あるいは灰黄褐色粘質土の貼床が残存していた。

〔周溝〕北辺を除く3辺で確認した。断面は偏平なU字形で、幅約30～45cm、深さ約15cmである。堆積土は、褐灰色粘質土あるいは黄褐色粘質土で焼土・炭化物を少量含む。東辺中央部では、丸瓦で蓋をした暗渠になっていた状況が確認された。

〔焼面〕中央部に80～100cmの不整形な範囲で焼面を検出した。

〔その他〕南辺周溝の中央部から東辺周溝の中央部へ北東方向に住居内暗渠を検出した。暗渠の掘方は断面逆台形で、幅約25cm、深さ約20cmである。堆積土は灰黄褐色粘質土で細かい灰白色土ブロックを含む。S I 2375A 堅穴住居跡の貼床を掘り込んでいた。

〔出土遺物〕周溝上面からヘラ切り・墨書「選」の体下部～底部破片1点（第35図4）が出土した。

### < S I 2375B 堅穴住居跡 >

〔検出状況〕貼床・周溝・焼面・住居内暗渠を検出した。

〔平面形・規模〕東西約4.9m、南北約4.8m以上である。

〔方向〕南辺は発掘東西基準線にほぼ一致する。

〔壁〕西壁で約20cm残存していた。

〔床面〕S I 2375A 堅穴住居跡の焼面を覆って、北半部に明黄褐色の風化凝灰岩ブロックや地山砂質土ブロックからなる貼床が残存していた。

〔周溝〕断面は偏平なU字形で、幅約25～30cm、深さ約10cmである。堆積土は暗褐色土で焼土・炭化物を多量に含む。東辺中央部では丸瓦で蓋をした暗渠になっていた状況が確認された。

〔支柱穴〕4個の柱穴を検出した。柱穴掘方の平面形は一辺20～40cmの方形で、深さ約40cmである。柱穴埋め土は灰黄褐色土である。3ヵ所の柱穴で柱痕跡を検出した。径約15cmの円形で、堆積土は褐灰色粘質土で炭化物片を多く含む。柱間寸法は東側柱列で南北3.48m、北側柱列で東西2.24mである。柱痕跡を結んだ線の方法は、東側柱列でみると発掘南北基準線にほぼ一致する。

〔焼面〕北半部中央で、貼床土上面に焼面を数ヵ所検出した。

〔その他〕南辺周溝の中央部から東辺周溝の中央部へ北東方向に住居内暗渠を検出した。掘方は断面偏平なU字形で、幅約25cm、深さ約10cmである。S I 2375A 堅穴住居跡の貼床を掘り込んでいた。

〔住居内堆積土〕1層は木炭粒を含み暗褐色土がブロック状に入るしまりの有る黄褐色土、2層は1cm角の木炭を多く含む黒褐色土、3層は木炭粒、焼土粒を多く含む褐灰色あるいはにぶい黄褐色土、4層は黄褐色地山砂質土が多く混ざる灰黄褐色土である。4層は住居機能時の自然堆積層である。

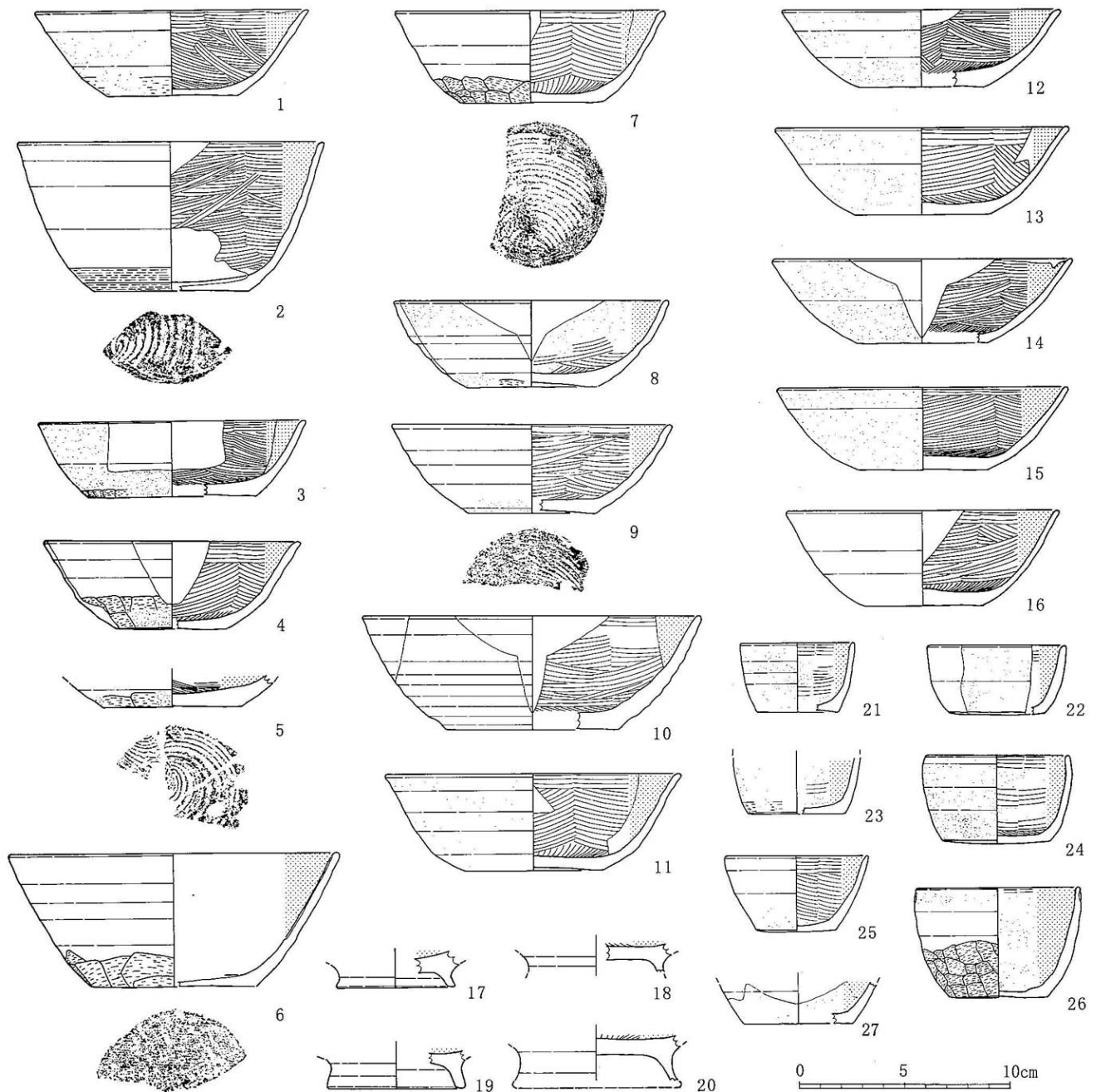
〔出土遺物〕遺物は貼床・暗渠など構築時のものは少なく、堆積土など廃絶時のものが多い（表3）。

支柱穴の掘方埋め土からは土師器の坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土した。

貼床からは口縁から底部まで残存する土師器坏1点（25）、須恵器坏3点（47・56・59）の他、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺の破片が少数出土した。

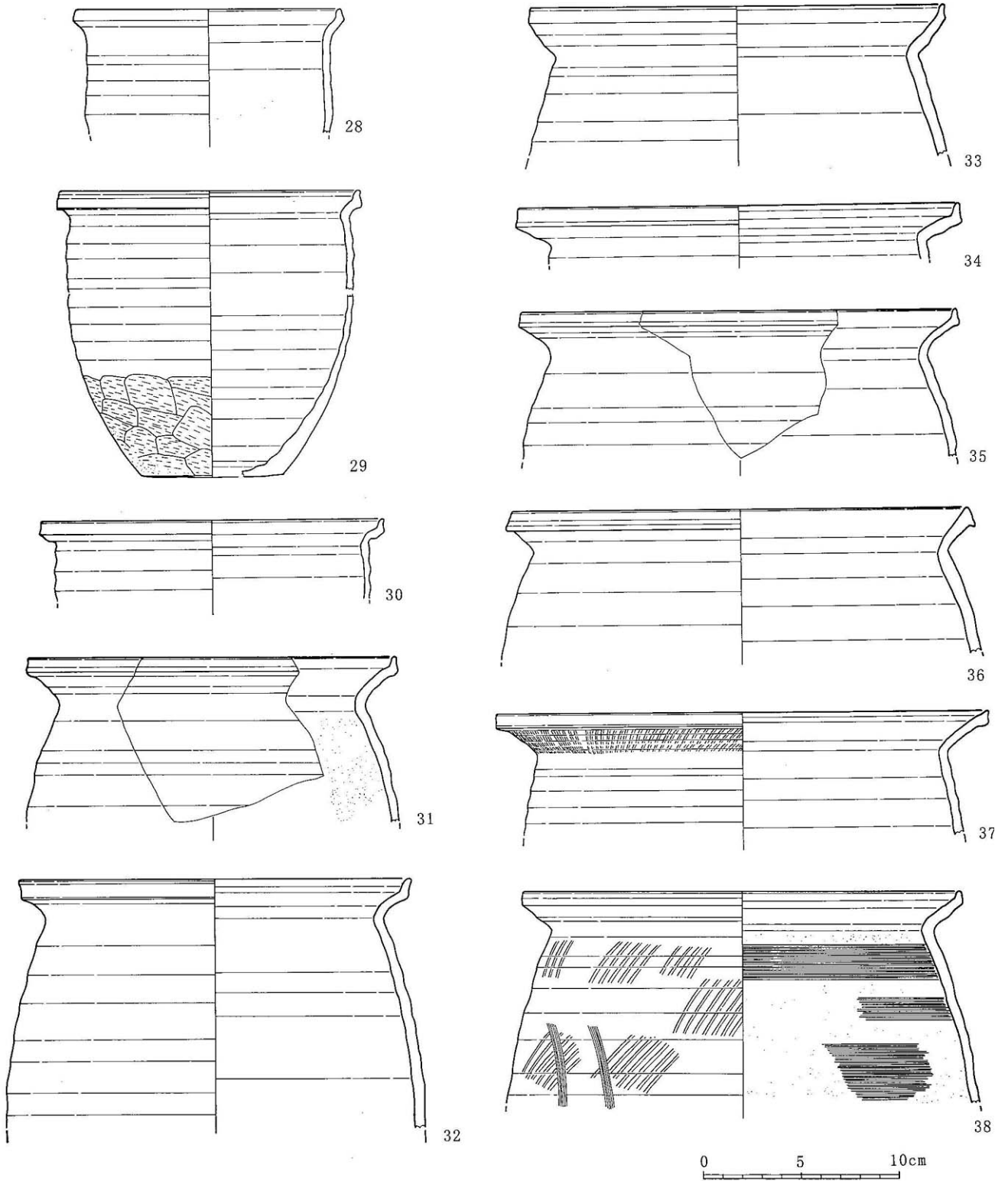
床面からは口縁部～底部まで残存する土師器坏2点（7・22）、須恵器坏2点（57・60）の他、土師器の坏・甕（38）、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類aタイプ2（74）の破片が少数出土した。

暗渠からは暗渠構築に用いられたほぼ完形の丸瓦ⅡB類（78）の他、土師器甕、須恵器坏・甕、政庁第Ⅰ期の平瓦ⅠA類の破片が少数出土した。



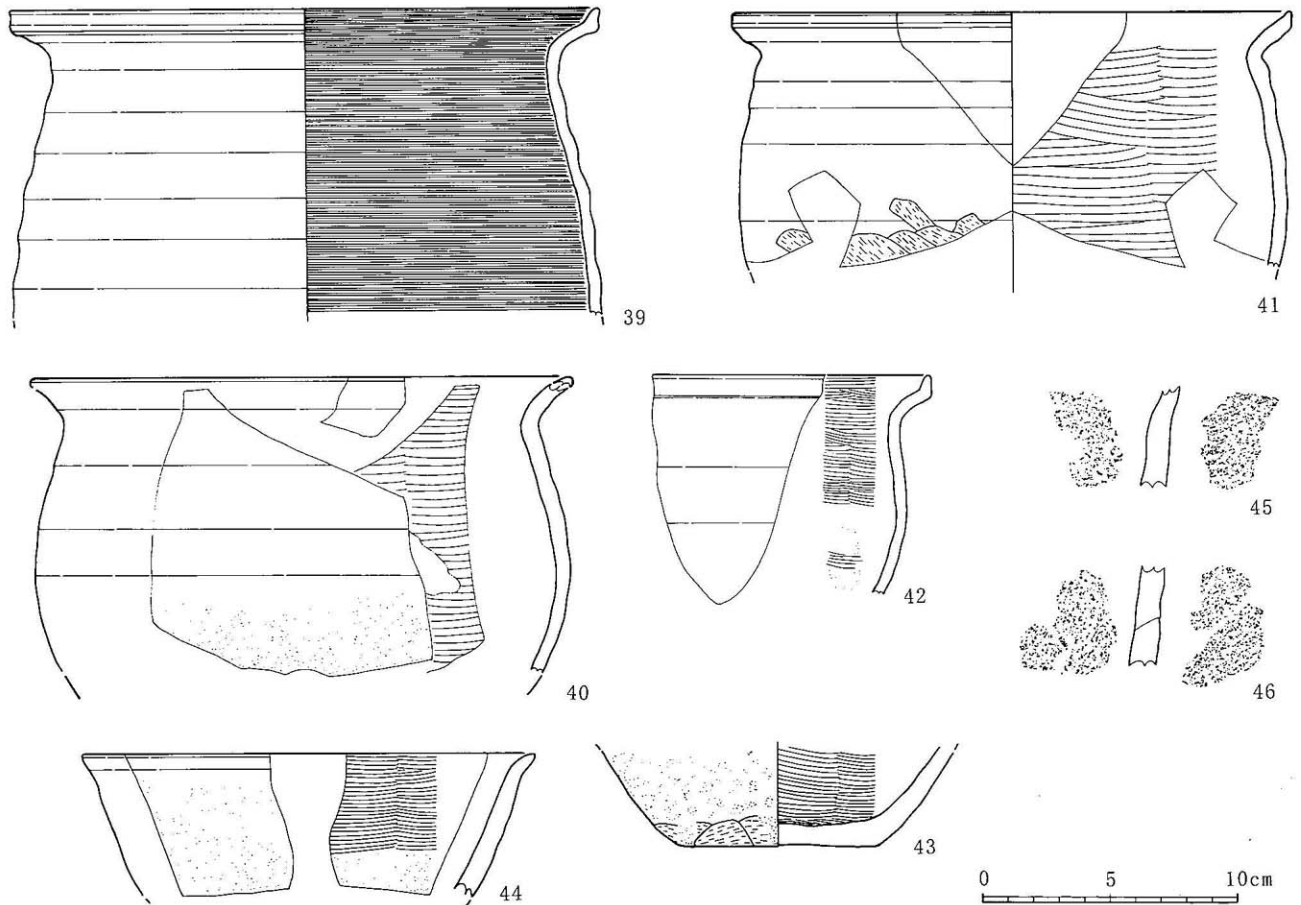
番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	1層	回転ケズリ。横ミガキ。摩滅。	13.0	6.2	4.0	1/3	14	12725	13	坏	1層	手持ちケズリ?。横ミガキ。	14.0	6.4	4.1	1	15	12725
2	坏	1層	回転糸切り→体下部・底部外周回転ケズリ。ミガキ。海綿骨針を含む。	14.6	7.4	7.1	1/3	12	12725	14	坏	2層	横ミガキ黒色不完全。海綿骨針。	14.2	6.2	4.0	1/4	11	12725
										15	坏	2層	ケズリ?。摩滅。横ミガキ。	13.8	6.2	3.9	1	8	12725
3	坏	1層	手持ちケズリ。横ミガキ。海綿骨針	12.8	8.0	3.6	1/3	25	12725	16	坏	2層	摩滅。放射状ミガキ。黒斑。	13.0	5.6	4.5	1	7	12725
4	坏	1層	手持ちケズリ。横ミガキ。黒斑。	12.2	5.2	4.2	1/4	19	12725	17	高台坏	1層	ミガキ消失。高台径5.6cm。高台高8mm。				1/4	29	12725
5	坏	1層	手持ちケズリ。横ミガキ。黒斑。		6.6		1/2	21	12725	18	高台坏	1層	高台端部欠損。横ミガキ。				1/4	27	12725
6	坏	2層	手持ちケズリ。摩滅底部附着物。	15.6	7.8	6.3	1/2	6	12725	19	高台坏	1層	ミガキ消失。高台径6.6cm。高台高10mm。				1/4	28	12725
7	坏	床面	回転糸切り→体下部・底部外周手持ちケズリ。放射状ミガキ。	12.8	6.8	4.3	2/3	1	12725	20	高台坏	1層	高台端部欠損。放射状ミガキ。				1/3	26	12725
										21	坏	1層	コップ形小型坏。摩滅。	5.4	3.8	3.3	<1/2	22	12725
8	坏	1層	手持ちケズリ。横ミガキ。黒斑。	13.0	6.2	3.9	1	13	12725	22	坏	床面	コップ形小型坏。摩滅。雲母を含む。	6.6	4.6	3.3	1/4	2	12725
9	坏	1層	回転糸切り。ミガキ。黒斑。海綿骨針。	13.2	6.0	4.2	<1/2	17	12725	23	坏	斜暗渠	コップ形小型坏。ケズリ?。摩滅。		4.6		1/4	24	12725
10	坏	1層	回転糸切り・摩滅横ミガキ。黒斑。	16.0	8.0	5.4	1/4	18	12725	24	坏	2層	コップ形小型坏。摩滅。横ミガキ。	6.8	5.1	4.2	1	4	12725
11	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。黒斑。海綿骨針を含む。	14.0	6.5	4.6	1	16	12725	25	坏	貼床	コップ形小型坏。摩滅海綿骨針。	6.8	3.8	3.6	1	3	12725
										26	坏	2層	コップ形小型坏。手持ちケズリ。	7.8	4.6	5.2	1	5	12725
12	坏	2層	摩滅横ミガキ。黒斑。海綿骨針。	13.2	6.0	3.6	1/3	10	12725	27	坏	1層	コップ形小型坏。摩滅。		5.2		1/3	23	12725

第 36 図 S12375B 竪穴住居跡出土遺物(1) (1~27: 土師器)



番号	器種	層位	特	徴	登録	箱番号	番号	器種	層位	特	徴	登録	箱番号
28	甕	1層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径 13.5cm。	71	12727	34	甕	1層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径 22.4cm。	73	12727
29	甕	2層	口縁部受口状。ロクロナデ。ケズリ。	口径 15.4cm。	65	12727	35	甕	2層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径約 22.2cm。	62	12727
30	甕	1層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径 17.4cm。	76	12727	36	甕	1層	口縁部外反。ロクロナデ。	口径 23.2cm。	72	12727
31	甕	1層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径約 18.8cm。	70	12727	37	甕	4層	口縁部受口状。平叩き→ロクロナデ。	口径 25.2cm。	63	12727
32	甕	1層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径 20.0cm。	69	12727	38	甕	床面	口縁部受口状。外面：平叩き→ロクロナデ→部分的ナデ。内面：ロクロナデ・回転刷毛目。	口径 22.4cm。	60	12727
33	甕	2層	口縁部受口状。ロクロナデ。	口径 21.2cm。	66	12727							

第 37 図 S12375B 竪穴住居跡出土遺物(2) (28~38 : 土師器)



番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号	番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号
39	甕	カマド崩壊土	口縁部受口状。外面：ロクロナデ。内面：回転刷毛目。口径 23.0 cm。	61 12727	42	甕	2層	口縁部受口状。外面ロクロナデ。内面ミガキ→黒色処理	86 12727
					43	甕	4層	底部回転糸切り→体下部ケズリ。内面ミガキ→黒色処理。	62 12727
40	甕	1層	口縁部外反。外面：ロクロナデ、下半ケズリ?。内面ミガキ→黒色処理。口径 21.2 cm。	79 12727	44	鉢	1層	口縁部軽く外反。外面：ロクロナデ。内面：ミガキ→黒色処理。口径約 17.8 cm。	81 12727
41	甕	1層	口縁部軽い受口状。外面：ロクロナデ→下半ケズリ。内面：ミガキ→黒色処理。口径 22.0 cm。	75 12727	45	製塩土器	2層	同一非接合の体部破片 35 点。非ロクロ。橙褐色。礫・砂粒を多量に含む。2次加熱でボロボロ。	235 12727
					46	器			

第 38 図 S12375B 竪穴住居跡出土遺物(3) (39～46：土師器)

周溝からは口縁部～底部まで残存する須恵器坏 1 点 (64) の他、土師器坏、須恵器坏、政庁第 II 期の平瓦 II B 類の破片が少数出土した。

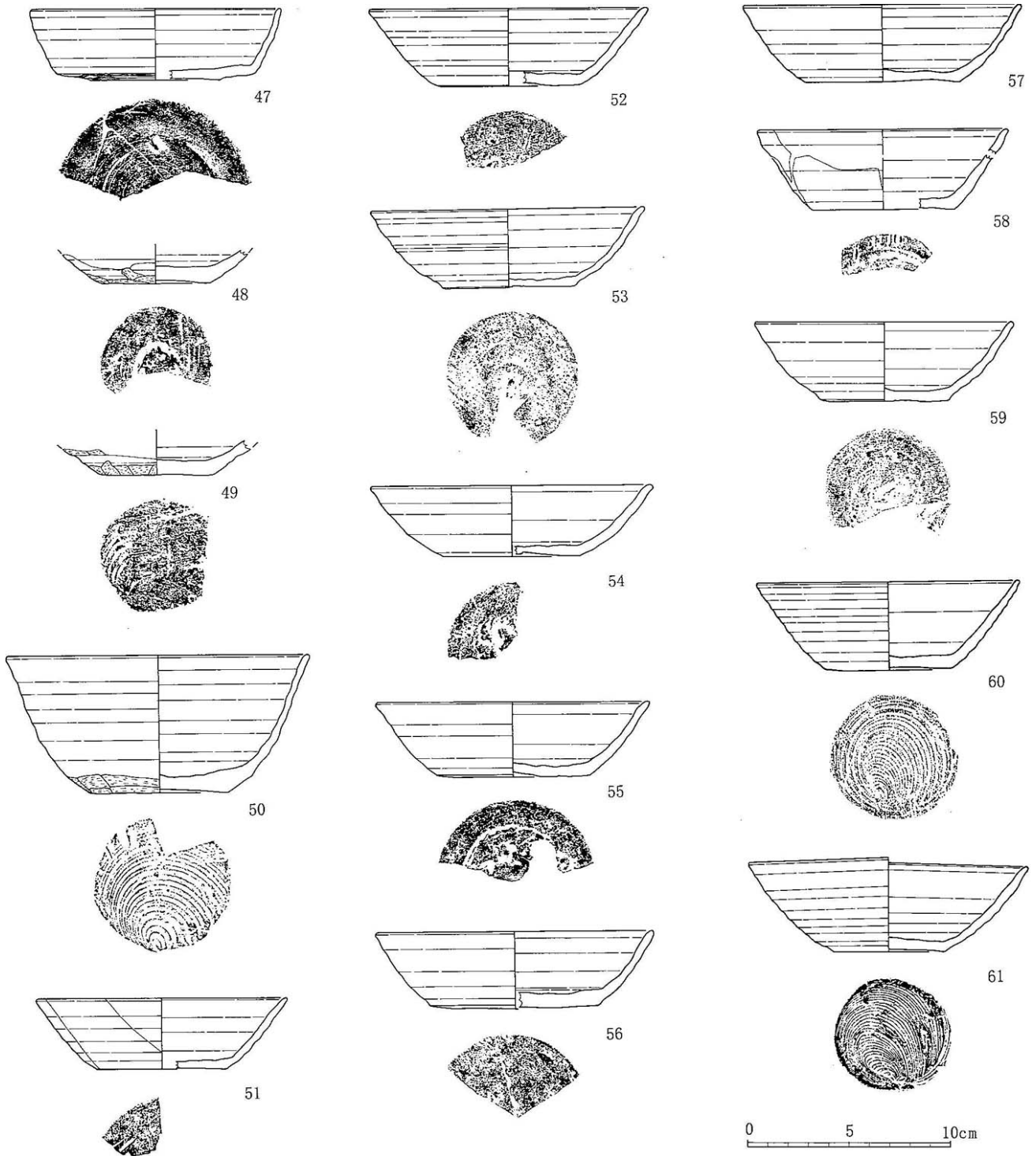
外延溝からは土師器甕の破片が少数出土した。

支柱穴の柱切取穴からは土師器坏・甕の破片が少数出土し、柱痕跡からは土師器坏・甕、丸瓦 II 類の破片が少数出土した。

カマド崩壊土からは土師器坏・甕 (39) が少数出土した。

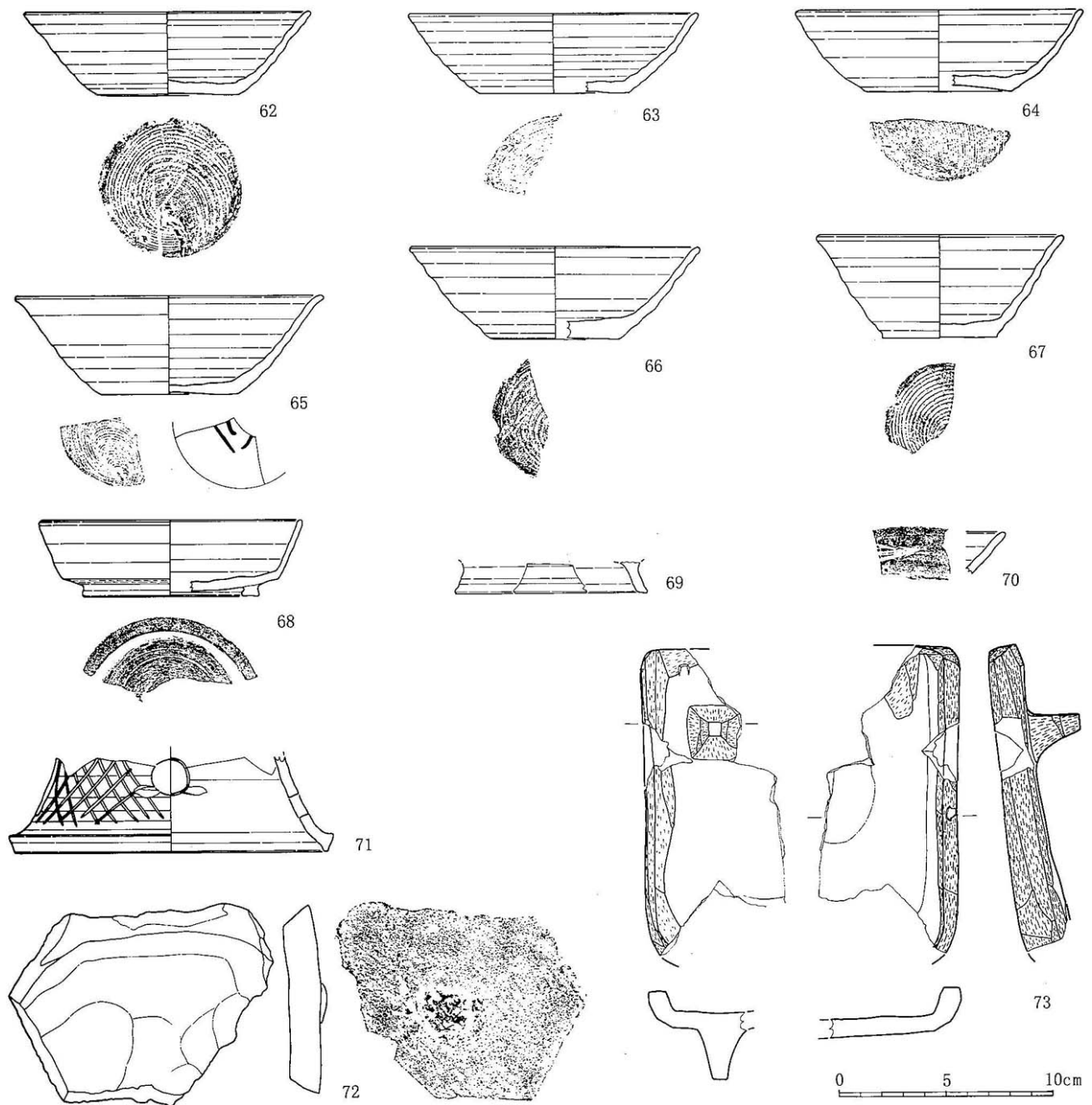
堆積土からの遺物は特に多い。口縁部～底部まで残存する土師器坏 16 点 (1～4・6・8～16・24・26)、甕 1 点 (29)、須恵器坏 16 点 (50～55・58・61～63・65～67)、須恵器高台坏 1 点 (68) の他、多くの土師器坏・甕 (28～37・40～42)、須恵器坏・甕破片と少数の土師器高台坏・鉢 (44)、製塩土器 (45・46)、須恵器高台坏・甕・壺破片、円面硯脚部破片 1 点 (71)、風字硯破片 1 点 (73)、須恵





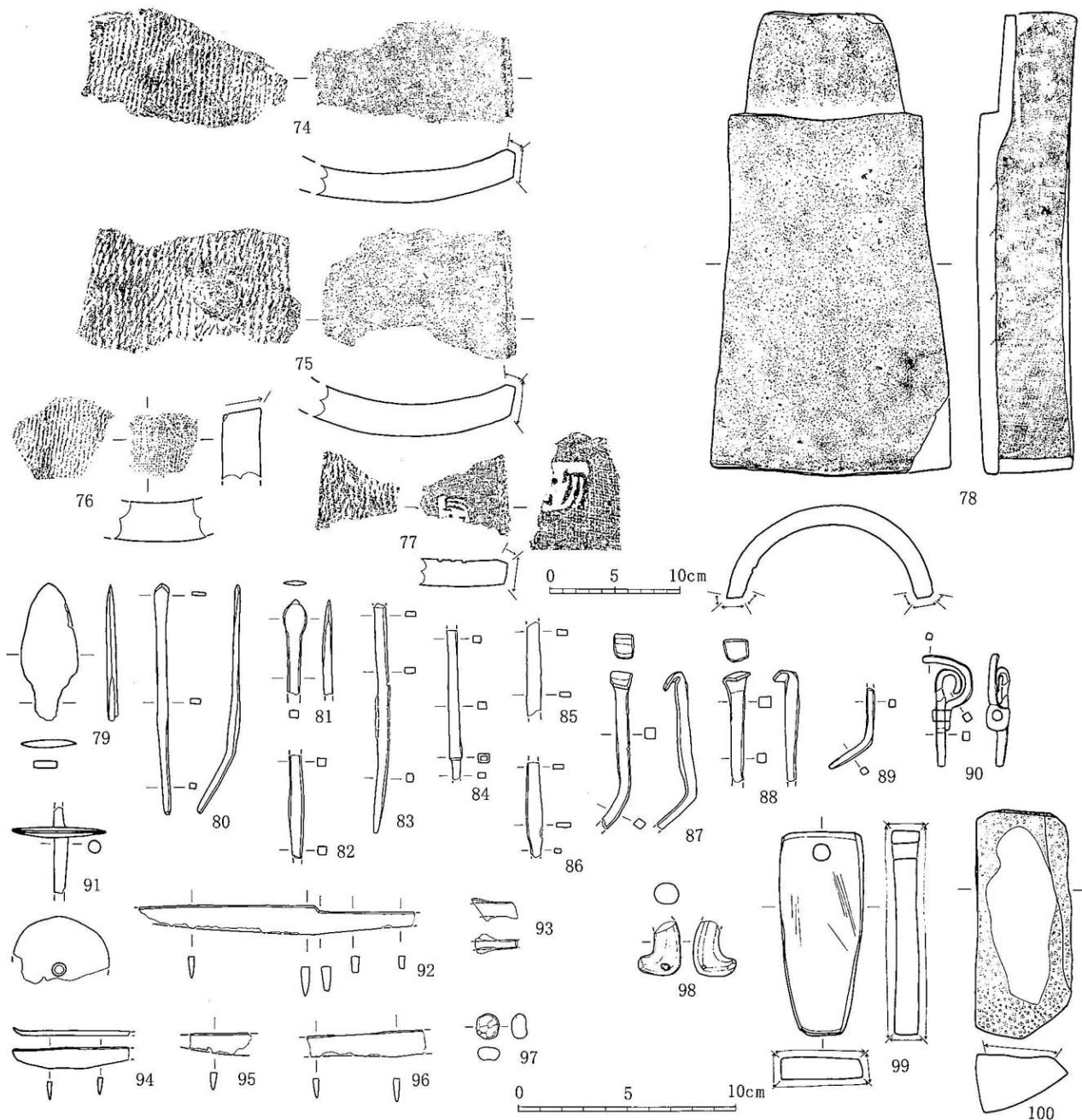
番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
47	坏	貼床	回転ケズリ→底部外周ロクロナデ→ナデ。重ね焼き痕。	12.4	9.8	3.5	1/3	36	12726	54	坏	1層	ヘラ切り。両面に火燻痕。	14	6.8	3.5	>1/4	44	12726
48	坏	1層	手持ちケズリ。	5.3			3/4	51	12726	55	坏	2層	ヘラ切り。重ね焼き痕。	13.6	7.6	3.7	<1/2	38	12726
49	坏	1層	回転糸切り→手持ちケズリ。底部両面黒斑。	5.6			3/4	50	12726	56	坏	貼床	ヘラ切り。重ね焼き痕。	13.8	8.4	3.8	1/3	35	12726
50	坏	2層	回転糸切り→体下部手持ちケズリ。底部棒状圧痕。口縁に重ね焼き痕。	17.0	6.8	6.8	>3/4	39	12726	57	坏	床面	ヘラ切り。2次加熱で軟質化・両面黒褐色化。	13.8	7.8	3.8	1/3	31	12726
51	坏	3層	ヘラ切り→棒状圧痕。重ね焼き痕。	14.4	6.4	3.5	1/4	37	12726	58	坏	1層	ヘラ切り→棒状圧痕。	12.4	7.0	4.0	1/4	52	12726
52	坏	1層	ヘラ切り→部分的軽いナデ。油煙。	13.8	7.0	3.8	1/3	43	12726	59	坏	貼床	ヘラ切り→棒状圧痕。重ね焼き痕。	12.8	6.4	3.9	3/4	34	12726
53	坏	1層	ヘラ切り→棒状圧痕。重ね焼き痕。	13.6	6.6	3.9	7/8	42	12726	60	坏	床面	回転糸切り→棒状圧痕。重ね焼き痕。	13.0	6.2	4.4	1	32	12726
										61	坏	1層	回転糸切り無調整。焼け歪み。	13.8	5.4	4.4	1	45	12726

第 39 図 S12375B 竪穴住居跡出土遺物(4) (47~61: 須恵器)



番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	登録	箱番号
62	坏	1層	回転糸切り無調整。底部不明墨書。	13.4	6.6	3.9	1	46	12726	68	高台坏	2層	回転ケズリ→付高台。口径12.2cm。底径10.0cm。高台径8.2cm。高台高6mm。器高3.6cm。	41	12726
63	坏	1層	回転糸切り→部分的ナデ。重ね焼き痕。	13.6	7.0	3.7	>1/4	49	12726	69	高台坏	1層	高台破片。高台径約9.0cm。高台接合面に3条沈線。	54	12726
64	坏	周溝	回転糸切り無調整。	13.4	6.8	3.4	<1/2	33	12726	70	坏	1層	内面に稲科植物茎圧痕。	53	12726
65	坏	1層	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。墨書。	14.4	6.4	4.6	1/3	47	12726	71	円面硯	2層	円形・方形透かし各1対。斜格子状沈線。底径12.6cm。自然釉。重ね焼き痕。SK2389土壌と接合。	57	12726
66	坏	2層	回転糸切り→外周部分的軽いナデ。重ね焼き痕。	13.6	6.0	4.3	1/3	40	12726	72	転用硯	1層	須恵器甕体部破片再利用。破損面・内面を研磨面。	58	12726
67	坏	1層	回転糸切り無調整。	11.6	5.4	4.8	1/3	48	12726	73	風字硯	1層	須恵器質。ケズリ。脚は四角錐状。	56	12726

第40図 SI2375B 竪穴住居跡出土遺物(5) (62~70: 須恵器 71~73: 硯)



番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号	番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号
74	平瓦	床直上	平瓦ⅡB類 aタイプ2。凸面縄叩き目。凹面糸切り痕→布目→ナデ。灰色。政庁第Ⅱ期。	237 12742	86	鉄鎌	1層	筒被式?。現存長4.4cm。	264 12746
75	平瓦	2層	平瓦ⅡB類 aタイプ3。凸面縄叩き目。凹面布目→ナデ。赤褐色。政庁第Ⅲ期。	238 12742	87	鉄釘	1層	折方頭角釘。頭部9×8mm方形。現存長7.3cm。	253 12746
76	平瓦	1層	平瓦ⅡC類。凸面縄叩き目。凹面布目。政庁第Ⅳ期。	240 12742	88	鉄釘	1層	折方頭角釘。頭部11×10mm方形。現存長5.1cm。	271 12746
77	平瓦	1層	平瓦ⅡB類 aタイプ1。凸面縄叩き目。凹面布目→ナデ。刻印「物」A。灰色。政庁第Ⅱ期。	239 12742	89	鉄釘	1層	角釘。頭部欠損。折れ曲がる。現存長4.2cm。	255 12746
78	丸瓦	東暗渠	粘土紐巻き作り有段の丸瓦ⅡB類。黒褐色。	236 12742	90	不明	1層	目釘で弧状に曲げた部品を留める。現存長5.1cm。	254 12746
79	鉄鎌	堆積土	有茎式。現存長6.3cm。最大幅2.6cm。最大厚5mm。	256 12746	91	紡錘車	4層	軸両端・円盤半分欠損。円盤径4.3cm。現存長6.9cm。	258 12746
80	鉄鎌	1層	筒被式。現存長10.6cm。	250 12746	92	刀子	1層	平造り角棟。片区。茎四方面取り。現存総長12.8cm。	252 12746
81	鉄鎌	1層	筒被式。現存長4.2cm。11と同一個体か。	269 12746	93	刀子?	1層	茎?。現存長2.1cm。	262 12746
82	鉄鎌	1層	筒被式。現存長4.7cm。	272 12746	94	刀子	1層	平造り角棟。現存長5.4cm。	270 12746
83	鉄鎌	1層	筒被式?。現存長10.6cm。	251 12746	95	刀子	1層	身部破片。平造り角棟。現存長2.8cm。19と融着。	307 12746
84	鉄鎌	1層	筒被式。現存長6.9cm。8と同一個体か。	268 12746	96	刀子	4層	身部破片。平造り角棟。現存長5.4cm。	249 12746
85	鉄鎌?	4層	鉄鎌または刀子の茎。現存長4.3cm。	259 12746	97	鉄滓	1層	球状滓。11×10×6mm。	257 12746
					98	勾玉	4層	玉髓製。半透明貌珀色。現存長2.5cm。両側から穿孔。	245 12744
					99	砥石	1層	提砥石。細粒凝灰岩製。9.2×3.7×1.2cm。紐穴穿孔。	243 12744
					100	砥石	1層	安山岩製。完形。10.5×4.2×2.7cm。1面研磨。	241 12744

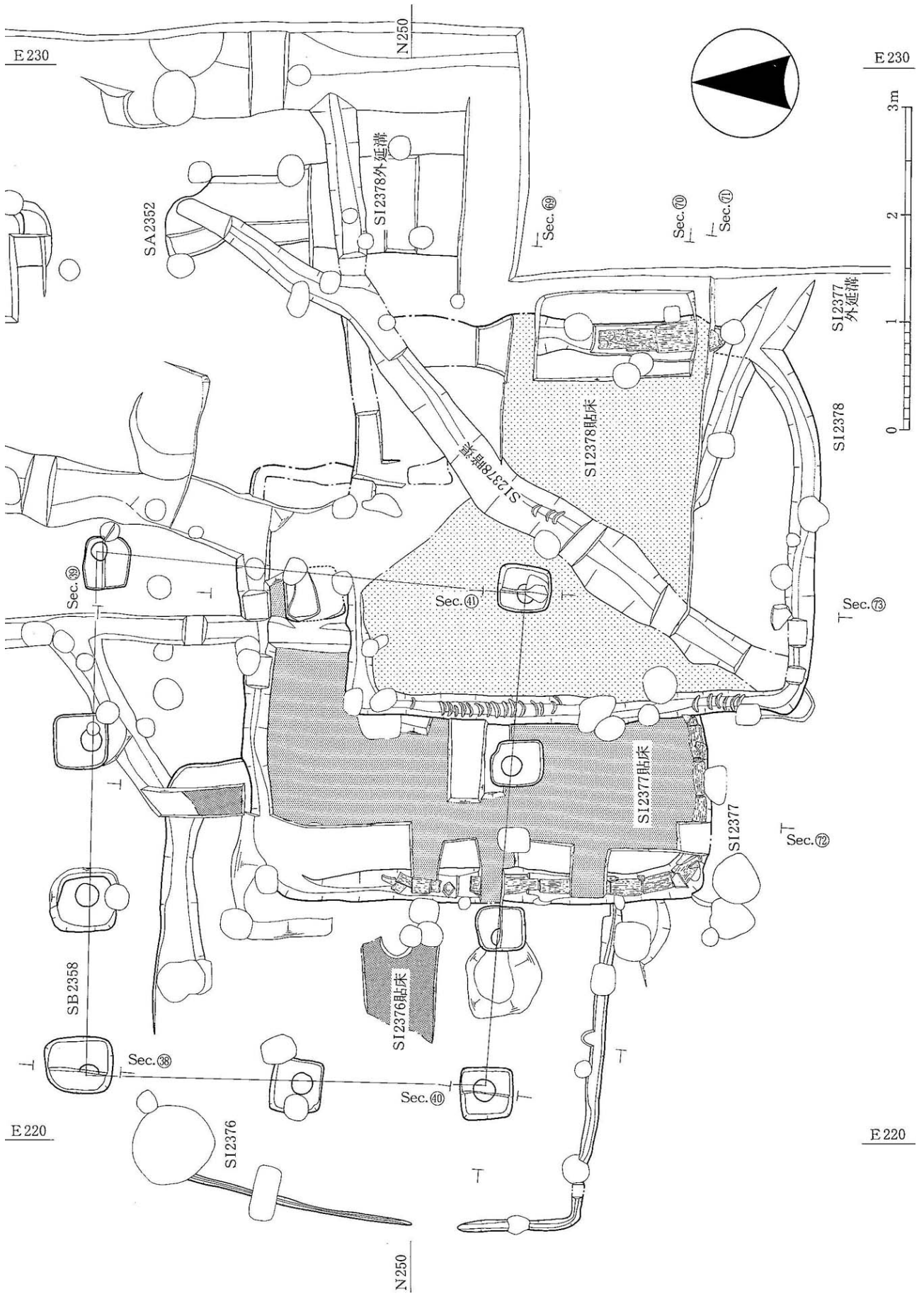
第41図 SI2375B 竪穴住居跡出土遺物(6) (74~78: 瓦 79~96: 鉄製品 97: 鉄滓、98~100: 石製品)

種類	器種	特徴	主柱穴掘方	床面	暗渠	周溝	外延溝	主柱穴切取穴	主柱穴柱痕跡	カマド崩壊土	住居内堆積土	合計	種類	器種	特徴	主柱穴掘方	床面	暗渠	周溝	外延溝	主柱穴切取穴	主柱穴柱痕跡	カマド崩壊土	住居内堆積土	合計								
																										種類	器種	特徴	主柱穴掘方	床面	暗渠	周溝	外延溝
土師器	杯	口縁～底部	回転ケズリ									1	1	須恵器	高台坏	口縁～高台	回転ケズリ										1	1					
			回転糸切り→回転ケズリ													1	1	高台部											1	1			
			回転糸切り→手持ちケズリ	1												1	1	甕	底部												1	1	
			ケズリ?													6	6		口縁部													1	1
			回転糸切り無調整													1	1		頸部													1	1
		摩滅・不明		1									3		3	体部					1									57	58		
		回転ケズリ		1									19		20	壺	底部															1	1
		回転糸切り→手持ちケズリ											2		2		口縁部														4	4	
		手持ちケズリ											22		22		口頭部														1	1	
		ケズリ				2							2		4		体部														32	32	
	回転糸切り無調整											28	28	小計					5	2	2	9							449	467			
	甕	口縁部	回転糸切り無調整										131	133	硯	円面硯													1	1			
			摩滅・不明		1					1				131		133	風字硯													1	1		
			口縁部		1	7	2		1	1	2			334		348	転用硯													1	1		
		高台坏	体部		1	4	4							717	726	瓦	平瓦	平瓦ⅠA類	政庁第Ⅰ期			1										1	1
			高台部											7	7				政庁第Ⅱ期		1		1									10	12
		甕	口縁～底部										1	1	平瓦ⅡB類			政庁第Ⅲ期														3	3
			底部										1	41	42			時期不明														1	1
			口縁～体部										1	15	16			平瓦ⅢC類	政庁第Ⅳ期													1	1
		鉢	口縁部		1	1		2		1	2			133	140		不明	時期不明													2	2	
			体部		6	4		6	16	1	8			1735	1779		丸瓦	丸瓦ⅡB類				1										1	1
		製塩土器	口縁～体部										1	1	丸瓦Ⅱ類															1	14	15	
			体部											35	35		不明													14	14		
		小計		9	20		8	8	18	3	15	3239	3323	小計					1	2	1								1	45	50		

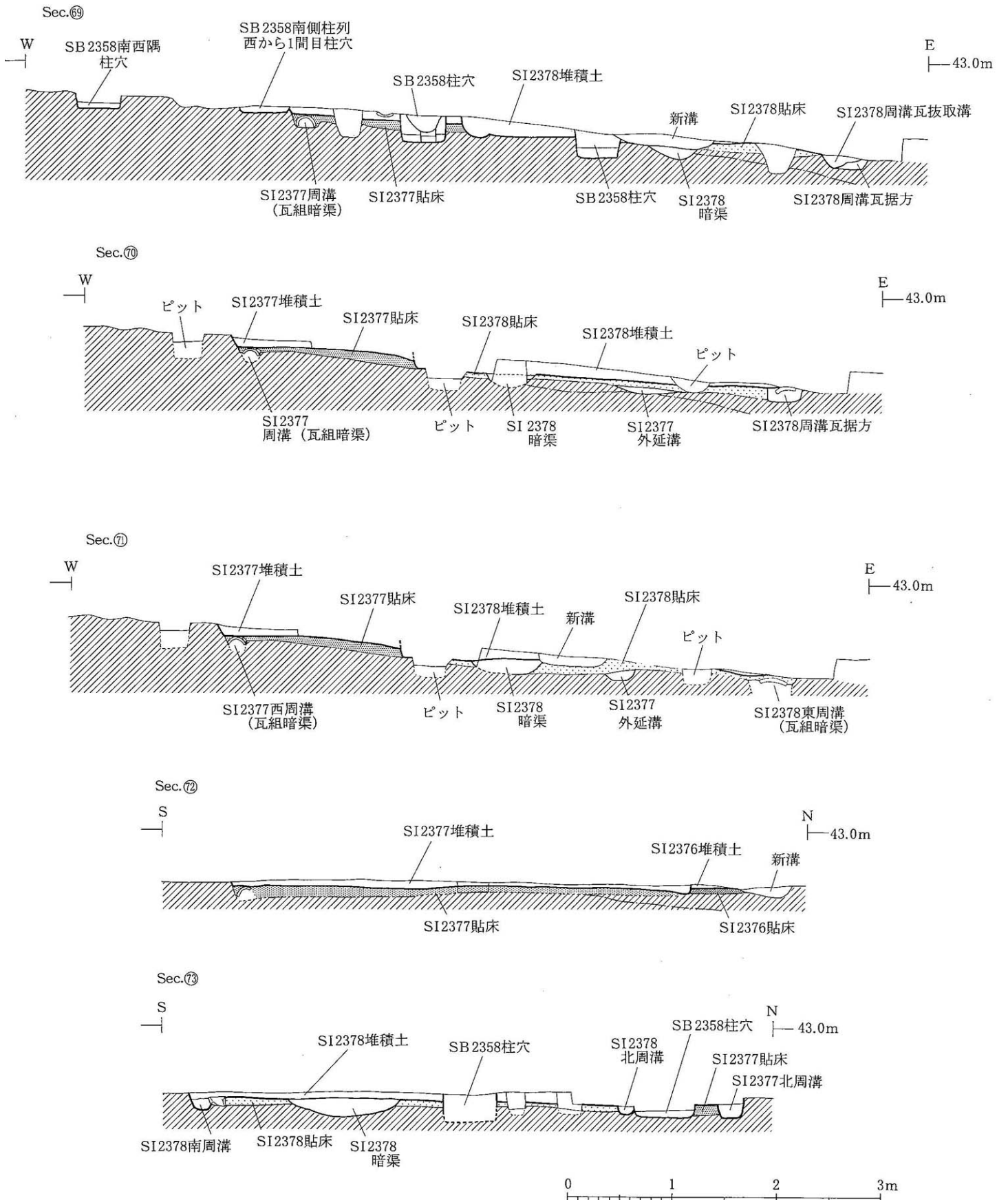
表3 S12375 縦穴住居跡出土遺物の集計

器甕体部破片転用硯1点(72)、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類 aタイプ(77)、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 aタイプ(75)、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類(76)や丸瓦の破片、鉄鏝8点(79～86)、鉄釘3点(87～89)、鉄製紡錘車1点(91)、刀子5点(92～96)、不明鉄製品1点(90)、鉄滓(97)、砥石2点(99・100)、勾玉1点(98)、漆皮膜小片1点、スサ痕のある壁材小破片25点が出土した。

このうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。また、底部の調整のわかる土師器坏は89点あり、手持ちケズリが31点、回転ケズリが22点、ケズリが5点で、再調整されたものが58点(65.2%)と主体を占め、回転糸切り無調整も31点(34.8%)と多い(表3)。底部内面のミガキには横ミガキと放射状ミガキの両者があり、前者が多い。また、土師器坏ではコップ形の小型坏が目立つ。底部の調整のわかる須恵器坏は83点あり、へら切りが47点(56.6%)と主体を占め、次いで回転糸切り無調整が31点(37.3%)と多い。手持ちケズリは3点、回転ケズリは2点と少ない。



第 42 図 SB2358 建物跡、SI2376~2378 竪穴住居跡 平面図 (1/50)



第 43 図 SI2376~2378 竪穴住居跡 断面図 (1/50)



【S I 2376 竪穴住居跡】（平面図：第 42 図、断面図：第 43 図、写真：図版 14）

〔位置〕 調査区東部の中央。

〔検出状況〕 南東部を S I 2377 竪穴住居跡により壊されているが、周溝・貼床を検出した。

〔重複〕 S I 2376・2377 竪穴住居跡、S B 2358 建物跡より古い。基本層の第 2 層に覆われている。

〔平面形・規模〕 東西約 4.0m、南北約 4.2m の方形である。

〔方向〕 南辺は発掘東西基準線に対し、東で南に約 6° 偏る。

〔壁〕 残存していなかった。

〔床面〕 中央部に黄灰色地山粘土をブロック状に多く含む暗褐色粘質土の貼床が一部残存していた。

〔周溝〕 西及び南辺では断面 U 字形で幅約 10cm、深さ約 2～5cm である。北辺では断面逆台形で幅約 30～40cm、深さ約 5cm である。

〔住居内堆積土〕 黄灰色地山粘土をブロック状に多く含む灰黄褐色粘質土である。

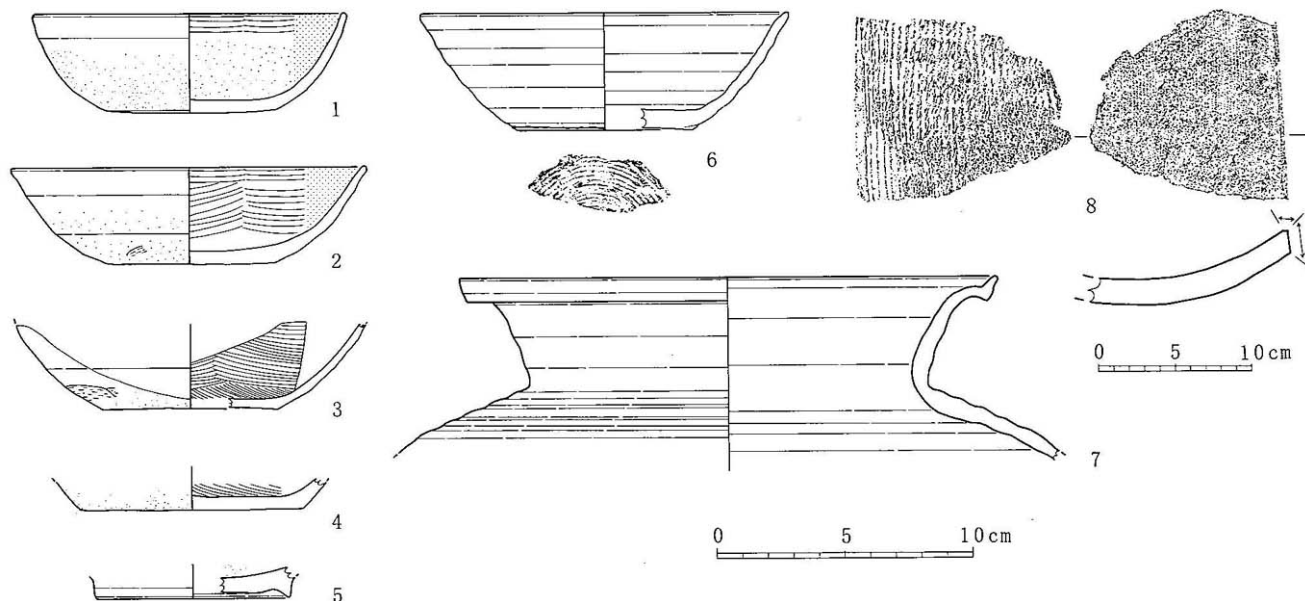
〔出土遺物〕 ロクロ土師器の坏・甕、須恵器坏・甕の破片や転用硯（須恵器甕体部破片転用）、スサ痕のある焼けた壁材の小破片が少数出土した。

【S I 2377 竪穴住居跡】（平面図：第 42 図、断面図：第 43 図、遺物：第 44 図、写真：図版 14）

〔位置〕 調査区東部の中央。

〔検出状況〕 南東部を S I 2378 竪穴住居跡により壊されているが、周溝・貼床を検出した。

〔重複〕 S I 2376 竪穴住居跡より新しく、S B 2358 建物跡・S I 2377 竪穴住居跡より古い。基本層



番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	床面	回転ケズリ?。摩滅。雲母を含む。黒斑。	12.2	6.6	3.9	1	1	12728	5	高台坏	周溝	高台径 7.6cm。高台高 8mm。ミガキ消失。				1/3	7	12728
2	坏	堆積土	回転ケズリ?→手持ちケズリ?。黒斑。	14.0	6.6	3.8	1	2	12728	6	坏	堆積土	回転糸切り無調整。生焼け。黒斑。	16.4	8.8	4.6	1/3	4	12728
3	坏	堆積土	手持ちケズリ。横ミガキ。		6.8		1/3	3	12728	7	甕	床面	口縁部受口状。ロクロナデ。口径 21.0cm。					14	12728
4	坏	堆積土	摩滅。横ミガキ。		8.8			5	12728	8	平瓦	西暗渠	平瓦 II B 類 a タイプ 2。灰色。凸面：長軸に平行する潰れた叩き目。凹面：布目→ナデ。政府第 II 期。					20	12741

第 44 図 S I 2377 竪穴住居跡出土遺物 (1～5：土師器、6・7：須恵器、8～17：瓦)

の第2層に覆われている。

〔**平面形・規模**〕 東西約4.1m、南北約4.3mの方形である。

〔**方向**〕 西辺は発掘南北基準線にほぼ一致する。

〔**壁**〕 西壁で最大約10cm残存していた。

〔**床面**〕 凝灰岩片や炭化物片を多く含む黒褐色土の貼床が、住居内の西半部に残存していた。後述の周溝暗渠を覆う。

〔**周溝**〕 幅約30cm、深さ約12cm、断面逆台形である。西辺南半と南辺西半では、平瓦で蓋をした暗渠になる。

〔**住居内堆積土**〕 炭化物片をやや多く含む暗褐色土である。

〔**出土遺物**〕 遺物は堆積土からやや多く出土し、他からは少ない。貼床から土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土した。床面から口縁部～底部まで残存する回転ケズリ？の土師器坏1点(1)の他、土師器の坏・甕、須恵器坏・甕(7)、丸瓦の破片が少数出土した。瓦組み暗渠からは政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦の破片が出土した。構築材に用いられた瓦のうち、取り上げた平瓦1点を第44図8に図示した。周溝から土師器の坏・甕、須恵器坏(回転糸切り無調整の底部1点など)、丸瓦の破片が少数出土した。堆積土から口縁部～底部まで残存する手持ちケズリの土師器坏1点(2)、回転糸切り無調整の須恵器坏1点(6)の他、土師器の坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦、スサ痕のある壁材の破片が出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

〔**S I 2378 竪穴住居跡**〕 (平面図：第42図、断面図：第43図、遺物：第45・46図、写真：図版14)

〔**位置**〕 調査区東部の中央。

〔**検出状況**〕 周溝、貼床、住居内暗渠を検出した。

〔**重複**〕 S A 2352 材木堀跡、S I 2376・2377 竪穴住居跡より新しく、S B 2358 建物跡より古い。基本層の第2層に覆われている。

〔**平面形・規模**〕 東西約3.7m、南北約4.8mの長方形である。

〔**方向**〕 西辺は発掘南北基準線にほぼ一致する。

〔**床面**〕 全面に凝灰岩片を多く含む灰黄褐色土の貼床が残存していた。床面は平坦である。

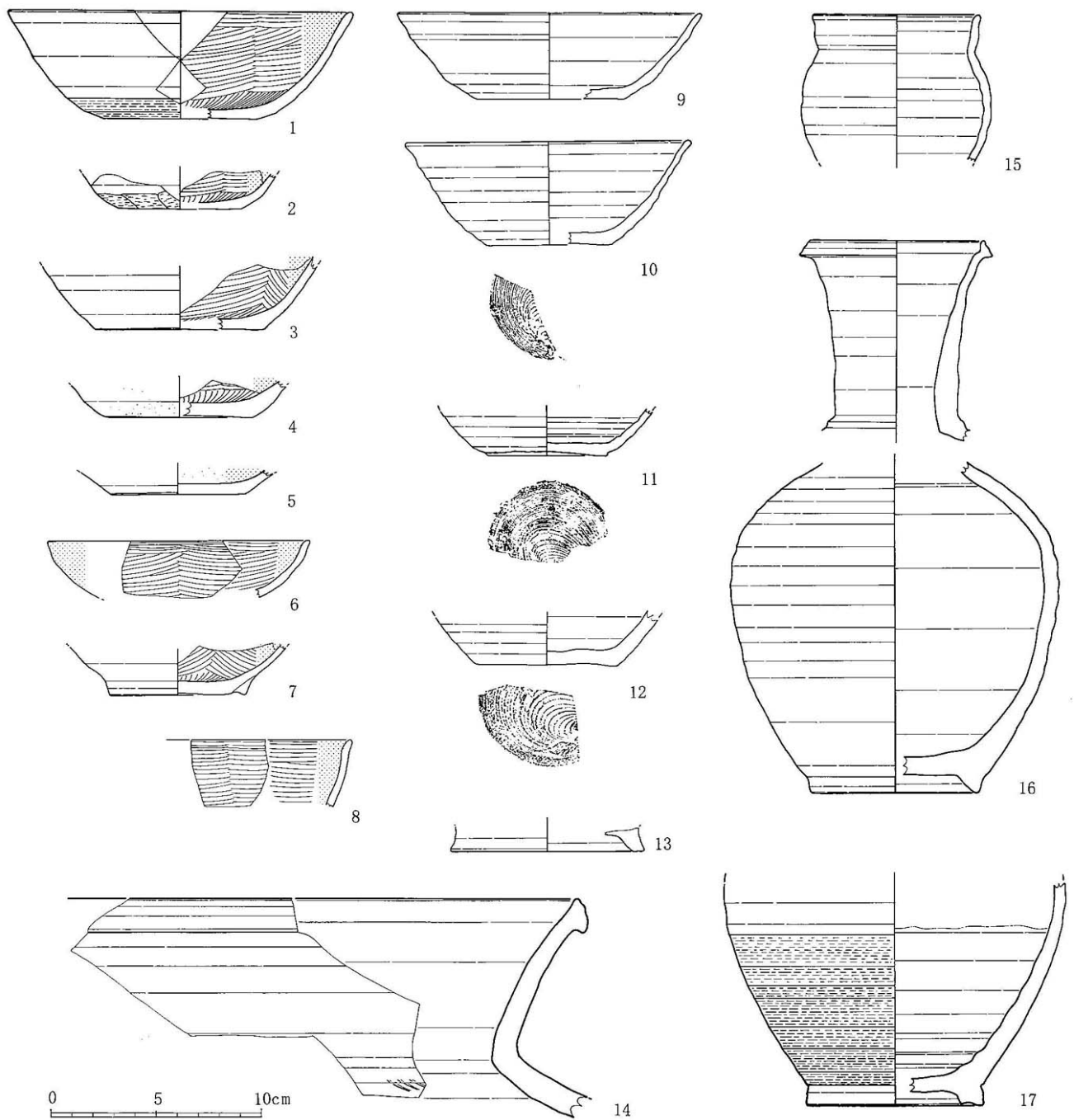
〔**壁**〕 西壁で最大約15cm残存していた。

〔**周溝**〕 断面U字形で、幅約25cm、深さ約15cmである。堆積土は風化凝灰岩片を多く含む灰褐色土である。東辺南寄りでは平瓦で蓋をした暗渠になっていた状況が確認された。また、北東隅から東へ外延溝が延びる。これは断面U字形で、幅約30cm、残存していた深さは約10cmである。この外延溝はS A 2352 材木堀跡を一部壊す。

〔**住居内堆積土**〕 黒褐色土である。

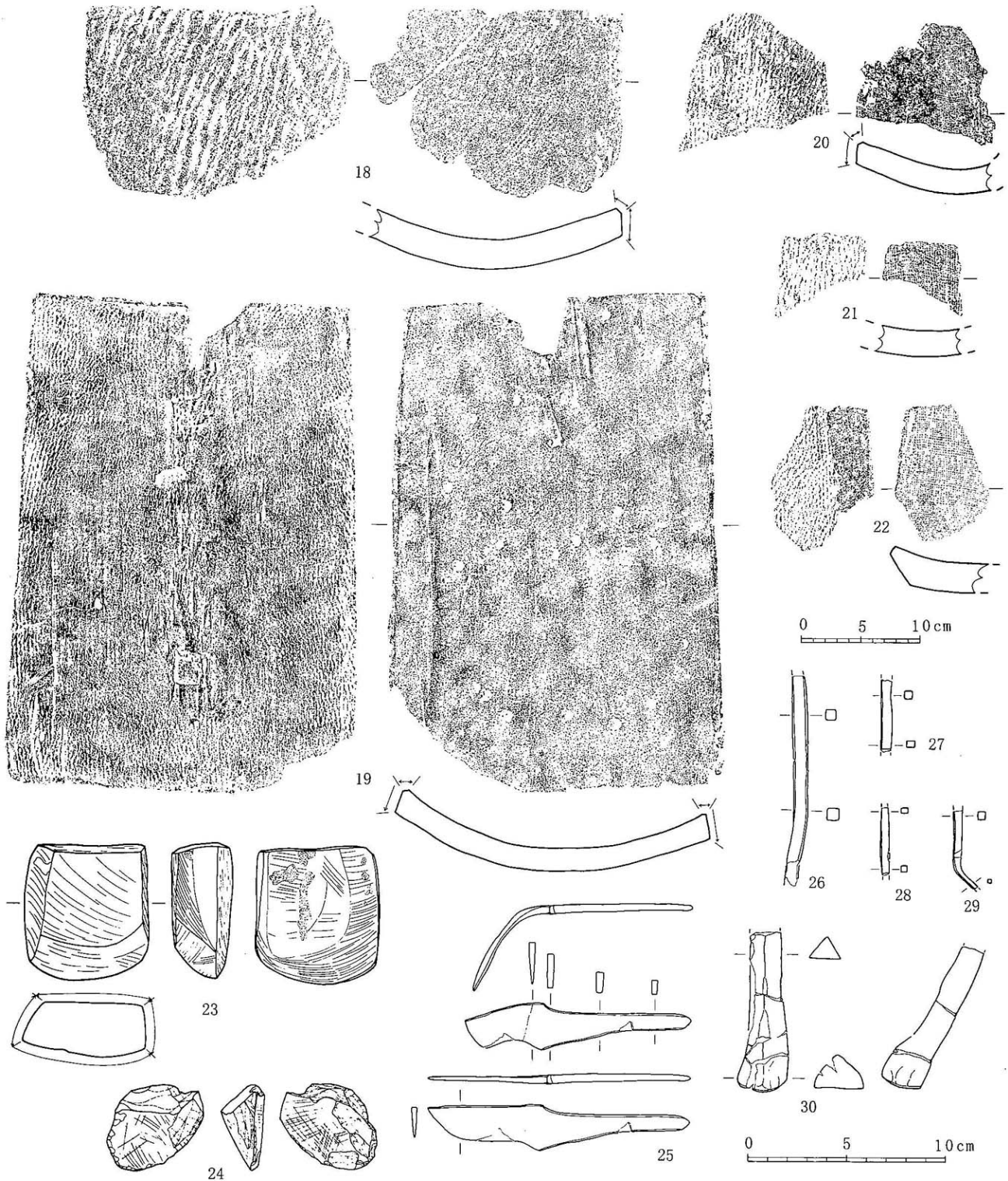
〔**その他**〕 住居内を南西隅から北東隅へ、幅約30～50cm、深さ約15cm、断面U字形の溝を検出した。これは貼床土、周溝内堆積土及び外延溝内堆積土を切る。

〔**出土遺物**〕 遺物は堆積土からやや多く出土し、他からは少ない。



番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	堆積土	回転ケズリ。放射状ミガキ	16.4	7.2	5.1	1/2	1	12728	9	坏	堆積土	ヘラ切り。	14.4	7.0	4.1	1/4	12	12728
2	坏	暗渠	回転糸切り→体下部手持ちケズリ。放射状ミガキ。底径 5.8cm。				1/4	7	12728	10	坏	堆積土	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	13.6	6.0	4.9	1/3	13	12728
3	坏	堆積土	底部のみ手持ちケズリ。横ミガキ。底径 8.0cm。海綿骨針を含む。黒斑。				1/3	4	12728	11	坏	堆積土	回転糸切り無調整。底径 5.6cm。				1/2	14	12728
4	坏	堆積土	回転糸切り。放射状ミガキ。底径 7.0cm。黒斑。				1/3	5	12728	12	坏	堆積土	回転糸切り無調整。底径 6.6cm。				1/3	15	12728
5	坏	西周溝	回転糸切り→底部外周手持ちケズリ。摩減。底径 6.5cm。				1	2	12728	13	高台坏	堆積土	高台破片。接合面に菊花状オサエ痕。高台径 9.2cm。				1/4	19	12728
6	坏	堆積土	両面ミガキ→面黒色処理。口径 12.4cm。				1/6	10	12728	14	甕	貼床	口縁→体上部破片。平行叩き→ロクロナデ。					31	12728
7	埴	堆積土	回転糸切り→付高台。放射状ミガキ。高台径 6.5cm。				2/3	9	12728	15	小壺	西周溝	広口。直立気味に口縁外反。ロクロナデ。口径 6.0cm。					29	12728
8	埴	堆積土	両面ミガキ→両面黒色処理。					11	12728	16	壺	堆積土	口縁部受口状。頸下部リング状凸帯。口径 8.2cm。高台径 8.0cm。器高約 24.6cm。体部内面火はね痕。					30	12728
										17	壺	床面	回転ケズリ。高台径 8.4cm。内面上部火はね痕。					32	12728

第 45 図 S12378 竪穴住居跡出土遺物 (1~8: 土師器、9~17: 須恵器)



番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号	番号	器種	層位	特 徴	登録 箱番号
18	平瓦	東暗渠	平瓦ⅡB類 aタイプ1。凸面太縄叩き目。凹面糸切り痕→布目→ナデ。灰褐色。政庁第Ⅱ期。	91 12741	23	砥石	堆積土	手持ち砥石。極細粒砂岩製。6面研磨・擦痕。	95 12744
19	平瓦	東暗渠	平瓦ⅢB類 aタイプ1。凸面縄叩き目。凹型台による方形凹み・木目痕。凹面布目→ナデ。灰色。政庁第Ⅱ期。	90 12741	24	砥石	堆積土	破損品再利用。極細粒凝灰岩製。2面研磨・擦痕。	96 12744
20	平瓦	西周溝	平瓦ⅡB類 aタイプ3。凸面縄叩き目。凹面布目→ナデ。赤褐色。政庁第Ⅲ期。	93 12741	25	刀子	堆積土	完形。折れ曲がる。平造り角棟。片区。総長13.3cm。	102 12746
21	平瓦	東暗渠	平瓦ⅡB類。凸面縄叩き目。凹面布目→ナデ。黒褐色。政庁第Ⅲ期。	92 12741	26	鉄鎌?	堆積土	現存長10.6cm。断面6mm方形。	100 12746
22	平瓦	堆積土	平瓦ⅡC類。凸面縄叩き目。凹面布目。灰色。	94 12741	27	鉄鎌?	堆積土	現存長3.6cm。断面4mm方形。	103 12746
					28	鉄釘?	堆積土	現存長3.4cm。断面3.5mm方形。	105 12746
					29	鉄釘	堆積土	頭部・先端欠損。現存長4.1cm。断面4mm方形。	104 12746
					30	獣脚	堆積土	鑄鉄製。ヒビ割れ。断面三角形。脚・爪の表現不明確。	101 12746

第46図 SI2378 竪穴住居跡出土遺物(2) (18~22: 瓦 18~22: 瓦、23・24: 石製品、25~30: 鉄製品)

貼床からは土師器の坏・甕、須恵器坏・甕（14）の破片が少数出土した。

床面からは土師器坏、須恵器壺（17）の破片が少数出土した。東暗渠からは土師器の坏（2の回転糸切り→手持ちケズリの底部など）・甕、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類 aタイプ（18・19）、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類（21）の破片が少数出土した。

周溝からは土師器の坏（5の回転糸切り→手持ちケズリ、調整不明の底部各1点など）・甕、須恵器坏（へら切りの底部1点など）・甕・小壺（15）、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 aタイプ3（20）、丸瓦の破片2などが少数出土した。

堆積土からは口縁部～底部まで残存する土師器坏3点（回転ケズリ1点、調整不明2点）、須恵器坏2点（へら切り、回転糸切り無調整各1点；9・10）、須恵器壺1点（16）の他、多くの土師器坏（底部58点〔回転糸切り無調整16点、回転ケズリ1点、手持ちケズリ3点、調整不明38点；3・4〕など）・甕、須恵器坏（底部13点〔へら切り3点、回転糸切り無調整10点；11・12〕など）・甕の破片、少数の須恵器高台坏（13）・壺、平瓦・丸瓦の破片、鉄製獣脚破片1点（30）、ほぼ完形の刀子1点（25）、鉄鏃とみられるもの2点（26・27）、鉄釘1点（29）、鉄釘？1点（28）、砥石2点（23・24）、磨石？1点、白色玉石1点、スサ痕のある壁材小破片5点が出土した。

このうち底部の調整のわかる土師器坏は22点、須恵器坏は15点とやや多い。土師器坏では手持ちケズリが4点、回転ケズリが2点と少なく、回転糸切り無調整が16点と主体を占める。底部内面のミガキには横ミガキと放射状ミガキの両者があり、後者が多い。須恵器坏ではへら切りが4点と少なく、回転糸切り無調整が11点と多い。

また、鉄製獣脚破片（30）は多賀城城外では山王遺跡多賀前地区より5点出土しているが（山田，1996）、多賀城城内で初めての検出例である。福島県相馬郡新地町向田A遺跡では、8世紀後半頃から鑄造が開始され、9世紀前半～後半頃にかけて最盛期を迎えており、器物・獣脚・獣脚蓋・梵鐘・性格不明品の鑄型が多数出土している（寺島・安田ほか，1989）。向田A遺跡出土の獣脚鑄型はⅠ～Ⅶ類に分類されている。大きさでは小型で獣面のないⅥ類に類似するが、間接部を表現した横線がみられない。他に陸奥国では獣脚の生産遺跡は知られていない。向田A遺跡など相馬地方には製鉄遺跡が多く、この地域から搬入された可能性が考えられる。

#### 【S I 2379 竪穴住居跡】（平面図：第5図）

【位置】 調査区東部の南寄り、S A2350 材木堀跡の南東側。

【検出状況】 住居跡の南西部の周溝を検出した。残存状況が悪く、周溝以外の詳細は不明である。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 東西1.6m以上、南北1.8m以上である。

【方向】 西辺は発掘南北基準線にほぼ一致する。

【周溝】 断面はU字形で、幅約10cm、深さ約2cmである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

#### (4) 井戸跡

【SE2386 井戸跡】(平面図：第47図、断面図：第47図、遺物：第48図、写真：図版15-8・9)

【位置】調査区東部の南西寄り

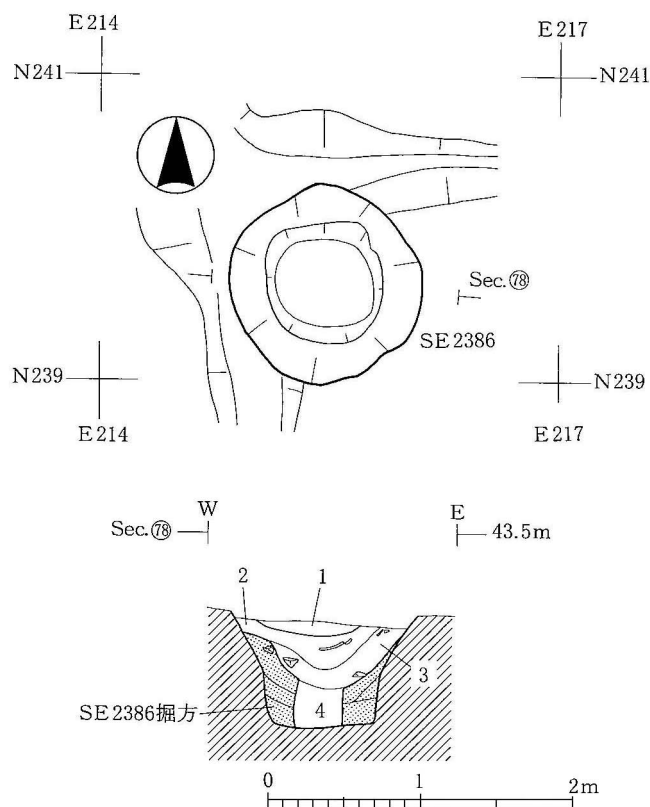
【重複】なし。

【形態・規模】掘方平面は直径約1.3mの円形である。断面は逆台形状で、深さ1.3mである。掘方のほぼ中央部に直径約30cmを残すようにして、裏込め土がにぶい黄褐色土と灰黄褐色土の互層をなす。井戸枠は残存していないが、円筒形の曲物または木製の井筒があったものと推定される。

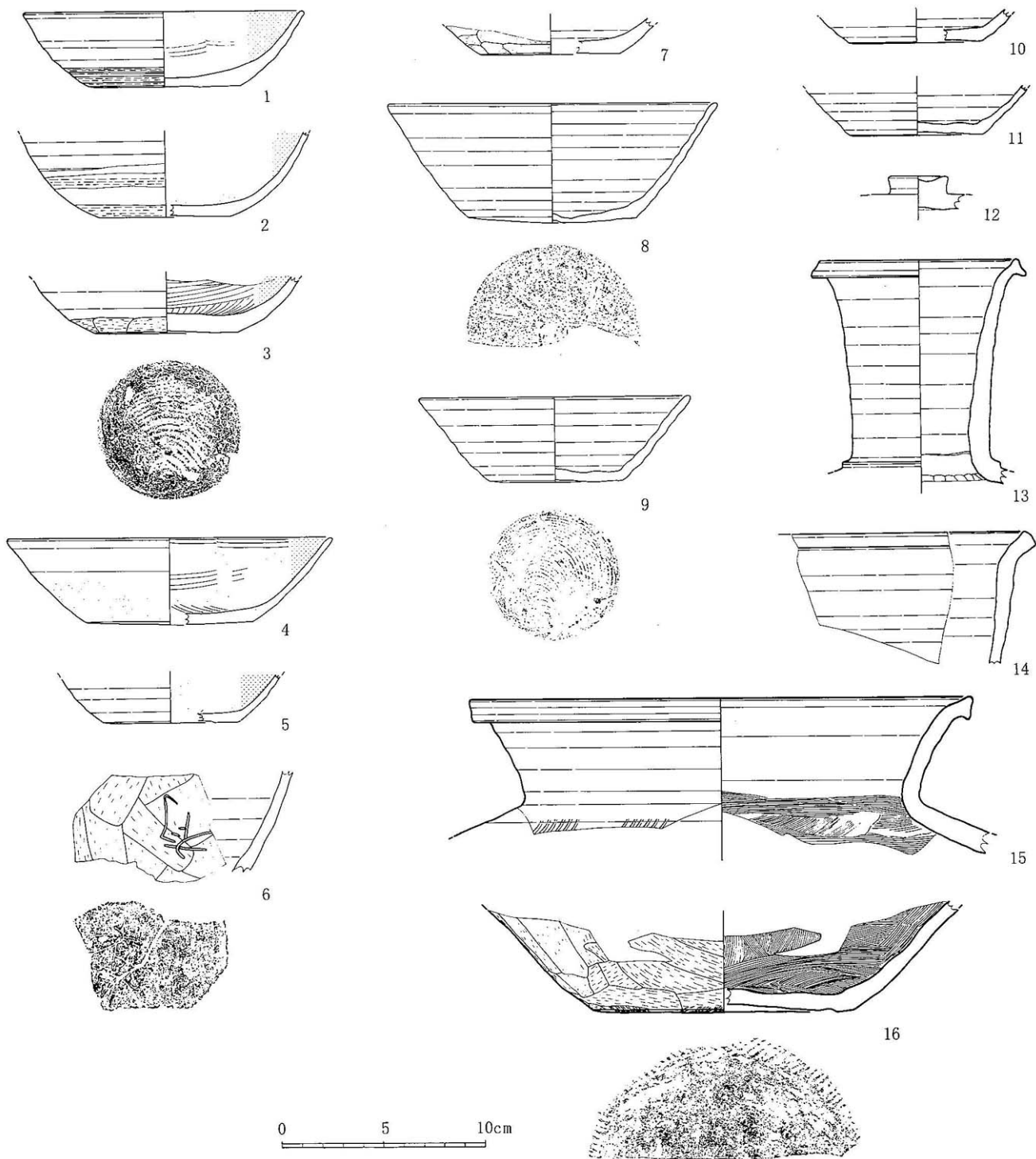
【堆積層】1層は木炭・焼土を多く含む暗褐色土、2層は木炭を少量含む粘性のある灰黄褐色土、3層は木炭・地山粒を少量含む粘性のある灰黄褐色土、4層は木炭を少量、地山粒をやや多く含む粘性のある灰黄褐色土である。

【出土遺物】遺物は各層から少数出土した。口縁部から底部まで残存する土師器坏(1・4)、須恵器坏(8・9)の他、土師器坏(2・3)・甕(6)、須恵器坏(7・10・11)・蓋(12)・甕(15・16)・鉢(14)・長頸壺(13)、政庁第Ⅱ期までの平瓦・丸瓦の破片、木板片、モモ種子、種不明の二枚貝各1点が出土した。

このうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。また、底部・体下部の調整のわかる土師器坏は6点あり、回転糸切り→手持ちケズリが1点(3)、手持ちケズリが1点、回転ケズリが3点(1・2)、回転糸切り無調整が1点(5)で、再調整されたものが多い。また、底部・体下部の調整のわかる須恵器坏は7点あり、回転糸切り→手持ちケズリが1点(7)、ヘラ切りが2点(8)、回転糸切り無調整が4点(9～11)で、回転糸切り無調整が多い。底径は土師器・須恵器坏とも比較的大きい。また、焼成前に「有」と口縁部を下にした状態で刻書された土師器甕体部破片(6)が1点あり、注目される。



第47図 SE2386 井戸跡平面図・断面図(1/50)



番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	残存	登録	箱番号
1	坏	4層	回転ケズリ。摩滅。	13.8	7.4	3.7	1/3	1	12731	10	坏	3層	回転糸切り無調整。底径 6.8cm。	1/4	10	12731
2	坏	3層	回転ケズリ→部分的ナデ。摩滅。底径 6.4cm。				1/4	3	12731	11	坏	3層	回転糸切り無調整。底径 6.6cm。	1/2	8	12731
3	坏	4層	回転糸切り→手持ちケズリ。放射状ミカキ。底径 7.0cm。				1	2	12731	12	蓋	2層	リング状つまみ部破片。つまみ径 2.9cm、高 9mm。		14	12731
4	坏	2層	摩滅。横ミガキ。	16.0	8.2	4.3	1/2	4	12731	13	長頸壺	3層	凸帯綾リング状凸帯。口径 9.8cm。頸部高 10.1cm。	22		12731
5	坏	2層	回転糸切り無調整。内面摩滅。底径 6.6cm。				1/3	5	12731	14	鉢	1層	口縁外反してやや内傾。ロクロナデ。	16		12731
6	甕	2層	体下部破片。外面ケズリ→焼成前ヘラ描き「有」。				図示	23	12731	15	甕	2層	凸帯縁。1.1 径 24.8cm。外反平行叩き→両面ロクロナデ→内面ナデ。約 21m 離れた SK2389 と接合。	15		12731
7	坏	3層	回転糸切り→体下部手持ちケズリ。底径 6.8cm。				1/4	9	12731	16	甕	1層	体下部・底部平行叩き→体下部・底部ケズリ。内面ナデ。底径 12.8cm。	18		12731
8	坏	4層	ヘラ切り。	16.2	8.3	5.9	>1/2	7	12731							
9	坏	2層	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	13.3	6.5	4.2	1	11	12731							

第 48 図 SE2386 井戸跡出土遺物 (1~6 : 土師器、7~16 : 須恵器)



(5) 土壙

【SK2380 土壙】(平面図：第49図、断面図：第49図、遺物：第51図、写真：図版15-1・2)

【位置】調査区中央部やや南寄り。

【重複】SB2356建物跡より新しい。基本層の第2層に覆われている。

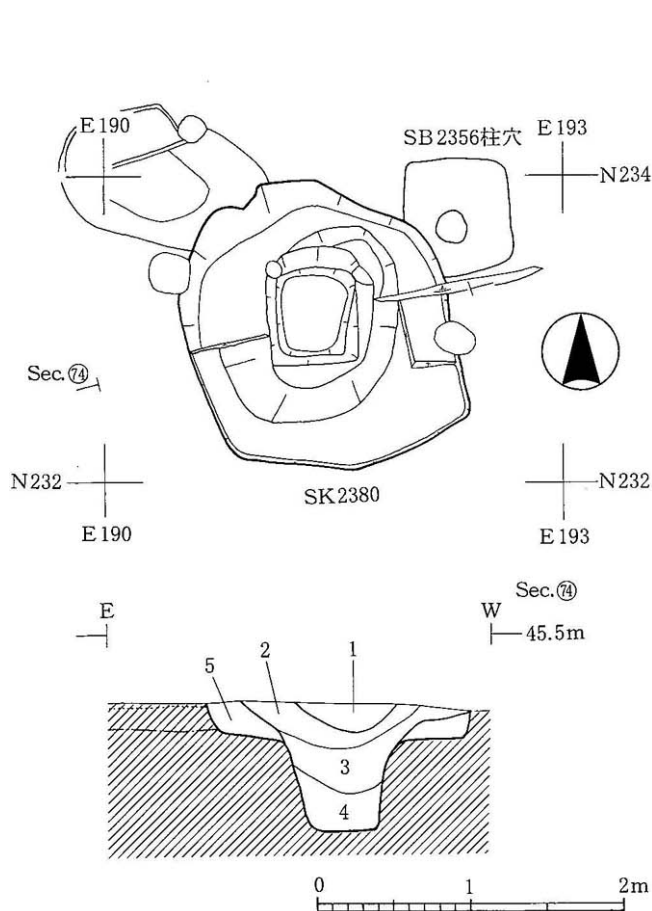
【形態・規模】平面形は不整形で、直径約1.7m、深さ約20~30cmに掘り下げ、さらにその中央部を一辺約60cmの方形で深さ60cmほど段掘りしている。井戸の可能性もある。

【堆積層】1層は炭化物を多量に含む暗褐色土で、窪地状になったところに土器が大量に捨てられて形成されたものである。2層は風化凝灰岩をブロック状に多く含むにぶい褐色粘質土、3層は多量にブロック状の風化凝灰岩を含むにぶい褐色粘質土と橙色粘質土が混ざる層である。4層は風化凝灰岩をブロック状に多く含む橙色粘質土である。5層は3層より粘土化が著しく特に壁際は灰褐色にグライ化している。堆積土はすべて人為堆積層である。

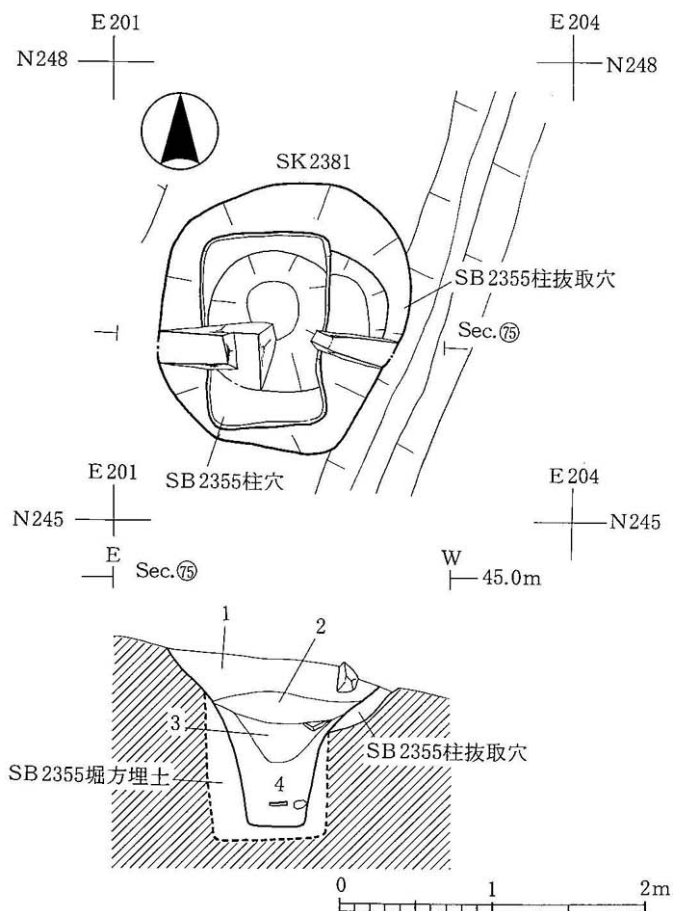
【出土遺物】遺物は各層から出土した。1層から多く出土し、他からは少ない。

5層からは土師器坏体部破片2点、須恵器壺体部破片1点が出土した。

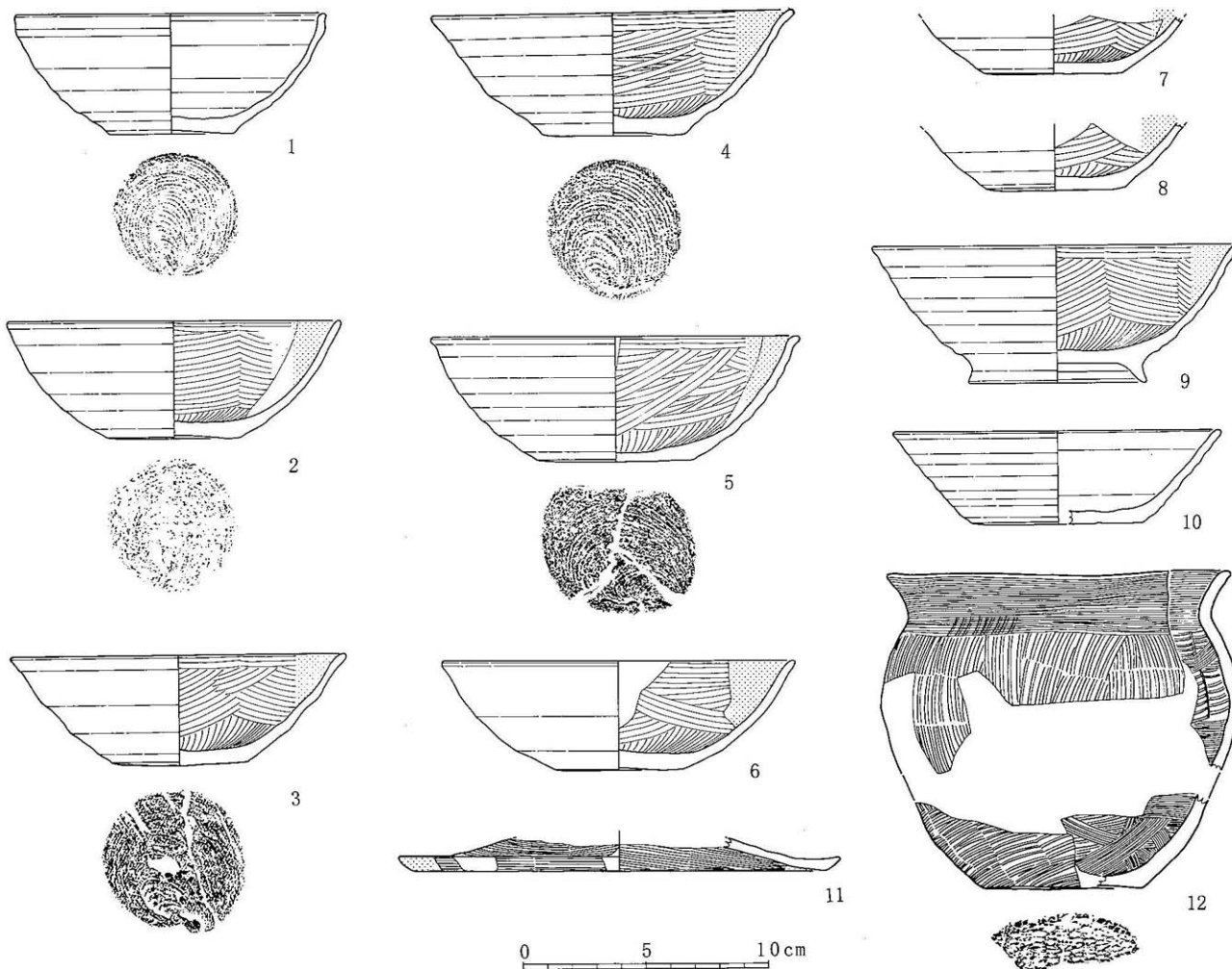
4層からは口縁部~底部まで残存する回転糸切り無調整の土師器坏1点が出土した(残りが悪く図示できない)。他には、土師器の坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦の破片が少数出土した。



第49図 SK2380 土壙 平面図・断面図(1/50)

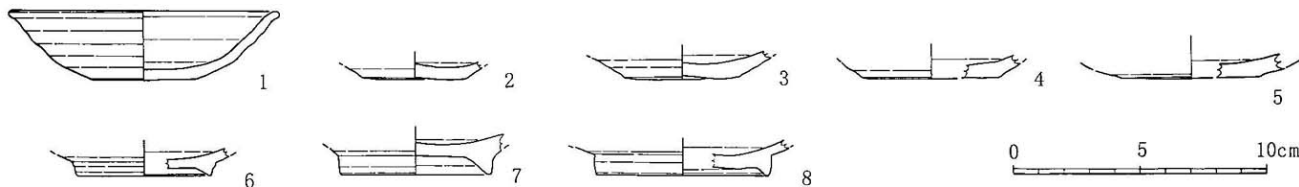


第50図 SK2381 土壙 平面図・断面図



番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	1層	回転糸切り無調整。黄褐色。	12.6	5.0	4.9	1	3	12729	6	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ部に小黒斑。	14.4	5.2	4.5	1	6	12729
2	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。	13.6	5.4	4.8	1	8	12729	7	坏	2層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。海綿骨針を多く含む。底径5.7cm。				1	2	12729
3	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。外面体部～底部に黒斑。	13.8	5.6	4.6	1	5	12729	8	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。底径5.7cm。				1	9	12729
4	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。外面口縁を中心に底部まで黒斑。内面にミガキ前口ロナデ一部残す。	14.8	5.8	5.1	1	4	12729	9	高台坏	1層	放射状ミガキ。口径15.0、高台径7.3、器高5.6cm。				1	11	12729
5	坏	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。外面口縁を中心に体下部まで黒斑。	15.0	6.4	5.1	1	7	12729	10	坏	2層	ヘリ切り→一部分的軽いナデ。	13.4	7.0	3.8	1/4	13	12729
										11	蓋	1層	口縁部外反。両面ミガキ→両面黒色処理。口径8.0cm。					12	12729
										12	甕	1層	非口クロ。刷毛目→ナデ。網底。歪み大。					14	12729

第51図 SK2380 土壌出土遺物 (1: 須恵系土器、2~9・11・12: 土師器、10: 須恵器)



番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	残存	登録	箱番号
1	小型坏	回転糸切り無調整。黄褐色。胎土微細。	10.6	4.2	2.7	>1/4	1	12730	5	坏	回転糸切り無調整。黄褐色。砂粒含む。底径5.6cm。	1/4	5	12730
2	小型坏	回転糸切り無調整。黄褐色。胎土微細。底径4.0cm。				1/4	2	12730	6	高台坏	淡黄灰色。胎土微細。高台径5・2cm。高台高5mm。	1/3	9	12730
3	坏	回転糸切り無調整。黄褐色。砂粒含む。底径4.6cm。				1	4	12730	7	高台坏	黄灰色。胎土微細。高台径6.0cm。高台高7mm。	1/2	6	12730
4	坏	回転糸切り無調整。黄褐色。砂粒含む。底径5.4cm。				1/4	3	12730	8	高台坏	糸切痕。橙褐色。砂粒含む。高台7.0cm。高台高8mm。	1/3	7	12730

第52図 SK2381 土壌出土遺物 (1~8: 須恵系土器)

3層からは土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土した。

2層からは口縁部～底部まで残存するへら切りの須恵器坏1点(10)の他、比較的多くの土師器坏・甕破片、少数の須恵器坏・甕、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類の破片が出土した。

1層からは口縁部～底部まで残存する須恵系土器坏1点(1)、回転糸切り無調整の土師器坏5点(2～6)、土師器高台坏1点(9)、土師器甕1点(12)の他、多くの土師器坏・甕破片と少数の土師器蓋破片1点(11)、須恵器坏・甕・小壺?、須恵系土器坏・高台坏?、丸瓦、凝灰岩切石の破片、壁材小破片25点(スサ痕あり4点、なし21点)が出土した。土師器は12が非ロクロ調整で、他はロクロ調整である。

【SK2381 土壌】(平面図：第50図、断面図：第50図、遺物：第52図)

【位置】調査区中央の東寄り。SB2355建物跡の西側柱列北から2間目の柱穴と重複する。

【重複】SB2355建物跡より新しい。

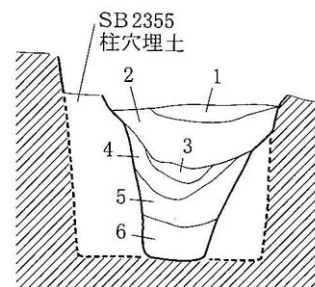
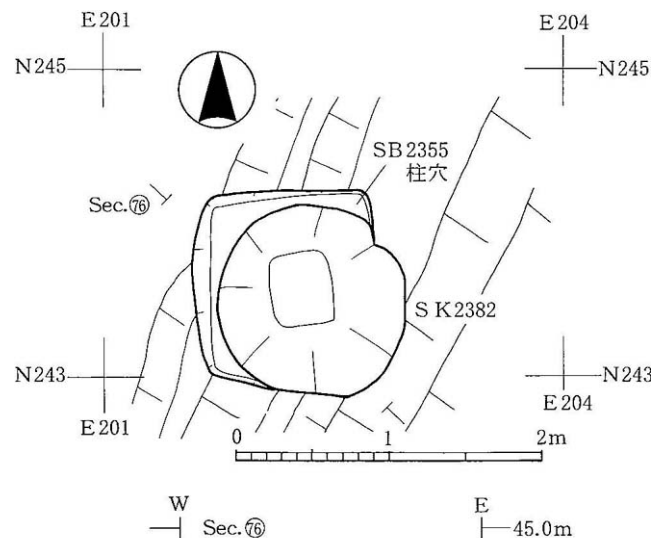
【形態・規模】平面形は直径1.5～1.8mの円形である。断面形は漏斗状で、深さ約1.1mである。

【堆積層】1層は暗褐色土、2層は黒褐色土、3層はしまりがあまりない褐灰色粘土、4層は全体に細かい地山風化凝灰岩をブロック状に含む褐灰色砂質粘土である。

【出土遺物】遺物は各堆積層から出土した。特に1層に多い。4層からは須恵系土器坏・高台坏、土師器坏・高台坏、須恵器甕、灰釉陶器壺体部、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類の破片が少数出土した。3層からは須恵系土器坏、土師器坏・高台坏・甕、

須恵器壺、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦の破片が少数出土した。2層からは須恵系土器小型坏・坏・高台坏(7)、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺の破

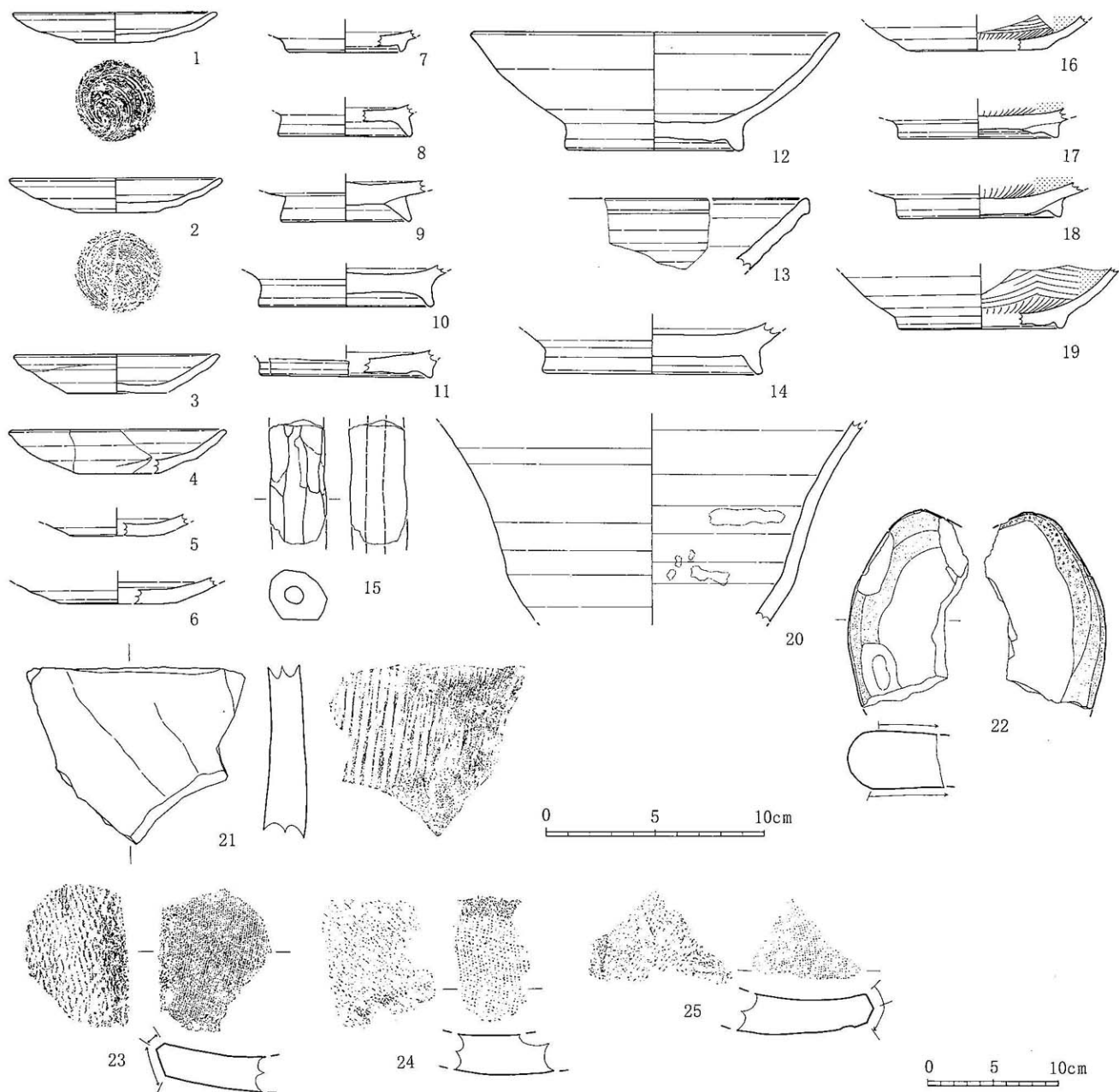
片が少数出土した。1層からは口縁部～底部まで残存する須恵系土器小型坏(1)の他、須恵系土器小型坏(2)・坏(3～5)・高台坏(6・8)・高台皿?、土師器坏・甕の破片多数と須恵器坏・甕・壺、灰釉陶器・皿類体部、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類aタイプ・ⅡB類の破片少数が出土した。各層出土の土師器はいずれもロクロ調整のものである。



【SK2382 土壌】(平面図：第53図、断面図：第53図、遺物：第54図、写真：図版15)

【位置】調査区中央の東寄り。SB2355建物跡の西側柱列北から3間目の柱穴と重複する。

第53図 SK2382土壌 平面図・断面図(1/50)



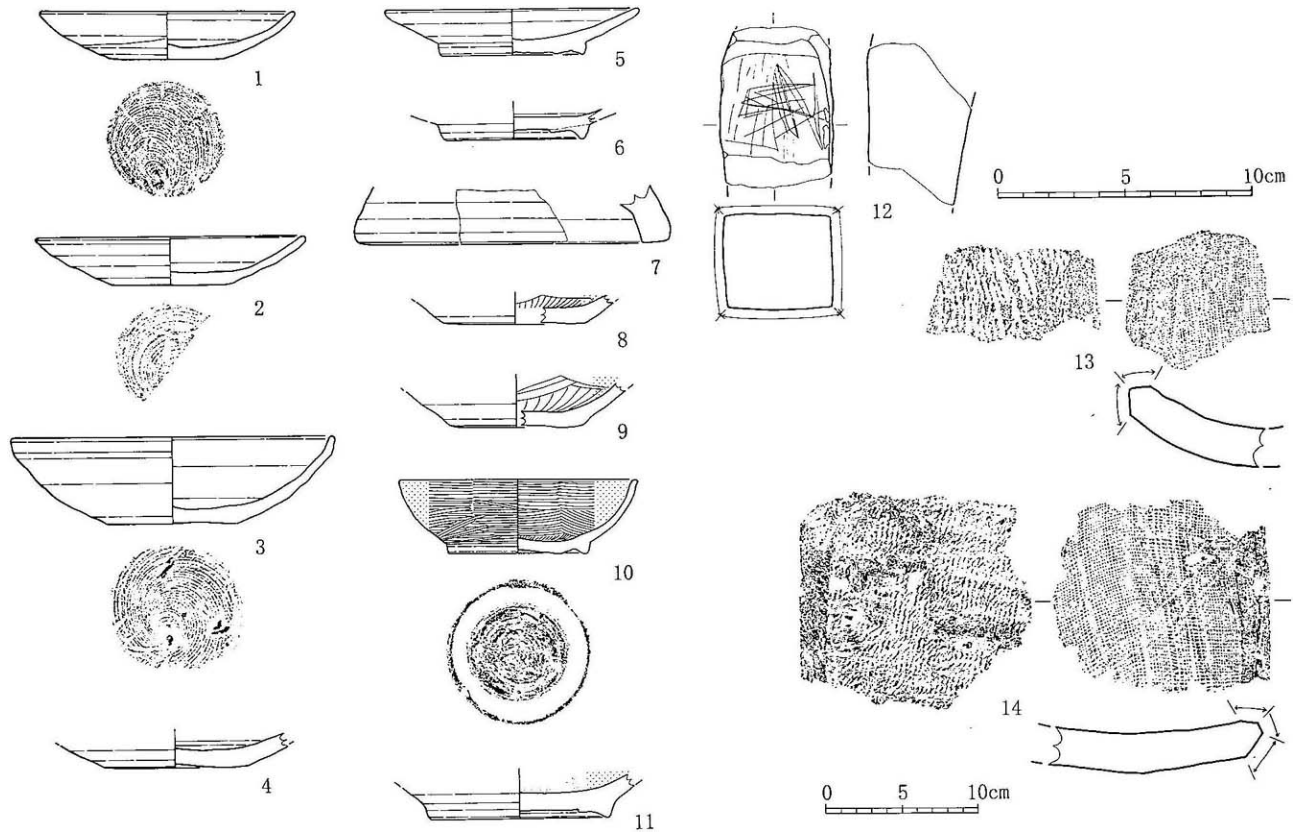
番号	器種	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特徴	残存	登録	箱番号
1	小型坏	回転糸切り無調整。淡黄灰色砂粒含む。	9.4	3.6	1.4	1	2	12730	15	器台	脚部破片。黄褐色。砂粒含む。丸芯に粘土塊を巻き付けてオサエ形成。穿孔。	図示	23	12730
2	小型坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	9.8	3.8	1.6	1	1	12730	16	坏	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。底径6.4cm。	1/6	31	12730
3	小型坏	回転糸切り無調整。黄褐色。胎土微細。粘土紐積み上げ痕。	9.5	4.6	1.8	1	4	12730	17	高台坏	糸切り→高台。放射状ミガキ。高台径7.4cm。高台高7mm。	1	26	12730
4	小型坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	10.0	3.8	2.0	1/4	3	12730	18	高台坏	糸切り→高台。放射状ミガキ。高台径7.6cm。高台高9mm。	1	27	12730
5	坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。底径4.4cm。				1/4	11	12730	19	高台坏	付高台。放射状ミガキ。高台径7.6cm。高台高6mm。外面に粘土紐積み上げ痕。	>1/4	25	12730
6	坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。底径5.4cm。				1/3	10	12730	20	鉢	体部破片。ロクロナデ。内面漆状付着物。	1/4	35	12730
7	高台坏	淡黄灰色。胎土微細。高台径5.2cm。高台高6mm。				1/4	9	12730	21	転用砚	須惠器甕体部破片転用。内面全面研磨。		36	12730
8	高台坏	黄褐色。胎土微細。高台径6.2cm。高台高9mm。				>1/3	18	12730	22	砥石	複輝石安山岩製。扁平。2面研磨。破損。		76	12730
9	高台坏	糸切り→高台。褐色。砂粒。高台径6.0cm。高台高1.2cm。				>1/4	16	12730	23	平瓦	平瓦IIc類。凸面長軸と平行する密な縄叩き目。凹面細い布目痕。政庁第IV期。		73	12730
10	高台坏	黄褐色。砂粒含む。高台径8.1cm。高台高1.0cm。				1	6	12730	24	平瓦	平瓦IIc類。凸面長軸とやや斜行する密な縄叩き目。凹面細い布目痕。政庁第IV期。		75	12730
11	高台坏	黄褐色。砂粒含む。高台径8.0cm。				1/6	8	12730	25	平瓦	平瓦IIc類。凸面長軸と斜行する密な細縄叩き目。凹面粗い布目痕。政庁第IV期。		74	12730
12	高台坏	橙褐色。砂粒含む。口径19.0cm。高台径8.2cm。高台高1.0cm。器高5.4cm。内面に油煙付着。				1	5	12730						
13	高台鉢	玉縁状の口縁部破片。淡黄褐色。砂粒含む。	図示				34	12730						
14	高台鉢	赤褐色。砂粒含む。高台径10.2cm。高台高1.3cm。				1/3	24	12730						

第54図 SK2382 土壌出土遺物(1~15: 須惠系土器、16~20: 土師器、21: 砚、22: 石製品、23~25: 瓦)

〔重複〕 S B 2355 建物跡より新しい。

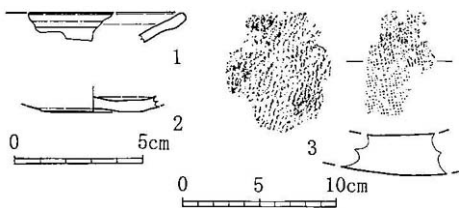
〔形態・規模〕 平面は直径約 1.2m の円形である。断面形は漏斗状で、深さ約 1.1m である。

〔堆積層〕 1層は木炭、焼土を含む暗褐色土、2層は木炭、焼土をやや多く含み、粘性がややある黒



番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	小型坏	回転系切り無調整。淡黄灰色。胎土微細で粉っぽい。粘土紐積み上げ痕。	10.0	4.5	1.9	1	2	12730	8	坏	回転系切り無調整。放射状ミガキ。底径 5.6cm。				1/4	18	12730
2	小型坏	回転系切り無調整。淡黄褐色。胎土微細。	10.6	4.8	1.9	1/2	3	12730	9	坏	回転系切り無調整。粗い放射状ミガキ。底径 5.2cm。				1/3	17	12730
3	坏	回転系切り無調整。淡黄灰色。砂粒・ガラス若干含む。底部に棒状圧痕。	13.7	5.2	3.4	1	4	12730	10	小型高台坏	回転系切り→付高台→両面ミガキ→黒色処理。海綿骨針を含む。口径 9.4cm。高台径 5.4cm。器高 2.9cm。				1	5	12730
4	坏	回転系切り無調整。澄褐色。砂粒含む。底径 5.7cm。				2/3	12	12730	11	高台坏	回転系切り→付高台。高台径 7.0cm。高台高 7mm。				3/4	20	12730
5	小型高台皿	付高台。淡黄灰色。砂粒・ガラスを含む。口径 10.0cm。径 5.6cm。器高 1.8cm。高台高 5mm。				1	1	12730	12	砥石	珪質極細粒凝灰岩製。直方体状。4面研磨・擦痕。破損。					39	12744
6	高台皿	糸切り→高台。灰褐色。砂粒含む。高台径 5.6cm。				2/3	14	12730	13	平瓦	平瓦 II C 類。凸面長軸と平行する太く深い縄叩き目。凹面細い布目痕。政庁第 IV 期。					38	12743
7	高台鉢	高台破片。赤褐色。砂粒含む。高台径約 12.4cm。				<1/6	21	12730	14	平瓦	平瓦 II C 類。凸面長軸とやや斜行する密な縄叩き目。凹面細い布目痕。政庁第 IV 期。					37	12743

第 55 図 SK2383 土壌出土遺物 (1) (1~7: 須恵系土器、8~11: 土師器、12: 石製品、13・14: 瓦)



番号	器種	特 徴	登録	箱番号
1	小型坏	肥厚した口縁部破片。橙褐色。砂粒含む。	6	12731
2	坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。底径 4.0cm。	2	12731
3	平瓦	平瓦 II C 類。凸面長軸と平行する密な縄叩き目。凹面細い布目痕。政庁第 IV 期。	21	12743

第 56 図 SK2384 土壌出土遺物 (1・2: 須恵系土器、3: 瓦)

褐色土、3層は木炭、焼土、地山ブロックを含み、粘性のある黒褐色土、4層は地山ブロックを含み、粘性がある黒褐色土、5層は粘性のある灰黄褐色土、6層は粘性のある褐灰色土である。

【**出土遺物**】堆積土からは口縁部～底部まで残存する須恵系土器小型坏（1～4）・高台坏（12）の他、須恵系土器小型坏・坏（5・6）・高台坏（7～11）・高台鉢（13・14）、器台（15）、土師器坏（16）・高台坏（17・18）・椀（19）・甕・鉢（20）、須恵器坏・甕・壺の破片、須恵器甕体部破片転用硯（21）、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（23）などの平瓦・丸瓦、砥石（22）の破片が出土した。土器では須恵系土器が多く、土師器・須恵器は少ない。須恵系土器は胎土に砂粒を含むものが多く、胎土が微細なものは少ない。しかし、色調は黄褐色～黄灰色のものが多く、橙褐色のものは少ない。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

【**S K2383 土壌**】（平面図：第5図、遺物：第55図、写真：図版15-5・6）

【**位置**】調査区東部北寄り。S A2349 材木堀跡の東側。

【**重複**】SA2349 材木堀跡、SI2373・2374 竪穴住居跡より新しい。基本層の第2層に覆われている。

【**形態・規模**】平面形は直径1.6～1.8mの円形である。断面形は逆台形状で、深さ約85cmである。

【**堆積層**】1層は5～15cmの礫および炭化物をまばらに含む黒褐色粘質土、2層は地山土粒を非常に多く含む褐色砂質土、3層は褐灰色粘土を多く含む褐色砂質土である。

【**出土遺物**】比較的多くの遺物が各層、特に1層から出土した。堆積土からは口縁部～底部まで残存する須恵系土器小型坏（1・2）・坏（3）・高台皿（5）、両黒土師器高台坏（10）の他、須恵系土器小型坏・坏（4）・高台坏・高台皿（6）・高台鉢（7）、土師器坏（8・9）・高台坏（11）・甕、須恵器坏・甕・壺の破片、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（13・14）などの平瓦・丸瓦の破片や砥石（12）、壁材小片6点（スサ痕あり・なし各3点）が出土した。土器では須恵系土器が多く、土師器・須恵器は少ない。須恵系土器には黄褐色～黄灰色で胎土が微細なもの、橙褐色で砂粒を含むものなどがある。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

【**S K2384 土壌**】（平面図：第5図、遺物：第56図）

【**位置**】調査区東部の北東隅。

【**重複**】S A2351 材木堀跡、S D2403 溝より新しい。基本層の第2層に覆われている。

【**形態・規模**】平面形は直径1.0mの円形である。断面形は逆台形状で、深さ約65cmである。

【**出土遺物**】遺物は少ない。須恵系土器小型坏（1）・坏（2）・高台坏・高台鉢、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（図3）、丸瓦の破片が少数出土した。須恵系土器は橙褐色で砂粒を含むものが多い。

【**S K2385 土壌**】（平面図：第57図、断面図：第57図、遺物：第58図、写真：図版15-7）

【**位置**】調査区東部の南西寄り。

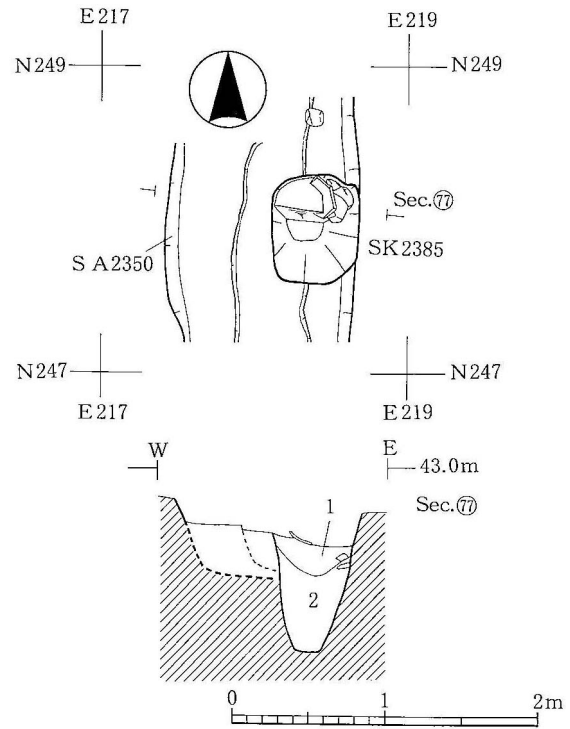
【**重複**】S A2350 材木堀跡より新しい。

〔形態・規模〕 平面形は一辺 60～70cm の隅  
 円方形である。壁の勾配は強く、深さ約 90cm  
 である。

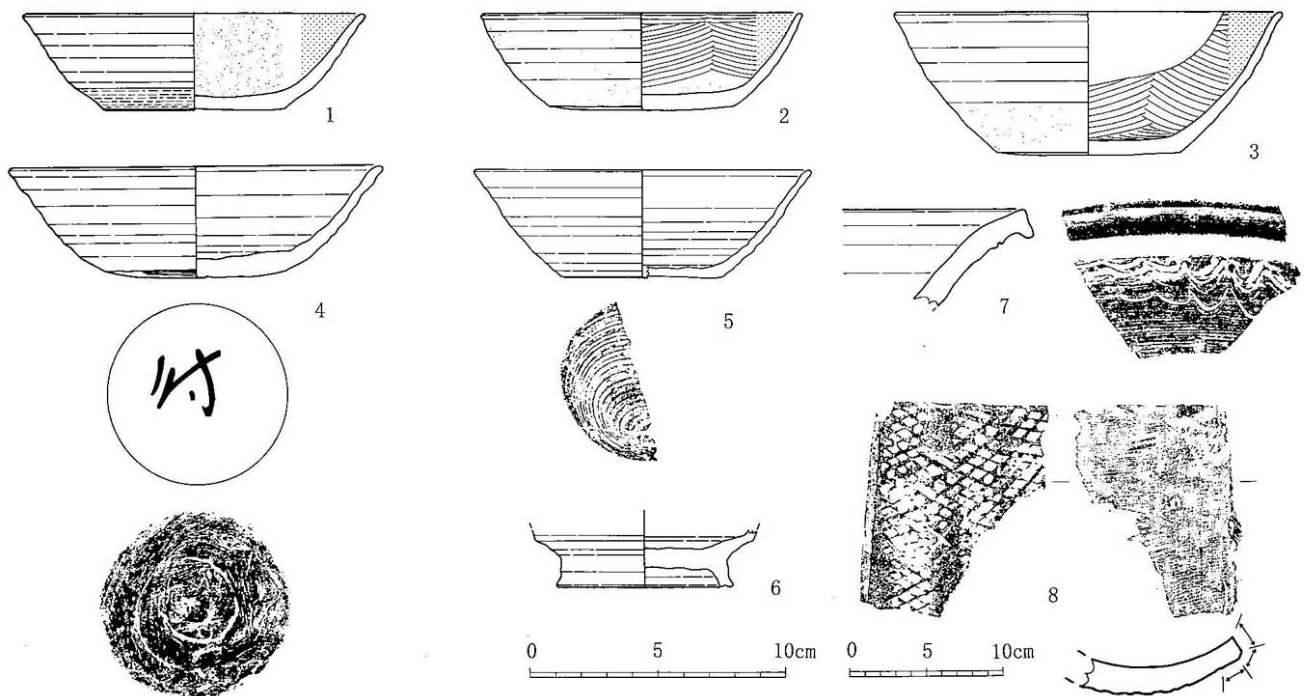
〔堆積層〕 1層は径約 2cm の凝灰岩ブロック、  
 炭化物を微量含み、粘性強く、しまりのある  
 灰黄褐色粘質土、2層は凝灰岩を粒状に多く  
 含む、しまりのあるにぶい黄褐色粘土である。

〔出土遺物〕 口縁部から底部まで残存する土  
 師器坏（1～3）、須恵器坏（4・5）の他、  
 土師器坏・甕、須恵器坏・稜椀（6）・甕（7）・  
 壺、政庁第Ⅰ期の平瓦 IC 類 a タイプ（8）  
 などの平瓦・丸瓦の破片少数、  
 ウマの歯 1 点が出土した。このうち 4 の須恵  
 器坏は底部に「厨」と墨書されている。土師

器はいずれもロクロ調整のものである。



第 57 図 SK2385 土坑 平面図・断面図 (1/50)



番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	回転ケズリ。摩滅。外面底部に黒斑。	13.4	7.1	3.8	>1/2	3	12731	5	坏	回転糸切り無調整。焼成あまい。	13.2	6.3	4.2	1/2	5	12731
2	坏	ケズリ?。摩滅。外面底部に黒斑。	12.6	7.2	3.8	1	1	12731	6	稜椀	高台接地面が沈線状。高台径 6.9cm。高台高 1.2cm。					6	12731
3	坏	ケズリ?。摩滅。横ミガキ。	15.2	7.2	5.6	2/2	2	12731	7	甕	口頸部破片。凸帯縁。櫛描波状文。海綿骨針を含む。					7	12731
4	坏	ヘラ切り。底部墨書「厨」。重ね焼き痕。	14.6	7.0	4.3	1	4	12731	8	平瓦	平瓦 IC 類 a タイプ。凸面格子叩き目。両面細い布目痕。Ⅰ期。					8	12743

第 58 図 SK2385 土坑出土遺物 (1～3: 土師器、4～7: 須恵器、8: 瓦)



【SK2387 土壙】(平面図：第 59 図、断面図：第 59 図、遺物：第 60 図、写真：図版 16-1)

【位置】 調査区西部の南寄り。

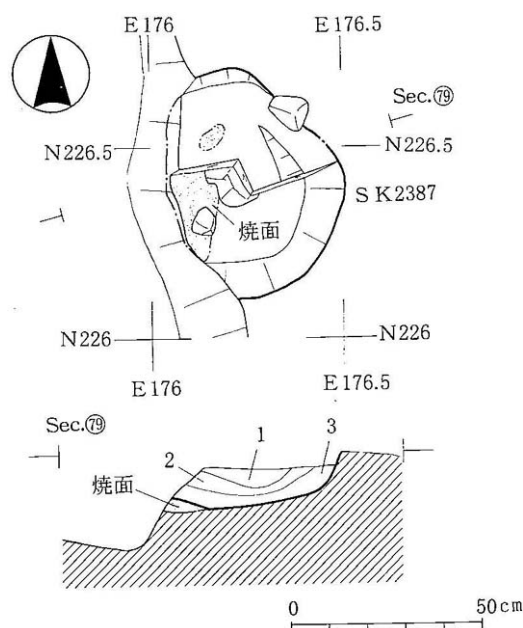
【重複】 SK2395 土壙より新しい。

【形態・規模】 西側を新しい溝によって壊されているため、平面形は半円状に残存していた。東西約 45cm 以上、南北約 60cm である。壁はごく緩やかに掘り込まれ、底面は平坦である。検出面からの深さは約 15cm である。

【焼面】 焼面は上下 2 面あり、上部焼面は 3 層上面に、下部焼面は底面で検出した。

【堆積層】 1 層は黄褐色粘土ブロックを若干含む褐色土、2 層は 1 層よりも黄褐色粘土ブロックを多く含む褐色土、3 層は明黄褐色土である。

【出土遺物】 口縁部から底部まで残存する須恵器坏破片 (3) の他、ロクロ調整の土師器坏 (1)・甕 (2) の破片が少数出土した。3 は体部に「力」と墨書され、底部は回転糸切り無調整である。



第 59 図 SK2387 土壙 平面図・断面図 (1/50)

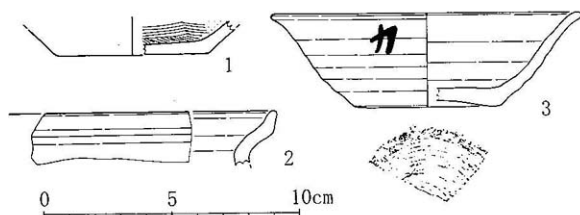
【SK2388 土壙】(平面図：第 61 図、断面図：第 61 図)

【位置】 調査区東部の北寄り、SA2349 材木堀跡の西隣。

【重複】 SA2349 材木堀跡より新しく、SK2389 土壙より古い。基本層の第 2 層に覆われている。

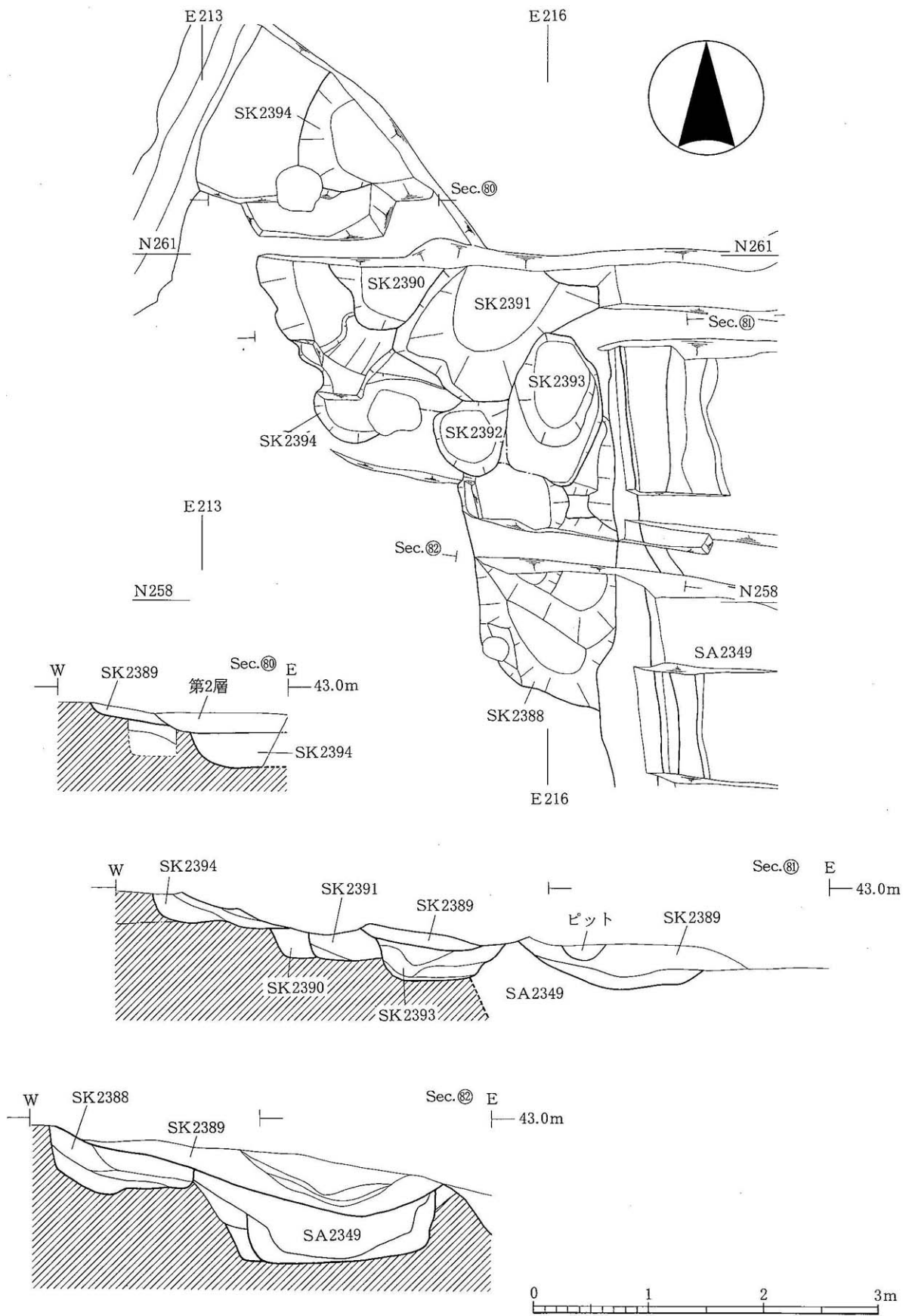
【形態・規模】 平面形は長軸約 1.6m 以上、短軸約 1.2m の不整形である。壁の傾斜は急で、底面は凹凸がある。検出面からの深さは約 60cm である。

【堆積層】 1 層は地山粘土を多く含むにぶい黄褐色土、2 層は地山粒・岩片を多く含む褐色土、3 層は比較的大きな地山岩片を含むにぶい黄褐色土、4 層は地山粘土・岩片を多量に含む黄褐色土である。

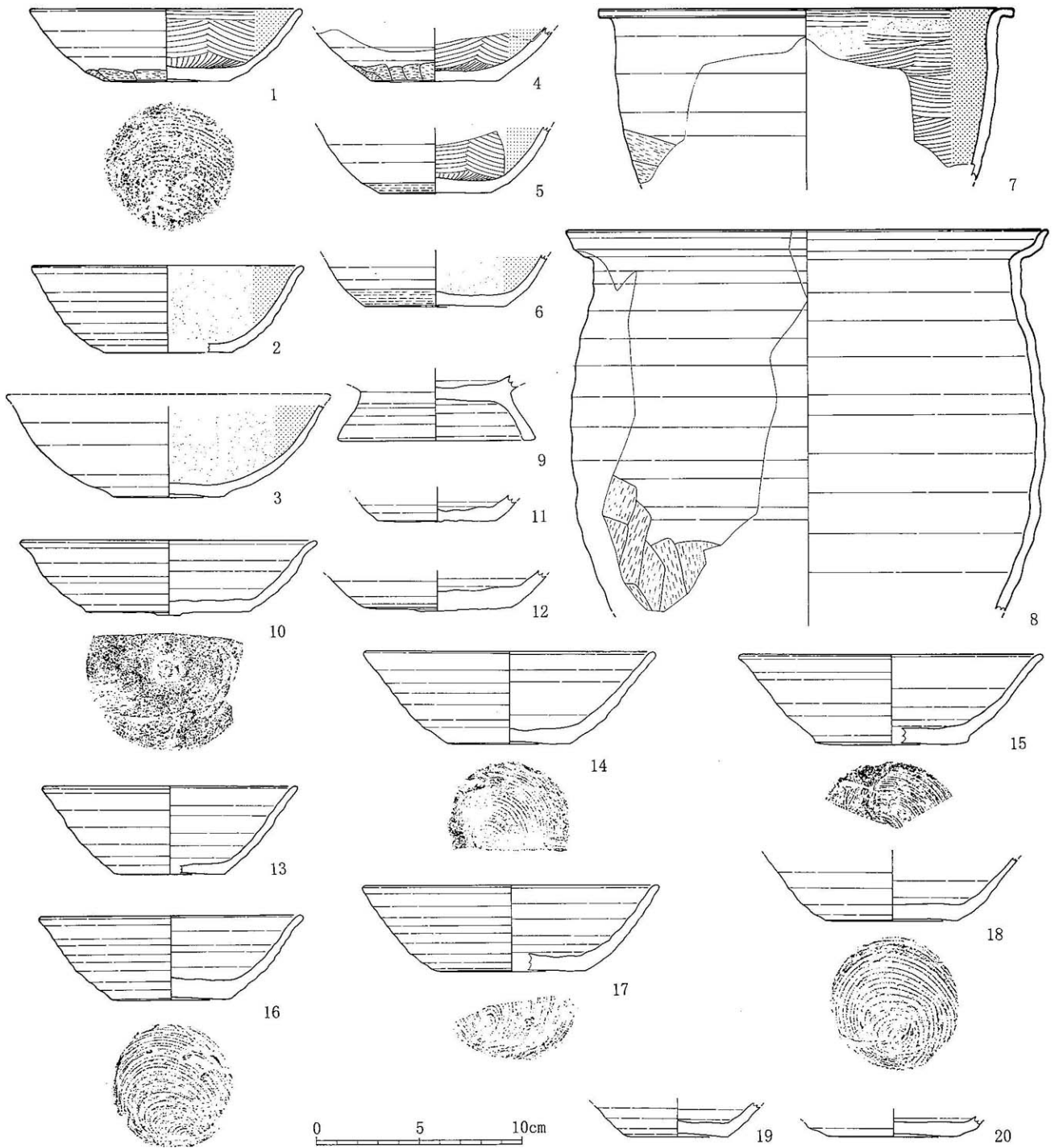


第 60 図 SK2387 土壙出土遺物 (1・2：土師器、3：須恵器)

番号	器種	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	1層	ケズリ。摩滅。横ミガキ。底径 6.0 cm。				1/4	2	12731
2	甕	3層	口縁部逆 S 字状に直立。ロクロナデ。					3	12731
3	坏	3層	回転糸切り無調整。外面体部に墨書「力」。	12.2	5.8	3.7	1/3	1	12731



第 61 図 SK2388~2394 土坑 平面図・断面図 (1/50)



番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	3層	回転糸切り→体下部手持ちケズリ。放射状ミガキ。	13.2	6.1	3.5	1	2	12732	10	坏	3層	ヘラ切り→棒状圧痕。	14.4	8.0	3.7	1/2	22	12732
2	坏	3層	回転糸切り無調整。内面摩滅。	13.2	6.2	4.2	1/2	3	12732	11	坏	4層	ヘラ切り。外面煤付着。底径5.8cm。				1/3	21	12732
3	坏	1層	回転糸切り無調整。内面摩滅。底径5.4cm。				3/4	14	12732	12	坏	2層	ヘラ切り→部分的軽いナデ。底径7.1cm。				1/2	32	12732
4	坏	1層	回転糸切り→体下部手持ちケズリ。横ミガキ。底径6.2cm。海綿骨針を含む。				2/3	16	12732	13	坏	3層	回転糸切り無調整。	12.4	5.4	4.3	1/3	25	12732
5	坏	3層	回転ケズリ。放射状ミガキ。黒斑。底径5.4cm。				>1/2	6	12732	14	坏	1層	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	14.2	5.9	4.5	>1/2	33	12732
6	坏	2層	回転ケズリ。内面摩滅。黒斑。底径6.8cm。				1/3	11	12732	15	坏	3層	回転糸切り→部分的軽いナデ。	14.8	7.4	4.4	1/3	24	12732
7	壺	1層	外反ロクロナデ→ケズリ。内面ミガキ→黒色処理。				>1/4	43	12732	16	坏	4層	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	12.8	5.8	4.1	1	20	12732
8	甕	3層	口縁部受口状。ロクロナデ→ケズリ。口径23.4cm。				1/4	41	12732	17	坏	3層	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	14.4	7.2	4.2	1/3	23	12732
9	高台坏	1層	回転糸切り→高台。黄褐色。高台径9.6cm。高台高2.4cm。					38	12732	18	坏	2層	回転糸切り無調整。底径6.4cm。				1	31	12732
										19	坏	3層	回転糸切り無調整。底径5.9cm。				1	26	12732
										20	坏	3層	回転糸切り無調整。底径6.4cm。				1/2	30	12732

第 62 図 SK2389 土壌出土遺物 (1)

(1~8: 土師器、9: 須恵系土器、10~20: 須恵器)

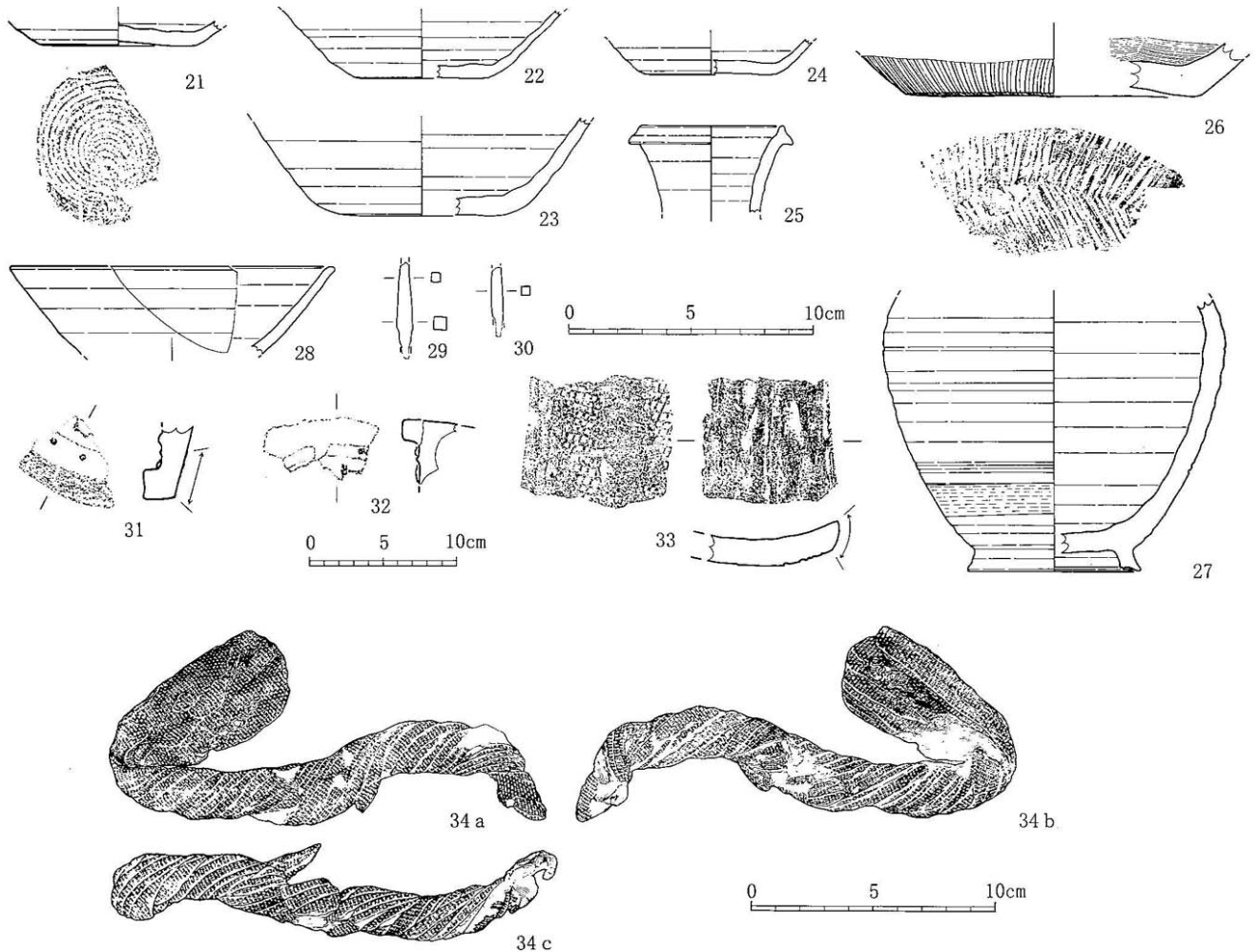
【出土遺物】ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺破片が少数出土した。このうち土師器坏には回転ケズリ、須恵器坏にはヘラ切りのものが各1点ある。

【SK2389 土壌】(平面図：第61図、断面図：第61図、遺物：第62・63図)

【位置】調査区東部の北寄り。SA2349材木堀跡の西隣。

【重複】SK2388土壌より新しく、SK2390土壌より古い。基本層の第2層に覆われている。

【形態・規模】平面形は不整形であり、規模は不明である。壁の傾斜はごく緩やかで、検出面からの深さは約40cmである。



番号	器種	層位	特 徴	残存	登録	箱番号	番号	器種	層位	特 徴	登録	箱番号
21	坏	3層	回転糸切り無調整。底部棒状圧痕。底径6.3cm。	>1/2	29	12732	29	鉄鎌?	1層	隠被式。現存長3.3cm。	62	12746
22	坏	3層	回転糸切り無調整。底径5.4cm。4と同一工人か。	>1/3	28	12732	30	鉄鎌?	1層	現存長2.8cm。	70	12746
23	坏	3層	回転糸切り無調整。底径6.8cm。	1/3	27	12732	31	軒丸瓦	3層	細弁蓮花文軒丸瓦310。	57	12743
24	坏	1層	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。底径5.4cm。	1/2	34	12732	32	軒丸瓦	3層	細弁蓮花文軒丸瓦310。	58	12743
25	長頸壺	1層	凸帯縁。口径5.8cm。	1/4	47	12733	33	平瓦	4層	平瓦IA類bタイプ。凸面格子叩き目→第2次布目痕→ナデ。凹面模骨痕・第一次布目痕→ナデ。政庁第I期。	56	12743
26	甕	1層	外面体下部・底部平行叩き。内面ナデ。底径12.2cm。		45	12733	34	漆漉し布	4層	麻布?。全長28cm以上。平織。1cm四方に経糸10本、緯糸10本。糸の太さ約0.8cm。時計回りに絞られる。	59	12745
27	壺	4層	回転ケズリ。高台径7.1cm。高台高9mm。最大径14.0cm。		48	12733						
28	塊	4層	口径約13.2cm。内面全面・口唇一部に灰軸刷毛塗り。		37	12732						

第63図 SK2389土壌出土遺物(2) (21~27:須恵器 28:灰釉陶器 29・30:鉄製品 31~33:瓦 34:布)

【**堆積層**】 1層は木炭・焼土粒を含むにぶい黄褐色土、2層は木炭・焼土粒、地山岩片を含むにぶい黄褐色土、3層は木炭を多量に含む暗褐色土、4層は木炭・焼土・地山岩片を含むにぶい黄褐色土と灰黄褐色土と黒褐色土が混じる。

【**出土遺物**】 各層より多くの遺物が出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。

埋土4層からは雑巾絞りされた漆漉し布1点(34)、口縁部から底部まで残存する回転糸切り無調整の須恵器坏1点(16)の他、土師器坏(底部11点〔ケズリ8点、調整不明3点〕など)・甕破片多数と須恵器坏〔底部3点(11のヘラ切り、回転糸切り無調整、回転糸切り→手持ちケズリ各1点)など〕・甕・壺(27)、灰釉陶器椀(28)、政庁第Ⅰ期の平瓦ⅠA類bタイプ(33)、丸瓦の破片少数が出土した。

3層からは口縁部から底部まで残存する土師器坏2点(回転糸切り→手持ちケズリ、回転糸切り無調整各1点;1・2)と須恵器坏4点(ヘラ切り1点、回転糸切り無調整3点;10・13・15・17)の他、土師器坏(底部18点〔回転糸切り→手持ちケズリ1点、回転ケズリ2点、手持ちケズリ3点、ケズリ1点、調整不明11点;5〕など)・甕(8)、須恵器坏〔底部17点(ヘラ切り8点、手持ちケズリ1点、回転糸切り無調整8点;19~23)など〕破片多数、須恵器甕・壺、政庁第Ⅲ期またはⅣ期の細弁蓮花文軒丸瓦310(31・32)、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦破片少数、スサ痕のある壁材小片2点が出土した。

2層からは土師器坏〔底部10点(回転糸切り無調整1点、回転ケズリ1点、手持ちケズリ2点、調整不明6点;6)など〕・甕破片多数、須恵器坏〔底部5点(ヘラ切り1点、回転ケズリ1点、回転糸切り無調整3点;12・18)など〕・甕、須恵系土高台坏・高台鉢、丸瓦の破片少数と漆紙断片が出土した。

1層からは土師器坏〔底部39点(回転糸切り無調整4点、回転糸切り→手持ちケズリ2点、回転ケズリ3点、手持ちケズリ3点、調整不明26点;3)など〕・甕、須恵器坏〔底部20点(ヘラ切り4点、手持ちケズリ2点、回転糸切り無調整14点;14・24)など〕・甕(26)の破片多数、須恵器壺、須恵系土器坏・高台坏(9)、平瓦、丸瓦の破片少数、鉄鏃・鉄鏃?各1点(29・30)、椀形鉄滓1点、凝灰岩切石破片1点、漆皮膜断片1点、スサ痕のある壁材小片2点が出土した。

【**SK2390 土壙**】(平面図:第61図、断面図:第61図)

【**位置**】 調査区東部の北寄り。SA2349材木堀跡の西隣。

【**重複**】 SK2389土壙より新しく、SK2391土壙より古い。基本層の第2層に覆われている。

【**形態・規模**】 平面形は不整形である。壁の傾斜は急で、底面は平坦である。検出面からの深さは約60cmである。

【**出土遺物**】 遺物は出土していない。

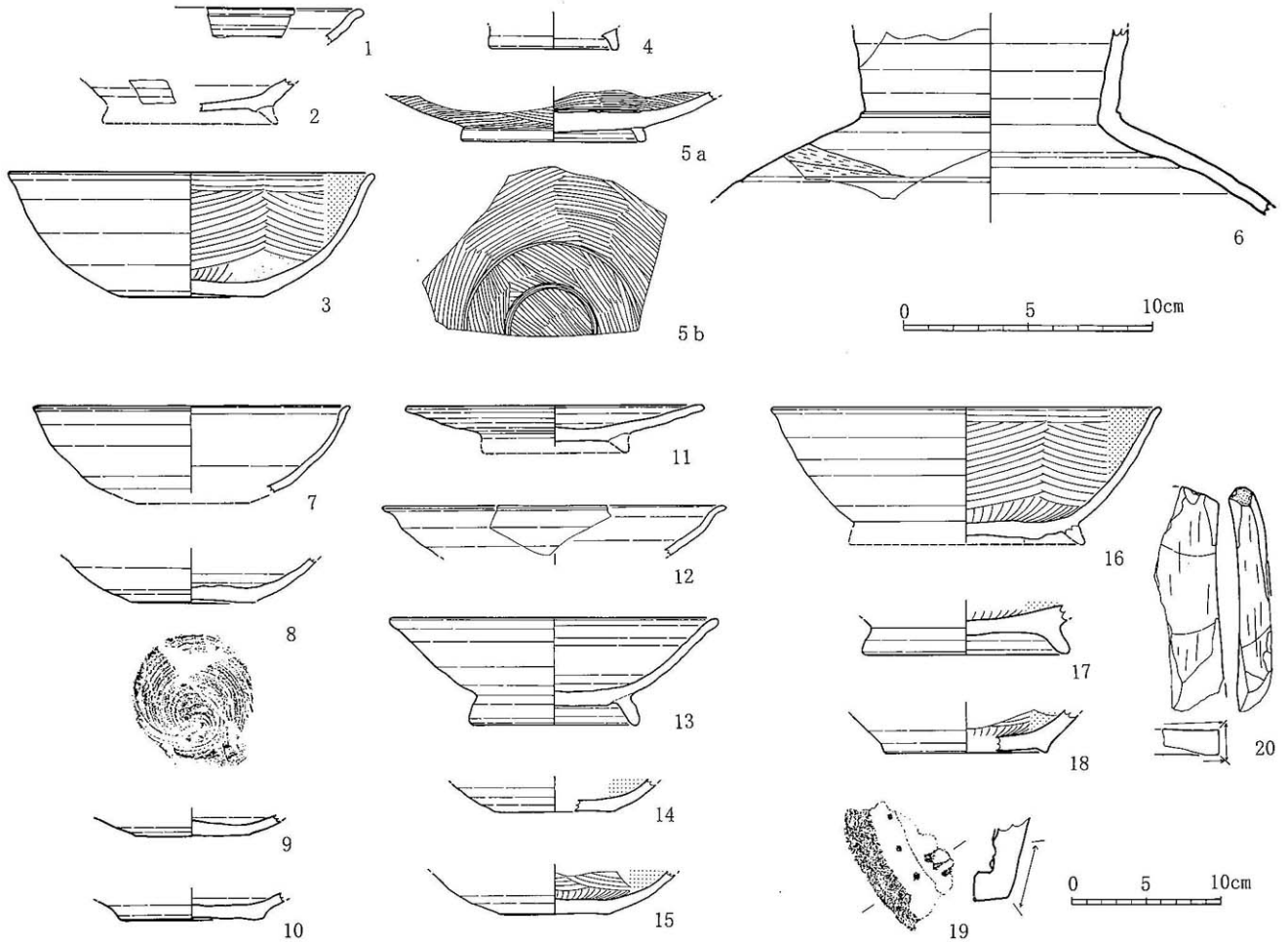
【**SK2391 土壙**】(平面図:第61図、断面図:第61図、遺物:第64図)

【**位置**】 調査区東部の北寄り。SA2349材木堀跡の西隣。

〔重複〕SK2390 土壌より新しく、SK2392 土壌より古い。基本層の第2層に覆われている。

〔形態・規模〕平面形は長軸約 1.3m以上、短軸約 1.0mの不整形である。壁の傾斜は急で、底面は平坦である。検出面からの深さは約 30cmである。

〔堆積層〕1層は褐色粘質土をブロック状に含む灰褐色粘質土、2層は凝灰岩ブロックを多く含む灰褐色粘質土である。



番号	器種	遺構	層位	特 徴	登録	箱番号	番号	器種	遺構	層位	特 徴	登録	箱番号
1	坏類	SK2391	1層	高台坏?。口縁緩やかにS字状に外反。灰色。	2	12733	12	高台坏	SK2393	4層	黄褐色。胎土微細。口径約 13.8cm。	4	12733
2	高台杯	SK2391	1層	回転糸切り→付高台。黄灰色。胎土微細。	3	12733	13	高台坏	SK2393	4層	黄褐色。胎土微細。回転糸切り→付高台。口径 13.8、高台径 6.8、器高 4.3、高台高 1.2cm。焼歪む。	1	12733
3	坏	SK2391	1層	回転糸切り。口径 14.6、底径 5.8、器高 5.0cm。	1	12733	14	坏	SK2393	3層	回転糸切り無調整。内面摩滅。底径 4.8cm。	9	12733
4	高台坏	SK2392	1層	高台破片。淡橙褐色。胎土微細。高台径 5.2cm。	2	12733	15	坏	SK2393	1層	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。底径 4.4cm。	12	12733
5	高台皿	SK2392	1層	角高台。ロクロナデー両面ミガキ。内面に圈線。深草緑色。高台径 7.4cm。高台高 5mm。京都系。	1	12733	16	高台坏	SK2393	2層	回転糸切り→付高台。高台欠。粗い放射状ミガキ。口径 15.6cm。器高推定 5.5cm。	3	12733
6	広口壺	SK2392	1層	退化したリング状凸帯(径 10.4cm)。自然釉。	3	12733	17	高台坏	SK2393	1層	回転糸切り→付高台。粗い放射状ミガキ。高台径 8.4cm、高台高 1.1cm。高台厚 6mm。	15	12733
7	坏	SK2393	2層	淡黄灰色。胎土微細。口径 12.6cm。	5	12733	18	高台坏	SK2393	3層	放射状ミガキ。高台径 6.6cm。高台高 4mm。高台と底部との間が 1mmと小さい。	13	12733
8	坏	SK2393	2層	回転糸切り無調整。底部棒状圧痕。淡明黄褐色。胎土微細。底径 4.9cm。	6	12733	19	軒丸瓦	SK2393	2層	繡弁蓮花文軒丸瓦 310B。瓦当破片。政庁第IV期。	22	12743
9	坏	SK2393	2層	回転糸切り。淡黄褐色胎土微細。底径 4.5cm。	7	12733	20	砥石	SK2393	1層	結晶片岩製手持ち砥石。3面研磨。	23	12744
10	坏	SK2393	1層	回転糸切り。淡黄褐色。胎土微細。底径 5.7cm。	8	12733							
11	高台皿	SK2393	3層	淡黄色。胎土微細。高台欠。口径 12.0cm。	2	12733							

第 64 図 SK2391~2393 土壌出土遺物 (1・2・4・7~13: 須恵系土器 3・14~18: 土師器 5: 緑釉陶器 6: 須恵器 19: 瓦 20: 石製品)

【**出土遺物**】口縁部から底部まで残存する回転糸切り無調整の土師器坏1点（3）の他、須恵系土器の坏類（1）・高台坏（2）、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。

【**S K 2392 土壙**】（平面図：第 61 図、断面図：第 61 図、遺物：第 65 図）

【**位置**】調査区東部の北寄り。S A 2349 材木堀跡の西隣。

【**重複**】S K 2391 土壙より新しく、S K 2393 土壙より古い。基本層の第 2 層に覆われている。

【**形態・規模**】平面形は直径約 70cm の円形である。壁の傾斜は急で、底面は平坦である。検出面からの深さは約 5 cm である。

【**出土遺物**】須恵系土器高台坏（4）、土師器坏（回転糸切り無調整の底部など）・甕、須恵器坏・甕・広口壺（6）・壺、緑釉陶器高台皿（5）の破片が少数出土した。

【**S K 2393 土壙**】（平面図：第 61 図、断面図：第 61 図、遺物：第 64 図）

【**位置**】調査区東部の北寄り。S A 2349 材木堀跡の西隣。

【**重複**】S K 2392 土壙より新しく、S K 2394 土壙より古い。基本層の第 2 層に覆われている。

【**形態・規模**】平面形は長軸約 1.2m 以上、短軸約 0.8m の不整楕円形である。壁の傾斜はやや急で、底面は平坦である。検出面からの深さは約 40cm である。

【**堆積層**】1 層は灰褐色粘質土と褐色粘質土が混じる層、2 層は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土。3 層は灰褐色粘質土と褐色粘質土が混じる層、4 層は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土である。

【**出土遺物**】4 層からは口縁～高台まで残存する須恵系土器高台坏（13）1 点の他、須恵系土器小型坏・坏・高台坏（12）、土師器坏、須恵器甕の破片が少数出土した。3 層からは須恵系土器坏・高台皿（11）、土師器坏（14）・高台坏（18）・甕、須恵器坏、平瓦、丸瓦の破片が少数出土した。2 層からは須恵系土器坏（7～9）、土師器坏・高台坏（16）・甕、政庁第Ⅳ期の細弁蓮花文軒丸瓦 310B（19）の破片が少数出土した。1 層からは須恵系土器坏（10）・高台坏、土師器坏（15）・高台坏（17）・甕、須恵器甕、平瓦、丸瓦、砥石（20）の破片が少数出土した。

【**S K 2394 土壙**】（平面図：第 61 図、断面図：第 61 図、遺物：第 65 図）

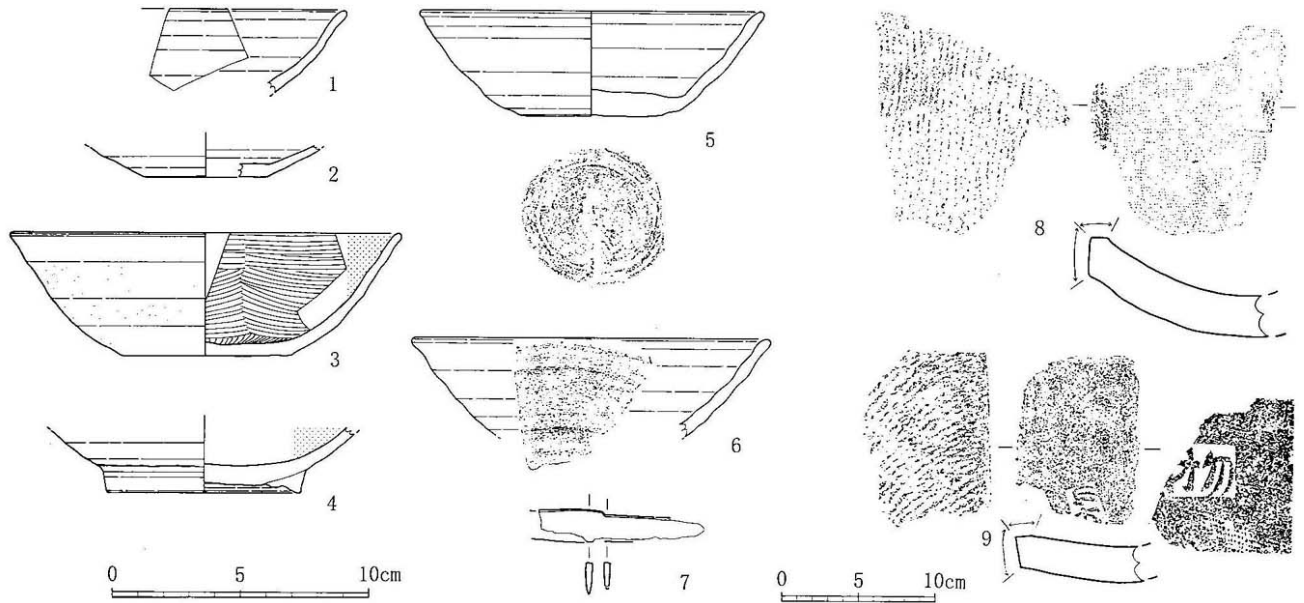
【**位置**】調査区東部の北寄り。S A 2349 材木堀跡の西隣。

【**重複**】S K 2393 土壙より新しい。基本層の第 2 層に覆われている。

【**形態・規模**】平面形は長軸約 3.2m 以上の不整形である。壁の傾斜はやや急で、底面は平坦である。検出面からの深さは約 60cm である。

【**出土遺物**】口縁部から底部まで残存する土師器坏（3）、須恵器坏（5）各 1 点の他、須恵系土器小型坏（1・2）・坏・高台坏、土師器高台坏（4）・甕、焼成前ヘラ記号のある須恵器坏（6）、須恵器甕・壺、刀子（7）、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC 類（8）、政庁第Ⅱ期の刻印「物」A の平瓦ⅡB 類（9）、丸瓦の破片が少数出土した。





番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	登録	箱番号
1	小型坏	口縁部破片。黄褐色。胎上微細。				図示	3	12734	6	坏	外面体部に焼成前ヘラ記号「*」。口径約 14.0cm	7	12734
2	小型坏	明黄褐色。砂粒含む。底径 4.8cm				1/3	2	12734	7	刀子	身へ茎破片。平造り角棟。両区?。現存長 6.5cm。棟厚 3mm。	19	12746
3	坏	回転ケズリ。放射状ミガキ。黒斑。	15.2	6.6	4.8	1/3	5	12734	8	平瓦	平瓦ⅡC類。凸面長軸と並行する密で深く細い縄叩き目。凹面細い布目痕。ヘラ描き文字?。黄褐色。政庁第Ⅳ期。	18	12743
4	坏	回転糸切り→付高台。高台径 7.6cm。高台高 8mm。				2/3	1	12734	9	平瓦	平瓦ⅡB類 aタイプ 1。凸面長軸と斜行する潰れた縄叩き目。凹面布目→丁寧なナデ→刻印「物」A。灰色。政庁第Ⅱ期。	17	12743
5	坏	回転糸切り→底部手持ちケズリ→底部回転ケズリ。内面底部平滑。	13.4	5.6	4.1	1	6	12734					

第 65 図 SK2394 土壌出土遺物 (1・2: 須恵系土器、3・4: 土師器、5・6: 須恵器、7: 鉄製品、8・9: 瓦)

【SK2395 土壌】(平面図: 第 13 図、断面図: 第 66 図、遺物: 第 67 図、写真: 図版 16)

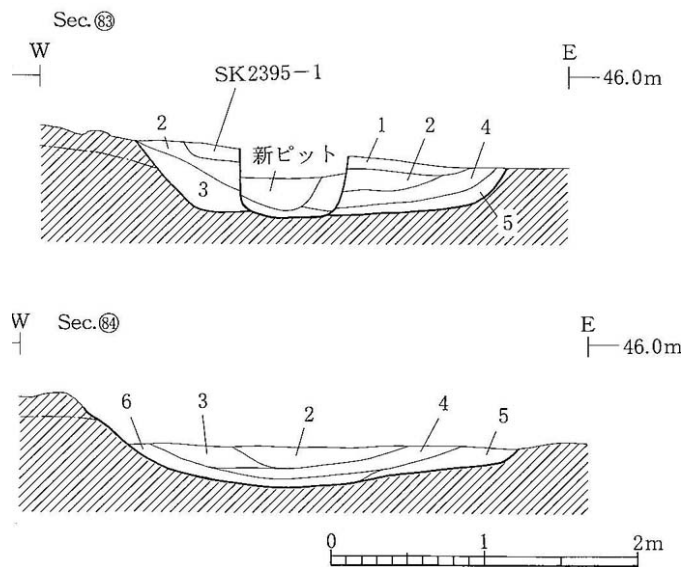
【位置】調査区南部西寄り。

【重複】SB2354・2361 建物跡、SK2387 土壌より古い。

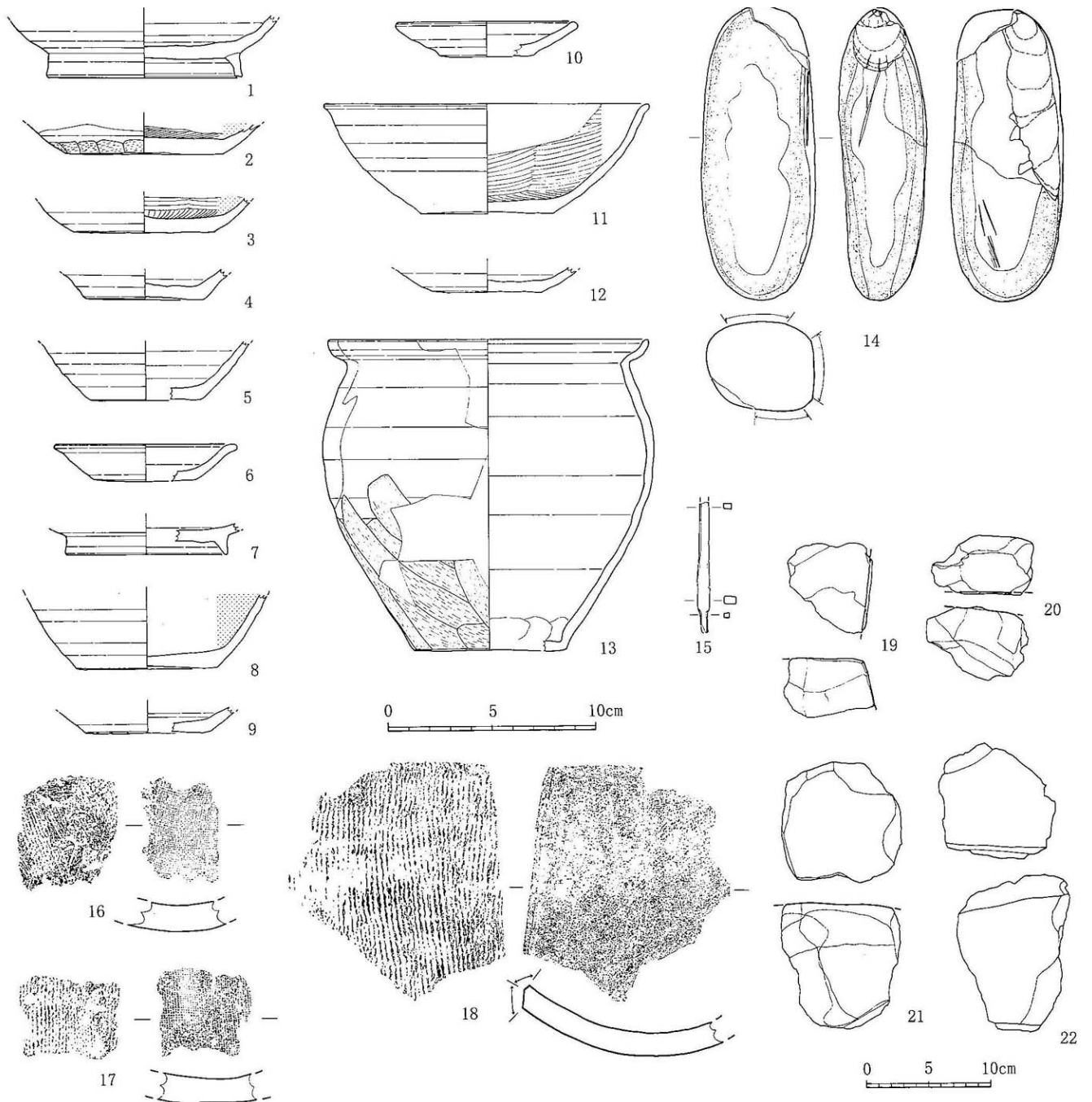
【形態・規模】平面形は長軸約 8.0 m、短軸約 3.0m の不整形である。壁の傾斜はごく緩やかで、底面は平坦である。検出面からの深さは約 50cm である。

【堆積層】1層は均質な橙色粘質土、2層はマンガン粒を多く含む均質な褐色粘質土、3層は一部灰褐色に粘土化している褐色粘質土である。

【出土遺物】土師器坏・甕、須恵器甕・壺、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類(16)の破片が少数出土した。



第 66 図 SK2395 土壌 断面図 (1/50)



番号	器種	遺構	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	遺構	特 徴	登録	箱番号
1	高台杯	SK2396	回転糸切り→回転ケズリ→付高台。高台径9.4cm。				>7/8	1	12734	13	甕	SK2400	口縁部受口状。ロクロナデ→外面体下部ケズリ、内面体下部～底部指オサエ。口径15.4cm。底径17.4cm。器高15.0cm。残存>1/2。	6	12734
2	杯	SK2397	手持ちケズリ。横ミガキ。底径7.6cm。海綿骨針を多く含む。二次加熱を受け、両面とも数箇所剥落。				1	1	12734	14	砥石	SK2397	砂岩製。長楕円形。3面研磨。18.7×7.4×5.6cm	6	12744
3	杯	SK2397	底部手持ちケズリ。放射状ミガキ。底径6.8cm。				1	2	12734	15	鉄鏝	SK2396	籠被式。現存長6.3cm。	2	12746
4	杯	SK2397	回転糸切り無調整。底径5.6cm。				1/3	4	12734	16	平瓦	SK2395	平瓦II C類。凸面縄叩き目。凹面布目。政庁第IV期。	1	12743
5	杯	SK2397	回転糸切り無調整。底径5.4cm。				1/3	3	12734	17	平瓦	SK2398	平瓦II C類。凸面縄叩き目。凹面布目。政庁第IV期。	3	12743
6	小型杯	SK2398	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	3.8	1.6	1.7	1/3	1	12734	18	平瓦	SK2397	平瓦II B類 a2。凸面縄叩き目。凹面布目→ナデ。政庁第II or III期。	5	12743
7	高台杯	SK2398	橙褐色。砂粒含む。高台径7.8cm。高台高9mm。				1/3	2	12734	19	切石	SK2397	凝灰岩製。直交する平坦面。加熱を受け赤変。	12	12748
8	杯	SK2399	回転糸切り無調整。底径6.8cm。				2/3	1	12734	20	切石	SK2397	凝灰岩製。直交する平坦面。加熱を受け小豆色に変色。	11	12748
9	杯	SK2399	回転糸切り→底部外周手持ちケズリ。底径6.0cm。				1/4	2	12734	21	切石	SK2397	凝灰岩製。平坦面1面。加熱を受け小豆色に変色。	7	12748
10	小型杯	SK2400	回転糸切り無調整。橙褐色砂粒含む。	3.8	1.6	1.7	<1/4	3	12734	22	切石	SK2397	凝灰岩製。直交する平坦面。加熱を受け赤変。	8	12748
11	杯	SK2400	手持ちケズリ。横ミガキ。黒斑。	15.6	5.4	1.3	3/4	2	12734						
12	杯	SK2400	回転糸切り無調整。底径5.2cm。				1/3	4	12734						

第 67 図 SK2395～2400 土壌出土遺物 (1・4・5・9・12: 須恵器、2・3・8・11・13: 土師器、6・7・10: 須恵系土器、14・19～22: 石製品、15: 鉄製品、16～18: 瓦)

【S K2396 土壌】（平面図：第13図、遺物：第67図）

〔位置〕 調査区中央部南寄り。

〔重複〕 S B 2356・2357・2362 建物跡、S K2380 土壌より古い。基本層の第2層に覆われている。

〔形態・規模〕 平面形は長軸約 8.0m、短軸約 4.5mの不整形である。未精査のため詳細は不明である。

〔出土遺物〕 ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器高台坏（1）・壺、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類、鉄鏃（15）の破片が少数出土した。

【S K2397 土壌】（平面図：第15図、遺物：第67図）

〔位置〕 調査区中央部。S B 2362 建物跡の北側。

〔重複〕 なし。

〔形態・規模〕 平面形は長軸約 1.0m、短軸約 0.8mの楕円形である。壁の傾斜はやや急で、底面は平坦である。検出面からの深さは約 45cm である。

〔出土遺物〕 手持ちケズリの土師器坏（2・3）・甕、回転糸切り無調整の須恵器坏（4・5）・甕・壺、平瓦ⅡB類（18）、丸瓦、砥石（14）、凝灰岩切石（19～22）の破片が少数出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

【S K2398 土壌】（平面図：第15図、遺物：第67図）

〔位置〕 調査区中央部北東寄り。

〔重複〕 S B 2355 建物跡と重複するが、直接の切り合いがなく新旧は不明である。

〔形態・規模〕 平面形は長軸約 2.0m、短軸約 1.5mの不整形である。壁の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。検出面からの深さは約 20cm である。

〔出土遺物〕 口縁部～底部まで残存する須恵系土器小型坏（6）1点の他、須恵系土器高台坏（7）、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（17）、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦の破片が少数出土した。

【S K2399 土壌】（平面図：第5図、遺物：第67図）

〔位置〕 調査区東部中央。

〔重複〕 S B 2358 建物跡と重複するが直接の切り合いがなく新旧は不明である。基本層の第2層に覆われている。

〔形態・規模〕 平面形は長軸約 1.1m、短軸約 0.6mの楕円形である。壁の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。検出面からの深さは約 10cm である。

〔出土遺物〕 ロクロ調整の土師器坏（8）・甕、須恵器坏（9）・甕、凝灰岩切石の破片が少数出土した。

【SK2400 土壇】（遺物：第 67 図）

〔位置〕 調査区東部北寄り。

〔重複〕 S I 2375 竪穴住居跡より新しい。

〔検出状況〕 S I 2375 住居跡の上面で検出したものである。基本層の第 2 層に覆われている。

〔形態・規模〕 平面形は長軸約 1.6m、短軸約 1.2mの楕円形である。壁の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。検出面からの深さは約 20cm である。

〔出土遺物〕 口縁部から底部まで残存する須恵系土器小型坏（10）、土師器坏（11）・甕（13）各 1 点の他、比較的多くの土師器坏・甕、須恵器坏（12）破片と少数の須恵系土器坏、須恵器甕・壺破片が出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

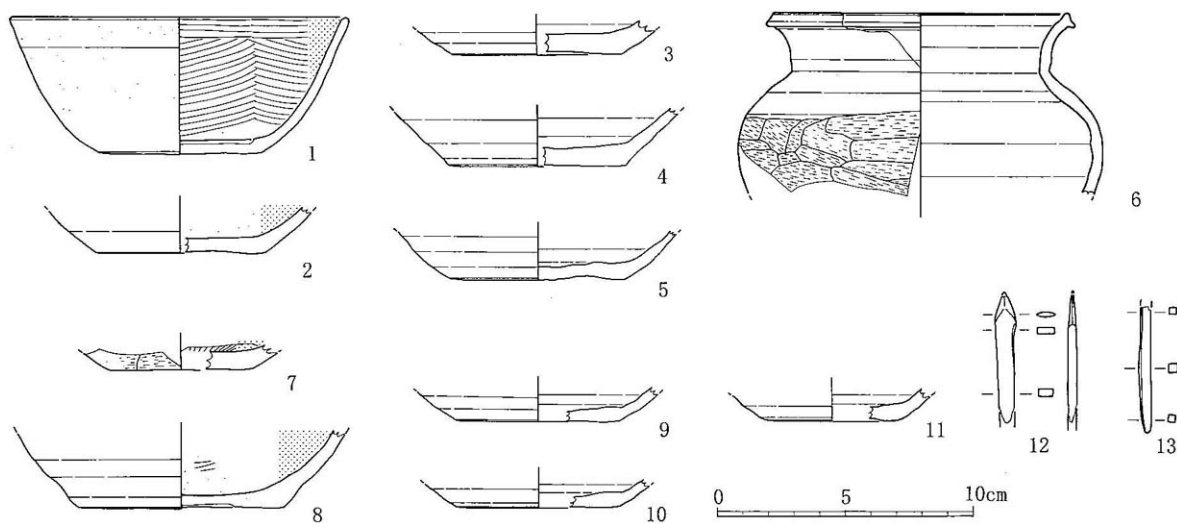
【SK2401 土壇】（平面図：第 6 図、断面図：第 9 図、遺物：第 68 図）

〔位置〕 調査区東部の東端。S A 2351 材木堀跡の南東側。

〔重複〕 S A 2351 材木堀跡より新しい。基本層の第 2 層に覆われている。

〔形態・規模〕 平面形は長軸約 2.8m、短軸約 1.1mの楕円形である。壁の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。検出面からの深さは約 30cm である。

〔出土遺物〕 口縁部～底部まで残存する土師器坏（1）1 点の他、土師器坏（2）・甕、須恵器坏（3



番号	器種	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	遺構	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	坏	SK2401	摩滅。内面底部火はね痕。	13.2	6.3	5.4	1	1	12734	7	坏	SK2402	手持ちケズリ。放射状ミガキ。黒斑。底径 5.6cm。	>1/4	2	12735			
2	坏	SK2401	回転糸切り無調整。内面摩滅。底径 6.6cm。				1/2	2	12734	8	坏	SK2402	回転糸切り無調整。底径 8.0cm。		1/2	1	12735		
3	坏	SK2401	回転糸切り無調整。底径 6.6cm。				1/4	4	12734	9	坏	SK2402	ヘラ切り。底径 6.4cm。海綿骨針を含む。		1/4	4	12735		
4	坏	SK2401	回転糸切り無調整。外面火はね痕。底径 7.0cm。				1/3	3	12734	10	坏	SK2402	ヘラ切り。底径 6.4cm。		1/4	5	12735		
5	坏	SK2401	ヘラ切り。底径 6.8cm。				1/4	5	12734	11	坏	SK2402	回転糸切り無調整。底径 5.2cm。		>1/4	3	12735		
6	甕	SK2401	口縁～体部破片。凸帯縁。ロクロナデ→外面下半部ケズリ。口径 11.5cm。				1/4	6	12734	12	鉄鏃	SK2402	長茎鏃。現存長 4.9cm。			6	12746		
										13	鉄鏃?	SK2402	現存長 4.9cm。			7	12746		

第 68 図 SK2401・2402 土壇出土遺物 (1・2・7・8：土師器、3～6・9～11：須恵器、12・13：鉄製品)

～5)・甕(6)、凝灰岩切石の破片が少数出土した。須恵器坏はいずれも底径が7cm前後と比較的大きく、回転糸切り無調整(3・4)とヘラ切り(5)の両者がある。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

**【SK2402 土壙】**(平面図：第5図、遺物：第68図)

〔位置〕調査区東部の東端。SA2351材木堀跡の南東側。

〔重複〕他の遺構とは重複していない。基本層の第2層に覆われている。

〔形態・規模〕平面形は直径約60cm、短軸約0.8mの円形である。壁の傾斜はごく緩やかで、底面は平坦である。検出面からの深さは約10cmである。

〔出土遺物〕ロクロ調整の土師器坏(7・8)・甕、須恵器坏(9～11)・甕・壺、鉄鏃など鉄製品(12・13)、壁材とみられる破片が少数出土した。

(6) その他の遺構

**【SA2364 柱列跡】**(平面図：第21図、断面図：第21図、遺物：第24図、写真：図版16)

〔位置〕調査区西部の中央。

〔柱間数〕南北3間。

〔重複〕なし。

〔検出状況〕4個の柱穴を検出した。

〔柱穴掘方〕掘方は一辺35～50cmの方形で、検出面から深さは約30cmである。埋め土は粘性のあるにぶい黄橙色土で地山風化凝灰岩をブロック状に含む。

〔柱痕跡〕2ヵ所で柱痕跡を確認した。直径は約20cmの円形で、堆積土はにぶい黄橙色土である。

〔平面規模〕総長は約9.4mで、柱間寸法は北から約3.7m・約2.2m・約3.5mである。

〔柱列方向〕発掘南北基準線に対し、北で西に約2°偏る。

〔出土遺物〕柱穴埋め土より回転糸切り無調整の土師器坏(12)、折戸53号窯式の猿投窯製品の灰釉陶器碗(13)などの破片が少数出土した。

**【SD2403 溝跡】**(平面図：第5図、遺物：第69図)

〔位置〕調査区東部の北端。

〔溝方向〕ほぼ東西方向。西でやや北に曲がる。

〔重複〕SA2351材木堀跡、SI2375竪穴住居跡より新しく、SK2384土壙より古い。基本層の第2層に覆われている。

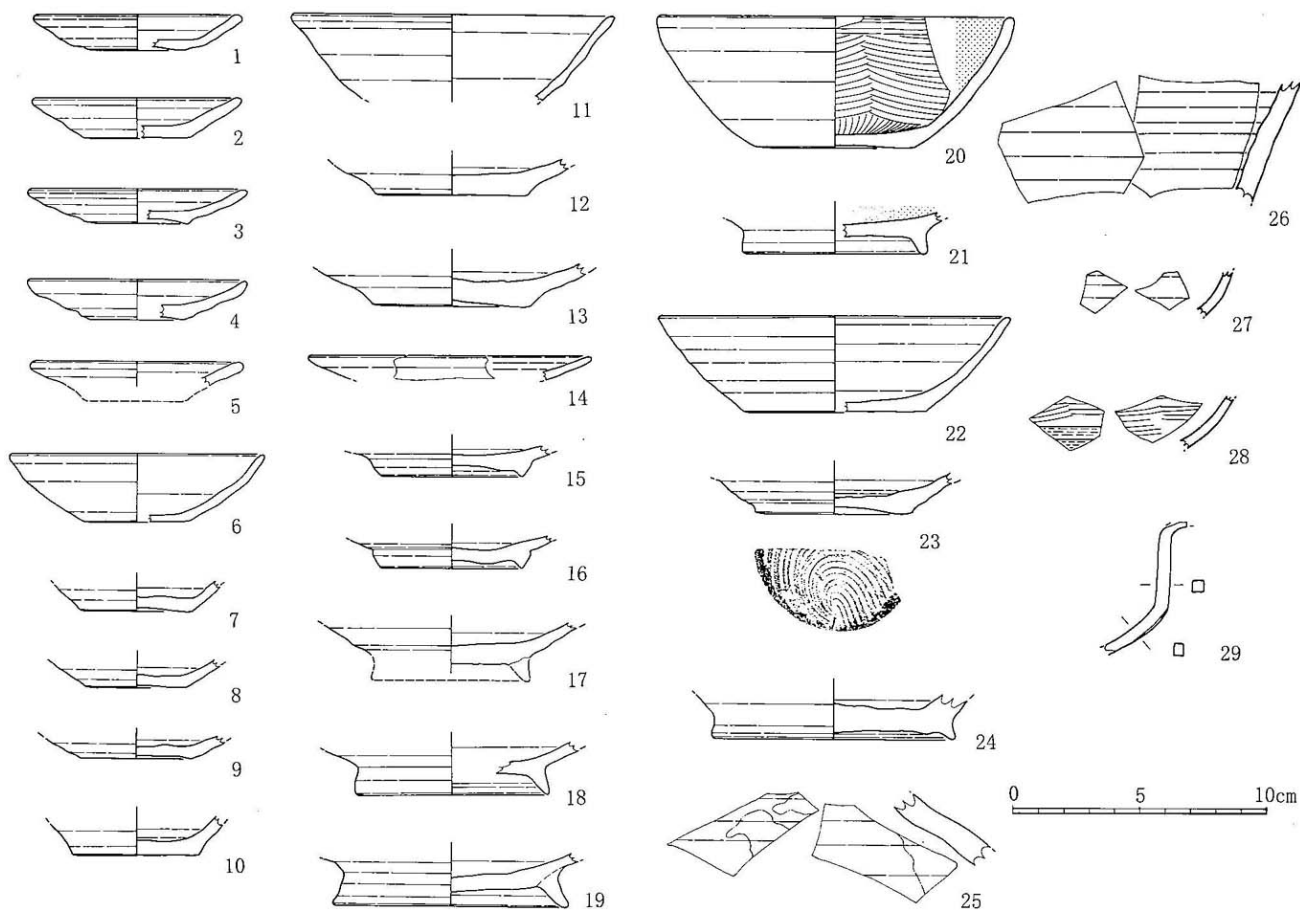
〔規模〕幅約90cm以上、残存深さ約20cm、断面は偏平なU字形で、長さ約5m検出した。

〔堆積層〕地山砂礫粒を含む黒褐色土である。

〔出土遺物〕口縁部から底部まで残存する須恵系土器小型坏5点(1～4・6)、回転糸切り無調整

の土師器坏1点(20)、へら切りの須恵器坏1点(22)の他、多量の須恵系土器小型坏・坏(7~13)、土師器坏・甕、須恵器甕破片と少量の須恵系土器高台皿(14~16)・高台坏(17~19)、土師器高台坏(21)、須恵器坏(23)・壺(24・25)、灰釉陶器碗(27・28)、政庁第I~IV期の平瓦、丸瓦、鉄釘(29)、凝灰岩切石破片が出土した。

【未登録の土壌・ピット・溝の出土遺物】(第70図)



番号	器種	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	小型坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	8.2	4.0	1.4	1/3	2	12735	16	高台皿	淡黄褐色。胎土微細。高台径5.6cm。高台高7mm。			1/2	22	12735	
2	小型坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	8.2	4.2	1.6	1/2	3	12735	17	高台坏	回転系切り一付高台。高台欠。褐色。胎土微細。			1	21	12735	
3	小型坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	8.6	4.2	1.4	1/3	1	12735	18	高台坏	淡黄灰色。胎土微細。高台径7.6cm。高台高1.1cm。			1/3	24	12735	
4	小型坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	8.6	3.8	1.6	1/4	4	12735	19	高台坏	淡黄灰色。胎土微細。高台径9.2cm。高台高1.3cm。			1/3	23	12735	
5	小型坏	淡黄褐色。砂粒含む。	8.4			1/3	6	12735	20	坏	回転系切り無調整。放射状ミガキ。	14.0	6.2	5.2	1/3	26	12735
6	小型坏	回転系切り無調整。淡黄灰色。胎土微細。	10.0	4.2	2.7	1/4	8	12735	21	高台坏	内面ミガキ・黒色消失。高台径7.3cm。高台高9mm。			<1/2	27	12735	
7	小型坏	回転系切り無調整。黄灰色。胎土微細。底径4.0cm。				2/3	13	12735	22	坏	へら切り→部分的軽いナデ。重ね焼き痕。	13.8	7.2	3.8	1/4	30	12735
8	坏	回転系切り無調整。黄灰色。胎土微細。底径4.4cm。				2/3	16	12735	23	坏	回転系切り無調整。底部焼成前へら記号「×」。底径6.2cm。				32	12735	
9	坏	回転系切り無調整。橙灰色。砂粒含む。底径4.4cm。				3/4	15	12735	24	壺	高台径9.6cm。高台高5mm。				33	12735	
10	坏	回転系切り無調整。赤褐色。砂粒含む。底径5.0cm。				1	12	12735	25	壺	体部破片。両面に漆状付着物。				34	12735	
11	坏	淡黄灰色。胎土微細。口径12.6cm。				2/3	9	12735	26	壺	頸部破片。両面透明な灰釉を刷毛塗り。				37	12735	
12	坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。底径6.0cm。				1/4	19	12735	27	碗	体部小破片。外面灰釉。内面灰釉。				36	12735	
13	坏	回転系切り無調整。橙褐色。砂粒含む。底径6.2cm。				1	11	12735	28	碗	体部小破片。外面回転ケズリ・ミガキ。内面ミガキ。両面に深草緑色の緑釉。				35	12735	
14	高台皿	口縁部小破片。淡黄灰色。胎土微細。					図示	38	12735	29	鉄釘				54	12746	
15	高台皿	淡黄褐色。胎土微細。高台径5.6cm。高台高7mm。				1/4	25	12735									

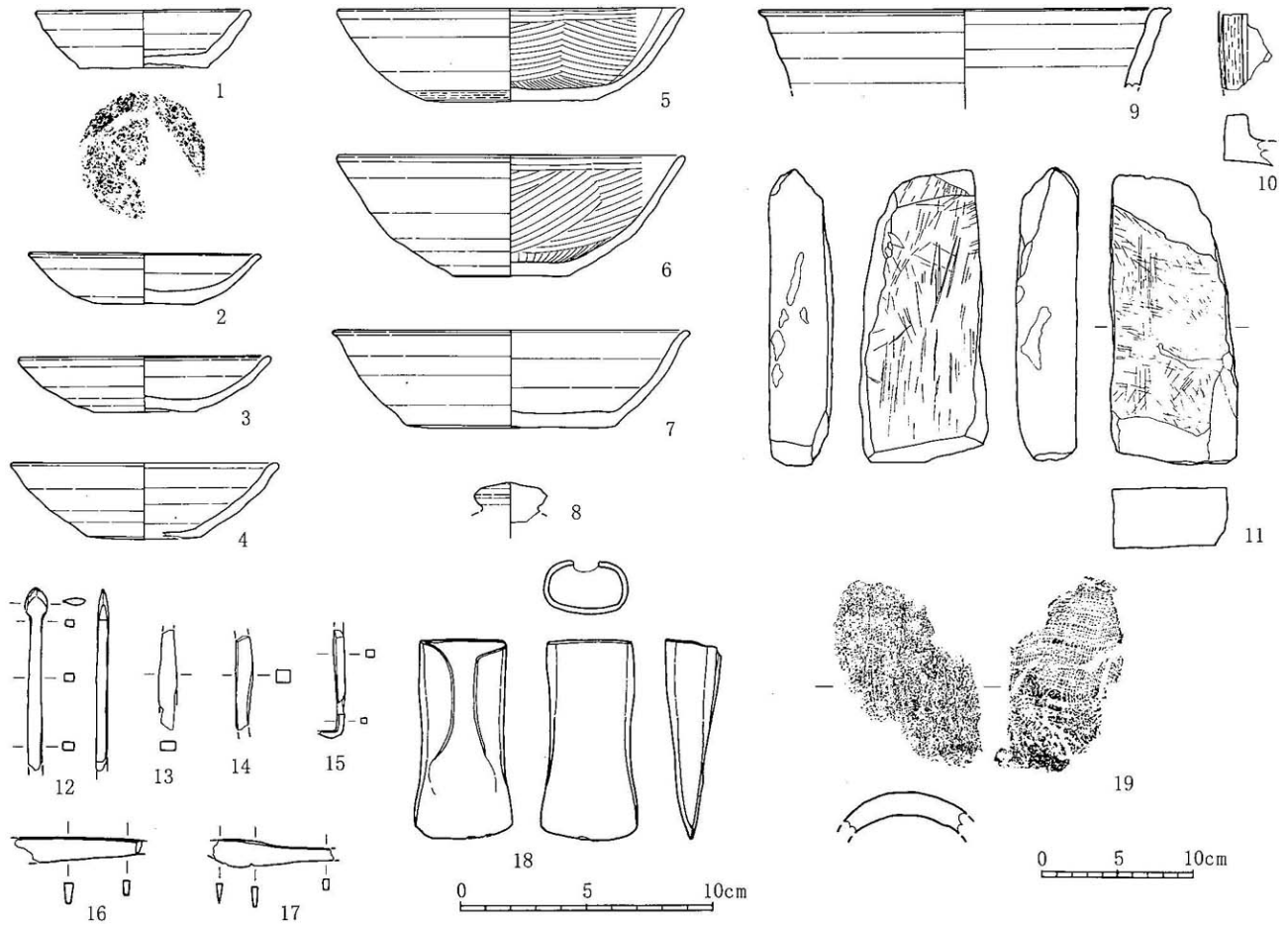
第69図 SD2403 溝出土遺物(1~19: 須恵系土器、20・21: 土師器、22~25: 須恵器、26・27: 灰釉陶器、29: 鉄製品)

この他、遺構登録していない土壌・ピット・溝からも遺物が多く出土した。これらのうち主な遺物を第70図に図示した。

(7) 堆積層とその出土遺物 (第71~73図)

調査区東部と中央南部に黒褐色土土の自然堆積層 (基本層第2層) が1層下の地山面上に部分的に分布していた。

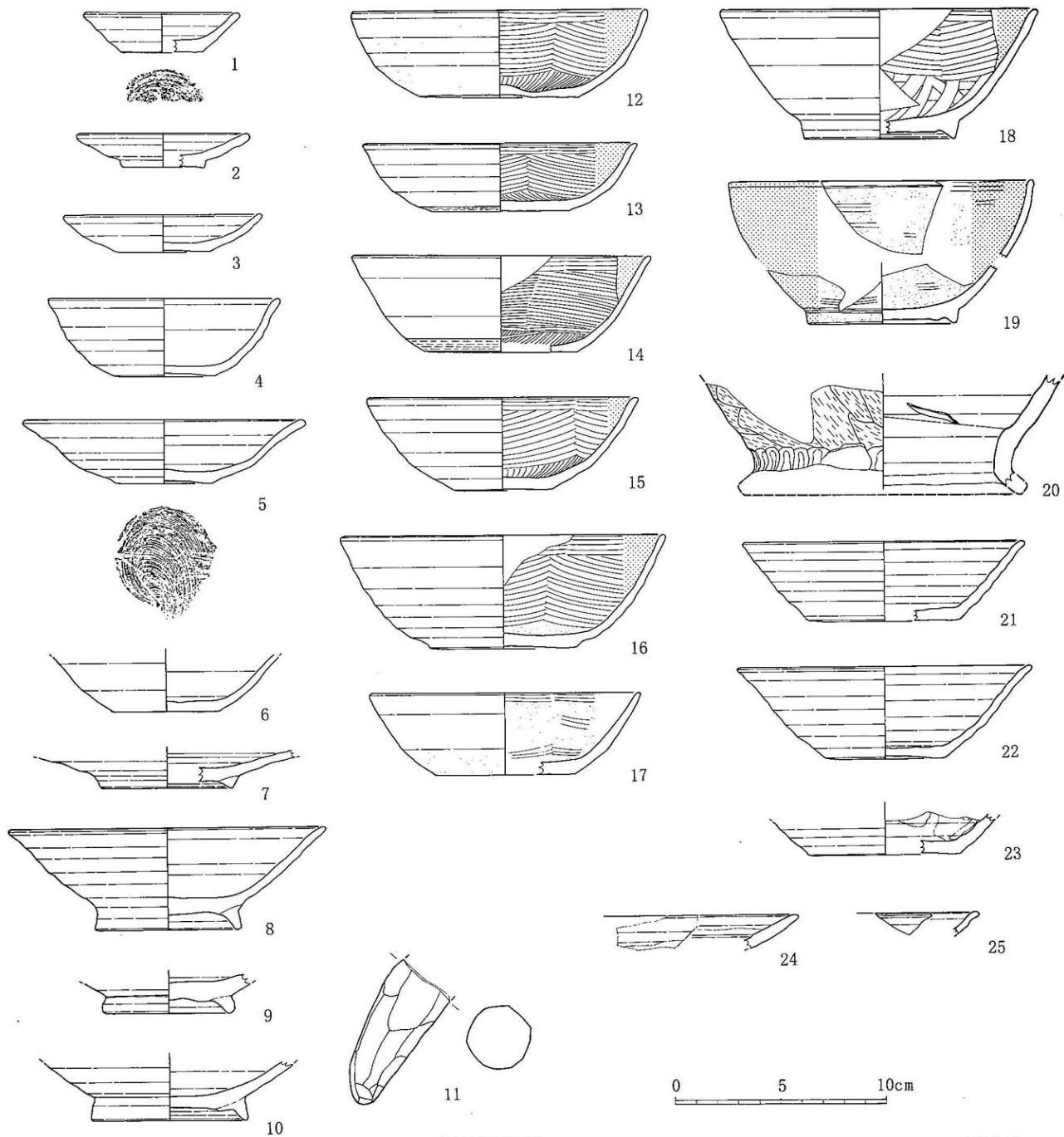
東部の第2層からは須恵系土器小型坏 (1~3)・坏 (5・6)・高台皿 (7)・高台坏 (8~10)・三足鍋 (11)、土師器坏 (12~17)・高台坏 (18)・椀 (19)・甕 (20)・甕、須恵器坏 (21~23)・甕・



番号	器種	遺構	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	遺構	特 徴	登録	箱番号
1	小型坏	新t'ット	底部手持ちケズリで特異。内面油煙 橙褐色。砂粒含む。SK2375より新。	8.6	4.6	2.3	3/4	30	12735	11	砥石	新t'ット	結晶片岩製。4面研磨・擦痕。SI2375Bより新。	242	12744
2	小型坏	P245	回転糸切り。淡黄灰色。胎土微細。	9.2	4.0	2.0	2/3	1	12735	12	鉄鏃	D36	長茎鏃。現存長7.1cm。	2	12746
3	小型坏	P113	回転糸切り。黄褐色。胎土微細。	10.0	4.2	2.2	1	1	12735	13	鉄鏃	P226	長茎鏃。現存長3.9cm。	1	12746
4	小型坏	P4	回転糸切り。淡黄灰色。胎土微細。	10.6	4.5	3.0	1	1	12735	14	鉄鏃	K57	長茎鏃。現存長3.7cm。	1	12746
5	坏	P146	回転ケズリ。横ミガキ。黒斑。	13.8	6.8	3.7	2/3	1	12735	15	鉄釘	D38	頭部欠損。先端曲がる。現存長4.3cm。	1	12746
6	坏	P58	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。	13.8	4.6	4.8	1	1	12735	16	刀子	P148	茎破片。茎四方面取り。現存長5.0cm。	1	12746
7	坏	K198	ヘラ切り。	14.2	8.3	3.9	1	1	12735	17	刀子	D60	身~茎破片。斜区。茎四方面取り。現存長4.8cm	5	12746
8	蓋	D34	低い宝珠状つまみ部破片。つまみ径2.8cm。高1.0cm。					2	12735	18	鉄斧	D36	袋状鉄斧。完形。鍛造。平面形は中央部がくびれる 長方形。両刃。袋部断面楕円形。折り返しの両端が 開く。長さ7.9cm。刃部幅3.8cm。基部幅3.5cm。 厚さ2.1cm。	1	12746
9	甕?	D65	口縁外傾してわずかに突出。ロケロナデ。口径16.4cm。				2	12735							
10	風字硯	D34	須恵器質。ケズリ。					1	12735	19	丸瓦	D60	丸瓦IA類Cタイプ。凸面縦方向ケズリ。凹面布目 痕。	4	12746

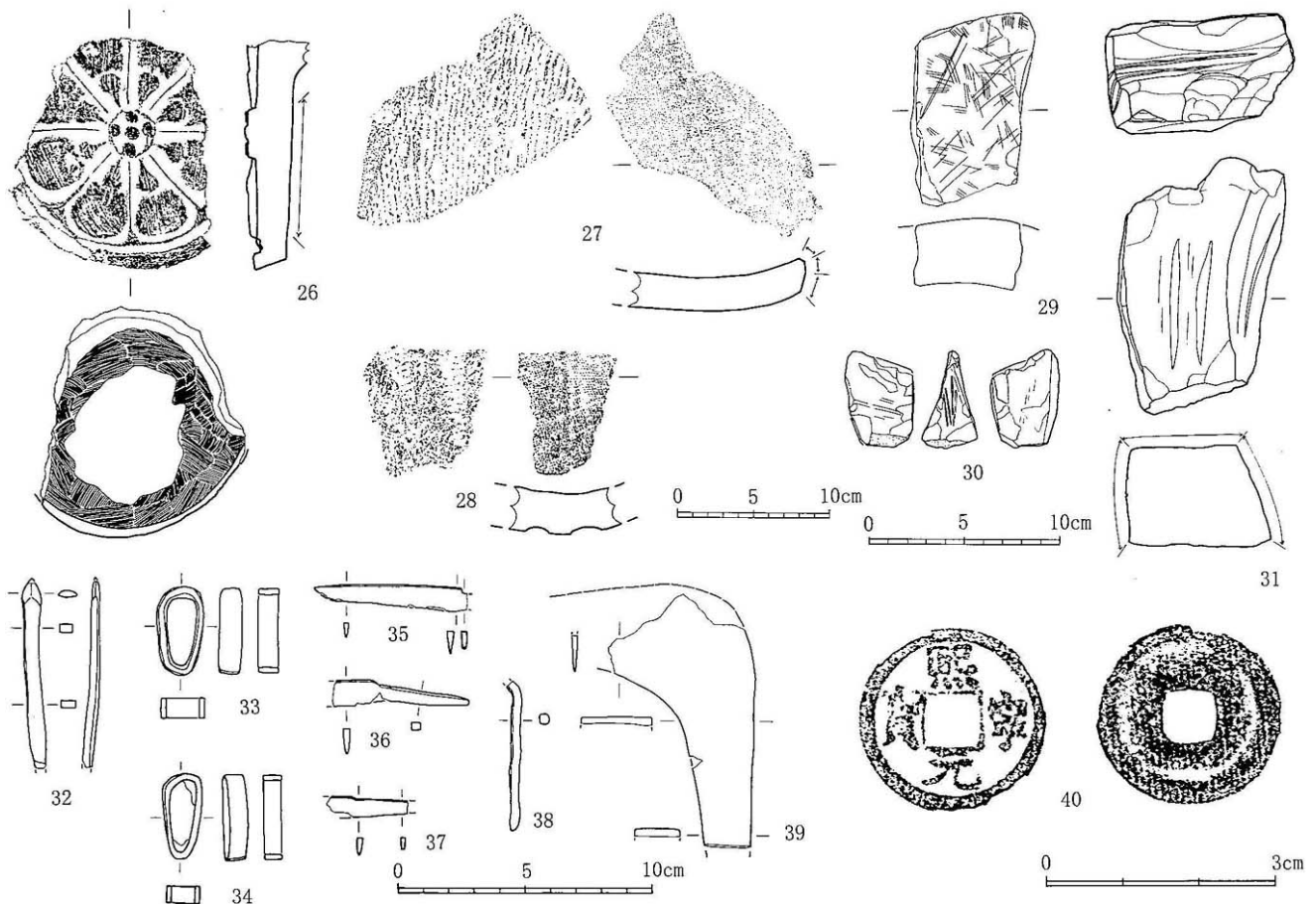
第70図 未登録の土壌・ピット・溝出土遺物 (1~4: 須恵系土器、5・6: 土師器、7~9: 須恵器、10: 硯、11: 石製品、12~18: 鉄製品、19: 瓦)





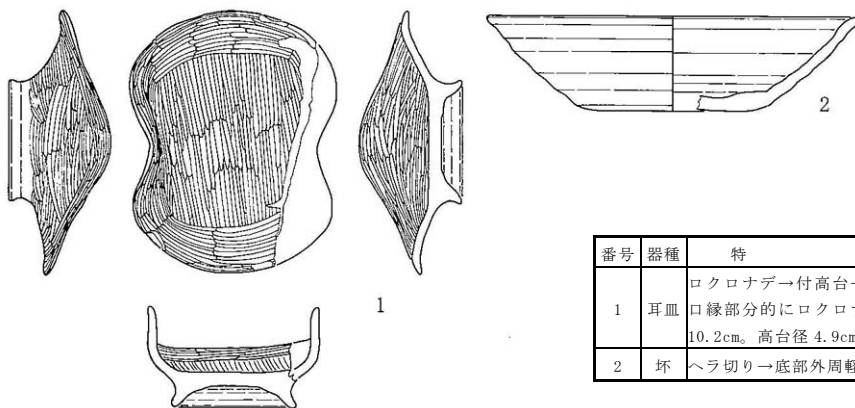
番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	小型坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	7.4	3.9	1.9	1/3	19	12736	13	坏	回転ケズリ。横ミガキ。海綿骨針含む。	13.0	6.6	3.2	>1/4	4	12736
2	小型坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	8.2	4.0	1.6	1/3	10	12736	14	坏	回転ケズリ。横ミガキ。	14.2	7.2	4.6	1/3	6	12736
3	小型坏	回転糸切り無調整。橙褐色。砂粒含む。	9.4	4.4	1.8	2/3	18	12736	15	坏	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。	12.9	4.7	4.4	1	3	12736
4	坏	回転糸切り無調整。淡黄灰色。胎土微細。	11.0	4.8	3.7	2/3	11	12736	16	坏	回転糸切り無調整。内面底部摩滅。	15.4	7.0	5.4	1	2	12736
5	坏	回転糸切り無調整。箸の子状圧痕。橙褐色。砂粒含む。重ね焼き痕。両面油煙。	13.4	4.6	3.0	1	12	12736	17	坏	底部両面摩滅。外面底部黒斑。	12.8	6.6	3.9	1/4	5	12736
6	坏	回転糸切り。橙褐色。砂粒含む。油煙。底径 5.0cm。				1/2	13	12736	18	高台坏	内面体下部～底部ミガキ粗く、ロクロナデ残る。御 5.0cm。高台径 7.2cm。器高 6.1cm。高台径 9mm。				2/3	8	12736
7	高台皿	付高台。黄褐色。砂粒含む。高台径 6.2cm。高台高 7mm。				1/3	14	12736	19	碗	ロクロナデ→両面ミガキ→両面黒色処理。口径 14.4cm。				1	9	12736
8	高台坏	付高台。黄褐色。砂粒含む。口径 15.0cm。高台径 6.9cm。器高 4.8cm。高台高 11mm。				1	15	12736	20	甌	体下部破片。外面ケズリ→指ナデ。内面ロクロナデ。				1/4	31	12736
9	高台坏	付高台。橙褐色。砂粒含む。高台径 6.2cm。高台高 8mm。				1/2	20	12736	21	坏	ヘラ切り→部分的軽いナデ。	13.4	7.2	3.8	1/4	24	12736
10	高台坏	付高台。橙褐色。砂粒含む。高台径 7.4cm。高台高 11mm。				1	16	12736	22	坏	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	14.0	5.8	4.4	>1/4	23	12736
11	三足鍋	脚部破片。中実。橙褐色。径 3.1cm。				図示	21	12736	23	坏	回転糸切り無調整。内面黒漆付着。底径 7.2cm。				1/3	25	12736
12	坏	手持ちケズリ。放射状ミガキ。				11	1	12736	24	段皿	口縁部小破片。両面灰釉刷毛塗り。				図示	27	12736
									25	碗	口縁部小破片。両面灰釉。				図示	26	12736

第 71 図 東部第 2 層出土遺物 (1) (1~11 : 須恵系土器、12~20 : 土師器、21~23 : 須恵器、24~25 : 灰釉陶器)



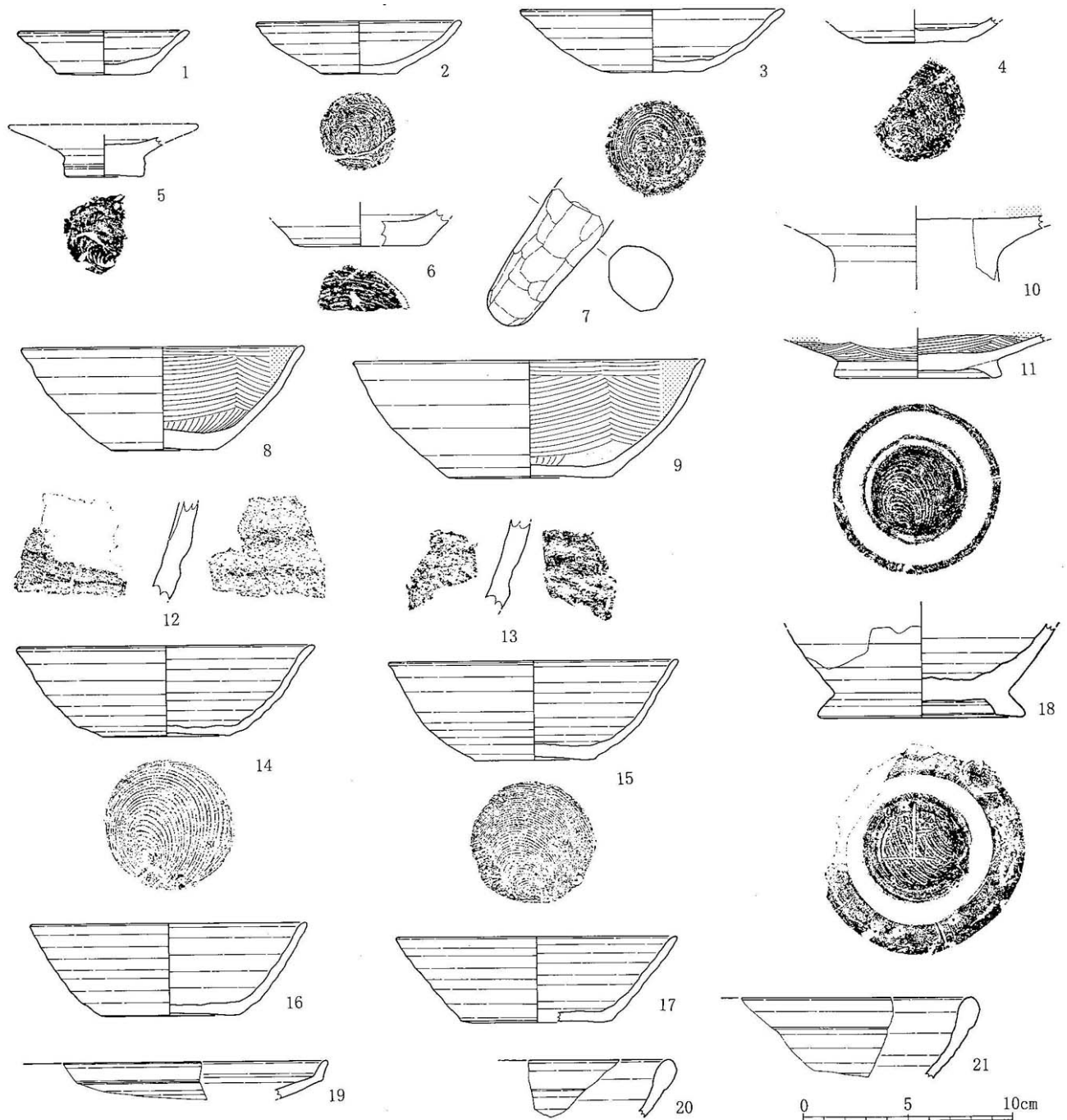
番号	器種	特	徴	登録	箱番号	番号	器種	特	徴	登録	箱番号			
26	軒丸瓦 転用硯	八葉重弁蓮花文軒丸瓦 226。蓮構成 1+4。周縁蓮子が円形で間弁をさす。蓮弁が扁平で糸切り痕を残丸瓦当裏面を丁寧になで。政庁第Ⅱ期。破損後に瓦当裏面を硯に転用し、光沢のある著しい研磨面となる。		64	12743	32	鉄鎌	長茎鎌。基部欠損。現存長 7.3cm。		75	12747			
						33	口金	環状。繩(はばき)か。3.5×1.8cm。幅 8mm。厚さ 2mm。		80	12747			
						34	口金	環状。繩(はばき)か。3.3×1.6cm。幅 7mm。厚さ 2mm。		77	12747			
						35	刀子	身破片。平造り角棟。両区。現存長 6.0cm。		79	12747			
27	平瓦	平瓦Ⅱc類。凸面長軸と平行する密で深く細い縄叩き目。部分的自然釉。凹面細い布目痕。黒褐色。政庁第Ⅳ期。		66	12743	36	刀子	身～茎破片。平造り角棟。両区。現存長 5.4cm。		76	12747			
						37	刀子	身～茎破片。平造り角棟。現存長 3.3cm。		73	12747			
28	平瓦	平瓦ⅡB類。凸面縄叩き→縄を巻き付けた叩き板側端部圧痕。凹面布目痕→ナデ。黒褐色。		65	12743	38	鉄釘?	現存長 5.9cm。断面 4mm。方形。		74	12747			
29	砥石	安山岩製。1面研磨・擦痕。破損。		68	12744	39	鉄鎌	身～茎破片。身と茎がほぼ直角に曲がる。現存長 10.2cm。		78	12747			
30	砥石	手持ち砥石。完形。極細粒砂岩製。全面研磨・擦痕。		69	12744				40	銭貨	北宋銭。熙寧元寶(きねいげんぼう)。書体は真書。北宋第6代神宗の熙寧元(1068)年初鑄。錢径 2.4cm。錢厚 1.1mm。		106	12747
31	砥石	完形。砂岩製。3面研磨・擦痕。鋭く深い2条の線条痕。		67	12744									

第 72 図 東部第 2 層出土遺物 (2) (26~28 : 瓦、29~31 : 石製品、32~39 : 鉄製品、40 : 銭貨)



番号	器種	特	徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	耳皿	ロクロナデ→付高台→ロクロナデ→両面ミガキ(内面口縁部分的にロクロナデ残す)→両面黒色処理。口径 10.2cm。高台径 4.9cm。高台高 7mm。					1	1	12736
2	坏	ヘラ切り→底部外周軽いナデ。		14.6	7.6	3.9	1/3	2	12736

第 73 図 中央南部第 2 層出土遺物 (1 : 土師器、2 : 須恵器)



番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号	番号	器種	特 徴	口径	底径	器高	残存	登録	箱番号
1	小型坏	摩滅。底部中央凹み。橙褐色。胎土微細。	8.2	4.5	2.1	1/2	24	12737	11	高台坏	回転糸切り→付高台→両面ミガキ→両面黒色処理。					12	12737
2	小型坏	回転糸切り無調整。淡黄灰色。胎土微細。	9.8	3.7	2.5	1	26	12737	12	製塩	体部破片。手裡ね。橙褐色。砂粒・ガラス多く含む。					22	12737
3	坏	回転糸切り無調整。淡黄灰色。胎土微細。	12.6	4.8	3.0	1	28	12737	13	土器	土器体部破片。手裡ね。橙褐色。砂粒・ガラス多く含む。					23	12737
4	坏	回転糸切り→部分的手持ちケズリ。淡黄灰色。胎土微細。底径5.0cm。				2/3	32	12737	14	坏	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	14.2	6.1	4.3	1	41	12737
5	柱状高台坏	回転糸切り無調整。黒斑。黄褐色。砂粒含む。底径3.8cm。底厚1.5cm。				1/2	35	12737	15	坏	回転糸切り無調整。重ね焼き痕。	13.8	5.8	4.7	1	42	12737
6	坏	回転糸切り。橙褐色。砂粒含む。底径1.6cm。底厚1.2cm。				1/4	33	12737	16	坏	回転糸切り無調整。焼成あまい。	13.2	6.6	4.4	1/3	43	12737
7	三足鍋	1脚部破片。中実。黄褐色。砂粒含む。径3.2cm。				図示	30	12737	17	坏	ヘラ切り→部分的軽いナデ。	13.4		4.1	1/3	46	12737
8	坏	回転糸切り無調整。放射状ミガキ。重ね焼き痕。	13.4	5.0	4.9	1	2	12737	18	壺	回転糸切り→付高台→底部に焼成前ヘラ描き文字「上」。両面に深草緑色自然釉。高台径9.8cm。高台高1.2cm。					74	12737
9	杯		16.8	7.8	5.6	1	1	12737	19	盤	「く」字状に口縁外傾。口径24cm前後。					50	12737
10	高台坏	柱状高台坏。中実。外面口ロナデ。内面ミガキ消失。				1/4	13	12737	20	篠鉢D	玉縁状の口縁部破片。西長尾5号窯段階の篠窯製品。					55	12737
									21	篠鉢D	篠鉢D玉縁状の口縁部破片。西長尾5号窯段階の篠窯製品。					54	12737

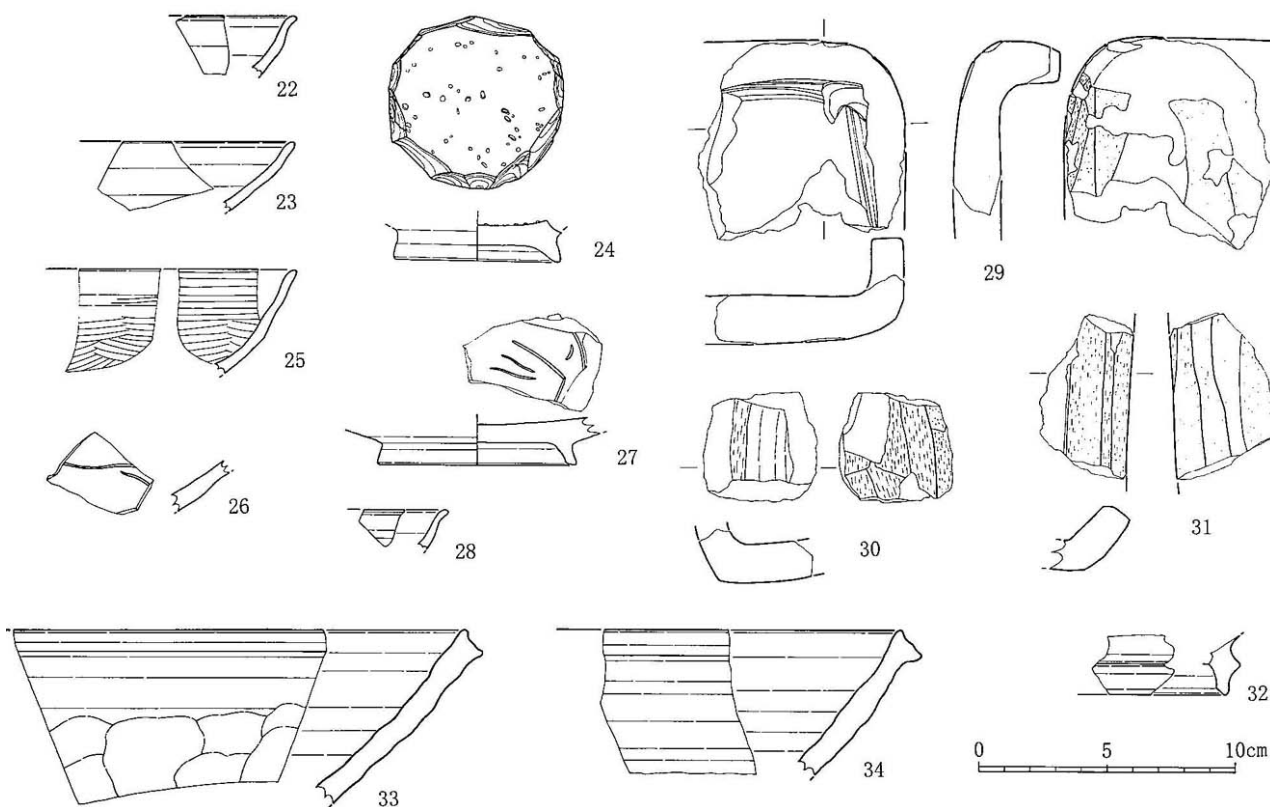
第74図 表土出土遺物(1) (1~7: 須恵系土器 8~13: 土師器 14~21: 須恵器)

壺、灰釉陶器段皿(24)・椀(25)、軒丸瓦転用硯(26)、平瓦、丸瓦、砥石(29~31)、鉄鎌(32)、口金(33・34)、刀子(35~37)、鉄鎌(39)、熙寧元寶(40)などが出土している。出土遺物の量は多く、須恵系土器・土師器が主体を占める。熙寧元寶は1068年に初鑄された北宋銭で、東部第2層の形成が11世紀後半以降であることを示す。土師器甌(20)は多賀城跡で2例目である。軒丸瓦転用硯(26)はこれまで多賀城跡内では類例はないが、今回の調査で表土からも1点出土している。口金(33・34)は鋤(はばき)かと考えられ、SB2358建物跡出土のもの(第20図8)に類似する。

中央南部の第2層からは須恵系土器小型坏・坏、土師器坏・耳皿(第73図1)・甕、須恵器坏(第73図2)・高台坏などが少数出土した。

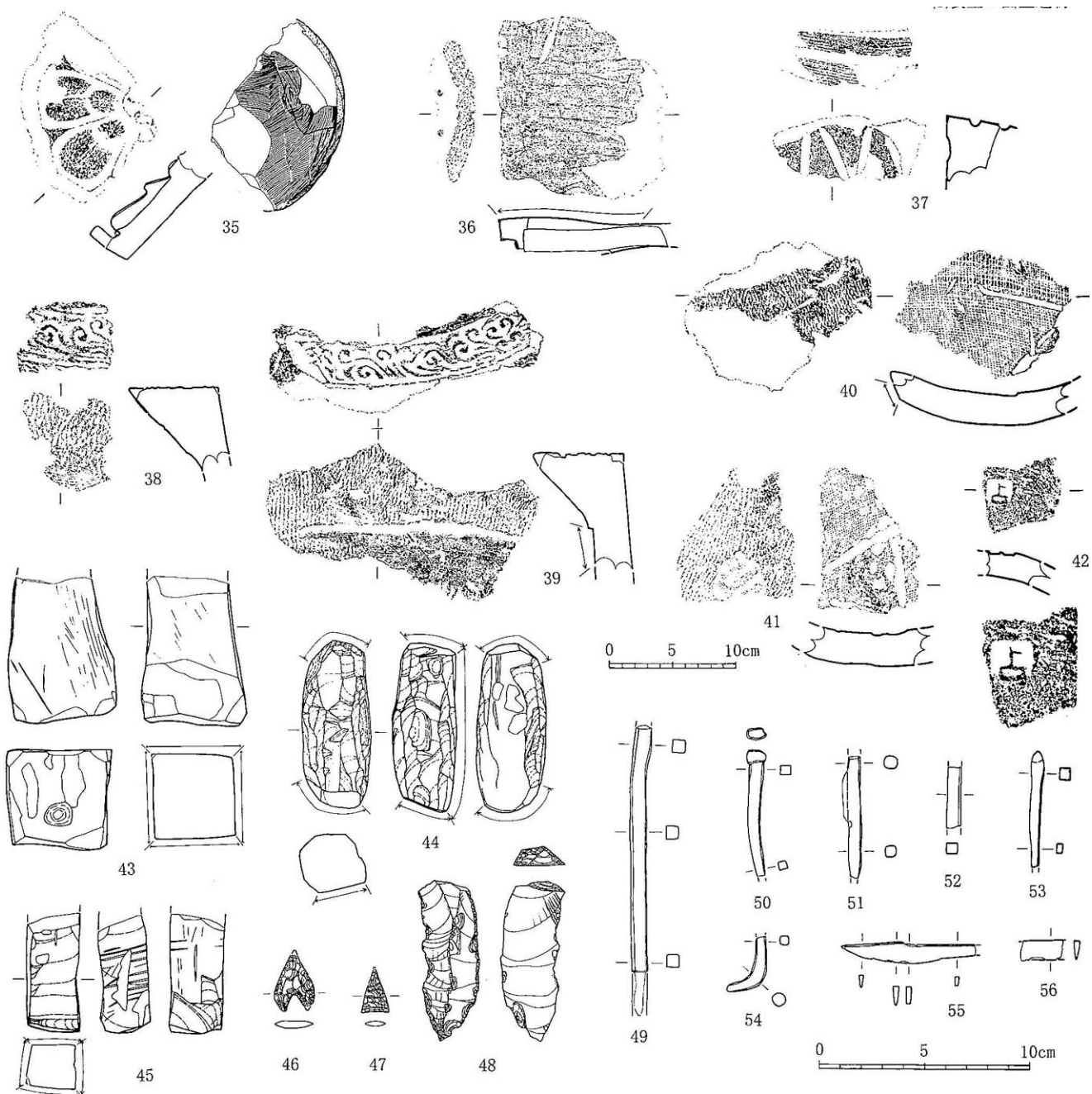
(8) 表土の出土遺物(第74~76図)

表土からは土師器・須恵器・須恵系土器・中世陶器などの土器、瓦、鉄製品、石製品など多数の遺物が出土した。そのうち完形のものや特に注目すべき遺物を第74~76図に図示した。このなかでもの須恵系土器柱状高台坏(5)、京都府篠窯跡群西長尾5号窯段階の篠鉢D(20・21)、軒丸瓦転用硯(35)は多賀城跡内では類例が少ない遺物である。



番号	器種	特 徴	登録 箱番号	番号	器種	特 徴	登録 箱番号
22	椀	口縁部小破片。両面透明な灰釉。浅緑色。	92 12738	28	椀	口縁部小破片。	81 12738
23	椀	口縁部小破片。内面灰釉刷毛塗り。浅黄色。	91 12738	29	風字硯	外面ケズリ。内面研磨著しく、かなり使い込んでいる。	57 12738
24	椀	回転糸切り一付高台。内面深草緑色灰釉、点状に盛り上がって融着。破損後に底部~高台の周辺打ち欠きして転用。	90 12738	30	風字硯	外面ケズリ。瓦質。	212 12738
25	椀	口縁部破片。両面ミガキ→両面透明な灰釉。浅緑色。	84 12738	31	風字硯	両面ケズリ。須恵器質。	58 12738
26	椀	外面ミガキ。内面陰刻花文。	86 12738	32	円面硯	高台破片。	56 12738
27	椀	内面陰刻花文。濃深緑色緑釉。高台径7.8cm。	85 12738	33	播鉢	口縁~体部破片。ロクロナデ→ナデ。赤褐色。在地産か。	63 12738
				34	播鉢	口縁~体部破片。ロクロナデ。赤褐色。断面灰色。在地産。	64 12738

第75図 表土出土遺物(2)(22~24: 灰釉陶器、25~27: 緑釉陶器、28: 白磁、29~32: 硯、33・34: 中世陶器)



番号	器種	特 徴	登録 箱番号	番号	器種	特 徴	登録 箱番号
35	軒丸瓦	八葉重弁蓮花文軒丸瓦 129。蓮子構成 1+4。周縁蓮子が間軒丸瓦, 弁を指す。弁中央線明瞭。弁端が垂直に立つ。政庁第 I 期。破損後に瓦当裏面を研磨した転用硯。	134 12743	42	丸瓦	丸瓦 II B 類。凸面刻印「占」。焼瓦。	139 12743
36	軒丸瓦	細弁蓮花文軒丸瓦 310。珠文間隔の対比から箔番号決定。310A ならば政庁第 III 期。310B ならば政庁第 IV 期。	135 12743	43	砥石	極細粒凝灰岩製。直方体状。5 面研磨・擦痕。一端破損。	141 12744
37	軒平瓦	重弧文軒平瓦 511。顎面に半載管状工具による鋸歯文。顎部と平瓦部接合のための斜格子状ヘラ刻み(ボジ)。政庁第 I 期。	138 12743	44	砥石	手持ち砥石。極細粒凝灰岩製。剥離による形成→研磨。両端・1 平坦面を中心に研磨。	147 12744
38	軒平瓦	均整唐草文軒平瓦 721B-a タイプ。顎面縦位縄叩き目→細いヘラ状工具による波文。政庁第 IV 期。	137 12743	45	砥石	極細粒凝灰岩製。直方体状。5 面研磨・擦痕。一端破損。	148 12744
39	軒平瓦	均整唐草文軒平瓦 721B-a タイプ。顎面縦位縄叩き目→太いヘラ状工具による波文。政庁第 IV 期。	136 12743	46	石鏃	縄文石器。凹基式。先端・基部一部欠損。珪質頁岩製。	156 12744
40	平瓦	平瓦 II C 類。凸面長軸と並行する密で深い縄叩き目。凹面布目痕→ヘラ描き不明文字。政庁第 IV 期。	213 12743	47	石鏃	縄文石器平基丸先端若干欠損。頁岩製。風倒木出土。	1 12744
41	平瓦	平瓦 II C 類。凸面密で深い縄叩き目。凹面布目痕→太い半載管状丁具 or 指頭によるヘラ描き不明文字?。政庁第 IV 期。	214 12743	48	日石器	ナイフ形石器。石刃素材。破損後再加工。珪質頁岩製。	154 12744
				49	鉄釘	頭部・先端欠損。現存長 13.7cm。断面 6mm 方形。	178 12747
				50	鉄釘	頭部 9×6 mm 楕円形。先端欠損。現存長 6.0cm。断面 5 mm 方形。	172 12747
				51	鉄釘?	頭部・先端欠損。現存長 5.8cm。断面 5 mm 方形。	191 12747
				52	鉄釘	頭部・先端欠損。現存長 2.9cm。断面 5 mm 方形。	186 12747
				53	鉄鏃	長茎鏃。現存長 5.5cm。	171 12747
				54	鉄釘	折れ曲がり、破損。	170 12747
				55	刀子	平造り角棟。片区。現存長 6.2cm。刃部長約 3.2 cm。	169 12747
				56	刀子	身部小破片。平造り角棟。現存長 1.9cm。	183 12747

第 76 図 表土出土遺物 (3)

(35~42 : 瓦、43~48 : 石製品、49~56 : 鉄製品)

### 3. 考察

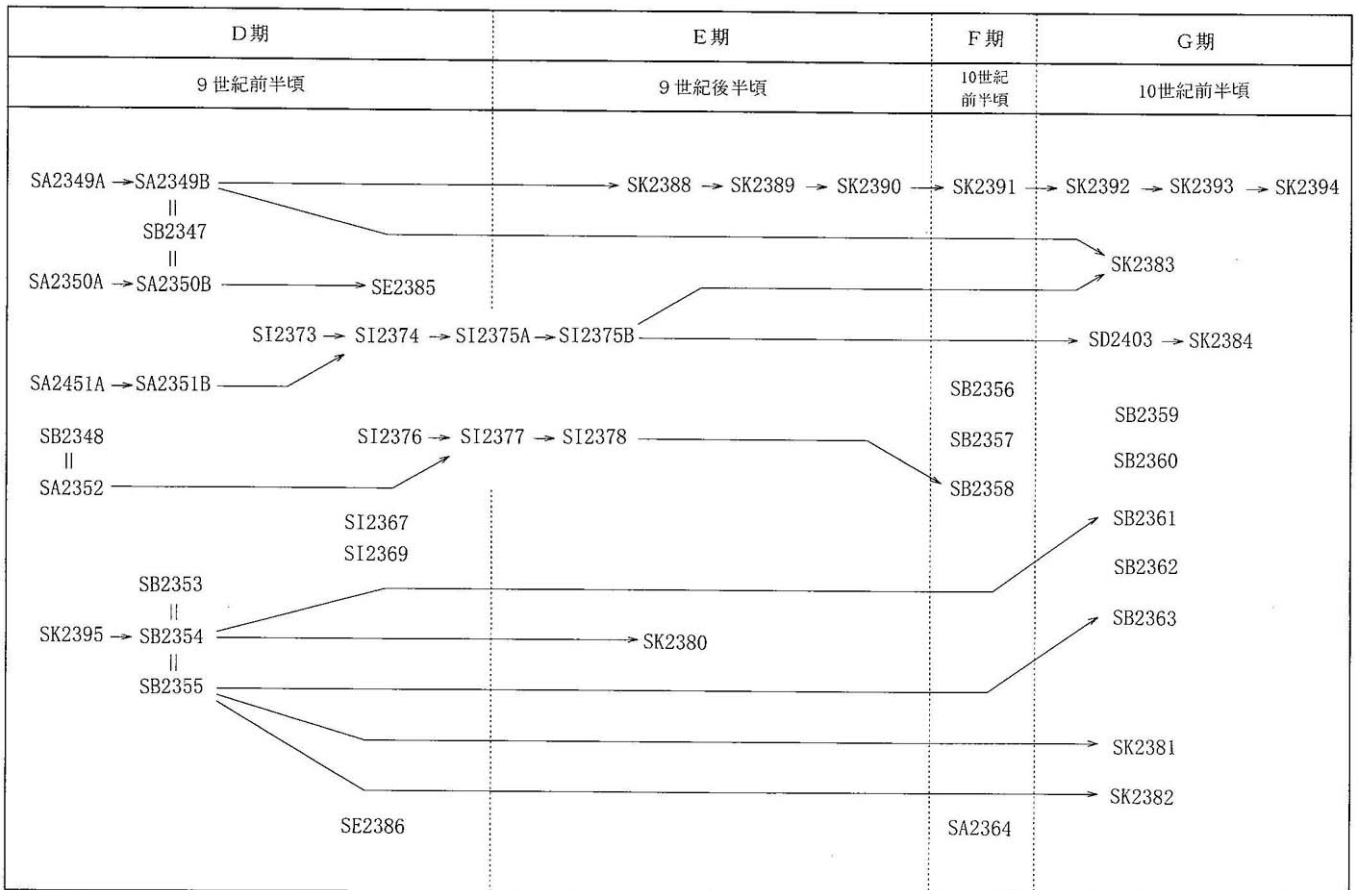
#### (1) 主要遺構の検討

今回の調査では棟門跡 2 棟、材木塀跡 4 条、掘立式建物跡 12 棟、竪穴住居跡 14 棟、井戸跡 1 基の他、多数の土壌・溝・ピットなどを検出した。これらのうちの主要遺構の重複関係を整理すると、第 77 図のようになる。

この重複関係と前述の事実記載に基づき、今回の調査で検出した主要遺構のうち棟門跡・材木塀跡、及び特に注目される建物跡について、まず整理・検討する。

#### 【S B 2347・2348 棟門跡と S A 2349～2352 材木塀跡】

西側の S A 2349 材木塀跡と S A 2350 材木塀跡とは約 1.3m の間隔をあけて南北に並び、S B 2347 棟門跡はその間に設けられている。S B 2347 棟門跡は S A 2349・2350 材木塀跡と掘方を共有しており、これらと一連のものである。S A 2349 材木塀跡の北端中央と S A 2350 材木塀跡の南端中央を結ぶと、発掘南北基準線に対しやや西に偏る。S A 2349・2350 材木塀跡にはそれぞれ A・B 2 時期の変遷があり、ほぼ同位置で一度建て替えられている。このような位置関係と状況から見て、S B 2347 棟門跡と S A 2349・2350 材木塀跡は計画的に造営された同時期の施設であると考えられる。そして、S A 2349・2350 材木塀跡は大畑地区官衙を東西に区画する施設で、S B 2347 棟門跡は区画内部に入る通用門と考えられる。



第 77 図 第 67 次調査主要遺構の変遷

東側の S B 2348 棟門跡と S A 2351・2352 材木塀跡についても、西側の S B 2347 棟門跡、S A 2349・2350 材木塀跡と同様の状況が認められる。したがって、S B 2348 棟門跡と S A 2351・2352 材木塀跡も計画的に造営された同時期の施設と考えられる。そして、S A 2351・2352 材木塀跡も大畑地区官衙を東西に区画する施設で、S B 2348 棟門跡も区画内部に入る通用門と考えられる。

S A 2349・2350 材木塀跡と S A 2351・2352 材木塀跡の間には S I 2373～2378 住居跡がある。しかし、後述するようにこれらは連続して営まれた住居で、材木塀跡よりも新しいと考えられることから、S A 2349・2350 材木塀跡と S A 2351・2352 材木塀跡の間は空閑地となっていたとみられる。

心々で見ると、S A 2349・2350 材木塀跡と S A 2351・2352 材木塀跡は約 10m の間隔でほぼ平行に並んでいる。位置関係と状況からみて、これらは同時期または連続する時期の施設とみられる。

ところで、S A 2349・2351 材木塀跡の北延長上には、S B 707 大畑地区官衙北門跡がある。方向は発掘東西基準線に対し東で北に約 7° 偏り、S A 2349～2352 材木塀跡の方向もこれに近い。S B 707 大畑地区官衙北門跡の桁行総長は 9.93m (33.5 尺) で (『年報 1993』)、S A 2349・2350 材木塀跡と S A 2351・2352 材木塀跡との間隔とほぼ一致する。また、S B 707 大畑地区官衙北門跡のすぐ南側では材木塀跡や路面跡や道路側溝を検出していないが、同時期の遺構が認められない空閑地となっており、S B 707 大畑地区官衙北門跡から大畑地区官衙内部に入る南北方向の通路となっていたとみられる。

したがって、位置関係と方向からみて、S A 2349・2350 材木塀跡と S A 2351・2352 材木塀跡、S B 2347 棟門と S B 2348 棟門は、S B 707 大畑地区官衙北門とともに計画された同時期の遺構と考えられる。

そして、S A 2349・2350 材木塀跡と S A 2351・2352 材木塀跡の間は、S B 707 北門跡から大畑地区官衙内部に入る南北方向の通路として用いられたとみられ、大畑地区官衙はこの南北方向の通路により東西 2 つの官衙に分けられていたと考えられる。

### 【S B 2353～2355 建物跡】

S B 2353 建物跡と S B 2355 建物跡は南北棟で、S B 2354 建物跡は東西棟である。方向はいずれも発掘基準線に対し北で西に約 5° 前後偏っており、同一方向の建物とみることができる。桁行はいずれも 6 間で、柱間寸法も約 3.0m (10 尺) とほぼ同じである。梁行は規模のわかる S B 2354 建物跡と S B 2355 建物跡が 2 間で、柱間寸法も約 3.0m (10 尺) とほぼ同じである。柱穴はいずれも一辺 1 m 前後の方形、柱痕跡も約 24cm の円形で、柱穴の規模・形状、柱痕跡の大きさもほぼ同じである。

S B 2355 南北棟の南妻は、S B 2354 東西棟の棟通りに一致しており、方向、桁行、柱間寸法、柱穴の掘方形状・大きさ、柱痕跡の大きさも同様であることから、S B 2354 東西棟と S B 2355 南北棟は同時期に計画的に配置されたとみられる。

S B 2353 建物跡は、東側柱列以外の柱穴が調査区外の私有地に位置するため、全体の規模は不明である。しかし、① S B 2354 東西棟の南北方向の中軸線で折り返すと、S B 2353 南北棟は S B 2355 南北棟と左右対称の位置にあること、② S B 2353 南北棟の南妻の柱筋も S B 2354 東西棟の棟通りに一致しているとみられること、③ 方向、桁行、柱間寸法、柱穴の掘方形状・大きさ、柱痕跡の大きさが同様であることから、S B 2353 南北棟も桁行 6 間・梁行 2 間と考えられ、S B 2354 東西棟、S B 2355



南北棟とともに同時期に計画的に配置されたとみられる。

ところで、これまでの大畑地区の調査で、東側の S B 2355 南北棟の北側には桁行 6 間・梁行 2 間の同規模の S B 807・711 南北棟が S B 2355 南北棟と柱筋をほぼ揃えて並んで検出されている(第 3 図)。方向、桁行、柱間寸法、柱穴の掘方形状・大きさ、柱痕跡の大きさは、S B 2354 東西棟、S B 2353・2355 南北棟と同様であり、S B 807・711 南北棟も S B 2354 東西棟、S B 2353・2355 南北棟とともに計画的に配置された同時期の建物跡と考えられる。

S B 807 南北棟の南妻と S B 711 南北棟の北妻との間隔は約 25.5m (85 尺)、S B 711 南北棟の南妻と S B 2355 南北棟の北妻との間隔は約 16.5m (55 尺) で、S B 807 南北棟の北妻と S B 2355 南北棟の南妻との間隔は約 96.0m (320 尺) である。

また、西側の S B 2353 南北棟の北側にも桁行 6 間の S B 2296 南北棟が検出されている(第 3 図)。この S B 2296 建物跡も東側柱列以外の柱穴が調査区外の私有地に位置するため、全体の規模は不明である。しかし、以下の理由から、S B 2296 南北棟も桁行 6 間・梁行 2 間で、S B 2354 東西棟、S B 711・807・2353・2355 南北棟と同規模の建物跡で、これらと同時期に計画的に造営されていると推定される。

①南中央に配置された S B 2354 東西棟の南北方向の中軸線で折り返すと、S B 2296 南北棟は S B 711 南北棟と左右対称の位置にあり、S B 2296 南北棟と S B 711 南北棟の両妻の柱筋は揃っているとみられる。

② S B 2296 南北棟の南妻と S B 2353 南北棟の北妻との間隔は約 16.8m (56 尺) で、S B 711 南北棟の南妻と S B 2355 南北棟の北妻との間隔の約 16.5m (55 尺) にほぼ等しい。

③西側の S B 2296 南北棟の東側柱列と東側の S B 711 南北棟の西側柱列との間隔は約 39.0m (130 尺) で、それぞれの南にある S B 2353 南北棟と S B 2355 南北棟との間隔に等しい。

④方向、桁行、柱間寸法、柱穴の掘方形状・大きさ、柱痕跡の大きさは、S B 2354 東西棟、S B 711・807・2353・2355 南北棟と同様である。

S B 2296 南北棟の北側は私有地のために未調査である。しかし、南中央の S B 2354 東西棟を中心に東西に左右対称な配置の建物があったと推定すると、ここにも S B 807 南北棟と両妻を揃えた桁行 6 間・梁行 2 間の同規模の南北棟があった可能性もある。

以上のことから、大畑地区北西部には、桁行 6 間・梁行 2 間の同規模の掘立式建物 7 棟からなる「コ」字形官衙が推定される。この官衙の特徴を改めてまとめると以下のようなになる。

① 1 棟の東西棟を南中心に置き、その北側の東西両側に 3 棟ずつの南北棟をこれと方向・柱筋を揃えて北に向けて「コ」字形になるように左右対称の位置に整然と配置していたと推定できる。建物の方向は発掘南北基準線に対し北で西に約 4° 前後偏る。

②東側の 3 棟の南北棟は、一番北の S B 807 南北棟と中央の S B 711 南北棟との間隔が約 25.5m (85 尺)、中央の S B 711 南北棟と一番南の S B 2355 南北棟との間隔が約 16.5 (55 尺) で、北側の 1 棟がやや離れている。西側の 3 棟の南北棟も東側の 3 棟の南北棟と同様の間隔で配置されているとみられる。

- ③ 7棟の建物からなると推定される「コ」字形官衙は、整然として計画的に配置されており、これらで囲まれた空間は東西約 39m（130 尺）、南北約 93m（310 尺）の広場となっているとみられる。
- ④ 南中心に置かれた S B 2354 東西棟は、他の南北棟と同規模であり、同格の建物とみられる。

### 【S I 2373～2378 住居跡】

S I 2373～2378 住居は、S A 2349・2350 材木堀跡と S B 2351・2352 材木堀跡で両側を区画された南北方向の通路の路面上にあり、これとは時期が異なる。これらの住居跡はいずれも方向が発掘南北基準線とほぼ一致し、古い住居を人為的に埋め戻して位置を若干東にずらしながら連続的に建て替えられている。重複関係と位置から、北側の S I 2373～2375 住居跡と南側の S I 2376～2378 住居跡に分けられる。

北側の S I 2373～2375 住居跡は、ほぼ同位置で S I 2373 住居跡→S I 2374 住居跡→S I 2375A 住居跡→S I 2375B 住居跡へと連続して建て替えられている。S I 2375A・B 住居跡については、住居内部に焼面があること、S I 2375B 住居跡から鉄滓が少量出土していることから、鉄器生産に関わる工房跡の可能性はある。

また、南側の S I 2376～2378 住居跡は、ほぼ同位置で S I 2376 住居跡→S I 2377 住居跡→S I 2378 住居跡へと連続して建て替えられている。S I 2378 住居は東側の S A 2352 材木堀跡よりも新しい。

### （2） これまでに設定した大畑地区官衙の遺構期の概要

大畑地区官衙については、これまでに第 14 次調査（『年報 1971』）、第 23 次調査（『年報 1974』）、第 56 次調査（『年報 1989』）、第 58 次調査（『年報 1990』）、第 59 次調査（『年報 1990』）、第 60 次調査（『年報 1991』）、第 62・63 次調査（『年報 1992』）、第 64 次調査（『年報 1993』）、第 66 次調査（『年報 1995』）と 11 次にわたる調査を実施してきた。

そして、大畑地区官衙の遺構期については、第 56 次調査（『年報 1989』）で、主要遺構の重複関係や方向などから、A 期～G 期の 7 時期の遺構期を初めて設定した。

第 58・59 次調査（『年報 1990』）では、第 56 次調査（『年報 1989』）の F 期と G 期の間に 1 時期を入れて、従来の G 期を H 期とし、A～H の 8 時期の遺構期を設定した。

第 60 次調査（『年報 1991』）では、遺構期を A～G の 7 時期に再編した（表 4）。A～D 期については第 58 次調査までの遺構期を踏襲し、E 期は従来の E・F 期、F 期は従来の G 期、G 期は従来の H 期を再編した。年代については、A 期を 8 世紀中頃～後半、B 期を 8 世紀後半、C 期を 8 世紀末～9 世紀初頭、D 期を 9 世紀前半頃、E 期を 9 世紀後半頃、F 期を 9 世紀後半～10 世紀前半代、G 期を 10 世紀前半代に位置付けた。そして、E 期は貞観 11（869）年の陸奥国大地震以後の政庁第 IV 期に位置付けられる可能性が高いとした。建物の方向は B 期・F 期が北で東に偏り、C 期・E 期・G 期が北で西に若干偏り、D 期が北で西に約 8～10° 偏る。この第 60 次調査（『年報 1991』）で設定した遺構期が以後の基準となった。

第 62・63 次調査（『年報 1992』）では第 60 次調査（『年報 1991』）の遺構期とその年代を踏襲した。

遺構期	年 代	政庁の遺構期	特 徴
A 期	8c 中頃～後半	第Ⅱ期	2 時期以上の変遷がある。
B 期	8c 後半	第Ⅱ～Ⅲ期	建物の方向は北で東に偏る。
C 期	8c 末～9c 初頭	第Ⅲ期	皆麻呂の乱(780)後の復興期。建物の方向は北で西に若干偏り、3 時期以上の変遷がある。
D 期	9c 前半	第Ⅲ期	東門が大きく移動している。建物の方向は北で西に約 8～10° 偏り、2 時期以上の変遷がある。
E 期	9c 後半	第Ⅳ期	陸奥国大地震(869)後の復興期。建物の方向は北で西に若干偏り、3～4 時期の変遷がある。
F 期	10c 前半	第Ⅳ期	建物の方向は北で東に偏り、建物の柱穴掘方埋め土は黒褐色土である。2 時期の変遷がある。
G 期	10c 前半	第Ⅳ期	建物の柱穴掘方は円形もしくは不整形で、埋め土は黒褐色土である。建物の方向は北で西に若干偏る。2 時期以上の変遷がある。

表 4 大畑地区官衙の遺構期 (『年報 1991』より)

第 64 次調査 (『年報 1993』) では、第 23 次調査 (『年報 1974』) で検出してそれまで奈良時代と位置付けてきた S B 707 八脚門跡と桁行 6 間・梁行 2 間の S B 807・711 南北棟について、平安時代のもの

ではないかという疑問が生じ、また S D 706 溝としていた遺構の性格などについても合わせて再検討した。その結果、S D 706 溝が大畑地区官衙の D 期の北辺区画施設の材木堀であり、大きく抜取溝が入って柱はほとんど抜き取られていることが判明した。廃絶の時期は出土遺物からみて 9 世紀中頃と考えた。そして、S B 707 八脚門跡が大畑地区官衙北門跡にあたり、S A 706 材木堀跡よりも古く、この門に取り付く堀は不明であり、S B 707 大畑地区官衙北門跡よりも新しい S A 706 材木堀跡と同時期の北門は不明であるとした。さらに、大畑地区官衙の D 期が前半と後半とに分かれる可能性が高く、前半が S B 707 大畑地区官衙北門跡とそれに取り付く不明の堀跡、後半が位置不明の北門とそれに取り付く S A 706 材木堀跡とみられる、と考察した。そして、S B 807 南北棟については出土遺物からみて、9 世紀後葉頃のものと考えた。

第 66 次調査 (『年報 1995』) では S A 706 材木堀跡に A・B 新旧 2 時期あることがわかり、S B 707 大畑地区官衙北門跡 (八脚門跡) が S A 706 B 材木堀跡の抜取溝で壊されていること、S B 707 大畑地区官衙北門跡に伴うような築地堀跡の痕跡 (築地堀本体・基礎整地・寄柱穴・足場穴・土取り穴・溝など) が認められなかったことから、S B 707 大畑地区官衙北門跡に S A 706 A 材木堀跡が伴い、作り直された S A 706 B 材木堀跡に伴う大畑地区官衙北門が棟門程度の簡易な門で、当初の S B 707 大畑地区官衙北門跡より東側に位置を変えた可能性が高く、9 世紀前半頃の D 期の中で新旧 2 時期の変遷があると考えた。

また、大畑地区官衙に隣接する外郭東門地区については、これまでに第 13 次調査 (『年報 1971』)、第 53 次調査 (『年報 1987』、『年報 1988』)、第 54 次調査 (『年報 1988』)、第 65 次調査 (『年報 1994』) と 4 次にわたる調査を実施してきた。

第 13 次調査 (『年報 1971』) では S B 307 外郭東門跡を検出し、当初が S B 307 A 掘立式八脚門で、

それがS B 307B 礎石式八脚門に作り替えられていることが明かとなり、当初のS B 307A 外郭東門跡を創建期に位置付けた。

第 53・54 次調査（『年報 1988』）では、S B 307 外郭東門跡の東側で新たに外郭東門跡（S B 1761 掘立式棟門跡→S B 1762 礎石式八脚門跡）とそれに取り付くS F 380 外郭東辺築地塀跡（A～Dの4時期）を検出した。そして、外郭東門跡とS F 380 外郭東辺築地塀跡が奈良時代のもので、それまで奈良時代～平安時代のもと考えていたS B 307 外郭東門跡とS F 300 外郭東辺築地塀跡が平安時代のものであることが判明した。そして、外郭東門地区の遺構期をA1・A2・B1・B2・C1・C2・D・E期の8時期に細分して整理し、A1～C2期を奈良時代の外郭東門跡とそれに取り付く外郭東辺区画施設、D・E期を西に大きく移動させて造営したS B 307 外郭東門跡とそれに取り付くS F 300 外郭東辺築地塀跡とした。このうち政庁第Ⅱ期に相当するB1期に本格的に造営されたS B 1762 礎石式八脚門は、宝亀 11（780）年の伊治公皆麻呂の乱で焼失する（B2期の終末）。その直後のC1期に同位置でS B 1768 棟門とS A 1769 材木塀で暫定的に復興され、さらに次のC2期には元の位置でS F 380D 外郭東辺築地塀が本格的に復興され、外郭東門は元の位置より南に設けたと推定した。

第 65 次調査（『年報 1994』）では、平安時代のS B 307 外郭東門跡に逆「コ」字形に取り付くS F 300 外郭東辺築地塀跡の北側部分を調査し、S F 300 築地塀跡に3時期あり、2時期目のS F 300B 築地塀跡とコーナー部分に設けられていた櫓跡が全面的に改修されていることなどから、これらを貞観 11（869）年直後のものであるとした。また、当初のS F 300A 築地塀跡については、奈良時代のS B 1762 外郭東門跡が宝亀 11（780）年の伊治公皆麻呂の乱で焼失した後に、暫定的な整備（外郭東門C1期）と本格的な整備（外郭東門C2期）の2時期を経た後に、西に大きく位置をずらして造営されていること、奈良時代の外郭東門跡に伴うS X 1772 城内道路跡のS D 1773 北側溝がS F 300A 外郭東辺築地塀跡の下から検出されたことから、9世紀初頭の胆沢城への鎮守府の移転に伴って造営された可能性が高いとした。そして、大畑地区官衙のD期の建物がこのS B 307 外郭東門跡、S F 300 外郭東辺築地塀跡の方向と一致し、これらを基準に造営されていると考えられることから、大畑地区官衙のD期の造営を9世紀初頭頃に位置付けた。

以上のように、昨年度までは大畑地区官衙の遺構期をA～Gの7時期に細分し、A期を8世紀中頃～後半頃、B期を8世紀後半頃、C期を8世紀末～9世紀初頭頃、D期を9世紀前半頃、E期を9世紀後半頃、F期を10世紀前半頃、G期を10世紀前半頃に位置付けている。また、D期の造営の開始を9世紀初頭頃、D期の終末を貞観 11（869）年の陸奥国大地震とみている。

### （3）主要遺構の年代と大畑地区官衙の遺構期との対応

ここでは前述の主要遺構について重複関係や出土遺物などから年代の検討を行い、これまでの調査・研究によって設定した大畑地区官衙における遺構期（『年報 1991』）や大畑地区官衙北西部での調査成果（『年報 1993』『年報 1995』）、外郭東門地区の調査成果（『年報 1994』）と対応させて考察する。また、その他の主要遺構についても位置付けを行なう。

まず、出土遺物の多いS I 2367～2378 住居跡について検討する。

## 【S I 2373～2378 住居跡の年代的検討】

北側で重複するS I 2373～2375 住居跡のうち、最も新しいS I 2375B 住居跡の埋め土からは多くの土器が出土した（第36～41 図）。S I 2375B 住居跡は人為的に埋め戻されており、埋め土から出土したこれらの土器は住居廃絶時のものと考えられる。土師器はいずれもロクロ調整である。底部の調整のわかる土師器坏は89 点あり、手持ちケズリが31 点、回転ケズリが22 点、ケズリが5 点で、再調整されたものが58 点（65.2%）と主体を占め、回転糸切り無調整も31 点（34.8%）と多い（表3）。底部内面のミガキには横ミガキと放射状ミガキの両者があり、前者が多い。また、土師器坏ではコップ形の小型の坏（第37 図21～27）が目立つ。底部の調整のわかる須恵器坏は83 点あり、ヘラ切りが47 点（56.6%）と主体を占め、次いで回転糸切り無調整が31 点（37.3%）と多い。手持ちケズリは3 点、回転ケズリは2 点と少ない。

こうした特徴の土器は多賀城跡第60 次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群（『年報1991』・『年報1993』）と類似する。

多賀城跡第60 次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群は、土師器坏では手持ちケズリが56%と過半数を占め、次いで回転ケズリが38%と多く、回転糸切り無調整が4%、非ロクロ調整が2%と少ない。須恵器坏ではヘラ切りが80%と主体を占め、回転糸切り無調整が13%、回転ケズリが5%、手持ちケズリが2%と少ない（『年報1991』）。この土器群には天長9（832）年以降に作成されたことが知られる漆紙文書が共伴する。また、「石口」と墨書された須恵器坏があり、これは磐城団を意味するものと解される。磐城団については、弘仁6（815）年以降、承和10（843）年以前に新設したとみられている（鈴木，1991）。これらのことから、多賀城跡第60 次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群は、天長9（832）年以降の9 世紀第2 四半期を中心とする頃と考えている。

S I 2375B 住居跡出土の土器をこの多賀城跡第60 次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群と比較すると、S I 2375B 住居跡の方が土師器坏・須恵器坏ともに回転糸切り無調整のものがやや多く含まれているものの、土師器坏・須恵器坏とも底径が大きく、器形や技法など類似する点が多い。したがって、S I 2375B 住居跡出土の土器は、多賀城跡第60 次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群とほぼ同じ9 世紀第2 四半期を中心とした頃のものとみることができる。

また、S I 2373～2375 住居の中では重複関係で最も古いS I 2373 住居跡、これより新しいS I 2374 住居跡から出土した土器は、量的には少ないがS I 2375B 住居跡から出土した土器と類似したものが多く、これら3 棟の住居が古い住居を取り壊して埋め戻しながら連続的に建てられたものであることを考慮に入れば、これらもほぼ同じ頃の住居であると考えられる。

S I 2373～2375 住居跡の南側で重複するS I 2376～2378 住居跡の中で、最も新しいS I 2378 住居跡の埋め土からも比較的多くの土器が出土している（第45 図）。S I 2378 住居跡は人為的に埋め戻されており、埋め土から出土したこれらの土器は住居廃絶時のものと考えられる。土師器はいずれもロクロ調整のものである。底部の調整のわかる土師器坏は22 点とやや多い。土師器坏では手持ちケズリが4 点、回転ケズリが2 点と少なく、回転糸切り無調整が16 点と主体を占める。底部内面のミガキには横ミガキと放射状ミガキの両者があり、後者が多い。底部の調整のわかる須恵器坏は15 点あり、へ

ラ切りが4点と少なく、回転糸切り無調整が11点と多い。このS I 2378 住居跡出土の土器を前述の多賀城跡第60次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群と比較すると、S I 2378 住居跡の方が土師器坏・須恵器坏ともに回転糸切り無調整のものが多く含まれており、多賀城跡第60次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群よりもやや新しく、9世紀中頃～後半頃のものと思われる。

また、S I 2378 住居よりも古いS I 2377 住居跡からは、量的にはすくないもののS I 2375B 住居跡とほぼ特徴を持つ土器が出土している。

したがって、S A 2349・2350 材木堀跡とS A 2351・2352 材木堀跡とに挟まれた通路の路面上に相次いで建てられたS I 2373～2378 住居跡については、9世紀第2 四半期～後半頃にかけてのものと考えることができる。年代的には大畑地区官衙のD期～E期に相当する。

### 【S B 2347・2348 棟門跡とS A 2349～2352 材木堀跡の年代的検討】

S B 2347・2348 棟門跡とS A 2349～2352 材木堀跡の造営年代を示す遺物は今回の調査では出土していない。しかし、S A 2349・2350 材木堀跡とS A 2351・2352 材木堀跡、S B 2347 棟門跡とS B 2348 棟門跡は、①S B 707 大畑地区官衙北門とともに計画された同時期の遺構と考えられること、②S B 707 大畑地区官衙北門が9世紀初頭頃にS B 307 外郭東門とS F 300 外郭東辺築地堀とともに計画的に造営されたと考えられること（『年報 1993』『年報 1994』）から、9世紀初頭頃に造営されたものと考えられる。

また、廃絶年代については、①S A 2349・2350 材木堀跡とS A 2351・2352 材木堀跡とに挟まれた通路の路面上に相次いで建てられたS I 2373～2378 住居跡については、前述の出土遺物の検討からいずれも9世紀第2 四半期～後半頃のものと考えられ、S A 2352 材木堀跡はこれらの住居のうちのS I 2377 住居跡よりも古いこと、②S A 2349B・2350B 材木堀跡の抜取溝から出土した土師器坏・須恵器坏はいずれも底径が大きく、多賀城跡第60次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群に類似していることから、9世紀第2 四半期頃と考えられる。

したがって、S A 2349・2350 材木堀跡とS A 2351・2352 材木堀跡、S B 2347 棟門跡とS B 2348 棟門跡は9世紀初頭頃～9世紀第2 四半期頃まで存続したとみられ、大畑地区官衙のD期に位置付けられる。

### 【「コ」字形官衙の年代的検討】

「コ」字形官衙を構成する建物跡のうち、S B 807・711 南北棟は第23次調査で検出し（『年報 1974』）、S B 807 南北棟は第64次調査で再検討し、大畑地区官衙のE期（9世紀後半頃）に位置付けた（『年報 1993』）。第66次調査ではS B 2296 南北棟を検出し、S B 811・711 南北棟と同時期に計画的に配置されたE期（9世紀後半頃）の建物と考えた（『年報 1995』）。さらに今回の調査ではこれらとともに計画的に造営されたS B 2353・2355 南北棟、S B 2354 東西棟を検出した。

これまでの調査では、これら「コ」字形官衙の年代的検討をする上で良好な出土遺物はなく、いずれも小破片であった（註1）。今回の調査の結果、S B 2355 建物跡の柱切取穴、S B 2354 建物跡より

新しいS K 2380 土壇から、廃絶年代を検討できる土器が出土した。

S B 2355 建物跡の柱切取穴からは、回転ケズリで内面横ミガキの土師器破片（第 17 図 5）、ほぼ完形の手持ちケズリの須恵器坏（第 17 図 8）と回転糸切り無調整の須恵器坏（第 17 図 9）が出土した。いずれも底径は大きい。こうした特徴の土器は、前述の 9 世紀第 2 四半期頃に位置付けられる多賀城跡第 60 次 S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群に類似しており、この頃のものと考えられる。

S K 2380 土壇は S B 2354 東西棟よりも新しく、回転糸切り無調整で内面放射状ミガキの土師器坏が多く出土し、他に須恵系土器坏・高台坏、土師器高台坏などが少量出土した（第 51 図）。これらの土器は、貞観 11（869）年以降、10 世紀前葉頃以前の土器群で、9 世紀第 4 四半期頃と考えている多賀城跡 S K 2270 土壇出土土器群（『年報 1994』；註 2）に類似している。

したがって、大畑地区北西部の「コ」字形官衙は 9 世紀第 2 四半期以前には廃絶したと考えられる。

造営年代については建物跡の方向から検討が可能である。これら「コ」字形官衙を構成する建物跡の方向をみると、方向に若干のばらつきがあるもののいずれも発掘南北基準線に対して北で西に 4° 前後偏り、発掘南北基準線に対して北で西に 6° 前後偏る D 期（9 世紀初頭頃～中頃）の S B 707 大畑地区官衙北門跡と S B 706 大畑地区官衙北辺材木堀跡の方向に近似する。

「コ」字形官衙の中央に位置する S B 2354 東西棟の北側柱列は、S B 706 大畑地区官衙北辺材木堀跡から約 108m（360 尺）という整った数値の位置にある。また、北東隅の S B 807 南北棟建物跡の北妻は S B 706 大畑地区官衙北辺材木堀跡から約 15m（50 尺）という整った数値の位置にある。また、南東隅の S B 2355 南北棟の東側柱列は、S A 2350 材木堀跡から約 10m 離れており、この距離は S A 2349・2350 材木堀跡と S A 2351・2352 材木堀で区画された南北方向の通路の幅員と同じである。

このように、「コ」字形官衙を構成する各建物跡は、D 期の S B 707 大畑地区官衙北門跡と S B 706 大畑地区官衙北辺材木堀跡の方向と近似し、これを基準として同時期に計画的に造営されたとみることができる。前述したように、S B 707 大畑地区官衙北門跡と S B 706 大畑地区官衙北辺材木堀跡は、S B 307 外郭東門跡と S F 300 外郭東辺築地堀跡を基準として 9 世紀初頭頃に計画的に造営されたものと考えているので（『年報 1994』『年報 1995』）、「コ」字形官衙も 9 世紀初頭頃に造営されたものと考えられる。「コ」字形官衙は D 期（9 世紀前半頃）とみられ、E 期（9 世紀後半頃）とみてきたこれまでの見解（『年報 1993』『年報 1995』）を訂正する。

したがって、これらの「コ」字形官衙および S B 707 大畑地区官衙北門跡、それから南に延びる通路跡、S A 2349～2352 材木堀跡と S B 2347・2348 棟門跡からなる大畑地区官衙北西部の構成は 9 世紀初頭頃に成立したとみられる。また、S A 2352 材木堀跡が 9 世紀第 2 四半期の S I 2377 住居跡によって壊されていることから、これ以前には廃絶していたと考えられ、9 世紀前葉頃まで存続したものとみられる。

### 【その他の建物跡】

その他の S B 2356～2363 建物跡を柱穴の形状で分けると、掘方が一辺 40～50cm の方形もしくは隅丸方形の S B 2356～2358 建物跡、掘方が直径 20～30cm の円形の S B 2359～2363 建物跡に分けられる。



前者のうちS B 2357 建物は桁行4間以上・梁行2間の東西両廂付きの大規模な南北棟で、D期のS B 2355 建物跡よりも新しい。S B 2358 建物跡は桁行3間・梁行2間の小規模な東西棟で、9世紀第2四半期頃のS I 2378 住居跡よりも新しい。S B 2356 建物跡は桁行3間・梁行2間の小規模な東西棟で、D期のS B 2354 東西棟、掘方が円形のS B 2361 建物跡と重複し、これらとは時期が異なる。S B 2357・2358 建物跡の方向はほぼ発掘東西基準線に一致しており、大畑地区官衙のE期（9世紀後半頃）もしくはF期（10世紀前半頃）の建物跡の方向と類似している。また、S B 2356 建物跡は発掘東西基準線に対し東で北に約7° 偏るが、北側柱列がS B 2357 南北棟の北妻とほぼ揃うことから、S B 2357・2358 建物跡と同時期のものと考えられる。S B 2357・2358 建物跡の掘方埋め土からは、10世紀前葉頃～中頃と考えられる須恵系土器小型坏や須恵系土器坏などが出土している。したがって、S B 2356～2358 建物跡は大畑地区官衙のF期のものと考えられる。

また、掘方が円形の後者の建物跡では、S B 2361 建物跡は桁行3間・梁行2間の中規模の南北棟で、D期のS B 2354 東西棟よりも新しく、F期と考えたS B 2356 建物跡とも重複する。S B 2363 建物跡は桁行10間・梁行2間の西廂付きの南北棟で、桁行5間・梁行2間の四面廂付きの南北棟であるS B 2362 建物跡と重複しており、S B 2362 建物跡とは時期が異なる。方向はS B 2360・2362 建物跡が発掘南北基準線に対し北で東に約11° 偏り、S B 2361 建物跡が発掘南北基準線に対し北で東に約16° 偏り、S B 2363 建物跡は発掘南北基準線に対し北で東に約23° 偏り、S B 2359 建物跡が発掘南北基準線に対し北で西に約18° 偏る。したがって、掘方が円形の後者の建物跡については、重複関係からみて少なくとも2小期に分けられ、方向からみれば最大4小期に分けられる可能性がある。また、S B 2361 建物跡の重複関係からみれば、D期より新しく、F期とも時期は異なる。

掘方が円形のこうした建物跡は、大畑地区官衙における遺構期（『年報1991』）のG期（10世紀前半頃）と考えている建物跡の特徴に類似している。柱穴の埋め土や切取穴からは10世紀前半頃の須恵系土器の坏や高台坏などが出土している。したがって、これらの建物跡は大畑地区官衙のG期のものと考えられ、G期は少なくとも2小期に細分されるとみられる。

#### （4）その他の主要遺構の検討

##### ① D期（9世紀前半頃）の遺構

S I 2367・2369～2371 住居跡、S E 2386 井戸跡は、9世紀第2四半期頃に位置付けられる多賀城跡第60次S E 2101B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群に類似する土器が出土していることから、D期のものとみられる。

##### ② F期（10世紀前半頃）の遺構

S A 2364 柱列跡の柱穴埋め土からは、折戸53号窯式期の灰釉陶器椀（第24図13）が出土した。折戸53号窯式は10世紀前半頃に位置付けられていること（齊藤，1994）、柱穴の掘方が方形であることから、F期のものとみられる。

## (5) 大畑地区官衙北西部の構成と変遷

これまでの調査成果を含めると、大畑地区官衙北西部の構成と変遷に関して、次のような見通しを得ることができた(第3図)。

①奈良時代のA～C期の遺構は不明確で、奈良時代における大畑地区官衙北西部は遺構が希薄であったと考えられる。

②大畑地区官衙北西部が本格的に整備されるのは、大畑地区官衙北東部と同様に平安時代のD期(9世紀前半頃)になってからである。9世紀初頭頃、S B 307 外郭東門とそれに取り付くS F 300 外郭東辺築地塀を基準として、S B 707 大畑地区官衙北門(八脚門)とそれに取り付くS A 706A 大畑地区官衙北辺材木塀が計画的に造営され、大畑地区官衙の北辺は材木塀で区画される。そして、S B 707 大畑地区官衙北門から官衙内部に通じる幅員約10mの通路の南延長上に南北方向の平行する材木塀が設置され、大畑地区官衙は両側を材木塀で区画された通路で東・西2つの官衙に分けられる。西官衙の東辺を区画する材木塀と東官衙の西辺を区画する材木塀の途切れた箇所があり、ここに南北方向の通路より東官衙・西官衙内部に入る棟門が想定された。そして、大畑地区西官衙では、桁行6間・梁行2間の同規模の建物7棟を北向きの「コ」字形に配置した官衙が成立する。こうした構成の官衙は多賀城内では初めての検出であり、同時期の大畑地区東官衙ではこのような整然とした構成はみられない。

③D期後半に相当する9世紀第2四半期頃になると、S A 706A 大畑地区官衙北辺材木塀がS A 706B 材木塀に改修され、大畑地区官衙の北門も位置をずらして棟門程度の簡易な門に作り直されたと考えられる。その前のS B 707 大畑地区官衙北門(八脚門)の南延長上の南北方向の通路には、住居群が相次いで作られ、東官衙と西官衙の区別が不明瞭になる。大畑地区北西部の「コ」字形官衙もこの頃までには廃絶したとみられる。大畑地区官衙の利用形態が大きく変わったと思われるが、この頃における官衙の構成上の変化は大畑地区官衙の北東部や南東部では明らかではなく、D期の細分についてはさらなる検討が必要であり、今後の課題としたい。

④大畑地区官衙の北西部ではE期(9世紀後半頃)の構成がまだあまり明確ではない。S B 2295・2297・2298 建物跡など方向が北東部のE期のものと同様のものがあり、これらがE期に位置付けられる可能性がある。また、S I 2301 住居跡は出土遺物からE期に位置付けられる。また、S B 707 大畑地区官衙北門跡からと南に延びる通路上にある住居跡の中にはこの頃のものがいくつかある。

⑤大畑地区官衙の北西部では、F期(10世紀前半頃)には建物の棟数は減るものの、東西2面廂の大規模な南北棟と桁行3間・梁行2間の中規模の東西棟で構成される。

⑥大畑地区官衙の北西部では、G期(10世紀前半頃)になると、柱穴は小さくなるが、廂付きの大規模な南北棟と小規模な建物、井戸で構成されている。2～4小期に細分される可能性がある。

## 註

- 註1 第23・64次調査で、S B 807 建物の柱穴埋め土からロクロ調整の土師器甕、柱痕跡より政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類、柱切取穴より須恵系土器坏破片が出土したことから、S B 807 建物跡は9世紀後葉頃～10世紀前葉頃に建てられ、10世紀前半頃に廃絶したと考えて、大畑地区官衙のE期に作られてF期に廃絶したと考えた（『年報1993』）。また、第66次調査ではS B 2296 建物の柱穴埋め土から底径の大きなへら切りの須恵器坏が出土しているが、新しい判断材料がなく、E期の建物とした考え方は変更していない（『年報1995』）。なお、S B 807 建物跡出土の平瓦ⅡC類と須恵系土器坏の破片については、重複する新しいピットなどの遺構を見のがしたための誤認と現在は判断している。
- 註2 S K 2270 土壌は完形に近い土師器坏を中心に集中的に廃棄した土壌で、時間幅は短いと考えられる。層位的には10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰（第2層）に覆われることから、10世紀前葉頃より古く、灰白色火山灰の下の第3層に覆われることから10世紀前葉頃よりある程度は遡る。また、政庁第Ⅳ期〔貞観11（869）年～10世紀中頃〕の平瓦ⅡC類と共伴する。したがって、貞観11（869）年以降、10世紀前葉頃以前の土器群であることは確かである。土師器坏は回転糸切り無調整で底部内面が放射状ミガキのものを主体とし、底径は底径／口径比は0.4前後で、底径がやや大きいものが多い。須恵系土器高台坏がわずかに含まれるが、須恵系土器坏は含まれない。高崎遺跡S X 1080 土器捨て場跡出土土器群（千葉・伊藤，1995；高野，1991）との比較・検討から、これよりも古い9世紀第4四半期を中心とする頃に位置付けている。

## 引用文献

- 齊藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3－施釉陶器の生産と消費－』（古代の土器研究会第3回シンポジウム資料）
- 高野芳宏 1991 「高崎遺跡井戸尻（今村氏）地区の調査」『多賀城市史 第4巻 考古資料』 pp. 471～485
- 千葉孝弥・伊藤浩 1995 『高崎遺跡－第11次調査報告書－』（多賀城市文化財調査報告書第37集）
- 寺島文隆・安田稔ほか 1989 『相馬開発関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（福島県文化財調査報告書第215集）
- 山田晃弘 1996 「Ⅲ. 6（2）鉄製品」『山王遺跡Ⅲ－仙塩道路建設関係発掘調査報告書－多賀前地区遺物編』（宮城県文化財調査報告書第170集）

## Ⅲ. 付章

### 1. 関連研究・普及活動

平成8年度は多賀城跡発掘調査の他に、以下の関連研究事業や普及活動を行った。

#### (1) 多賀城跡環境整備事業

平成8年度の環境整備事業は第6次5カ年計画の2年目にあたり、外郭東門・大畑地区官衙の北部を対象に史跡公園としての整備を行った。その概要は次のとおりである。

##### 1. 平安時代の道路跡表示工

外郭東門の東側(城外:425㎡)と西側(城内:245㎡)を対象に、小石敷き道路の表示を行った。今年度で、城外から東門へのアプローチ、約40m分の舗装が完了した。城内の未舗装部分については、平成9年度に完了する予定である。

##### 2. 地形修復工

大畑地区官衙の北東部～西側の一部を対象に、遺構の保護と古代の地形を修復することを目的に盛土(面積10,600㎡・厚さ60～80cm)を行った。この盛土は将来当地区に計画している建物復元のための造成を兼ねている。

##### 3. 緑化修景

大畑地区官衙の地形修復を目的として盛土した範囲を対象に、盛土の流出防止と園地として利用を兼ねて、ケンタッキーブルーグラスとハイランドベントグラスを配合した種子の吹付けを行った。

この他、奈良時代の外郭東門南側を対象に、緑陰の形成を目的にサクラ・モミジ・キンモクセイ・ヤマグワ・ボケ等の植栽を行った。また、奈良時代の外郭東辺築地塀の表示と、私有地との境界をわかりやすくするため、ドウダンツツジを植えた。

#### (2) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

平成8年度は第5次5カ年計画の3年目にあたり、桃生郡河北町から桃生町に跨がる桃生城跡の第5次調査を実施した。桃生城は陸奥守藤原朝獺(あさかり)が天平宝字4(760)年には牡鹿郡に完成させた城柵である。桃生城跡は独立丘陵の南端に立地し、南・西側は水田地帯で眺望が開ける。

当研究所では昭和49・50年度の第1・2次調査で政庁跡を確認し、外郭区画施設の調査も一部行っていた。その後、大規模な圃場整備事業が計画され、土取り用地にあてられる危険性が生じたため、平成6年度から調査を再開し、政庁全体の建物配置を明らかにするとともに、平成7年度から桃生城跡の範囲を確認することにした。

##### 1. 調査の目的

これまでの調査で、外郭北半部の区画施設について、ほぼ明らかにしてきた。今年度は外郭南半部の区画施設を検出し、桃生城跡全体の規模を明確にすることを目的として、3カ所の発掘調査と5カ所の断面調査を実施した。調査面積は800㎡で、総事業費は17,000千円(50%国庫補助)である。

調査対象地は次のとおりである。

- (1)外郭南辺地区：発掘調査1カ所・断面調査2カ所。
- (2)外郭東辺地区：発掘調査2カ所・断面調査1カ所。
- (3)外郭西辺地区：断面調査2カ所。

## 2. 調査の成果

### (1)外郭南辺地区

外郭南辺西端部の発掘調査によって、南辺区画施設の材木堀跡1条とそれに伴う大溝1条、その他  
竪穴住居跡3棟・土壇10基などを検出した。

材木堀跡とそれに伴う大溝は丘陵南端の緩斜面に位置し、調査区の中央部を、ほぼ直線的に東西方  
向に延びている。材木堀跡は長さ約25m、大溝は約30mにわたって検出した。材木堀跡に沿って、そ  
の南約4.5mに大溝がある。材木堀跡と大溝は調査区の西約22mの土取りされた断面でも確認するこ  
とができた。

材木堀跡の掘方は幅35～50cm・深さ40～50cmの布掘りで、直径17～25cmの柱痕跡が連続して検出  
された。この材木堀跡は丸材を密接して立て並べたものとみられる。大溝は幅約3.0m・深さ約60cm  
で、堆積土からは、8世紀後半の土器が出土した。

検出した竪穴住居跡3棟のうち1棟を精査した。カマドの痕跡が認められ、9世紀後半の土器（土  
師器・須恵器）が出土した。

### (2)外郭東辺南半地区

北区：調査区は南北方向の丘陵尾根部分である。尾根平坦部の東西両側で、ほぼ連続して掘られた  
土取り穴群を検出した。これらの土取り穴群には承平4(934)年以前の灰白色火山灰層が堆積してい  
るものが認められ、いずれも古代のものと考えられる。区画施設そのものは残っていなかったが、こ  
れらの土取り穴群の存在と、両側が急斜面であることから、尾根平坦面に何らかの外郭区画施設が存  
在したものと思われる。なお、西側土取り穴群の内側で竪穴住居跡1棟を検出した。

南区：調査区は北東から南西方向に走る丘陵尾根部分である。土取り穴群が尾根平坦部の両側から  
検出されたことから、北区と同様な外郭区画施設の存在が想定される。

## 3. まとめと調査の意義

- 1)外郭南辺西端部の区画施設は、丘陵の南端に位置する。区画施設は材木堀で、外側に大溝が伴う。
- 2)外郭東辺では区画施設そのものは明瞭に残っていなかった。しかし、土取り穴群の存在と周辺の  
地形から、丘陵尾根の平坦部に区画施設の存在が想定される。
- 3)今回の調査によって、桃生城南半部の外郭区画施設の位置がほぼ明らかになった。これまでの調  
査成果を含めると、桃生城跡の規模は東西約800m・南北約650mほどであることが判明した。

### (3)遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物跡などの諸遺構を保存・展示・活用することを目的として、他遺

番号	申 請	変 更 内 容	対 応	結 果
1	佐藤茂登子 多賀城市市川字大畑 12-1	合併処理浄化槽の設置	発掘調査(6月6日～21日) 発掘面積(9 m <sup>2</sup> )	古代の遺物包含層と焼面。
2	玉川寺 多賀城市市川字城前 27	塀の改修工事	立会(6月19日)	遺構に支障無し。
3	佐藤久治 多賀城市市川字作貫 4-2	屋根葺替工事	確認	景観に支障無し。
4	多賀城市長 多賀城市中央二丁目 1-1	多賀城跡あやめまつり 仮設テント等の設置	確認	遺構・景観に支障無し。
5	千葉重機(株)代表取締役 多賀城市市川字城前 77	仮設資材保管庫設置	確認(6月)	遺構に支障無し。
6	多賀城市長 多賀城市中央二丁目 1-1	説明板及び擬木設置	立会(6月20日)	遺構に支障無し。
7	佐藤秋雄 多賀城市市川字金堀 4	屋根葺替工事	確認	景観に支障無し。
8	千葉康弘 多賀城市市川字作貫 4-1	屋根葺替工事	確認	景観に支障無し。
9	多賀城市長 多賀城市中央二丁目 1-1	環境美化盛土工事	立会(10月22日)	遺構・景観に支障無し。
10	多賀城市長 多賀城市中央二丁目 1-1	多賀城跡管理事務所 便所の改修(污水管接続)	立会(9月2・3日)	遺構・景観に支障無し。
11	佐藤孫次 多賀城市市川字大畑 33-2	車庫建築工事	立会(8月)	遺構に支障無し。
12	「エミシの慰霊祭」多賀城実行委 員会委員長塩竈市芦哇町 6-25	「エミシの慰霊祭」開催	確認(8月10日)	遺構・景観に支障無し。
13	多賀城薪能実行委員会代表 多賀城市中央二丁目 1-1	薪能仮設舞台設置等	確認	遺構に支障無し。
14	多賀城観光協会会長 多賀城市中央二丁目 1-1	多賀城跡・茶会の仮設 テント等の設置	確認	遺構・景観に支障無し。
15	菊池太衛司 多賀城市市川字五万崎 22	屋根葺替工事	確認	景観に支障無し。
16	佐藤源之 東北大学工学部地球工学科	地中レーダーのデモン ストラクション	確認(10月2日)	遺構に支障無し。
17	佐藤保 多賀城市市川字立石 26	住宅の増築	立会(12月6日)	遺構・景観に支障無し。
18	菊池浩 多賀城市市川字五万崎 58	屋根葺替工事	確認	景観に支障無し。
19	多賀城市教育長 多賀城市中央二丁目 1-1	道路舗装工事	確認	遺構に支障無し。
20	多賀城市長 多賀城市中央二丁目 1-1	史跡案内板・説明板の 設置	確認	遺構に支障無し。

※順番は研究所の対応年月日順。なお、多賀城跡の計画調査・環境整備に伴う調査は除く。

表5 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更(平成8年度)

跡における類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第4次5カ年計画の4年目として、都城跡として研究が進んでいる平城宮跡（奈良県奈良市）と近年の調査成果が著しい熊本県鞠智城跡の調査データを収集し、多賀城跡・桃生城跡と比較・検討を行った。

#### （4）特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更申請への対応

平成8年度における特別史跡指定地内の現状変更申請は表5に示したように合計20件である。その内容をみると道路工事のように公共事業に関わるものが1件、史跡の案内・説明板や環境美化盛土工事・便益施設（便所）の改修などが4件、史跡を活用したあやめまつりや薪能・茶会などの行事が4件、地中レーダーによる学術的利用が1件、この他に地域住民の生活改善に関わる合併処理浄化槽の設置や屋根葺き替え工事などが10件である。

当研究所では、できるだけ歴史的景観や地下遺構に悪影響を与えないように、関係機関と協議し、地域住民の協力を得ながら、特別史跡の保存と活用に努めてきた。掘削を伴うものについて、軽微なものは工事の際に立会（調査）を行い、浄化槽の設置については発掘調査を実施した。前者は6件、後者は1件であった。

#### （5）その他

##### 1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

「多賀城跡第67次調査について」平成8年11月23日 丹羽 茂・柳澤和明・白崎恵介

「桃生城跡第5次調査について」平成8年9月28日 阿部 恵・佐藤和彦

##### 2. 他機関への発掘調査協力

東山遺跡第11次調査：宮崎町教育委員会主体

##### 3. 各委員会などへの協力

進藤秋輝 秋田市秋田城跡環境整備指導委員・秋田県弘田柵跡環境整備審議委員・盛岡市志波城跡保存整備委員・古川市名生館官衙遺跡発掘調査指導委員・多賀城市文化財保護委員・仙台市郡山遺跡発掘調査指導委員・角田市郡山遺跡発掘調査指導委員・いわき市根岸遺跡調査指導委員・会津若松市大戸窯跡群調査指導委員

丹羽 茂 古川市名生館官衙遺跡発掘調査指導委員

白崎恵介 古川市名生館官衙遺跡発掘調査指導委員

佐藤和彦 国立歴史民俗博物館「非文献資料の基礎的研究－木札－」調査員・青森県史編纂委員会古代史部会専門委員

##### 4. 講演会などへの協力

進藤秋輝「多賀城跡の最近の調査成果」 多賀城市文化センター 平成8年9月27日

「陸奥国府多賀城とその周辺」

「館」懇談会 第3回サミット（旧宮城黒川地区2市6町1村）平成9年1月24日

「発掘調査を通して見た古代多賀城の姿」

東北技術事務所発足30周年記念講演 平成9年1月31日

「城柵官衙遺跡の整備」奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 平成9年2月27日

「多賀城なる」朝日カルチャーセンター 横浜市 平成9年3月5日

阿部 恵「桃生町と桃生城跡の関わり」桃生町文化財講演会 平成8年4月26日

佐藤和彦「桃生城－北上川河口を押さえる城柵」

朝日カルチャーセンター 横浜市 平成9年3月19日

## 5. 研究発表・論文など

進藤秋輝「陸奥国」シンポジウム 国府－畿内・七道の様相－

日本考古学協会三重大会 平成8年11月10日

「多賀城と遠朝廷」第2回古代都城制研究集会

－都城における行政機構の成立と展開－ 奈良国立文化財研究所 平成9年2月23日

「海道と牡鹿柵」「桃生城と蝦夷の反乱」石巻市史 第1巻 平成8年3月31日

丹羽 茂「多賀城跡の官衙地域」第23回古代城柵官衙遺跡検討会 シンポジウム

－古代城柵官衙遺跡の官衙地域の実態と城外の様子－ 平成9年2月9日

阿部 恵「桃生城跡第5次調査」宮城県遺跡調査成果発表会 平成8年12月14日

柳澤和明「多賀城跡第67次調査」宮城県遺跡調査成果発表会 平成8年12月14日

「多賀城跡第67次調査」第23回古代城柵官衙遺跡検討会 平成9年2月8日

柳澤和明「多賀城跡における古代末期土器編年」・「胆沢城における10世紀前後の土器群」

第3回古代末期土器群の勉強会 平成8年7月6・7日

## 2. 研究成果刊行物

『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996 平成9年3月

『桃生城跡Ⅴ』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第22冊 平成9年3月



## 報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちょうさけんきゅうしよねんぼう							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996							
副書名	第 67 次調査							
巻次	年報 1996							
シリーズ名	年報							
シリーズ番号	1996							
編著者名	進藤秋輝・丹羽茂・柳澤和明・白崎恵介							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985 宮城県多賀城市浮島字宮前 133 TEL022-368-0101							
発行年月日	西暦 1997 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "		m <sup>2</sup>	因
特別史跡 多賀城跡 第 67 次調査	みやぎけんたがじょ うし 宮城県多賀 城市 いちかわ うきしま 市川・浮島	4209	4	38 度 18 分 14 秒	140 度 59 分 30 秒	1995.5.8 ～ 1995.12.18	2,000 m <sup>2</sup>	調査計 画 に基づく 学術調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
特別史跡 多賀城跡	国府・ 城柵遺 跡	平安時 代(一部 奈良時 代を含 む)	門跡-2、 材木堀跡-4、 掘立式建物跡-1 2、竪穴住居跡-1 4、 井戸跡-1、 土壇-多数、 溝など	土師器・須恵器・須恵系土器・ 施釉陶器・瓦・鉄製品(刀子・鉄 鏃・釘など)・鉄滓・漆漉し布など		9 世紀前半頃の大畑地区 官衙の特質が明らかとなっ た。1. 大畑地区官衙北門 から南に延びる通路跡が 推定され、官衙は東西に 分割される。2. 西官衙で は、桁行6間、梁行2間の 建物7棟が「コ」字形に配 置されていた。		

# 写真図版

図版 1

1. 調査区遠景  
(北東上空から)

[ネガ B9109]



2. 調査区全景  
(南上空から)

[ネガ B9113]



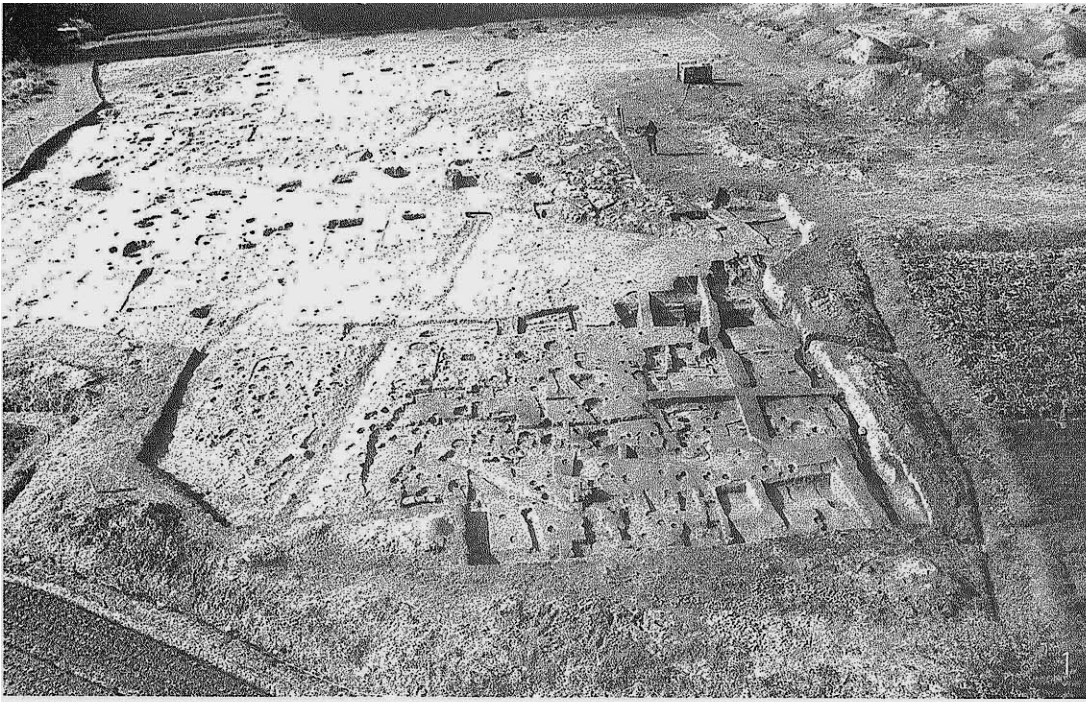
3. 査区全景  
(上空から)

[ネガ B9117]





図版 2



1. 査区全景  
(東上空から)

[ネガ B9120]



2. 調査区西半部  
(東から)

[ネガ B9126]



3. 調査区中央部  
(北から)

[ネガ B9136]



図版 3

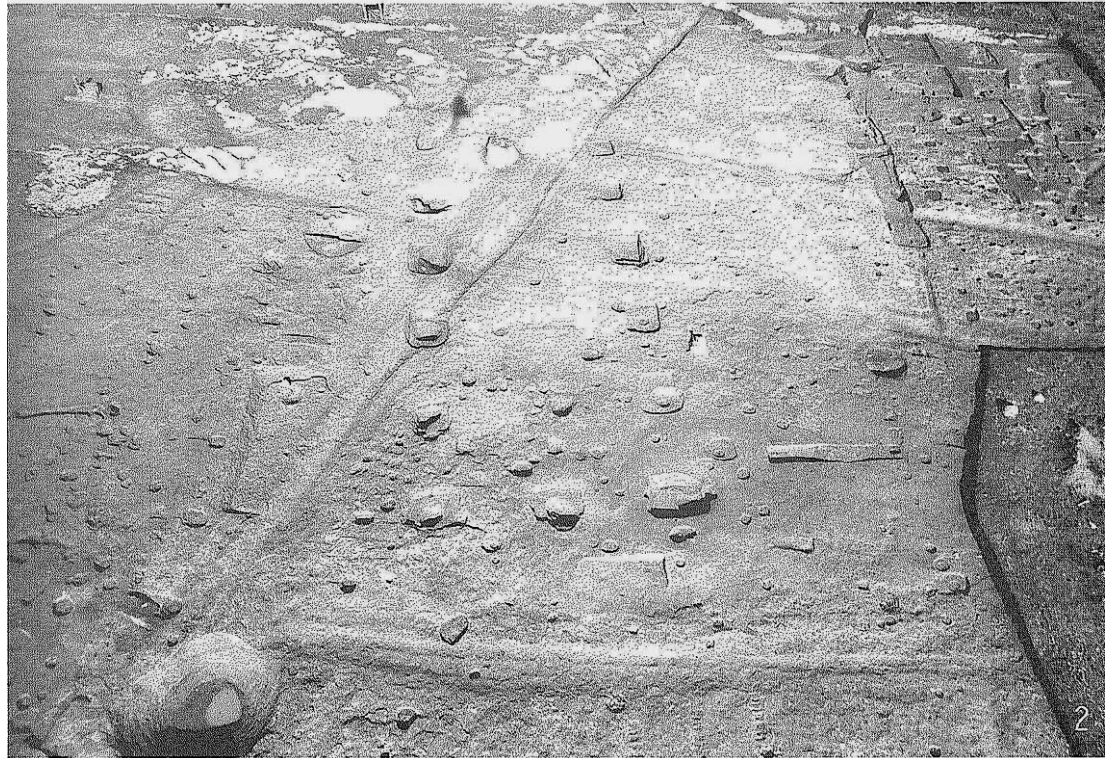
1. 調査区南中央部  
(東から)

[ネガ B9124]



2. 東半部  
(南から)

[ネガ B9146]



3. 東端部  
(南から)

[ネガ B9148]



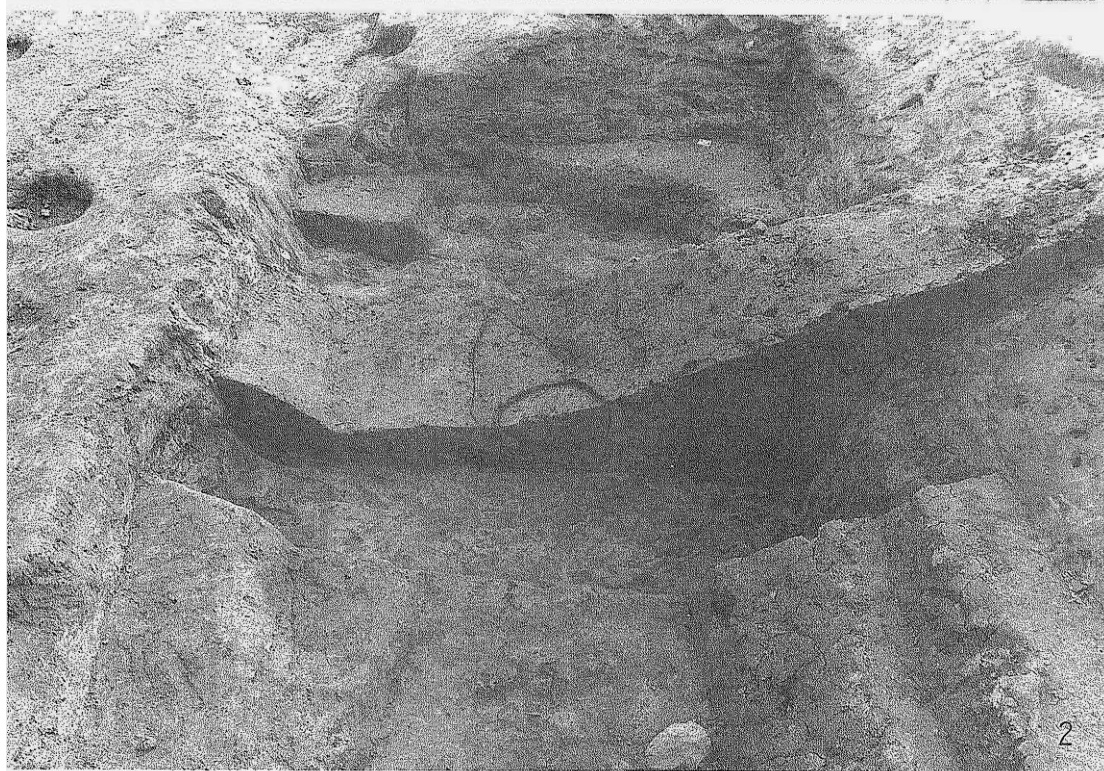


図版 4



1. SB2347 棟門跡、  
SB2349・2350  
材木堀跡  
(南から)

[ネガ B9151]



2. SB2347 棟門北柱痕  
跡、SA2349 材木堀跡  
断面 (北から)

[ネガ B9158]



3. SB2347 棟門南柱位  
置、SA2350 材木堀跡  
近景 (南東から)

[ネガ B9153]



図版 5

1. SA2349 材木堀跡、  
SK2388 土壇  
断面（北から）

[ネガ B9160]



2. SA2349 材木堀跡、  
SK2388 土壇 断面  
（南から）

[ネガ B9162]



3. SB2347 棟門南柱位置、  
SA2350 材木堀跡  
近景（南西から）

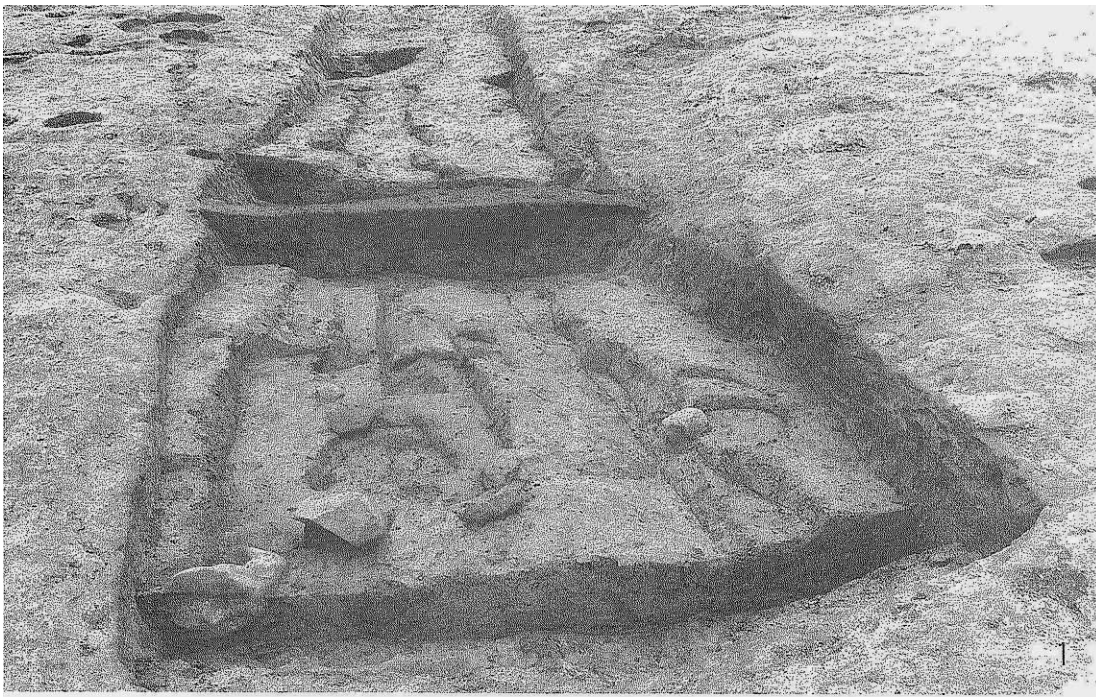
[ネガ B9154]





図版 6

1. SA2350 材木塀跡  
断面（北から）



[ネガ B9155]

2. SA2350 材木塀跡  
断面（北から）



[ネガ B9156]

3. SA2350 材木塀跡  
断面（北から）



[ネガ B9157]



図版 7

1. SB2348 棟門跡、  
SA2351・2352 材木堀跡  
(南から)



[ネガ B9171]

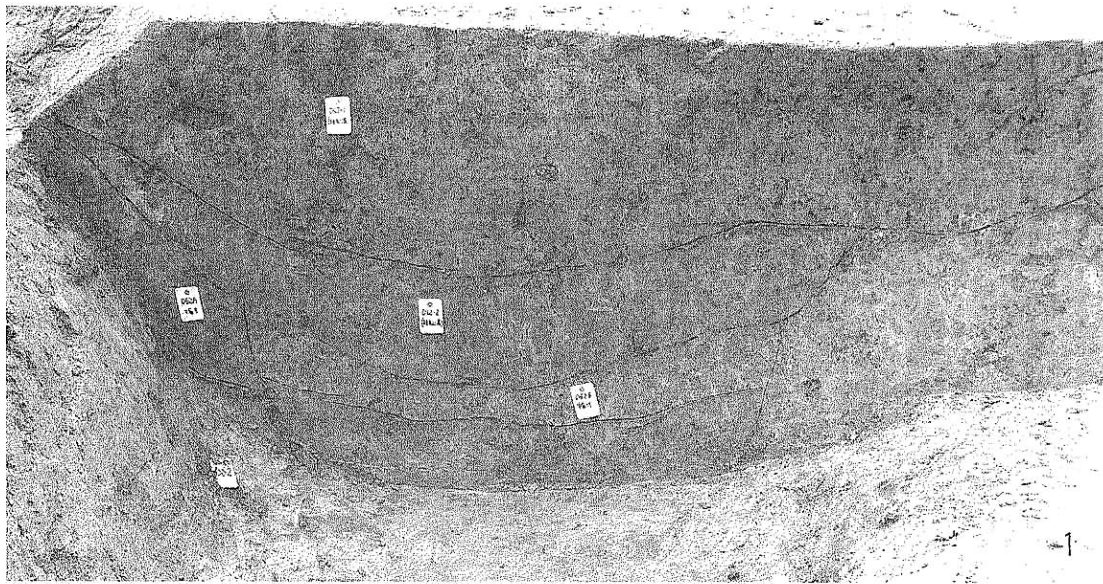
2. SB2348 棟門南柱痕跡、  
SA2352 材木堀材痕跡 (北西か  
ら)



[ネガ B9173]

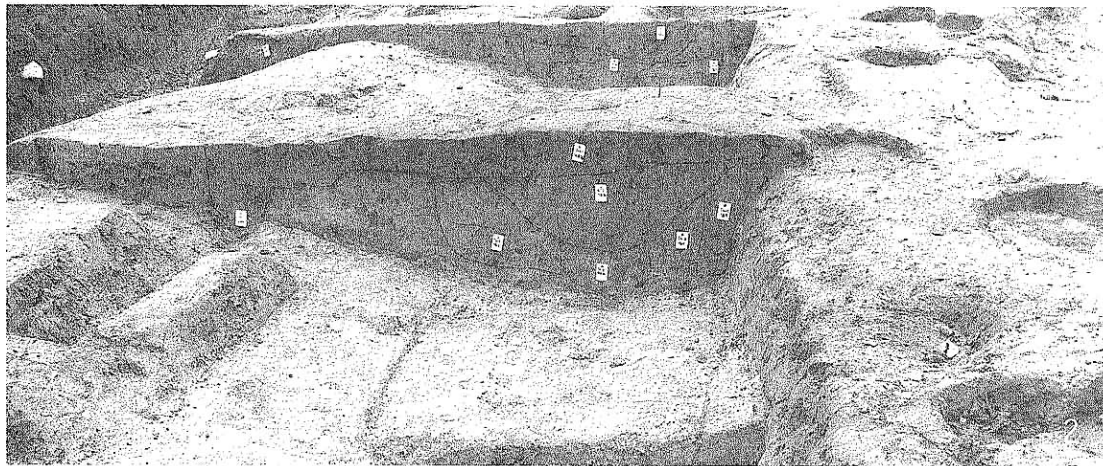


図版 8



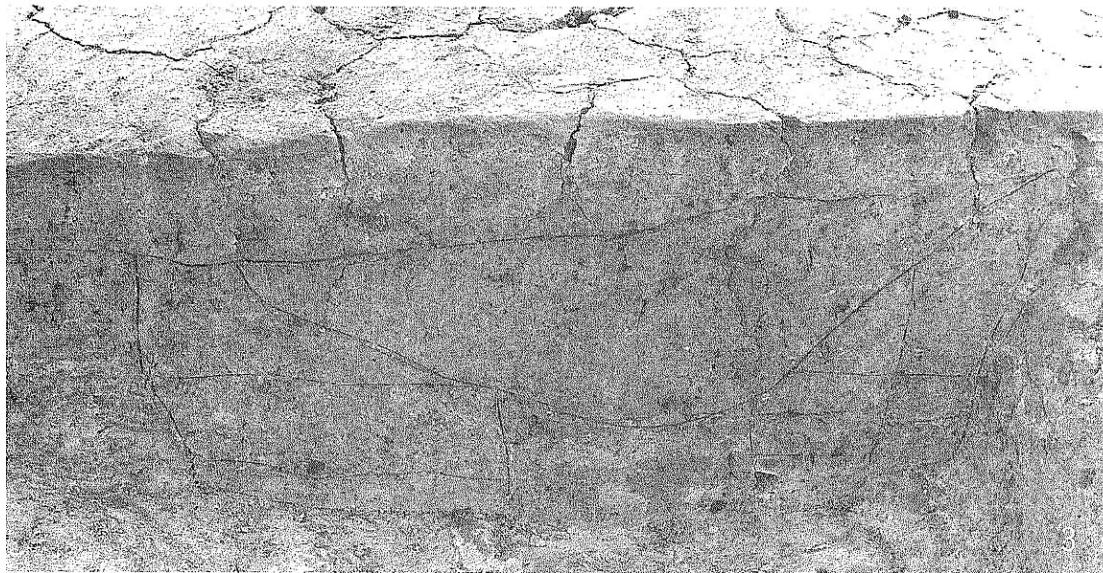
1. SA2351 材木塀跡  
断面（南から）

[ネガ B9178]



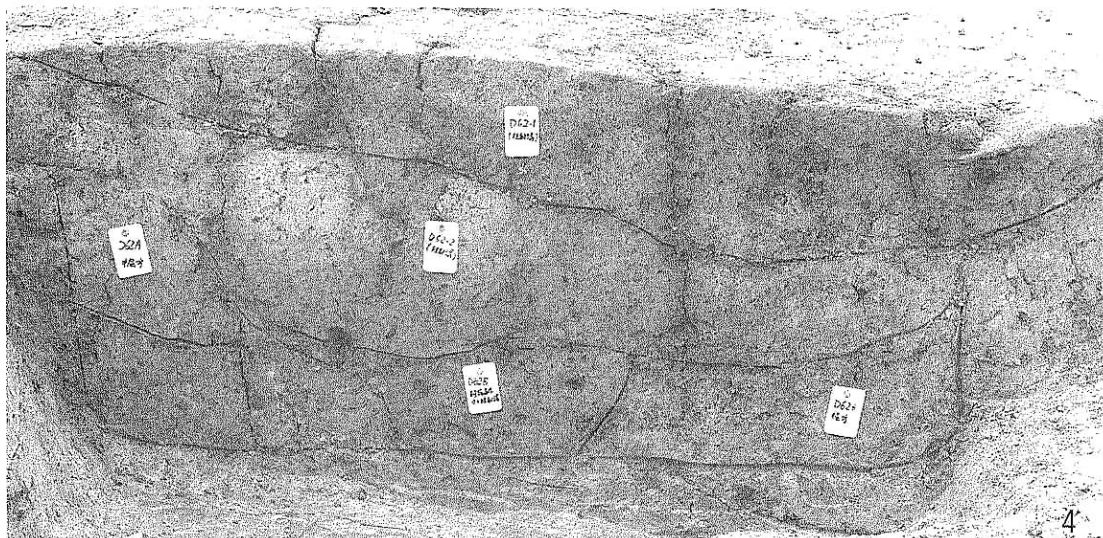
2. SA2351 材木塀跡  
断面（北から）

[ネガ B9170]



3. SA2351 材木塀跡  
断面（南から）

[ネガ B9179]



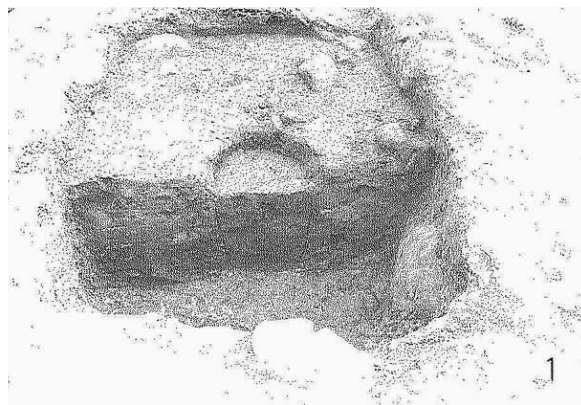
4. SA2351 材木塀跡  
断面（南から）

[ネガ B9177]



図版9

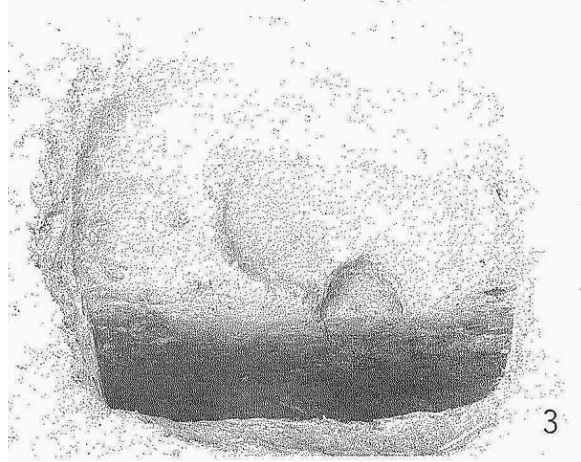
1. SB2298 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(西から)  
〔ネガ B9182〕



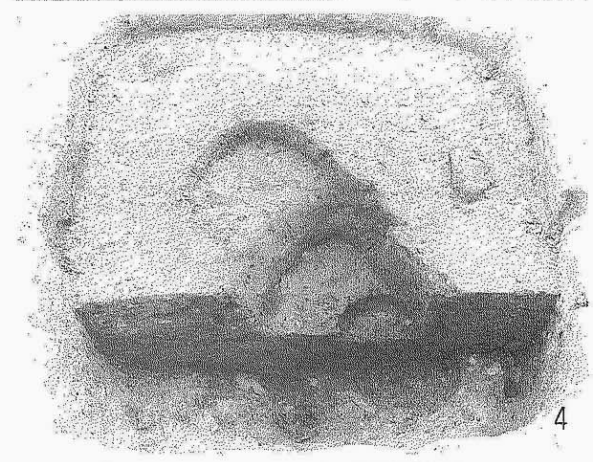
2. SB2298 建物跡  
南東隅柱穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9183〕



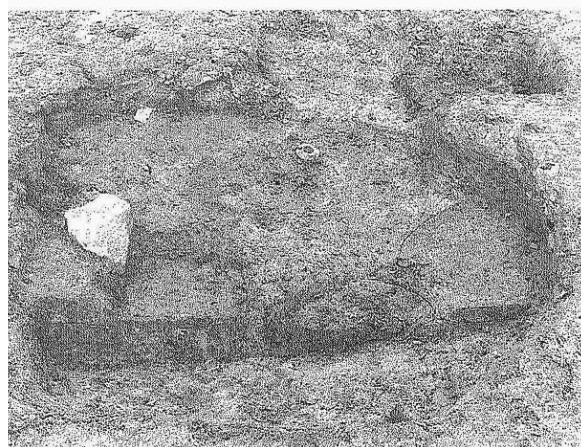
3. SB2353 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9186〕



4. SB2353 建物跡  
南東隅柱穴断面  
(北から)  
〔ネガ B9192〕



4. SB2354 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9197〕



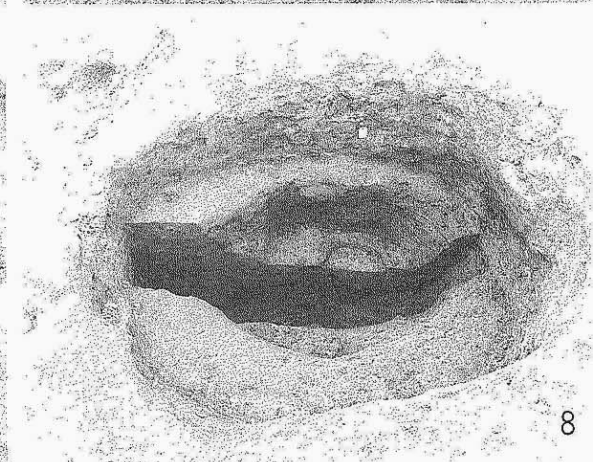
5. SB2354 建物跡  
南西隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9199〕



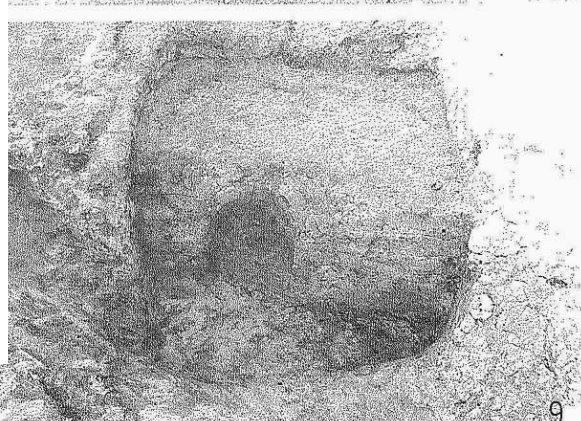
6. SB2354 建物跡  
南東隅柱穴断面  
(西から)  
〔ネガ B9198〕



7. SB2355 建物跡  
北妻棟通り柱穴断面  
(北から)  
〔ネガ B9207〕



8. SB2355 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9202〕

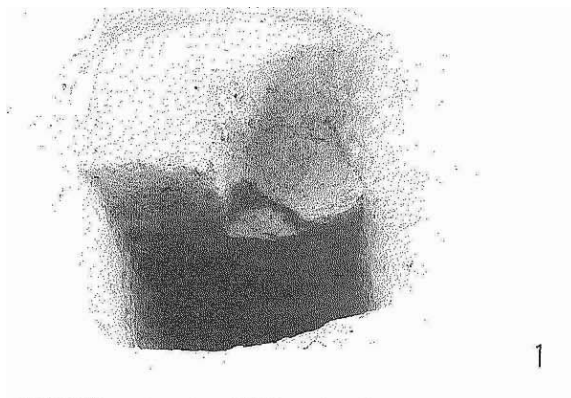


10. SB2355 建物跡  
南西隅柱穴断面  
(西から)  
〔ネガ B9212〕

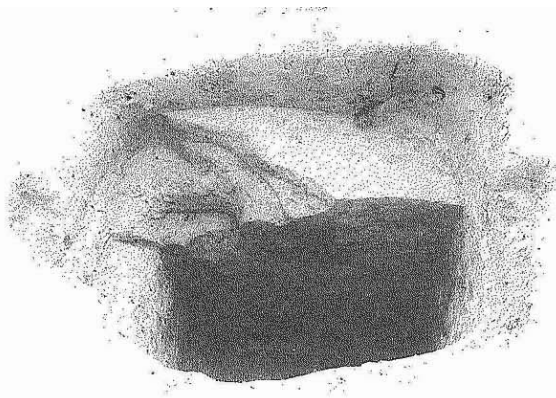




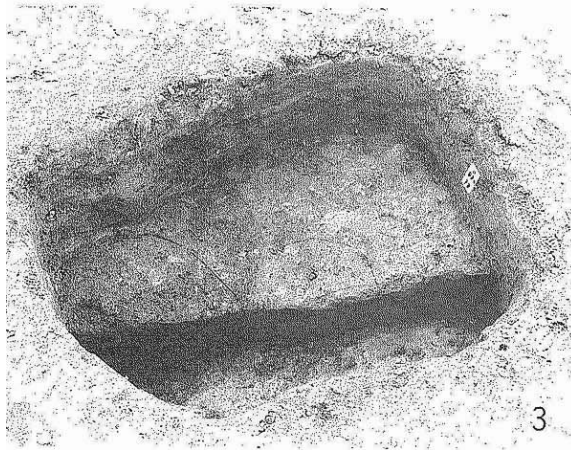
図版 10



1



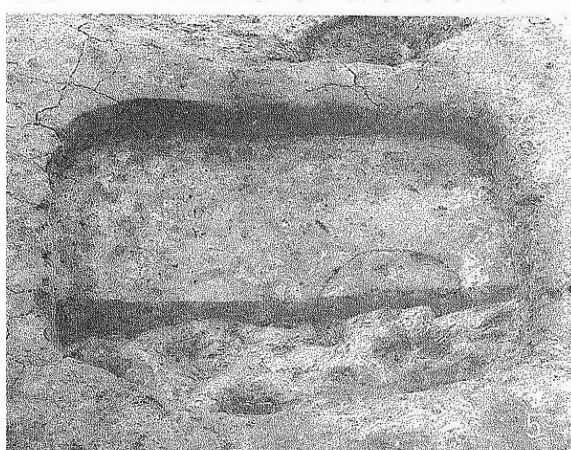
2



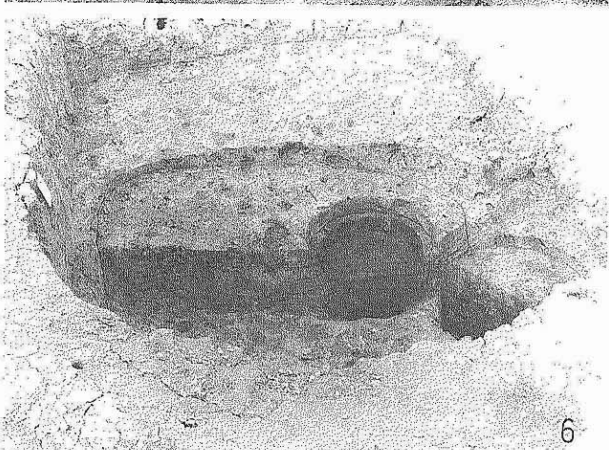
3



3. SB2356 建物跡  
北西隅柱穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9216〕  
4. SB2357 建物跡  
西側廂柱列北より  
4間目柱穴断面  
(北から)  
〔ネガ B9219〕

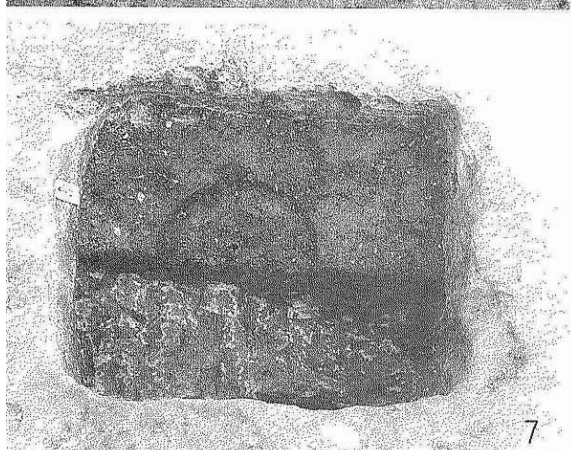


5



6

5. SB2358 建物跡  
北西隅柱穴断面  
(西から)  
〔ネガ B9221〕  
6. SB2358 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9220〕

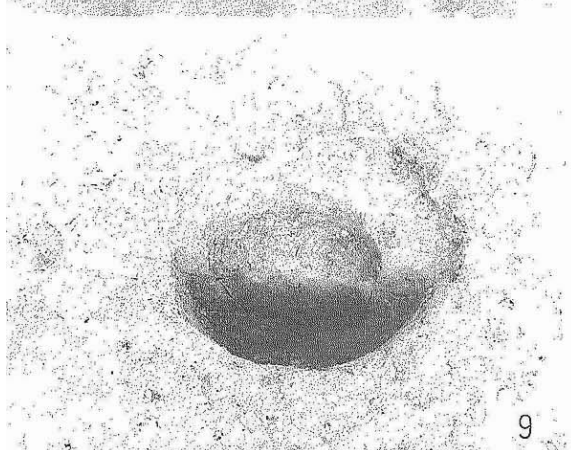


7



8

7. SB2358 建物跡  
南西隅柱穴断面  
(西から)  
〔ネガ B9224〕  
8. SB2358 建物跡  
南東隅柱穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9222〕



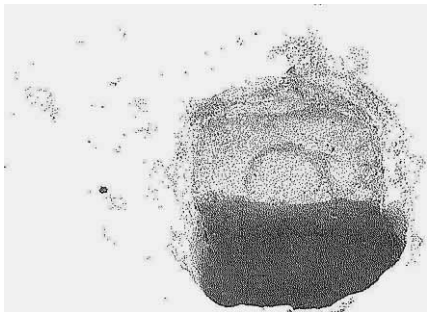
9



9. SB2359 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9227〕  
10. SB2359 建物跡南東隅  
柱穴断面 (南から)  
〔ネガ B9228〕

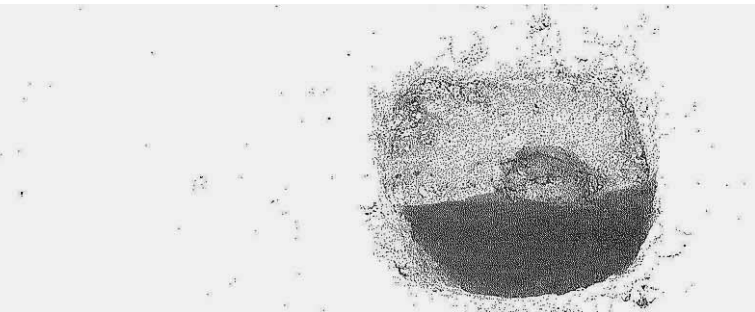
図版 11

1. SB2360 建物跡  
北西隅柱穴断面  
(西から)  
〔ネガ B9230〕



1

2. SB2360 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(北西から)  
〔ネガ B9229〕

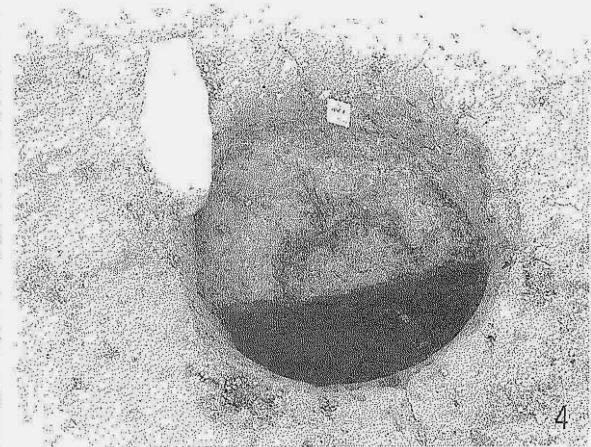


2

3. SB2361 建物跡  
北東隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9232〕

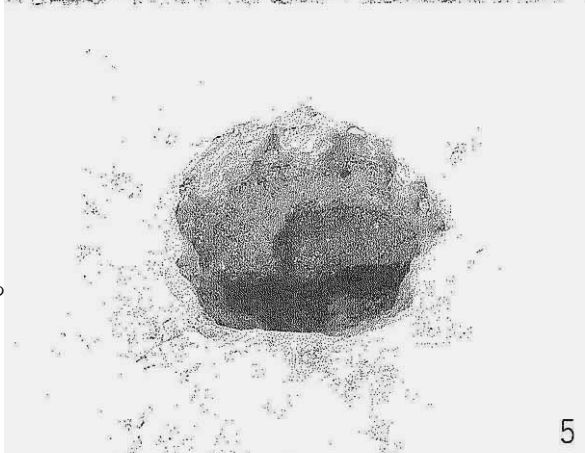


3

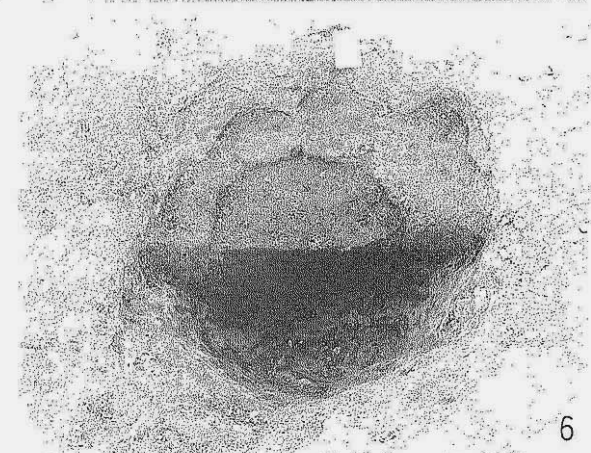


4

4. SB2361 建物跡  
南東隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9233〕

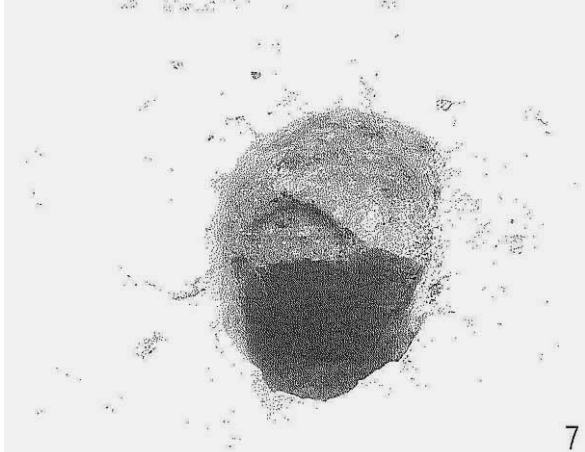


5

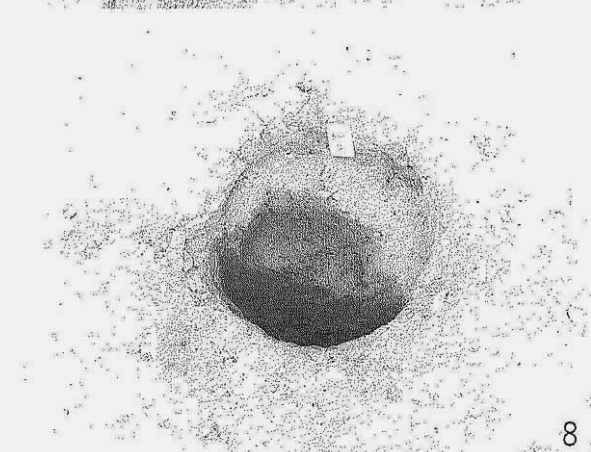


6

5. SB2362 建物跡  
廂北西隅柱穴断面  
(南東から)  
〔ネガ B9236〕

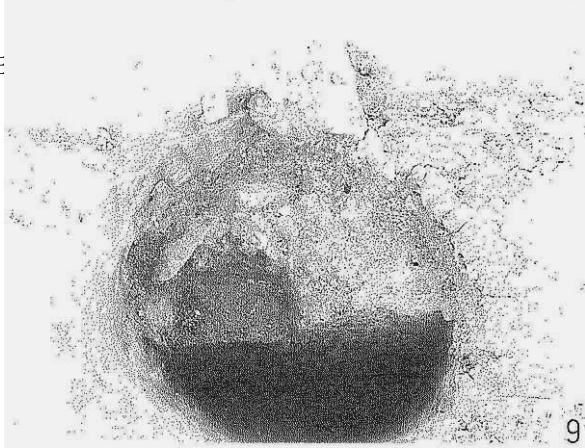


7

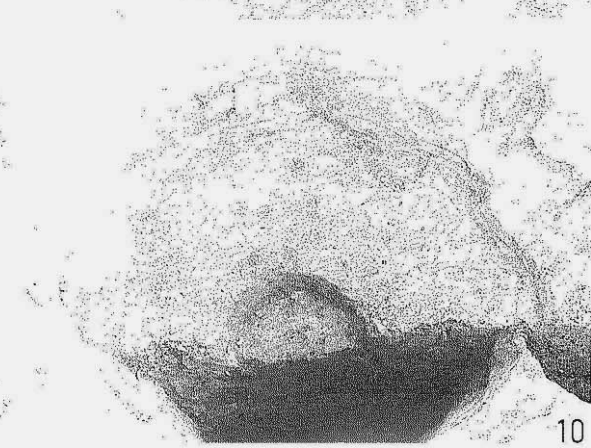


8

6. SB2362 建物跡  
身舎西側柱列北から  
1間目柱穴断面  
(南東から)  
〔ネガ B9234〕



9



10

7. SB2362 建物跡  
廂南西隅柱穴断面  
(北東から)  
〔ネガ B9231〕

8. SB2362 建物跡  
身舎南西隅柱穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9235〕

9. SB2363 建物跡  
西廂北から 5 間目柱  
穴断面  
(東から)  
〔ネガ B9242〕

10. SB2363 建物跡  
身舎南西隅柱穴断面  
(南から)  
〔ネガ B9240〕

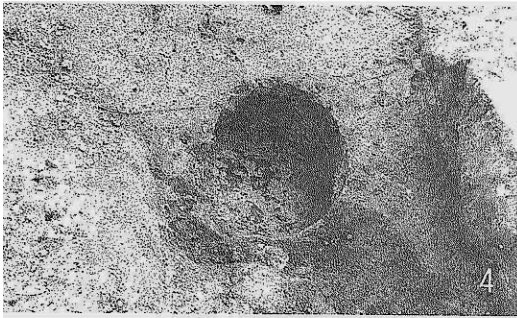


図版 12

1. SI2367 竪穴住居跡  
全景（北東から）  
〔ネガ B9248〕

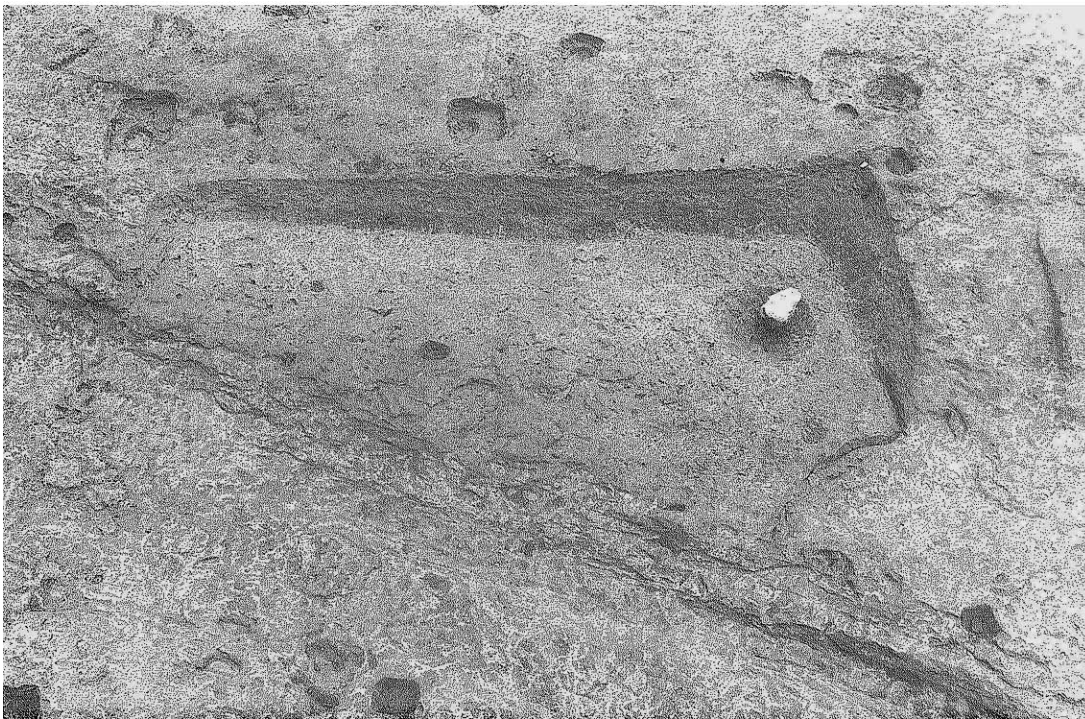


〔ネガ B9250〕



〔ネガ B9249〕

状況（西から） 〔ネガ



5. SI2369 竪穴住居跡  
全景（東から）

〔ネガ B9253〕



図版 13

1. SI2373~2375

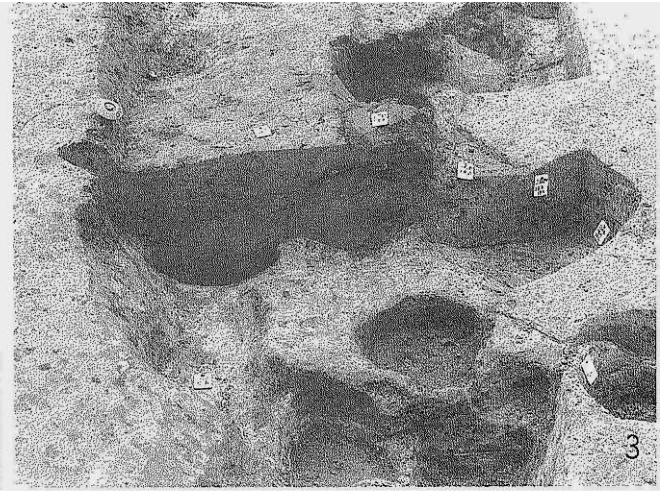
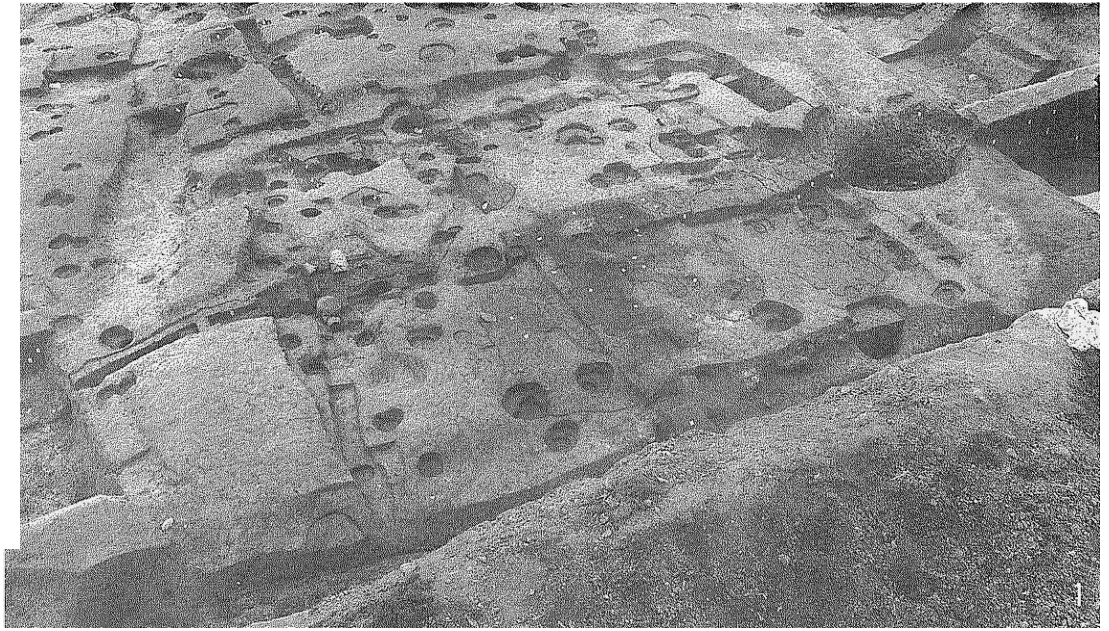
竪穴住居跡 全景  
(北東から) [ネガ B9254]

2. SI2373・2375

竪穴住居跡 南周溝  
(東から) [ネガ B9262]

3. SI2373・2375

竪穴住居跡 南周溝  
(西から) [ネガ B9264]

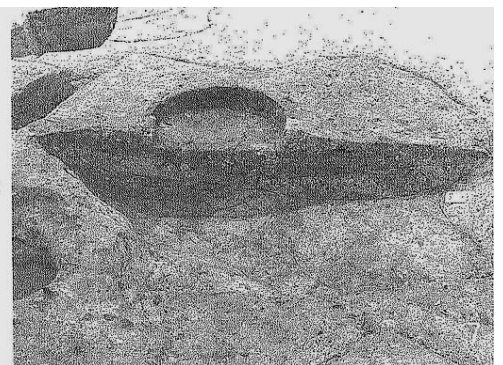


4. SI2373・2375 竪穴住居跡

東周溝  
SI2374 竪穴住居跡 外延溝  
(北から) [ネガ B9259]

5. SI2373~2375 竪穴住居跡

東半部 (南西から) [ネガ B9256]



6. SI2375 竪穴住居跡 南西支柱穴断面 (北西から) [ネガ B9270]

7. SI2375 竪穴住居跡 住居内暗渠断面 (東から) [ネガ B9265]





図版 14 掘立式建物跡

全景（西から）

[ネガ B9275]



2. SI2376~2378 竪穴  
住居跡・SB2358 掘立  
式建物跡

全景（南から）

[ネガ B9272]

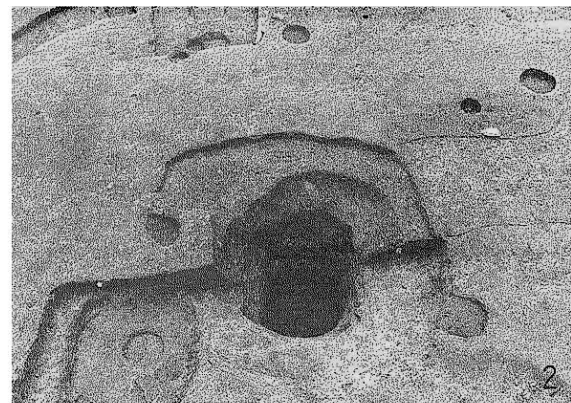
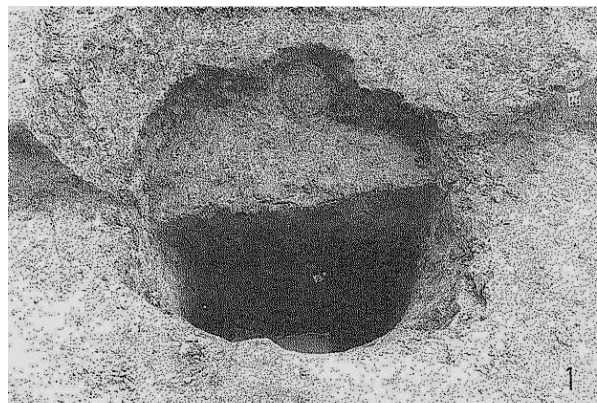


3. SI2377・2378 竪穴  
住居跡近景（南か  
ら）

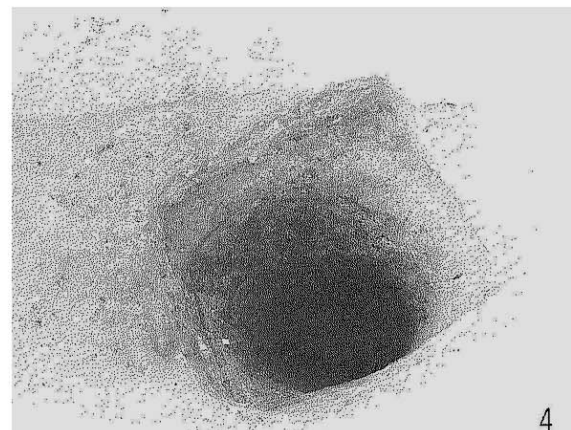
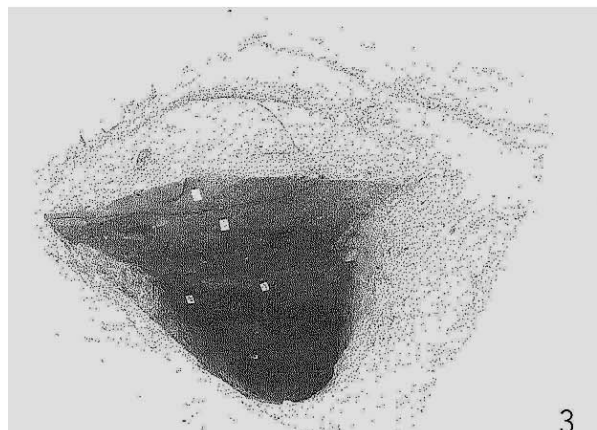
[ネガ B9273]

図版 15

1. SK2380 土壇断面  
(北から)  
〔ネガ B9279〕

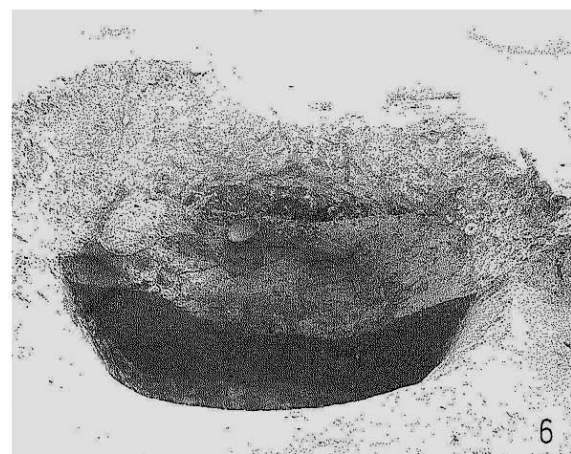


2. SK2380 土壇  
完掘状況  
(北から)  
〔ネガ B9277〕



3. SK2382 土壇  
断面 (北東から)  
〔ネガ B9287〕

4. SK2382 土壇  
完掘状況 (東から)  
〔ネガ B9285〕



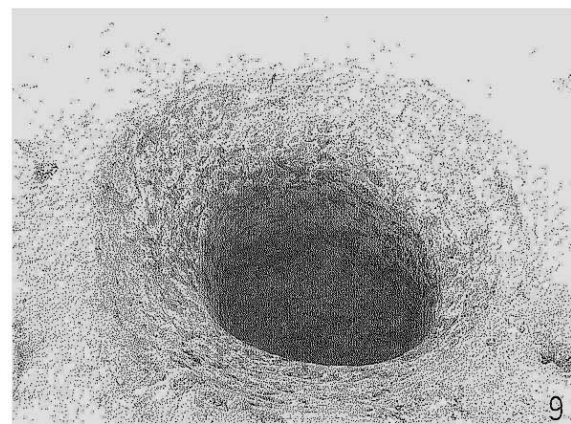
5. SK2383 土壇断面  
(北から)  
〔ネガ B9288〕

6. SK2383 土壇  
須恵系土器坏の  
出土状況 (北から)  
〔ネガ B9290〕



8. SE2386 井戸跡  
断面 (南から)  
〔ネガ B9293〕

9. SE2386 井戸跡  
完掘状況 (南から)  
〔ネガ B9292〕





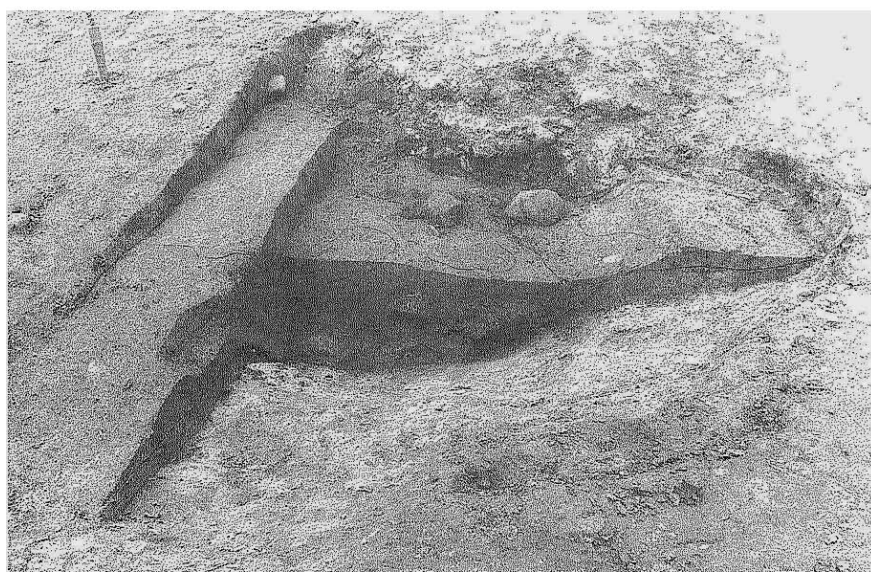
図版 16

1. K2387 土壙全景  
南西から

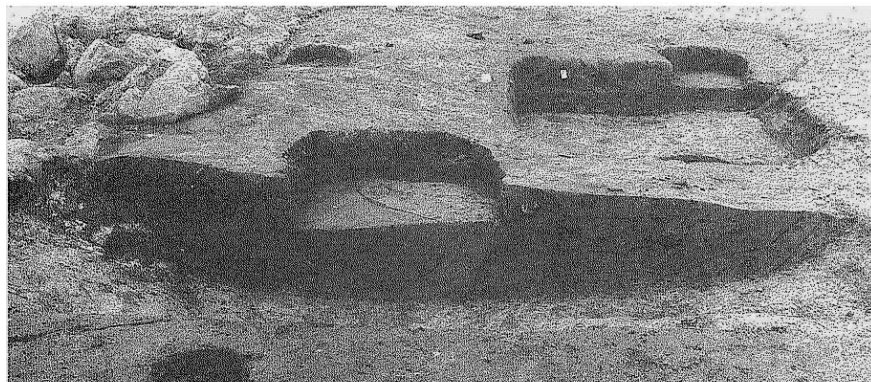


[ネガ B9299]

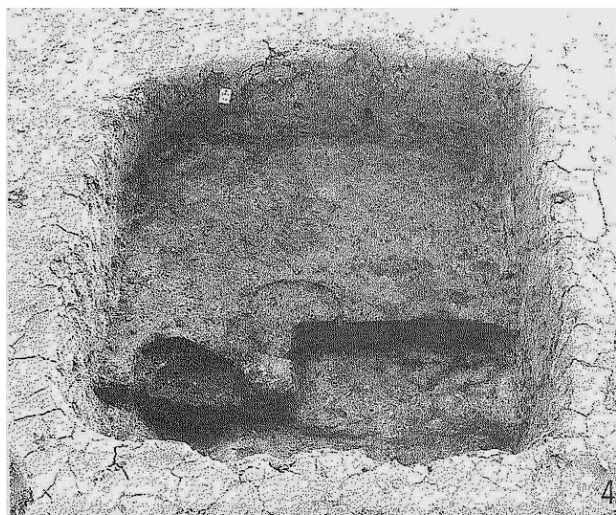
南北断面(東から)

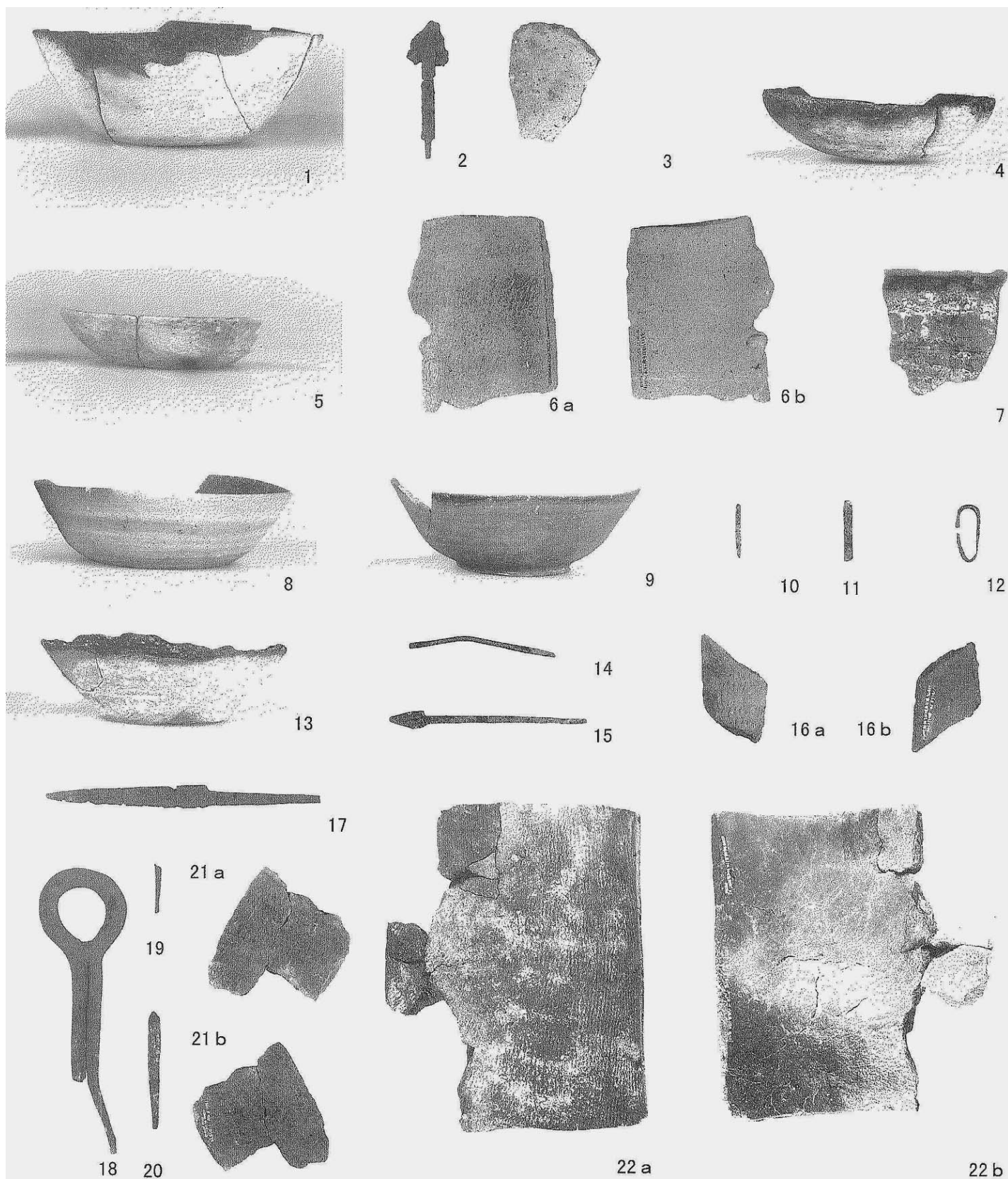


東西断面(北から)



から





図版 17 1~3. SA2349B 材木堀跡  
10~12. SB2358 建物跡  
17~21. SI2371 竪穴住居跡

4~7. SA2351B 材木堀跡  
13. SI2367 竪穴住居跡  
22. SI2374 竪穴住居跡

8・9. SB2355 建物跡  
14~16. SI2370 竪穴住居跡

1. 土師器坏 [ネガ B9850]

2. 鉄鏃 [ネガ B9851]

3. 砥石 [ネガ B9851]

4. 土師器坏 [ネガ B9852]

5. 土師器坏 [ネガ B9853]

6. 平瓦 [ネガ B9854・9870]

7. 土師器甕・漆付着 [ネガ B9855]

8. 須恵器坏 [ネガ B9856]

9. 須恵器坏 [ネガ B9857]

10. 鉄釘 [ネガ B9858]

11. 鉄鏃 [ネガ B9858]

12. 口金 [ネガ B9858]

13. 土師器坏 [ネガ B9859]

14. 不明鉄製品 [ネガ B9860]

15. 鉄鏃 [ネガ B9860]

16. 平瓦 [ネガ B9861・9862]

17. 刀子 [ネガ B9866]

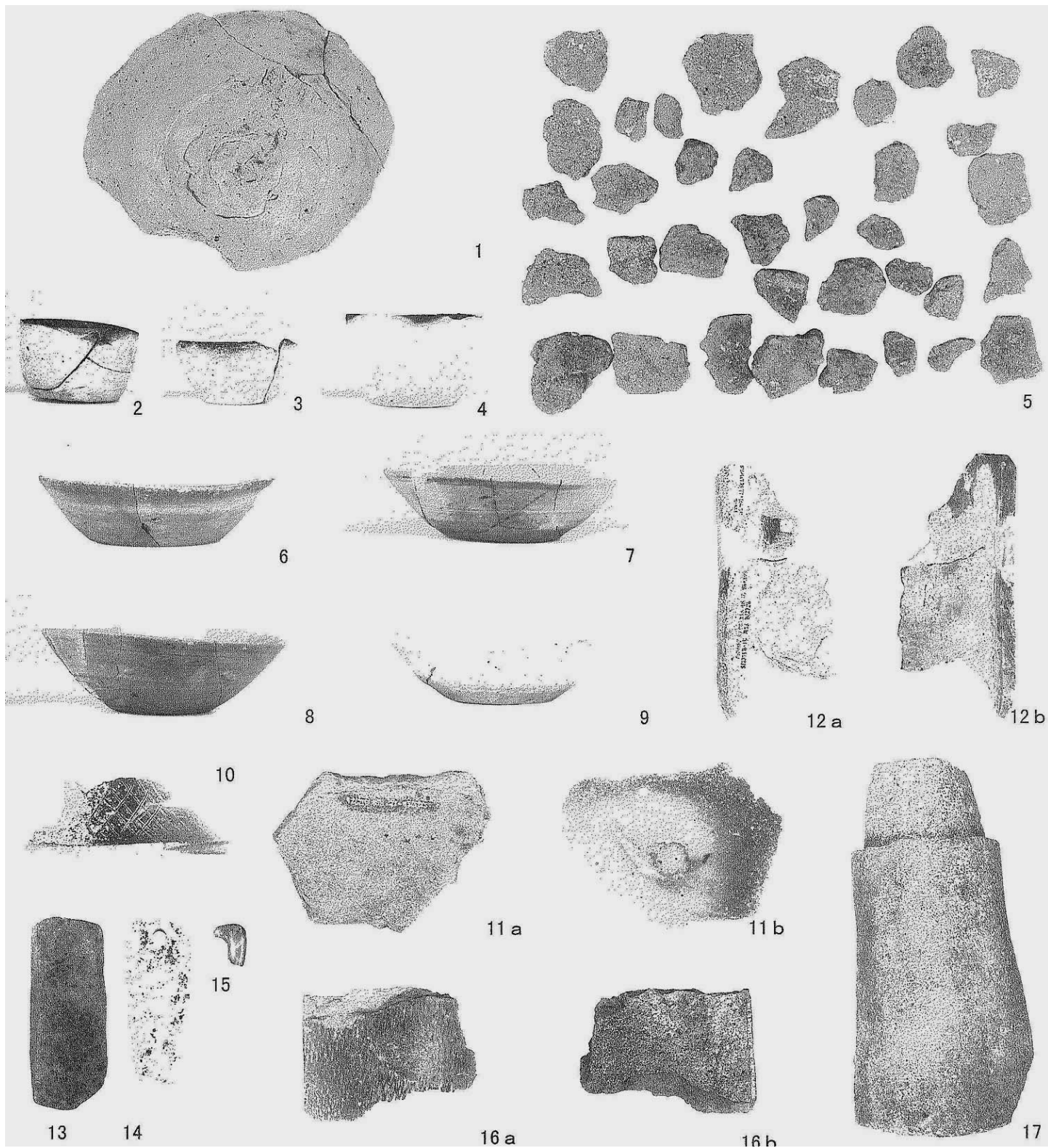
18. 鉄釘 [ネガ B9866]

19. 鉄釘 [ネガ B9866]

20. 鉄釘 [ネガ B9866]

21. 平瓦 [ネガ B9864・9865]

22. 平瓦 [ネガ B9867・9868]



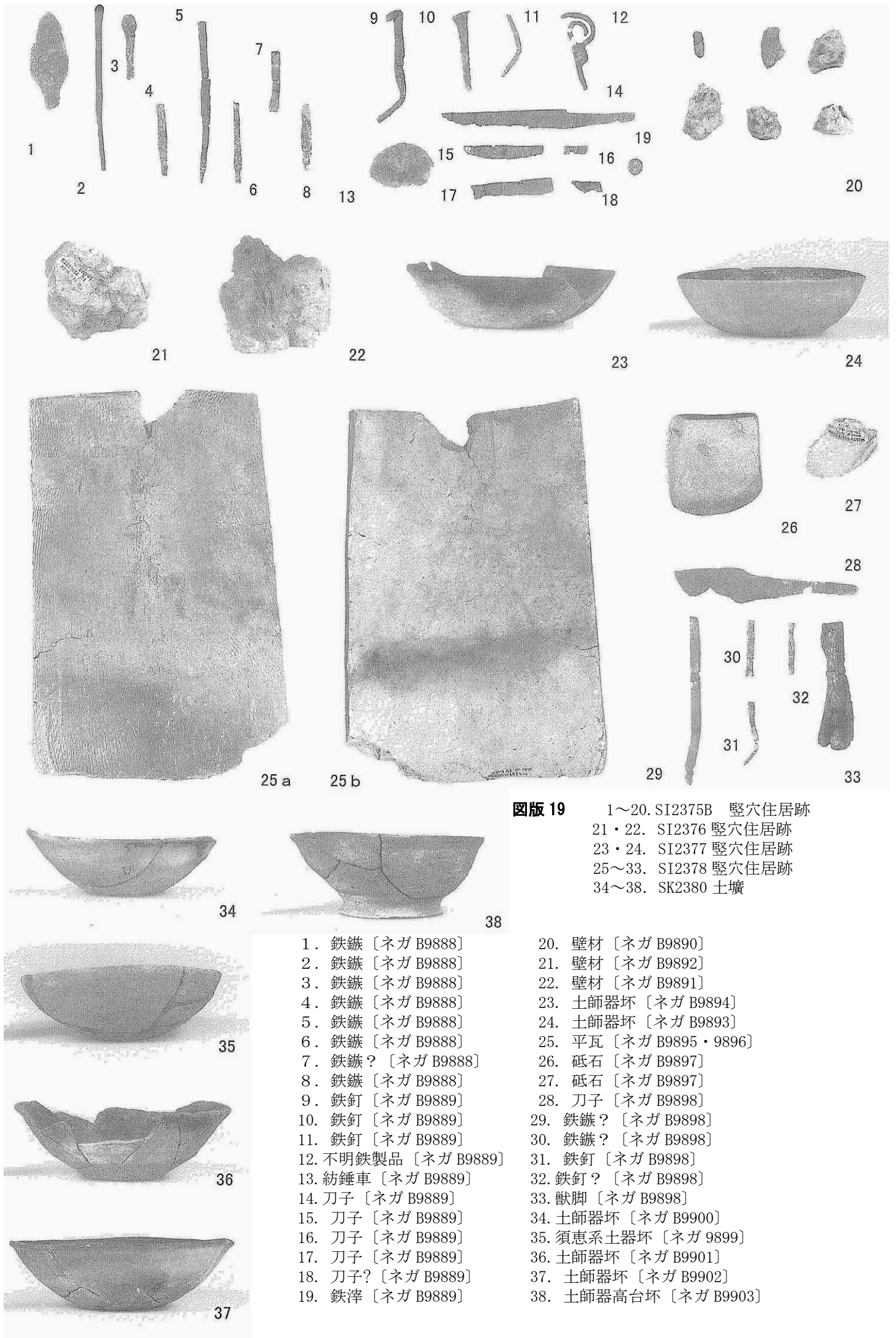
図版 18 1. SI2375A 竪穴住居跡

1. 須恵器坏 「選」墨書 [ネガ B9869]
2. 土師器坏 [ネガ B9871]
3. 土師器坏 [ネガ B9872]
4. 土師器坏 [ネガ B9873]
5. 製塩土器 [ネガ B9874]
6. 須恵器坏 [ネガ B9876]
7. 須恵器坏 [ネガ B9875]
8. 須恵器坏 [ネガ B9878]
9. 須恵器坏 [ネガ B9877]

2~17. SI2375B 竪穴住居跡

10. 円面硯 [ネガ B9879]
11. 転用硯 [ネガ B9882・9883]
12. 風字硯 [ネガ B9881・9880]
13. 砥石 [ネガ B9887]
14. 砥石 [ネガ B9887]
15. 勾玉 [ネガ B9887]
16. 平瓦 [ネガ B9884・9885]
17. 丸瓦 [ネガ B9886]



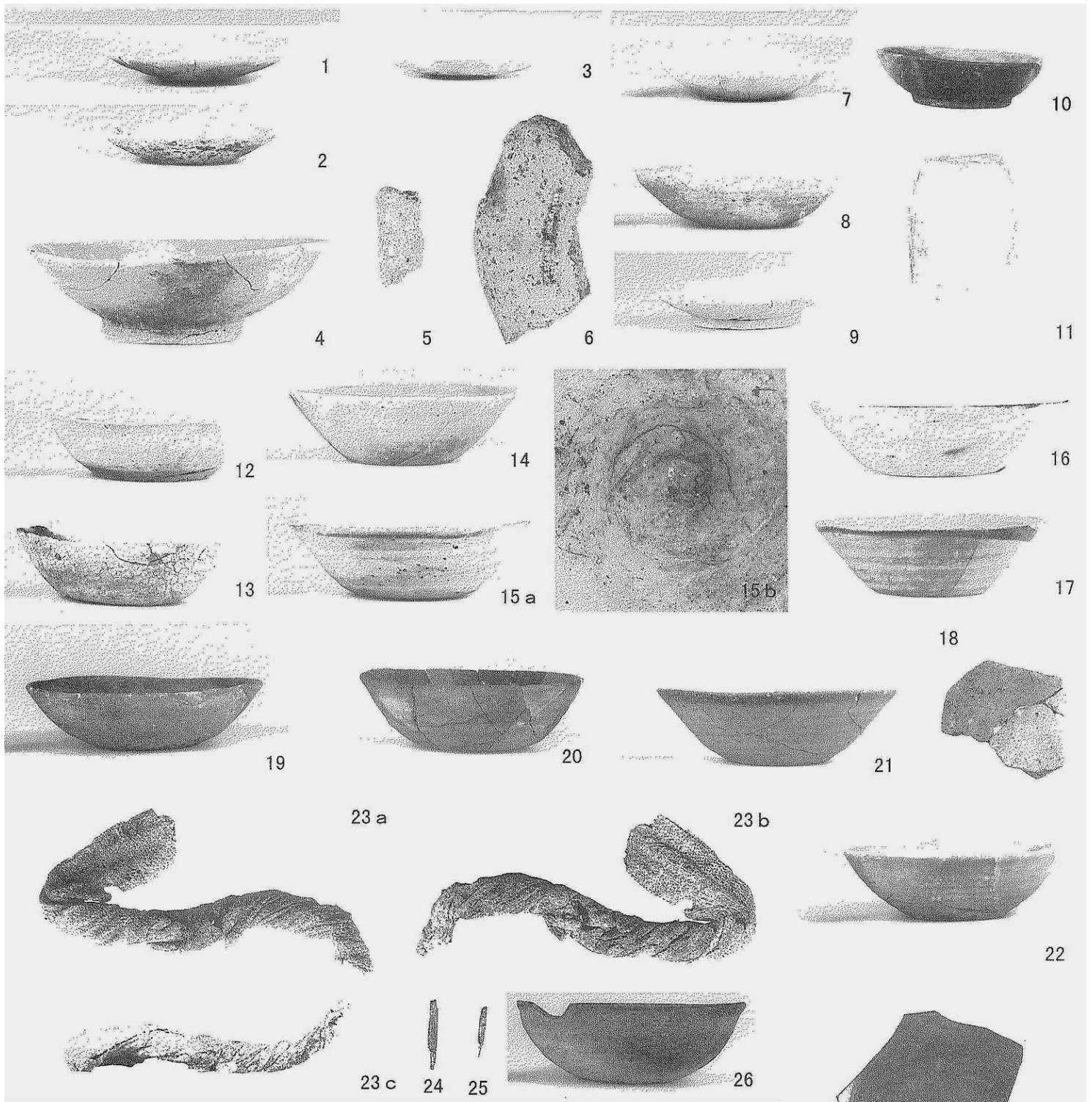


**図版 19** 1~20. SI2375B 竪穴住居跡  
 21・22. SI2376 竪穴住居跡  
 23・24. SI2377 竪穴住居跡  
 25~33. SI2378 竪穴住居跡  
 34~38. SK2380 土壇

1. 鉄鏃 [ネガ B9888]
2. 鉄鏃 [ネガ B9888]
3. 鉄鏃 [ネガ B9888]
4. 鉄鏃 [ネガ B9888]
5. 鉄鏃 [ネガ B9888]
6. 鉄鏃 [ネガ B9888]
7. 鉄鏃? [ネガ B9888]
8. 鉄鏃 [ネガ B9888]
9. 鉄釘 [ネガ B9889]
10. 鉄釘 [ネガ B9889]
11. 鉄釘 [ネガ B9889]
12. 不明鉄製品 [ネガ B9889]
13. 紡錘車 [ネガ B9889]
14. 刀子 [ネガ B9889]
15. 刀子 [ネガ B9889]
16. 刀子 [ネガ B9889]
17. 刀子 [ネガ B9889]
18. 刀子? [ネガ B9889]
19. 鉄滓 [ネガ B9889]

20. 壁材 [ネガ B9890]
21. 壁材 [ネガ B9892]
22. 壁材 [ネガ B9891]
23. 土師器坏 [ネガ B9894]
24. 土師器坏 [ネガ B9893]
25. 平瓦 [ネガ B9895・9896]
26. 砥石 [ネガ B9897]
27. 砥石 [ネガ B9897]
28. 刀子 [ネガ B9898]
29. 鉄鏃? [ネガ B9898]
30. 鉄鏃? [ネガ B9898]
31. 鉄釘 [ネガ B9898]
32. 鉄釘? [ネガ B9898]
33. 獣脚 [ネガ B9898]
34. 土師器坏 [ネガ B9900]
35. 須恵系土器坏 [ネガ 9899]
36. 土師器坏 [ネガ B9901]
37. 土師器坏 [ネガ B9902]
38. 土師器高台坏 [ネガ B9903]

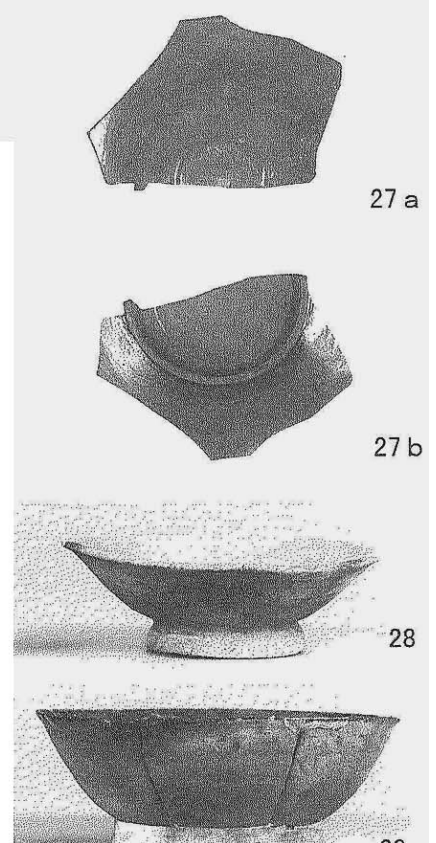


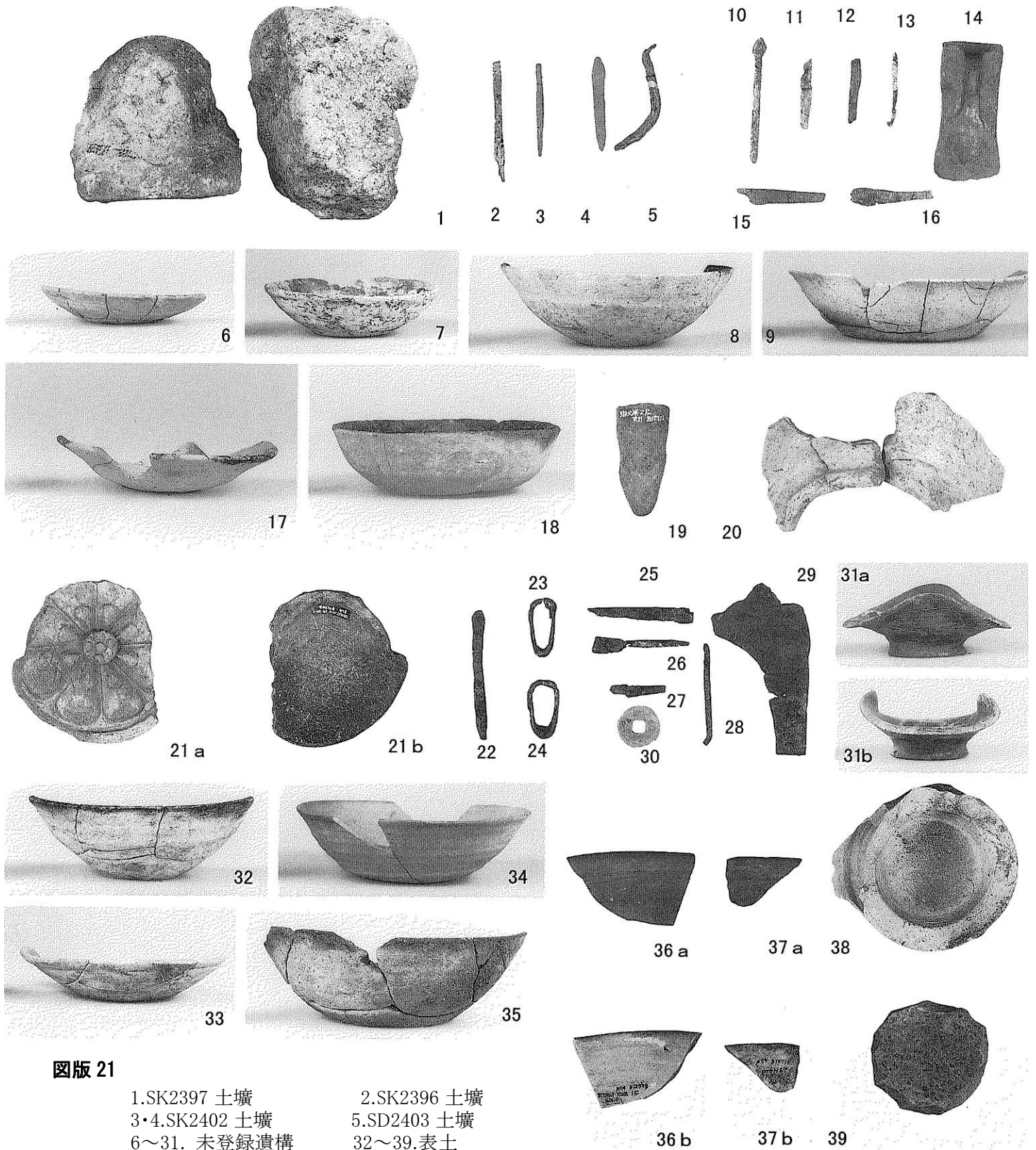


**図版 20** 1~6.SK2382 土壙 7~11.SK2383 土壙 12~15.SK2385 土壙  
 16~18.SE2386 井戸跡 19~25.SK2389 土壙 26.SK2391 土壙  
 27.SK2392 土壙 28・29.SK2393 土壙

1. 須恵系土器小型坏[ネガ B9905]
2. 須恵系土器小型坏[ネガ B9906]
3. 須恵系土器小型坏[ネガ B9904]
4. 須恵系土器高台坏[ネガ B9908]
5. 須恵系土器器台[ネガ B9909]
6. 砥石[ネガ B9910]
7. 須恵系土器小型坏[ネガ B9911]
8. 須恵系土器坏[ネガ B9912]
9. 須恵系土器小型高台皿[ネガ B9913]
10. 土師器小型高台坏[ネガ B9914]
11. 砥石[ネガ B9910]
12. 土師器坏[ネガ B9915]
13. 土師器坏[ネガ B9916]
14. 須恵器坏[ネガ B9919]
15. 須恵器坏「厨」墨書[ネガ B9917・9918]

16. 土師器坏[ネガ B9920]
17. 須恵器坏[ネガ B9922]
18. 土師器甕「有」へラ書き[ネガ B9921]
19. 土師器坏[ネガ B9923]
20. 土師器坏[ネガ B9924]
21. 須恵器坏[ネガ B9925]
22. 須恵器坏[ネガ B9926]
23. 漆漉し布[ネガ B10300・10299・10302]
24. 鉄鎌[ネガ B9927]
25. 鉄鎌？[ネガ B9927]
26. 土師器坏[ネガ B9928]
27. 緑釉陶器高台皿[ネガ B9929・9930]
28. 須恵系土器高台坏[ネガ B9931]
29. 土師器高台坏[ネガ B9932]





図版 21

1.SK2397 土壇                      2.SK2396 土壇  
 3・4.SK2402 土壇                  5.SD2403 土壇  
 6～31. 未登録遺構                32～39.表土

- |                       |                           |                            |
|-----------------------|---------------------------|----------------------------|
| 1. 切石〔ネガ B9933〕       | 15. 刀子〔ネガ B9938〕          | 29. 鉄鎌〔ネガ B9945〕           |
| 2. 鉄鎌〔ネガ B9927〕       | 16. 刀子〔ネガ B9938〕          | 30. 銭貨・熙寧元寶〔ネガ B9945〕      |
| 3. 鉄鎌?〔ネガ B9927〕      | 17. 須恵系土器小型坏〔ネガ B9939〕    | 31. 土師器耳皿〔ネガ B9948・9949〕   |
| 4. 鉄鎌〔ネガ B9927〕       | 18. 土師器坏〔ネガ B9941〕        | 32. 土師器坏〔ネガ B9951〕         |
| 5. 鉄釘〔ネガ B9927〕       | 19. 須恵系土器三足鍋〔ネガ B9940〕    | 33. 須恵系土器坏〔ネガ B9950〕       |
| 6. 須恵系土器小型坏〔ネガ B9934〕 | 20. 土師器甌〔ネガ B9942〕        | 34. 須恵器坏〔ネガ B9953〕         |
| 7. 須恵系土器小型坏〔ネガ B9935〕 | 21. 軒丸瓦転用硯〔ネガ B9943・9944〕 | 35. 土師器坏〔ネガ B9952〕         |
| 8. 土師器坏〔ネガ B9936〕     | 22. 鉄鎌〔ネガ B9945〕          | 36. 須恵器鉢〔ネガ B9956・9957〕    |
| 9. 須恵器坏〔ネガ B9937〕     | 23. 口金〔ネガ B9945〕          | 37. 須恵器鉢〔ネガ B9957・9956〕    |
| 10. 鉄鎌〔ネガ B9938〕      | 24. 口金〔ネガ B9945〕          | 38. 須恵器壺・「上」へら書き〔ネガ B9955〕 |
| 11. 鉄鎌〔ネガ B9938〕      | 25. 刀子〔ネガ B9945〕          | 39. 灰釉陶器埴〔ネガ B9958〕        |
| 12. 鉄鎌〔ネガ B9938〕      | 26. 刀子〔ネガ B9945〕          |                            |
| 13. 鉄釘〔ネガ B9938〕      | 27. 刀子〔ネガ B9945〕          |                            |
| 14. 鉄斧〔ネガ B9938〕      | 28. 鉄釘?〔ネガ B9945〕         |                            |

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996  
多賀城跡

平成9年3月25日印刷

平成9年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市浮島字宮前 133  
TEL(022)368-0101  
印刷所 東杜印刷株式会社

---